

# 薔薇と蛇の招待状

用具 操十雄

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界征服をしないモモンガさんの、ほのぼのした本編には投稿できないような猟奇的、胸糞展開、オリ展開などを投稿します。

至高の41人が異世界の変な場所へ放り投げられてから、魔導国へ向かうまでの物語です。

本編とこちらは同じ世界ですが、本編でこちらの言及はしません。どんなものでも構わないという方のみ、お楽しみいただけると思います。

不定期更新です

目次

地獄巡り	1
寄らば優しき鬱	37
評議国の商人 上巻	76
評議国の商人 下巻	109
真・異形編	
この子の七つのお祝いに	137
あまくち体質の女	157
いざ燃やせ、陽の当たる侍道	194
裏道に立つ獣の即断、人の迷い	232
弱者よ、壮絶であれ   前座	261
弱者よ、壮絶であれ   魂の救済を	290
弱者よ、壮絶であれ   遙かな虹を越えて	311
最悪編・裏	
タブラ・スマラグディナの退屈	346

## 地獄巡り

——所詮、この世はまやかしょ！

同族嫌悪とは——

自分と同じ趣味、系統、性質を持つ者に対する嫌悪感の総称で、同じ種族を嫌悪するだけではこれに該当しない。

種族に関係なく、同種族を嫌悪するものがある。

不条理な世への憎悪、社会への失望、過去の行いへの嫌悪、被害妄想、過度の自己愛、人外への畏怖、激しい劣等感、縄張りの独占欲、領地の占有など、それぞれの生まれ育った環境、現在の立場、見聞きしてきた歴史などに起因し、一概に言えるようなものではない。

どこかの誰かが、それは自己嫌悪だと言った。

これは、そんな彼女と彼女が別れる物語。



疲れてしまった。

俺が何を叫ぼうと、どんな抵抗をしようと、同僚、友人は死ぬ。一人の例外なく、職場から消えた彼らの姿は二度と見なかった。俺は同じ席に座り、右から左へライン作業のように何人も消えていくのを見続けた。足りなくなった人間はどこからともなく補充され、また新たに消えていく。

俺の憎悪や嫌悪はごまめの歯ぎしりでしかない。こんな世界を作った諸悪の根源に、俺の手は届かない。決心して辞表を提出した俺を、上司は諦めた顔を見た。

「俺が言うのもあれだが……元気でな」

「ええ、そちらも……お元気で」

それ以上、互いに言葉はなかった。上司の彼も然り、部下、同僚、上司、その上役まで、全てが菌車でしかない。会社から何人消えようとなべて世は事もなし、反吐が出る諸行無常は今日も鐘を鳴らし、俺は涅槃寂静に至った。

帰路で内側から溢れる感情に身を任せてガスマスクを剥ぎ取り、道に唾を吐き捨てた。自由の身になった俺は、道端のゴミ箱を蹴飛ばした。

「糞つたれが」

小さなポリバケツに住んでいた鼠とゴキブリが慌てふためき、仲良く手を取り合って汚染された排水溝に逃げていった。こんな汚染された世界でも、奴らはしぶとく生きている。人間だけが疲弊し、耐えられなくなつて消える。

次は俺の番だ。

だから俺は、薔薇の封蝋に蛇の絵が刻印された怪しい手紙の誘いに乗った。何かの間違いで死んでしまつても構わないと思つていた。

家に帰り、PCのソケットを首の後ろへ接続し、久方ぶりに《ユグドラシル》のアイコンをクリックした。視界が暗転し、自分の体が何処かへ飛ばされるのがわかった。これで糞のような世界に別れを告げ、俺は人間を辞められる。今となつては、俺が消えることを悲しむものは誰もいない。

今度こそ、翌日は明るい日だと思いたかった。



銀色に輝く門を通過した気がするが、夢でも見たのかもしれない。

小鳥が囁く声で意識は肉体に戻され、どろどろに溶けていた意識が覚醒で形を成す。ゆっくり目を開くと、木漏れ日の差し込む大樹の下、大の字に転がっていた。

体を起こすと、自分のものではないように軽い。ガスマスクの必要のない酸素は、吸い込めば味がするようだ。汚染されていない大気

は、とんでもなく遠くまで見渡せた。草原に雑草が生い茂り、流れる小川に魚や虫が生息し、そよ風が顔に当たって心地いい。

「ははっ……やった、俺は人間を辞めたんだ……やったぞ！」

両の拳を握り、天に掲げた。

今は誰かに喜びを伝えたかった。

目を閉じると、周囲の気配が探れた。体の内側から力が湧き、自分の使えるスキル・技の数々が浮かんできた。それに伴い、消費されるMPも、体の疲労も、初めから知っていたように把握できた。

試しに遠くの本杉へ向かって全速力で走ってみたが、驚くほど短時間で長距離を走れた。ごつごつした大木を殴ると、視界が埋まるほど葉っぱが落ちてきた。おまけに虫まで落ちてきて、俺の頭をゴソゴソと這った。気持ちが悪いので手で掴むと、元いた世界では考えられない大きさの虫が怒っていた。

「でかいな……ははっ……あっはははは！」

虫を放り投げると手裏剣のように切れのある動きで飛んでいった。俺は笑った。今度こそ普通に生きられると思えた。

何年も会話すらしていない俺を呼んでくれた相手を探そうと、周囲を見渡した。

東に小さな森、北と西にそれぞれ大きな都市、南は山脈が広がっていた。目的地も知らず、現在地から分らない。初めに解決する問題は食事だ。空気を吸い込むと、喉がカラカラと音を立てた。先ほどの小川で水を飲んでおけばよかった。

戻るより先に進みたいと思い、東の小さな森へ向かった。



森を進んでいくと、小さなログハウスが見えた。木造の家には誰もいないが、人が住んでいる痕跡があり出払っているようだ。後払いで何か頂戴しようと思ひ、不法侵入を詫びながら忍び込んだ。人の気配は感じられない。貯蔵庫らしき場所へ忍び込むと、飲料用の水が入った水瓶、果物と小さな弁当が大量に並べられていた。

家の主に後で礼を言おうと勝手に食べた。

果実を齧ると口中に果汁が入り、実を咀嚼すれば芳醇な香りが鼻から抜けた。芯を残して食べ終え、水を流し込んだ。ただの水でさえ、甘いように思えた。喉を伝って胃へ落ち、栄養素が体中に広がっていくようだ。固形食タブレットの食事とは比べ物にならない。

渴きを潤してから、家主を探そうと周囲を散策した。家の周りに人はなく、森の奥へ進んでいく。隠密特化の俺は対象を発見するのが早い。

森の影に隠れながら周囲を散策していると、低めの崖に行きついた。見下ろすと小さな湖があり、畔に人影が見えた。俺は対象の種族を確認しようと、気配を絶って崖を滑り降りた。

相手は人間、性別は女、年齢は不明だが水浴びの最中で全裸だ。ご丁寧に彼女は生まれたままの姿だったので、何もかも見えてしまった。迂闊に近寄り過ぎて、周囲に身を潜める場所もない。

最悪のタイミングだったと言える。

「っ……………」

「だ、誰?！」

俺が発した吐息で、金髪の女は胸と下半身を手で隠して叫んだ。女は透き通るほど白い肌で、濡れた金髪が太陽光で輝いた。顔は怯えて引き攣っているが、顔立ちを見るとさほど若くないように思える。それが彼女の色気を際立たせた。

元来、女性経験のない俺は、異形種の癖に女の裸体で動揺した。このままでは立派な変質者で、アインズ・ウール・ゴウンの恥さらしだ。俺は後ろを向き、両手を上げた。

「迷い込んだものだ！ すまない、覗くつもりはなかった」

「……………服を着るので、こちらを見ないでください」

「わかった」

陸へ上がる水音、衣が擦れる音、そしてこちらへ歩いてくる足音。彼女は俺のすぐ後ろにいる。衣擦れの音がしたので服は着ているだろうと振り返った。

振り返りしな、平手打ちを食らわされた。物理無効化で避けると相

手にダメージが跳ね返るかもしれないと、剥き身で彼女の制裁を受けた。そこまで考えられるほど、相手の平手は遅かった。綺麗な裸体を覗いた報いに、平手打ちなら安い。

しかし、思ったより紙装甲の俺には堪えた。頬を抑えると熱を帯びていた。

「……………」

「不埒者！」

金髪の女性が腕を組んで俺を見上げていた。かなり怒っていたし、少しだけ痛かったが、悪い気はしなかった。彼女にどう接すべきか考え、俺は同じくらいの年齢であるかのように振る舞うことにした。異形種の年齢など、黙っていればわかるまい。

「ああ……………本当に、悪かった。事故だったんだ」

「本当ですか……………」

女は物珍しそうに上から下まで俺を眺めた。こちらは装備品もなく裸同然の装備なので居心地が悪い。

「種族は何ですか？」

「ハーフ・ゴーレムだ」

「聞いたことがあります。ハーフ……………混血種ですか？」

「そうだな……………そうなるな」

「人間は食べますか？」

「食べない」

「よかった……………」

身の安全が保証されたと思い、女はため息を吐いて組んだ腕を解いた。衣服のポケットをまさぐり、煙草を取り出して小さな炎の出るマジックアイテムで一服つけた。紫煙が俺の体を通り抜けて空へ向かった。お世辞にもいい匂いと言えない上、体にも悪そうだ。

「体に悪い。長生きできる世界なら、長く生きた方がいい」

「私は、長く生きたくないの」

「生きたくても生きられない奴もいる」

「ええ、うんざりするほど」

「？」



女は唇を噛みしめた。

「名前は？」

「ホヅミ……」

うっかりハンドルネームではなく本名を名乗っていた。自分の名前にも慣れておかなければならない。

「ホヅミ……変わった名前」

女は間を空けて何かを考えていた。今さら間違えたとは言えなくなってしまう、次の言葉を大人しく待った。

「あなたは、私を殺す人なの？」

これが彼女との出会いだった。



女は30代から40代の間に見えた。

俺とそう変わらないように見えたかと思えば、時おり顔に影が差し、推定年齢を大きく上げた。顔の造りは美人だが、表情は全体的に暗い印象を与えた。

彼女はメイナと名乗り、森のログハウスで相棒と働いていると言った。

「先ほど勝手に入り、果物と水をもらった。何か礼がしたい」

「私を……殺——」

「俺は誅罰者パニッシャーじゃない。ただの迷い人だ」

女は俯き、また唇を噛んでいた。

無言の彼女に続いて先ほどの木造家屋に着くと、子供たちが楽しく遊ぶ喧騒が聞こえた。

「お帰り、メイナー！」

「メイナー！」

「うええええん……」

子供たち4、5人の集団から、小さな幼女が駆け寄って彼女に抱き着いた。子どもたちは遊びを辞め、俺たちを取り囲んだ。彼女に抱き着いたり、俺を不思議そう眺めたり様々だが、号泣している幼女は彼

女に抱き着いて離れない。

「サロ……」

女は笑い、しゃがんで子供の目線に合わせ、猫毛の頭をくしゃくしゃと撫でた。子供を産んで育てた経験を匂わせる対応だった。メイナはぐずぐずした少女の鼻水と涙を拭いた。

「サロ、泣いてはいけないわ。喧嘩でもしたの？ それとも寂しかった？ 大丈夫よ、みんなで同じ場所に行くのだから」

「うん……」

「そう、偉いわね」

家の扉が開き、誰かが出てきた。

一目で異形種だと判断したのは、頭が魚だったからだ。体はメイナと同じく成熟した女性のもので、声は非常に可愛らしかったが、首からは魚だ。人間の首に魚が乗っているような単純構造ではなく、衣服から魚の頭が飛び出していると言ったほうが近い。よく見ると手、足も鱗で覆われていたので、服の中身は半魚人<sup>マイマン</sup>かもしれない。

あちこちがアンバランスな生物だと思った。

「落としたブローチは見つけられた？」

「ええ、席を外してごめんなさい」

「そう、良かった。その人は誰？」

「彼は迷い人なの」

魚は俺をじろじろと眺めた。魚眼で見られると人間よりも余計にみられているような気がした。俺は肩をすくめて頭を下げた。

「家の中から林檎と水を貰ったから、何か礼がしたいと」

「そういえば、誰かが入ったような形跡があったかしら。メイナ、子供たちの面倒をお願い。あなたはこちらへ」

俺は手招きされ、子供たちとメイナを残して彼女に続いた。

森の木陰で彼女が聞いた。

「あなたは元人間の異形種？ それとも、生まれながらの異形種？」

「俺は元人間だが、なぜ知っているんだ」

「やつぱり……そんな輩が増えていると噂に聞いたから。元人間はめっっぽう腕が立ち、何をしでかすか分からないと言われていたけど、

あなたもそう?」

俺の他に来ている41人のことなのだろうか。

「そんな聞かれ方をされると素直に“そうだ”とも言い難いが……目的地は決まっているが、場所がわからない」

「人間がここに長居しないほうがいい。林檎も水も、足りないならもつとあげるから、すぐにここを去りなさい」

直球で、元人間の俺にいて欲しくないらしい。時間制限があるわけでもなく、俺は周辺国家の情報を集め、林檎の恩を返し、すつきりしてから旅に出たかった。

「言われなくても、勝手に恩を返し、勝手に消えるよ」

「恩を返すなら……私たちを殺して」

魚は口をパクパクと開閉させた。

どいつもこいつも、なぜ死にたがる。生きたくても生きられない奴はうんざりするほど見てきた。死にたがる女と魚に苛立ち、噛みしめた歯がぎりぎりと言音を出した。

俺は人差し指を魚の胸に突き出した。

「あんたらは、俺が人間を辞めてから最初に出会った相手だ。勝手に死なれちゃ後味が悪い。何に苦しんでいるのか知らないが、死にたがるのは止せ」

魚はしばらく黙り込み、何かを考えていた。

「ただ飯を食わせる余裕はない。働かないなら出て行ってほしい」

「なら、働かせてもらう」

「……後悔するわよ?」

「ここで去った方が後悔する」

どうせ行きつく場所は決まっている。せつかく異世界に飛んだのなら、寄り道は必要不可欠だ。俺はもう、簡単に諦めて誰も彼も見捨てたりしない。

この日は休息を願い出て、俺は物置で翌朝まで眠りこけた。

妙な流れで彼女たちを手伝うことになったが、仕事の説明は一切なかった。



指示も出されずに、翌朝から忙しかった。

俺が外に出て早々、小さな幼女が両手を前に出してペンギンのように寄ってきた。

「ほじゅみいーだっこ」

「ああ、と、きみの名は……サロ？」

「しゃろ！」

嬉しそうな顔で万歳をした。こんなに喜んでいる人間は初めて見た。

「抱っこだな、はいはい」

サロは赤子の領域から出ておらず、柔らかくて軽かった。抱き上げたときに乳のような甘い匂いがした。背の高い俺の片腕に抱きあげられたサロを羨み、他の子供たちも集まってくる。全員、年齢が同じくらいの幼児に見えた。

「ほじゅみいー。やたぐるま」

「肩車か？」

「ほじゅみ、だっこ」

「おいおい、もう手がいっぱいだ」

「がっこ」

子供は欲望に忠実で、しかも聞き分けがない。おしめのせいでペンギンのように歩くそいつらを無下にもできず、俺は朝から昼食を挟んで夕方まで四つん這いになり、背中に子供たちを乗せてログハウスや森の中を周回した。

「うきやー！」

「あっちー！」

「……やれやれ」

体力は減らないが、思ったより忍耐の要る重労働だ。

子供たちは体力の限界を迎え、ログハウスの中へ戻っていった。俺も後を追って戻ると、小さな子供なのに手助けがなくても一人で食事をしていた。教えるまでもなく、他の子を見て自然と学ぶのだとい

う。メイナが子供たちの補助で忙しそうに動き回っていた。

俺は外で薪割りを命じられた。よく使い込んだ斧は俺の手にもよく馴染んだ。スキルの練習にうってつけだった。

「ちようどいいな……スキル 《疾風迅雷》」

素早さを上げて拵えた大量の薪で、子供たちの遊具を建設してから戻ると、魚がタオルで汗を拭いてくれた。女性特有のいい匂いがしたが、口は酸欠気味に開閉を繰り返していた。サンマに似ていた。

「みんなはお風呂よ。休んでいていいわ」

「そうか」

大人と子供の食事は時間が分けられている。子どもたちは食事を済ませ、風呂に入って体を洗われ、全員が同じ模様のパジャマを着てから寝室で雑魚寝した。まだ幼いのに礼儀正しく、椅子に腰かけてぼんやりと彼らを眺めている俺に「おやすみ」を言いに来た。

「教育熱心だな……」

「ホヅミ、ご飯よ」

「あ……ああ、ありがとう」

「メイナ、あなたも食事になさい」

「はい」

大人の食事は子供たちが眠ってから、果物、木の実、パンなどで簡単に終わらせる。俺と同じく、朝から晩まで子供のおしめと入浴の世話をしたメイナも、夕食のときだけは気が抜けて、隙だらけだった。

子供たちと一緒に入浴したらしく、風呂上がりの上気した顔が艶っぽい。彼女の寝間着から覗く胸の谷間が俺の視線を吸い寄せようと誘い、視線を逸らすので必死だった。幸い、欲望を沈静化して気を紛らわせてくれる魚の頭がいた。

二人とも丁寧に切り分けた林檎を齧りながら、俺の顔を凝視していた。

「……何かついているか？」

「あなた、元は人間なんですって？」

「ああ、俺は人間を捨てた」

「私も……なれるでしょうか」

メイナは唇に指をあて、何かを考えていた。

「手段はあるだろうが、なぜだ？」

「……何でもありません」

メイナは出会ってからずっと言葉が足りない。思わせぶりの態度で何かを隠している。三個目の林檎に手を伸ばすと、魚が声をかけた。

「ごめんなさい。私たち、どちらも料理ができないの」

「食えるだけでありたいが……チビたちはそうもいかないだろう」

「みんなの食事は別で手配してあるの。私たちと同じものとはいかないわ」

「孤児院も気を使って大変だな」

「孤児院……ね」

魚は意味ありげに笑った。

「明日、都市国家連合に買い出しをお願い。メイナと一緒に」

「唐突だな。別に構わないが……メイナはともかく、人間じゃない俺が街を歩いてもいいのか？」

「亜人種も住んでいるし、物置の黒いローブで体を覆えばいいでしょう。背の高いあなたでも間に合うくらい大きいものだから」

それだけで異形の部位を覆い隠せるか不安だが、いざとなれば隠密行動をすればいい。俺が本気で気配を殺せば誰にも気づかれない。

「稀に魔物が出るから気を付けてね。いつもは気のいいトロールに護衛を頼むけど、あなたは強そうだから」

「まあ……それなりに、な」

初めて人間の都市に行けるとなって喜び、顔が緩んだ。高揚しかけた気分は、魚の言葉で階段を転げ落ちた。

「あなた、メイナと交尾したいの？」

林檎を粉々にしようとする歯の上下運動が、自分の意思と関係なく止まった。感情が滞ると体の動きに影響が出るのは、半分だけ混じったゴーレムの特性かもしれない。名目上は混血・ゴーレムで、何らおかしいことではない。

それよりも、上目遣いで俺を見ているメイナへ対策を取らなくては

ならない。

「……そうなの？」

「だって、彼、さつきからあなたの方をチラチラと見ているから」

「あ……ぶ」めんなさい、いつも二人だから胸がはだけていたのね……  
恥ずかしいわ」

彼女は緩んでいた寝巻のボタンを止めた。僅かに覗いていた胸の谷間が覆い隠されたが、それで済むならこんなに動揺しない。年上が俺の守備範囲とは知らなかった。

「本当に元人間なのね。私には見向きもしないもの」

「い、いや、済まない。気にしないようにしていたが」

「あなた、女性経験がないのね」

「……」

突然に言い当てられ、俺の体は金縛りにあった。取り繕おうとしても、指先一つ動かなかった。

「やっぱりね……。買い物に出ても、あまり遅くならないでね。二日くらいならいいわよ」

「何を……言ってる。俺は別に……女性経験がないわけじゃ」

「嘘ですね」

「嘘よね」

「……」

二人には確信があるようだ。魚は人差し指を立て、指揮棒タクのように振り回した。

「会話に慣れていないと、女性はすぐにわかるわ。二日くらいいいと言われたら冗談を交えて返すものよ。こんな美人が相手だと緊張するだけでも言っておけば、嘘でも彼女は喜んだでしょう」

ぐうの音も出ない。

「したい、ですか？」

「……」

「いいですよ。こんな年増で良ければ」

「いや、だから俺は別に——」

「ただし」

メイナは強い目で俺を見た。

「私たちを……殺してください」

「……」

「ふふっ……」

何も答えない俺に、自嘲するように笑って外へ出て行った。

俺は自分で思うよりもかなり苛立つてしまい、握った林檎に亀裂が走った。メイナが死にたがる理由はまだ説明されない。こんな世界でなぜ死にたがる。生きたくても生きられない奴なんて、現実世界に吐いて捨てるほどいた。

無言で林檎を睨んでいる俺に構わず、魚女は後片付けをしてメイナを追った。

ぼんやりと見ていた窓の外、暗黒の夜に紫煙が流れていた。右から左へ進む煙を見てみると、魚が出て行ってから紫煙の枝分かれが増えた。手持無沙汰な俺は先に寝ようと、物置に行つて横になった。恐らくは秋の夜長だと思われる静寂、身にまとう気温は一定に保たれ、毛布の類がなくても心地よかった。

俺は置いてあつた小さな木箱を枕にして眠った。

変な匂いがした。



「ほじゅみいーだっこ」

「サロ、俺は出掛けないといけないんだ」

「めー！ やああああ！」

「むう……」

コバンザメのように俺に張り付くサロは、3歳児らしく「いやいや」をしていた。聞き分けがいいはずがない。荷車の支度を終えたメイナが来るまで、彼女は俺に張り付いていた。サロは俺からメイナ、メイナから魚へと、バケツリレーよろしく引き継がれ、最後は涙目で指しやぶりをしながら俺たちを見送った。

自分の子供でもないし、すぐに再会できるのに心が痛んだ。



メイナの先導で荷車を引いて森を歩くと、すぐに草原に出た。

広大な草原の遙か南で謎の飛行物体が見え、北へ数キロの場所に都市が見えた。草原を撫でる風が気持ちよく、山から流れてくる風は仄かな冷気を孕んでいた。

メイナは北を指さした

「あれがカルサナス都市国家連合です。アインズ・ウール・ゴウン魔導国に属さない、大陸北東の国家です」

「魔導国はどっちだ？」

「西のほとんどが魔導国の領地です。首都は西の隅にあるリ・エスティーゼです。ここからだ、ずっと西南西でしょうか」

「西か……」

ギルドのメンバーが作った国の名が、アインズ・ウール・ゴウン魔導国だと知った。誰が決めたか知らないが、わかりやすい名前が助かった。

「西に行くと、まずバハルス帝国があります……都市国家連合より大都市で、魔導国に所属していて……私の祖国です。魔導国の首都へ行くには、そこからずっと西に行かないといけません」

「帝国出身者だったのか」

「私は貴族出身です」

「だから料理ができないんだな」

冗談めかして言ったつもりだったが、何かの地雷を踏んだらしい。彼女は無言で唇を噛みしめた。

「いや、ごめん……悪かった」

「本当のことですから。生まれた時から貴族で、家事は使用人に任せて育ちました。私……いい年して、一人じゃ何もできないんです」

彼方を見て自らを嘲るように笑った。

「俺を拾った……だろ？」

何の慰めにもならないが、せめて笑ってほしかった。彼女は空気を読んだのか、頭を強く振って明るく笑った。

「それでは、拾われた恩を返すために一生懸命、働いてくださいね。今日は二人で美味しいものでも食べましょう」

「メイナ、荷車に乗ってくれ。俺が本気で走ればすぐに着く」

「よろしく願います、ホヅミさん」

「スキル 《疾風迅雷》」

一気に走りだそうとしたが、すぐに停止を余儀なくされた。

「きゃあああ！」

「……」

想像とは違って上手くいかない。

急発進についてこれず、彼女は振り落とされ、冗談のようにゴロゴロと後転した。慌てて駆け寄った俺を泥だらけになった顔で見上げ、子供のように笑い、謝りながら俺も笑った。

死にたがっている女とは思えなかった。



走る速度の加減を掴んだころ、彼女の衣服はかなり汚れていた。

荷車に汚れた女性を乗せ、全身を黒衣で包んだ俺は誰がどう見ても怪しく、奴隷商人と変わりがない。都市の検閲官は当然、俺たちの馬車を止めた。

彼女は平静を保ち、手提げ鞆から丸まった書類を取り出した。

「私たちはソーハ家の末端です。今日は仕入れに参りました。通行許可証がこちらに」

「チツ……通つてよし！」

許可証を見た兵士は、忌々しいものでも見たように顔を歪めて舌打ちをした。俺の素顔が見られたのかと心配していると、荷車から飛び降りた彼女が進行方向を指さした。

「随分と感じの悪い兵隊だな」

「あれがまともな対応です。私たちは……だから」

「すまない、聞き取れなかったんだが」

「何でもない。さあ、行きましよう。木箱と大樽が必要です」

俺にはアイテムボックスがあるので、資材と食料は多めに買った。用途の分からない木箱と樽、食料品を大量に買い込み、全てをアイテ

ムボックスへしまった。無限に収納できると知った彼女は喜び、指定された量より多く買い込んだ。

「二人の食料も果実だけじゃ足りないだろう」

「そこまで資金に余裕はないんです」

「……今度、俺が稼ぐよ。美容にもよくないからな」

「ふふ、ありがとうございます。女性に優しい異形種さん」

荷車は彼女の個人タクシーとなり、馬代わりの俺に引かれて今日の宿を探した。

移動しながら、情報に疎い俺に様々なことを教えてくれた。彼女は俺が思っていたよりも饒舌だった。

「都市国家連合の都市長は女性です。詳しくありませんが、冒険者には勇者様と闇騎士様がいらっしやるとか」

「冒険者か……」

「身分の証明がいらないので手軽になれますよ」

「いつまでも養われるわけにはいかないな」

「都市国家連合は他国に比べて大変かもしれません」

神殿国家を支配した魔導国の影響で、属国化を拒否した都市国家連合には病院代わりの神殿が存在しない。日を追うごとに治安が悪化し、回復薬は高騰を続け、犯罪件数も伸びているが、優秀な都市長のおかげで国家として維持ができているようだ。重病人や怪我人はポーションなどの回復薬で応急処置し、資金を貯めてから冒険者を雇い、神殿のある魔導国の支配国へ亡命する。そこまで移動資金が稼げないものは、必死で暮らすしかないという。特権階級である貴族の安全は保証されているが、中には裏で犯罪組織に加担し、甘い蜜を啜るものもいる。

確実に人口減少が進んでいるが、問題はそれだけではないと言って言葉を止めた。

「どうした？」

「……あ、宿を取りますね。たまには美味しいものでも食べて、明日になつてから帰りましょうか」

「？」

「あちらは亜人種たちが住んでいる区画です。お酒も飲みましょう」

「無理しなくてもいい。寝るだけでいいだろう」

「私が飲みたいんです。いつもは一人だから」

酒は初めてなので気が進まなかった。俺が不安でぼんやりしているあいだ、彼女は手際よくダブルベッドの部屋を一つだけ取った。

「別の部屋にすべきだ……」

「お金がもつたいたいんです。子供たちの食費と私の煙草を考えると、宿のランクを落としても良かったかもしれません」

「いや……煙草を止めろ」

「お嫌いでしたね。窓を開けるので我慢してください」

いつの間にか論点がずれていた。男女が同じ部屋に泊まるのはどうなのかと聞いたつもりだったが、俺の心を読んでくれなかった。

備え付けてあるお飾りの椅子に座って、窓へ紫煙を吐き出す彼女を眺めていた。テレビもネットもない異世界で、他にすることがない。

内外の温度差で、紫煙は一直線に窓から外へ逃げて行った。

彼女は夜の背景が良く似合った。

「お腹、空きましたか？ そろそろ食事に行きましょう」

灰皿に煙草を押し付け、支度を始めた。



宿に隣接している亜人種のレストラン、「アネハギテイ」はそれなりに栄えていた。人間が珍しいのか、種族を隠す俺が珍しいのか、入店してから随分と不躰な視線を浴びたが、すぐにそれらは離れていった。活気ある店内に、彼女が怯んだ様子はない。

俺はいかにも空想的な世界が珍しく、ローブの隙間から周囲を観察した。

猫耳が生えた人間、服を着て二足歩行する犬、猫、猿、立派な髭面の小男は山小人<sup>ドワーフ</sup>、美味そうに酒を飲むイグアナと、魚の頭部を持った人間。孤児院の魚女はこの町の出身者なのだろう。

みんな楽しそうに食事をし、酒を嗜<sup>たしな</sup>んでいた。

俺は文字が読めないので注文は彼女に任せた。手慣れた様子であれこれ注文する彼女は、買い出しの度にここへ寄っているようだ。亜人種たちは黄色い炭酸の酒を旨そうに飲み干し、俺は思わず唾を呑んだ。漫画や小説に描かれているのと変わりなく、冷えた酒はとても美味しそうだ。

「あと、それから、灰皿ください」

「少々、お待ちください」

猫のウェイトレスは尻尾を立てて走っていった。灰皿が来る前にメイナは煙草に火をつけた。

「ヘビースモーカーだな……」

「そういうものです」

「……よくわからん」

酒はすぐに出てきた。

グラス一杯に注がれた橙色の液体を前に、俺は固まった。他の亜人たちが旨そうに飲んでいる黄色い炭酸の酒が来ると思っていた。予想が外れたのもそうだが、いざ酒を前にして怖気づいた。

「ふー……飲まないんですか？」

彼女は紫煙を燻らせ、既に酒を口にしていた。

「ああ、いや、飲む」

「ふふつ、本当に慣れてないのですね……お酒も、女性にも」

悪戯な笑みに、彼女の推定年齢が下がった。探るような目つきの彼女は、若く可愛らしい笑顔を張り付けていた。

「……そういう環境じゃなかったんだよ」

「どうしてですか？」

「いや……うん、相手がいなかった」

「人間を辞めてどうですか？」

「何がだ……」

「性欲……とか」

俺が何かを言う前に、料理が運ばれて会話が中断した。

割合、下世話な話をしているときでも、彼女の品は乱れなかった。酒を飲む仕草、蒸かした芋を食う仕草、肉を切るナイフとフォークの

使い方、どれをとつてもしつかりとした教育が身についていた。俺はテーブルマナーもろくに知らない自分が失敗しないかを恐れ、空腹の割に手の動きが鈍かった。

手持無沙汰なので、恐る恐るグラスを口に近づけた。

アルコール臭が鼻の奥へ突き刺さり、危なくグラスを落とすところだった。飲んでみると柔らかい柑橘系の香りが口の中に広がったが、後味はアルコール一色だ。あまり高い酒ではないらしく、後味が好きになれなかった。漫画や小説のようにはいかない。

俺はちびちびとグラスの液体を減らしながら、ナイフとフォークで肉を解体して口に運ぶ彼女を眺めていた。ソースで濡れる唇がやけに目についた。彼女は布巾で口を拭いながら俺を見た。

「あ、お肉、大きいのを頼んでるので取り分けましようか？」

「孤児院の子供たちがやけに少ないのはなぜだ」

「孤児院……そう、確かにそう見えますね」

「違うのか？ ソーハっていったか。そのの貴族の援助で孤児院を運営してるんだらう？」

「……まあ、そんなところです」

俺の発言以降、彼女の肉は減らなくなった。

「食べますか？」

「ああ、もらおうかな」

「どうぞ」

肉を突き刺したフォークが鼻先に突きつけられた。

「いや、どうぞって……」

「ソースが零れちゃいます」

「このまま食え」と顔に書いてあった。周囲で俺たちに関心を持っている者はいない。かといって、受け入れるには抵抗があった。

「早く」

彼女も引く気配がない。止む無く俺は、年上の淑女に“あーん”としてもらった。

初めて食べる肉は内部までよく焼けており、香辛料の匂いが口内に広がり、噛むと肉汁が溢れた。噛めば噛むほど体が悦び、口はもつと

寄越せと欲しがった。

「畜生、こいつあ美味しいな……」

「もつと食べますか？」

「食べる」

「はい、どうぞ」

いくら年上とはいええ、忝度も甘えるつもりはない。

「皿をくれ。自分で食べる」

「そうですか……」

少しだけ残念そうだった。

調理した料理はただの果実とは比べ物にならない。調理しただけでこんなにも違うのかと、感動して体が震えた。結局、彼女の残したものを全部、平らげてしまった。

食後に改めて酒を飲むと、アルコールが油分を洗い流すようで心地よかった。

「ふー……」

「私、子供に捨てられたんです」

一息ついた俺に対し、何の脈絡もなく過去の話を始めた。よく見ると顔が赤くなっている。酒が回った彼女は、より饒舌に重たい過去を話した。

「子供を捨てたんじゃない、子供に捨てられたんです」

「旦那は？」

「別れました。子供たちと一緒に使用人まで出て行って、新たに使用人も雇えず、夫婦喧嘩が絶えなくなりました……。彼、後先考えずに借金だけしていたみたいで。娘たちを引き取った御方から選別に頂戴した白金貨も、夫が勝手に使い果たしてして一文無しになりました。家も土地も、借金の果てに残った僅かな財産も借金の形に取られ……。途方に暮れた私たちは、帝都を逃げ出してから街外れで大喧嘩して……。何度も、何度も……。何度も、顔や頭を叩かれました」

俺の中で黒い何かが蠢いた。

「酷い旦那だな……」

「ふふっ、だから私、彼の股間を蹴り上げてやったんです。とても痛

がっていました」

「だろうな……」

彼女の笑顔と武勇伝で、俺の溜飲も下がった。

「そこで別れました。それ以来、彼とは会っていません」

話を聞く限り、彼女にも非はある。しかし、借金を申し入れたのが旦那なら、やはりそちらが癌だ。唇を噛む彼女を責める気にはなれなかった。

「昔の私は本当に最低で……貴族だから最後は何とかなると、何も考えていなかった。そんな地位なんて、生きるだけのことなのに何の価値もない」

「終わった過去は戻らない」

「知っています。だからこそ、せめて、あの子たちだけは魔導国で幸せであってほしい。私はもう、あの子たちの母親ではありませんから」  
「行けばいい、魔導国へ。俺の目的地は魔導国だ。そこで友人たちが待っている。俺と一緒に魔導国へ——」

「子に捨てられた親の末路なんて悲惨なものです」

彼女は煙草を灰皿に押し付け、自嘲気味に笑った。その顔は自分自身への嫌悪で満ち、明確に死を望んでいた。昔は大変だったにせよ、今は孤児院の養母に収まっている。それほど苦しめられる過去なのか疑問に思えた。

「それから、その日、一日を生きるために必死で働きましたが、何の取り得もない年取った貴族のお嬢様は、どこへ行っても役立たずです。娼婦に身をやつしたときもありましたが、それも長続きはしませんでした。あちこちを放浪し、ようやくエナが拾ってくれて」

「エナ?」

「魚の……」

「ああ……」

魚女の名前を初めて知った。

「子供がいらないからよくわからないが、母親ってのは死んでも母親だろう。血の繋がりはどんなに否定しても変わらないと思うが、違うのか?」



「私に子供たちを抱く資格はありませんから……」

「俺が見てこよう。子供たちが元気でしたら、母親がここにいると――」

「止めてください……それだけは、止めて」

拒絶が色濃く出ていた。

言葉を待ったが、それっきり彼女は唇を噛んで黙った。

酒場独特の喧騒の中、食事を終えた俺たちの間に重苦しい沈黙が居座った。無言で会計を済ませ、大人の男女が寝泊まりするダブルベッドの部屋へ戻った。

俺は所在なさげに壁際に立ち、ベッドシーツの皺を伸ばす彼女を見ていた。

「俺、床で寝るから、ベッドで寝ていい」

「お願い、側にいて……買い出しに出ると、いつもは一人だから……寂しくて」

「……そうか」

彼女に懇願され、俺はベッドに入った。

俺も酒が入って冷静でなかった。ステータス異常の対策はアイテムに頼っていたので、紙装甲の俺には一杯の酒という初体験が堪えている。それだけで十分に許容量を超えているのに、別の初体験もしいかと誘われた。彼女は広いダブルベッドの上で俺に抱き着いてきた。

「抱いてください……哀れな私が、一時でも過去を忘れるために」

「……俺、異形種なんだけど。メイナたちの言った通りで経験ないから……その」

「私が動きます」

彼女は顔を上げて俺の唇を奪った。

つるりとした体が硬直し、唾液が二人の唇の間に糸を張った。

「混血種なら人間も混じっているのでしょうか？」

「いや、だから……そういう問題じゃなくて」

「……ごめんなさい、私はこんな汚らわしい女なんです」

彼女は泣いていた。

俺は脊髄の反射に従い、優しく抱きしめた。

「どうなっても知らないからな……」

「ありがとう」

導かれるまま、俺は発情した獣のように、涙の止まらない彼女を飽くほど抱いた。つるんとした体を、彼女は優しく愛でた。恥ずかしいことに自分では止められなかった。

激しく、灼熱の闇の中、彼女が力尽きて意識を失うまで涙は止まらなかった。

起こさないようにベッドから抜け出し、煙草に火をつけて啜えた。お世辞にも美味しいとは言えず、好きになれそうもないが、熱を帯びた体を冷ますにはちょうどよかった。

月光に抱かれて泣き寝入る女と、初夜を迎えた異形種の男。

彼女の涙が粒ダイヤのように光った。

肺に吸い込んだ紫煙で、酒に似た独特の酩酊を感じて頭痛がした。

「サロ……」

ベッドの彼女は孤児の名を呟いた。

あの子は子供に似ているのだろうか。



朝、会計を済ませた俺たちは森へ向かった。あまり時間をかけて魚に勘繰られるのは御免だ。空っぽの荷車に彼女はぼつんと座り、ぼんやりと空を見ていた。俺が振り返ると笑いかけてくれた。

「しつかり捕まってる」

「よろしくお願ひします、従者さん」

「……ああ」

一晩を共にした相手にどんな顔と対応をすべきかわからなかった。行きよりも速度を上げてログハウスに戻ると子供たちの姿は見えず、トロールらしき異形種が魚女と何かを話していた。トロールは俺たちを発見し、鼻をひくひくと動かした。

「誰だあ？」

「迷い込んだ異形種だよ、手伝って貰ってるの。それより、今日の分が少ないのはどうして?」

「ああ、そいつあ、悪かった。瓦礫の山の発掘が終わってねえのさ」

「こつちだつて手を汚しているのよ。次はきつちり払いなさい」

「ああ?」

「対価は高すぎず安過ぎず。しつかり仕事に精を出しなさい」

「おい! お前え、自分が食われなくても思ってるのかあ!」

トロールは魚の首を掴んで持ち上げた。俺がどうやって助けるか考えた数秒で、魚が怒鳴った。

「やれるものならやってみなさい。あんたらの欲しがるものは永遠に手に入らないわよ」

トロールは両眼をぎよろぎよろと動かして何かを考え、彼女を下ろした。意外にも彼は後頭部をぽりぽりと引つ搔きながら謝った。

「悪かった、また来る」

「真剣に瓦礫を掘りなさい」

トロールは小さな木箱を担いで森の奥へ消えた。心なしか哀愁を漂わせていた。魚は金銀の混じった財宝らしきものが見える木箱を置き、俺たちに駆け寄った。

「お帰りなさい。早かったのね」

「何だ、あいつは」

「顧客だよ、私たちの」

「顧客?」

質問に答えはない。

「それより資材はどこなの?」

「ホヅミが不思議な力で仕舞っているの」

「そうなの?」

「ああ、全部、俺が持っている」

「まとめて物置に運んでくれるかしら」

詳しい話を聞きたかったが、家の中から飛び出してきた子供たちに見つかり、話すどころではなかった。物置に資材を降ろして外に出ると、子供たちがメイナに纏わりついている。俺も幼児専用の馬に変わ

り、彼らの子守に移った。

俺が違和感に気が付いたのは夜になってからだった。

サロがどこにもいなかった。

★★★

俺が枕代わりにしていた木箱は見当たらず、生木の匂いが香る新品を枕にした。

深夜、目を開くと月の明かりが顔に差し込んでいた。眩しくて起きたのではなく、誰かが外を歩く音がした。昼間のトロールが意趣返しに来たのかと思い、警戒して外へ出た。

森の奥へ向かう魚は、何かを抱きかかえていた。

月光で光る血痕を見つけた。何かあったのかと思い、隠密として後を追った。魚女は時おり振り返って周囲を警戒していたが、本気で気配を殺した俺に気付く素振りはない。

森の中の少しだけ開けた場所で立ち止まり、担いでいた何かを下ろした。

荷物が月光で照らされ、俺は卒倒しかけた。

つい昼間まで笑っていた幼子が、首にナイフを当てられていた。魚女の目には何も映っておらず、深い闇で気持ちよさそうに眠る幼児を見下ろした。

俺は何も考えず走っていた。突然に現れてナイフを掴んだ俺を、魚は不思議そうに見上げていた。

「……………どうして起きてしまったの？」

「足音がしたからな」

「そう……………尾行が上手いのね」

「隠密の本業だ」

俺はナイフを奪い取り、アイテムボックスへ仕舞った。

「お前たちは貴族の援助で孤児院を運営しているんじゃないのか」

彼女は嗤った。無知な俺を嘲るのではなく、自分へ対しての嘲笑が混じっていた。

「私たちはそんなに優しくない」

「俺は拾っただろう」

「行く当てのないものはよく働いてくれるから」

「……子供が少ないのは、殺していたからなのか？」

「少しだけ昔、獣人の小国家が滅びたの。トロールは瓦礫から財宝を掘り出し、私たちは調理してトロールに売る。財宝を街の貴族に渡して、新たな子供を得る」

「調……理……？」

想定外の最悪の展開に、俺の想像力が動いた。

「食人種に子供たちの肉は高く売れる。体が柔らかい幼児は彼らの嗜好品なのよ」

「サロを、殺して売ったな！」

俺たちが帰ってから、よちよちと歩いてきたサロを見ていない。俺は彼女の胸倉を掴んで持ち上げていた。次から次に沸き起こるのは、サロを家畜のように捌いて殺した彼女への怒り。怒鳴ったくらいでは引きそうにない。

「あの子はまだ3歳だぞ！ この子だってそうだ。おむつも取れてない、お前を親のように慕う子供を、躊躇いなく殺したのか。なぜそんな真似ができるんだ！」

「子供は種族に関係なく可愛い……本当に可愛かった。ひと月でも一緒にいれば情が移ってしまう……私の可愛い子供たち」

彼女は脱力し、サロの名前を聞いて涙を流した。後悔と懺悔は彼女の中で溢れ、俺の手を掴んで懇願した。

「全ては生きるため。弄ばれ、残虐に殺されるよりは、私たちが安楽死させた方がいいとしても……可愛い子供を殺す私たちは……いつか必ず報いを受ける。ふらつと現れたあなたは、私たちに罰を与える者だと思った」

人間が食われるという、容易に想像ができる残酷な真実。何年も続けていくはずの孤児院に、幼子数名しかいない事実。自分がとても汚らしいものだと思う彼女たちの苦悩。

考えればわかることを考えなかった。サロが消えたこと、あるいは

トロールと魚の会話、いま考えれば全てが事実を指している。

俺は誤魔化していた。

「皮肉なものね。生きるために何でもしようと思ったのに……最近、死ぬことばかり考えているの」

何も答えられなかった。目の前にいる魚と、歯ぎしりをしていた現実世界の俺が重なった。

「あと数日もすれば、トロールたちが財宝を抱えて持ってくる。それまでにすべての子供たちを処分しなければ、子供の補充と財宝の回収に来た使者が子供を殺す」

「生きるだけが……そんなに難しいのか」

「馬鹿ね……捨てられて、選択肢がない人はたくさんいるのよ」

「メイナは……」

「直接、聞きなさい」

俺は彼女を下ろし、しゃがみ込んで子供の頭を撫でた。幼子の髪は俺の指を流れ、触れるときざらりと溶ける氷のような優しい感触がした。胸が上下し、楽しい夢でも見てるように微笑んでいた。

「俺が……片をつける」

「人を殺した経験があるの?」

彼女は鋭い。幼子を助けて彼女たちを殺すか、彼女たちを生かして幼子を見殺しにするか、どちらを選ぶべきか、答えは簡単に出る。問題は、俺に彼女たちが殺せるのか、だ。

今の俺は、誰も殺せそうにない。人間基準の倫理観は理性の奥まで根を張っている。

「殺すのに躊躇いがあるなら、物置の上に置いてある木箱を開けなさい。きつと、決意は固まるから」

魚は子供の頭を膝に乗せ、優しく頭を撫でた。母親が子供を愛するように、慈悲深いものだった。

「私はここで待っているわね。この子と一緒に」

俺はその場を去った。

静かな森を歩きながら自問自答しても、俺の迷いは大きい。物置に戻り、棚の最上部に乗せてあった木箱を持つ。中に何が入っているの

か、薄々は勘づいていた。俺は優しく床に置き、蓋を一気に開いた。金縛りにあった。

中からむせ返る肉の臭いが立ち上る。顔を背けて臭気を逃がすと、赤いゼリーが飛び込んできた。スライムを箱に押し込めたような赤いゼラチン状の塊。ぶつ切りにされたサロの体が、赤いスライムの中でまばらに散らばっていた。

これは、煮凝りだ。

魚は血の一滴まで解剖した肉と一緒に煮詰め、俺たちが買い出しに出ているあいだ、長い時間をかけて煮凝りを作った。

サロの面影が残らないように丁寧に捌いた様子が見えたが、彼女の眼球と唇らしきものがゼリーの表面に浮かんでいる。表層に浮かび上がる肉塊はゼリーに凹凸を作り、浮かんだ両目と俺は目が合った。

「っ、あ、かつはっ……あ……！」

つばらで小さな両眼球は、可愛い女兒の生きている様子をありありと思い出させた。俺は顔から汗を零し、吐き気を堪えながら緩やかな動きで外に這い出た。

「っ……あ……ああ……あああああああ！」

気が付くと俺は絶叫していた。声は森の奥へ反響し、這いつくばる俺を月光が照らした。悲劇の舞台に立った主人公のようで情けなかった。

人間が管理するこの場所は、子供の家畜を締めて調理し、食人種に出荷する人間牧場だ。

子供たちは放牧されて健康に成長し、成長して膨らんだお腹が縮む前に捌かれる。

リアルでも、企業の歯車になって生きる子供は多い。

どちらも根本は同じで、一部の支配者層が甘い蜜を啜る。反吐が出る諸行無常はどの世界でも健在だ。

「……地獄だ」

「見たんですね……」

涙、鼻水、脂汗など、顔から様々なものを吹き出しながら振り返ると、月の明かりを背にしてメイナが立っていた。逆光で表情は黒く塗

りつぶされている。俺は酷い顔を隠そうと顔を背けた。

「死ぬべきだったんです、子供たちと別れたあの日に。だから、私に子供たちを抱く資格なんてないんです」

「こんな………まだまだ、お前はやり直せる！」

「私は、雇い主である貴族の情婦だった。散々、遊ばれて、犯されて、飽きたから、ここに回されたんです。あなたに抱かれたのも、現実から逃げ出したかったからです」

「う………ああああああ！」

俺の頭蓋骨の中を、これまで以上に色鮮やかな感情が溢れ、渦を巻いて意識を浚った。

自分でもどうしたいのかわからなかったが、激情は俺の体内で暴れている。俺は彼女の首を両手で掴んでいた。締めようにも力が入らず、俺の震えと彼女の震えが共鳴して力が滑り落ちた。

体から力が抜け、俺はしゃがみ込んだ。

「畜生………何であんたが、こんな目に………」

「生きていたかった。いつか子供たちと会えるんじゃないかって………子供たちに捨てられてから散々、さまよった挙句、幼子を殺す仕事に行きつくなんて………皮肉ですよね」

自嘲して小さく笑い、しゃがみ込む俺に顔を近寄せ、体液塗れの俺の顔を優しく拭いた。

「命令に従っているだけなら、俺がそいつらを殺してくるから………それであんたは自由の身だ。俺と一緒に魔導国へ——」

彼女は俺の口に指をあてて遮り、微笑みながら懐の血塗れナイフを取り出した。付着したばかりの鮮血はナイフの表面を切っ先に向けて流れ、草地へ滴った。

「ほ………ら。子供たちは、みんな死にました」

子供たちとメイナ、魚を連れて魔導国へ亡命する妄想は露と消えた。滴る血が誰のものかなど、彼女の塗りつぶされた顔が物語っている。

「なぜだあ！ 子供たちは何も！」

「あなたが人を殺すには理由が必要でしょう？ それに、どの道、こう



なる運命だったんです」

俺は目を見開いて立ち上がり、ログハウスへ顔を向けた。死者へするように合掌し、彼らの死体が冒瀉ブレイズされないように防いだ。

「忍術、《火遁、無礼蜉》」

口から炎で出来た蚯蚓が這い出し、一直線にログハウスへ向かい、家の中で暴れ回って火をつけた。ログハウスは炎に包まれ、暗い森は文字通り火がついて明るくなった。俺は炎に当てられた体をねじり、メイナを睨みつけたが彼女は笑っていた。

「優しいですね。私の言葉を信じてくれた」

「……死が救いだと思うなよ」

「首を刻むのが楽しみで楽しみで、内臓を引き摺りだし、血をバケツ一杯に啜って美味しかったとも言え、あなたはきつと私を殺してくれたんでしょね」

「……ああ、本当だ。出会った時にそう言ってくれればよかったんだ。それなら——」

「子供たちも死ななかつたかもしれない？」

彼女は炎に照らされ、出会ってから一番、良い笑顔を見せてくれた。

「なあ……死ぬ以外の道は無いのか」

「私は弱いから、もしかすると子供たちとまた暮らせるかもという希望に縋ってしまう。だから、子供たちを拾った人と同じように、強くて冷酷な異形種に、汚れた私を滅茶苦茶に壊してほしかった」

ナイフの切っ先を自分の胸に当て、柄を俺に握らせた。目を閉じた彼女は嬉しそうに笑っているが、裏で底の見えない闇が口を開いて囓っている。俺が手を伸ばしても、闇の奥には届かない。

「私がああ夜、抱かれたのは忘れるため。弱肉強食の世界で、弱者は自分を誤魔化して生きるしかない。あなたは強いから、忘れて生きてください」

「やめろ……そんなことは——」

「さようなら、優しい異形種さん」

ナイフの切っ先を自らの胸に当てた。俺は必死でナイフを奪おうとしたが、先に唇を奪われて俺の動きが止まった。異形の体の特性を

知っているかのように、俺の動きを止めてから刃へ倒れ込んだ。

ナイフは容易く心臓を食い破り、彼女の柔らかい体を貫いた。

掌から女性の命を奪い取った感触が伝わり、俺の胸の奥へ楔として打ち込まれた。

しな垂れかかる彼女から力が抜け、魂が剥離していくのがわかる。慌ててアイテムボックスを探したが、よりによって回復薬の類は見当たらない。彼女の柔らかい唇から血が流れ、白い肌が青白くなっている。

俺は今日を永遠に忘れない。

リアルから続いていた何も出来ない無価値な自分への嫌悪。それから逃げ出し、解き放たれて逃げ込んだ先も、リアルと何も変わらなかった。彼女の闇を晴らすことのできなかつた無力感が、また誰も救えないとせせら笑った。

「反吐が出る……」

俺は初めから、自分だけは綺麗な場所で死んでいくものたちを見ていた。自分が汚れないように気を付けながら、同じように要領よく過ごせない連中に苛立っていた。

自分に吐き気がこみ上げ、俺はその場に嘔吐した。

「うっづおええ……」

胃の内容物を全て吐き出す傍ら、メイナが体温を失っていく。燃え上がる炎は俺たちを照らしながら森中へ広がっていった。周囲が昼のように明るい夜、小さなログハウス、家の中の子供たちの死体まで、炎は残さずに飲み込んでくれた。

冷たくなっていくメイナを抱き上げ、森の奥へ運んだ。



魚女は俺がメイナを横たえるまで、何も言わずに俺たちを見ていた。まるで眠っているように、彼女の死体は綺麗だ。いま思えば、闇の深い彼女だからこそ綺麗でいられたのかもしれない。今ではその闇が眩しくもある。

「そう……全部、終わったのね」

「いや、まだだ。俺はこれから都市国家連合へ行き、貴族どもを殺す」  
メイナはソーハ家と言っていた。

彼女を情婦として弄び、ここへ人間牧場を作らせ、子供を誘拐して彼女たちに殺させていた卸元だ。彼女のためと言えは聞こえはいいが、俺は自分の恨みを晴らしたいだけだ。

彼女の衣服をまさぐり、煙草を取り出して一服つけた。

「ふー……」

空気を汚染する紫煙が俺の口から吐き出され、頭痛と酩酊感が訪れた。

「鬼神でも乗り移ったみたいね、ホヅミ」

彼女の言う通り、鬼でも宿ったように、俺の心は黒い鎖に囚われている。かつての俺と同様、自分の罪を自覚しない屑共を、あるべき地獄に叩き落としてやる。

「二度と会わないでしょうけど、元気でね」

「お前は自由だ。その子は……他の子供たちが死んでいく中、偶然、最後に残った命だ。何かの縁だと、立派に成長するまで面倒を見てやれ。死ぬならその後で魔導国に來い。そのときは、今度こそ俺が殺してやる」

俺は殺気を込めて魚を睨んだ。彼女は俺の視線を受け入れ、穏やかに笑った。魚なので表情はわかり辛いが、子を殺そうとする母親には見えなかった。彼女の明るい声が聞こえた。

「世話になったね、コウノトリさん」

煙草をくわえて紫煙を引き摺る俺は、途中で振り返った。

「俺の名はホヅミでも、コウノトリでもない。本当の名は……」

目を閉じて、俺が俺の生き方を受け入れる時間を要した。これから俺は、人間だった自分を殺し、暗殺者として血塗れの闇を生きなければならぬのだ。

魚は不思議そうに首を傾げてから、顔に似合わない可愛い声で聞いた。

「名は……」

「式式炎雷。アインズ・ウール・ゴウン魔導国の式式炎雷だ」  
俺は残像さえ残さず、その場を去った。



魚と別れてから、俺は夜の草原を走った。すぐに都市の明かりが見え、気配を消して闇に紛れた。ロールプレイも自己陶醉も存在しない。これから起きるのは、憎悪に囚われた俺の快樂殺人だ。

まだ明かりの灯る貴族の邸宅は警備が薄く、侵入は容易かった。応接間から下卑た笑い声が聞こえてくる。

「明日、仕入れたガキどもを牧場へ納品だ」

「ガキだからすぐに順応でき、彼女たちも楽な仕事でしような」

「スラムの孤児など、いくらでも替えがきく。食事をさせ、好きに遊ばせ、子守までついているんだから、短くて幸せな人生だな」

「ははは、仰る通りです。スラムを残してくれた都市長様様ですな」

「ああ、スラムには捨てられた子供たちが大勢いるからな。家畜にはしばらく事欠かんよ。いざとなれば、他国から攫ってくればいい」

揉み手の商人らしき男と、貴族の青年が話していた。

貴族は他人を見下したような目つきで、軽薄さが見て取れた。予想通り、特権に甘んじて何をしてもしゃくされると思っっている性格らしく、こちらにも必要以上に残忍になれそうだ。

影から歩み出た異形の俺に、二人は耳障りな悲鳴を上げた。

「な、なにものだ、いつからそこにいた！」

「誰か！」

俺は魚から預かったナイフを持ち、素早さを向上させた動作で商人の口を抑え、首を掻つ切った。出血は裂け目から吹き出し、貴族の体を赤く染めた。白目を剥いて絶命した彼を蹴飛ばし、紅に染まった手を伸ばして貴族を恐怖のどん底へ叩き落とした。

彼は絶叫を上げながら逃げ出した。

「闇に踊れ……」

一人の例外なく、皆殺しにするつもりだった。案の定、標的は情け

なく逃げ惑い、屋敷中の護衛をかき集めた。奴にも兵隊にも家族がいるはずだが、俺は躊躇わなかった。終わったら屋敷に火をつけ、炎で包んでやろう。

「だ、誰かいらないか！ 賊が侵入したぞ！」

彼の護衛は驚くほど弱く、背後に回って首に線を引くだけで力尽きた。多少のダメージは覚悟していたが、俺の素早さを目で追うこともできないようだ。部下や護衛として雇った兵士が背後で死んでいくの聞き、逃げる貴族の足がもつれていった。

屋敷の中庭で力尽き、失禁しながら腰を抜かして座り込んだ。

「な、なんなのだ、貴様は！ この化け物があ！」

その頃、俺の両手は返り血で赤く染まっていた。

強い殺気で奴を睨みつけ、両手で印を結んだ。

「拙者の名は式式炎雷……世に蔓延る悪鬼羅刹へ、天誅を下すもの」  
「なん——」

赤い掌を突き出して口を塞ぎ、顎の止め骨を砕いて外した。罪の意識がない汚らわしい貴族の言葉など、聞く価値はない。

「御命、頂戴する。畜生道に落ちた貴様らに生きる術無し。六つの地獄を巡り、己が罪科を悔い改めろ」

「おぎ、ぎ……」

「腐れ外道どもがあ！」

俺は指を口に当てて火を吐いた。

火だるまになった敵が断末魔の叫びを上げて暴れ回った。中庭の雑草に引火して炎が広がっていく。焦熱地獄を肉が灼ける臭いが漂った。仇敵が息絶えるまで、何の感情もない瞳で眺めていた。炎は屋敷に燃え移り、全てを呑み込もうとしている。

場所を移動し、離れた場所から屋敷が炎上する場面を腕を組んで眺めた。

（所詮、この世は弱者のまやかし……か）

闇に走り、影に潜む、鮮血で彩られた暗黒こそ、忍び耐える俺の生きる世。正義や愛は必要なく、暗殺者に慈悲はない。

これで俺も彼女と同じ、両手を血に染めた罪深き外道だ。

俺はそうすることで彼女が救われたと思い、自分を救いたかった。まやかしだろうと、死後は彼女と同じ場所へ行けると思いたかった。俺は望んで地獄に囚われ、足跡は血でと汚れていくのだろうか、やっとな彼女と同じ目線に立てた。

俺はきつと初めから、現実世界から逃げ出した自分も含めた人間が嫌いだった。幼い時から歯車のように利用される人間、虫けらのように死を受け入れた同僚、一部の特権階級だけが平和に過ごせる社会。それらよりも、要領よく立ち回って難を逃れていた自分自身を、心の底から嫌悪していた。

地獄から逃げた俺が行きついたのは、やはり地獄だった。

それだけのことだ。

貴族の館が崩壊するのを見届けてから、アインズ・ウール・ゴウン魔導国を目指し、西へ走った。

夜の草原を忍者走りで駆け抜けたとき、こみ上げる吐き気に立ち止まった。

どれほどえずこうと、俺の胃からは何も出てこなかった。

俺は自分考えていたよりずっと、一晩だけ肌を重ねた彼女に惚れていた。

気が付くと、顔を掻きむしりながら吠えていた。

「ぐ、あああああああああ！」

傷口から流れる血が顔を流れていく。

二度と帰らぬ過去の彼女が、月に浮かんで俺に笑いかけ、月光で俺を灼いた。

彼女の子供を拾い上げた異形種が誰かは知らないが、子供たちは魔導国にいる。名前も聞かなかったのに、会えばわかると確信があった。

森で眠る彼女の墓前に花を添え、報告しに来よう。  
穢れた人間を辞め、血に塗れた異形の生、しばらく抜け出せないで  
あろう地獄にいる俺に、新たな目的ができた事が嬉しかった。

風を切り裂きながら西へ走った。

## 寄らば優しき鬱

タフじゃなくては生きていけない。優しくなくては生きている資格がない。

——レイモンド・

チャンドラー

雪が降りそうで降らない寒い夜。

風を避けて路地裏に入ろうとも寒さは神経を凍てつかせ、薄汚れた手は霜焼けで真っ赤だ。どれほど擦り合わせても手が震え、二日ぶりにゴミ箱を漁って手に入れた貴重なパンを取り落とした。気にした素振りもなく、簡単に砂を手で払い、食いつこうとしてから動きが止まった。

一匹の子猫が従者のように隣に座り、綺麗な瞳でこちらを見上げていた。

「なんだ、お前は。あっちへいけ」

《にやあああん》

「儂のパンだ。貴様になぞくれてたまるか」

《？》

「……我が家臣になるのなら考えてやっても良いが」

《にやあ、にやう！》

「そうか、そこまで家臣になりたいと申すか。二日ぶりのパンだが……貴様にくれてやる。お前は今日からジェイムズだ！」

焼き上がったからかなりの時間が経過したパンは固いが、子猫は美味しそうに食いついた。

大人になるということは、忘れることだと誰かが言った。

世界から切り捨てられ、自分が何者か忘れてしまったような人間の末路に、明るい光はない。しかし、誰も必要とせず、誰からも必要とされない生き方は必ずしも不幸ではない。自らの幸福は自分自身で決めるべきもので、他者の評価は一つの指針でしかない。



◆  
自宅で机に向かって仕事をしていると、不意にドアが開いた。

「明美ちゃん、いる？」

「お姉ちゃん！」

年の近い姉とはよく連絡を取っているが、実際に会うのは稀だ。教員をしている姉はいわゆる勝ち組に分類され、日々、聖職に追われて忙殺されている。前触れなく部屋を訪れた彼女に、喜びよりも戸惑いの方が大きく、私が想像したのは結婚の報せか、最悪の凶報。

「クビになっちゃったあー」

彼女は座り込んで力なく笑い、最悪の凶報を告げた。

今の社会で、職を失うという言葉が意味するのは一つ。純然たる、避けようもない、逃れられない死だ。馘首<sup>クビ</sup>は斬首なのだ。姉を取り巻く事情を把握し、怒りで震える拳を握って立ち上がった。

「許せない……弁護士を雇って内容証明を出してやる！」

胸に暴風雨<sup>スーパーセル</sup>が生まれていた。

母子家庭の私たちは、母を亡くしてから2人で生きてきた。大切な姉の首を切った者を許せず、それ相応の報いを受けさせてやりたかった。

「仕方がないよ。明日から仕事、探さないよ」

「どう考えても不当解雇、報復人事でしょう！ 現場のお姉ちゃんがどれほど子供たちのために思っているか！」

モンスターペアレンツに分類されるクレーマーに目をつけられたのだ。そういう手合いは、往々にして権力を振るえる場所にいることが多い。学校は企業の援助なしに運営が成り立たず、姉はとかげの尻尾よろしく首を切られた。これで学校側は丸く収まり、運営に支障はでない。

「うん……そうなんだけどー」

「けど、なにさ」

「教頭先生にも立場があるから」

確かに、この世界で生きるためには、企業側の人間を無視できない。学校は利益追求とは無縁の存在だ。授業料を高く設定したところで、寄付金が無ければ成立しない。学校は企業に都合の良いことだけを教える洗脳教育所で、管理職でさえ世界を牛耳っている企業に都合のいい歯車だ。臭い足を向けて寝れば、速やかに報いを受ける。

それでは、首を切られた姉の立場はどうなる。小学校の教員とは狭き門で、不足が生じれば人が群がり、幾らでも補填される。椅子取りゲームからあぶれた姉に、同じ職が都合よく回ってくるとは到底、思えない。そんなに私は楽天的ではない。

「どうしようもなかったんだよ、教頭先生も」

「なんでそんなに落ち着いていられるの!」

やりきれない感情が私の拳を震わせる。拳を振り上げて机に叩きつけたが、本当は姉の上司の頭に叩きつけてやりたかった。きつと禿散らかしているに違いない。

「そんなに怒らないでよ、明美ちゃん。なんとかなるよ、きつと」

「なるわけないでしょう!」

「教頭先生、大丈夫かなあ……」

姉は遠い目をして、汚染された空気が煙る窓の外を眺めた。

樹齢万年の巨木並みの精神を持つ姉は、自らの首を切った教頭の心配をしているのだ。どうして彼女は、命の危ぶまれる状況まで追い詰められているのに、こうも優しく微笑むことができるのか。

「優しすぎるよ……お姉ちゃんは」

視点を変えてみれば好都合かもしれない。私の中に残っていた躊躇いは、姉の斬首という灼熱の怒りで一片の氷のように溶けた。机の引き出しから手紙を取り出し、姉に見えるように指で弄んだ。

「ねえ、旅行に行かない?」

「旅行?」

「異世界への招待状なのよ、これ」

何とも言えない奇妙な顔で私を見ていた。彼女が知らないのも無理はなく、この手紙は姉には届いていない。

差出人も不明なのに、この機を狙っていたかのような出所不明な怪

文書。薔薇の封蝋に蛇の絵が刻印された手紙。姉の名を“舞子”から“やまいこ”に変えることが、私に舞い降りた託宣だ。もし、この文書が全て嘘であり、死んでしまったとしても構わなかった。私の愛する姉を切り捨てた世界に未練はない。

「異世界……かあ……。面白いね、それ。でも本当に行けるのかな」  
「駄目で元々だよ、お姉ちゃん。職を失ったし、ちようどいいじゃない」

「う……。まあ、そう言われればそうかな」

二度と帰れないとは教えなかった。

その夜、姉が見守る中、ユグドラシルのアイコンを押しした。

徐々に意識が遠ざかり、視界が暗転していく。体を失う間際、姉が倒れる音を聞いた。



「あけみちゃんの頭も撫でてよ。頑張ったねって褒めてやってよ！勉強ばかりさせないで、二人も産んでくれたんなら、同じように優しくしてよ！」

（お姉ちゃん、私は勉強だけしてればいいんだよ）

「髪を梳かして、よしよしやってよ……勉強なんかできなくてもいいよ……僕が守るから」

（……私は優しくなりたくない）

夢の最後に銀色に輝く門を見た。

気が付くと私は草原に立っていた。

体を通過する風が心地よく、自然と目を閉じた。汚染されていない大気は、現実世界で積み重なった日々の垢を引き剥がしてくれた。目を開いて空を見上げれば、千切れた雲の隙間から太陽光が地表に差し込んでいる。深呼吸をして澄んだ空気を肺の奥まで吸い込んだ。体の悪いところ全部、浄化してくれるような澄んだ空気が肺を満たした。

私は森妖精エルフになっていた。

体が妙に軽いが、驚くべきはその容姿だ。女性らしいすらつとした流線形のくびれ、胸は現実よりも大きくなって、耳に手を当てると尖がった耳が生えていた。アバターを美人のエルフにしておいて本当に良かった。鏡を見るのが楽しみだ。

緑色のミニスカートから露出する太腿が白くて眩しい。私でも見惚れる白さだ。緑のドレスの両腕にごつごつしたガントレットを嵌め、背中に弓と矢筒が取り付けられていた。ユグドラシルの装備品通りだ。手間と時間をかけた弓は掌に吸い付くように馴染み、背中の矢を取り出して空へ放つと、地上から飛び上がった矢の一撃で雲に穴が空いた。

窗口を広げられた太陽光が地表に差し、草原の緑を輝かせた。抒情詩的な表現に苦笑いをしながら、美しい風景に口を開いて見とれた。

「凄いなー……」

「本当、凄いな！ 明美ちゃん！」

「あ、お姉ちゃん。おはよう」

いつの間にか起きた姉が、興奮した様子で叫んだ。

「アバターじゃなくて、現実だよ！ ガスマスクいらなんなんて感動するね！」

何と表現したものか……お姉ちゃんは、すごく大きい。

私と別ギルドへ属していた姉は、引退時に装備品とアイテムを預けてしまい、今は薄い布切れのような物を身に纏っている。いわば紙装甲だ。浮浪者のようで可愛くないし、全然、似合っていない。当の本人に気にした様子はない。人間を辞めても、大樹のように揺るがぬ精神は健在だ。

半魔巨人ネフィリムだけあって背が高く、並ぶと私の頭二つほどの差があった。

「美人だなあ、明美ちゃん。背が縮んでるけど……大丈夫？」

大きな目で私を見下ろす姉は、妹の身長が縮んだと心配していた。天然なところも健在だ。

「お姉ちゃんが大きくなったんだよー」

「そんなに背が高かったっけなあ……」

彼女は体を捻り、腕を振り回し、物珍しそうに自分の体を観察していた。

こうして実体化したアバターを見ると、実に奇妙なデザインだ。先に自分の紙装甲を心配すべきだが、種族が変わっても姉らしさは変わらない。つつい、私の頬が緩む。

「その凶太さと同じように大きいね、お姉ちゃん！」

「そう？ そんなに太くないと思うけど……」

どうやら自覚はないらしい。冗談交じりの冷やかしも姉の天然性に受け流された。

「でも本当、明美ちゃんは美人になったね。エルフってこんなに美形だったんだ」

「羨ましい？」

「うーん……どうなんだろう」

「ほらほら、アバターだから胸も大きくなってよ？」

自分の胸を両腕で持ち上げて迫ると、姉は顔を背けた。自分で言うのもどうかと思うが、バストは大幅にサイズアップが図られていた。

「触ってみる？」

「やめい」

「あははー！」

「すぐにお嬢さん、見つかるよ。僕も一安心だね！」

「うーん……どうなんだろう」

あまりそちらには興味がない。結婚適齢期で考えれば、姉の方が心配だ。上下左右、どの角度から見ても、半魔巨人に人間だった名残はない。

「お姉ちゃん、結婚できるかな……」

「ん？ それより、ここはどこかな」

私たちは周囲を見渡した。

手紙には異世界の情報は一切、書いてなかった。私たちが立っている場所は広大な草原の中央で、南に大きな都市が見えた。高い城壁に囲まれた都市は大きく、それなりに栄えている。東に山脈が見えた

が、山歩きの趣味はない。向かうなら都市だが、私は二の足を踏んだ。「お姉ちゃん、まずメッセージで知っている人に片っ端から連絡してみよっか」

ユグドラシルほどPKが流行っているゲームはない。異形種狩りは匿名掲示板で狩猟報告の掲示板が立っていたほどだ。異世界でPKは流行っていないと思うが、ユグドラシルを源泉にした世界で迂闊な行動をする気になれない。紙装甲の姉を守りながら戦えるほど、私は強くない。

「町へ行こうよ」

「ええー？」

「入ってから考えても良いじゃない？」

PKを警戒しているのは私だけのようだ。

「良くないよう……PKとかされたらどうするの」

「その時はほら、取りあえず殴ってみて、駄目そうなら逃げようよ」

「装備……紙装甲じゃない」

「人間、捨てたもんじゃないよ。大丈夫だよ、きつと」

全然、大丈夫ではない。こちらより相手の足が早かったらどうするつもりなのか。姉は歩き始め、考えることを止めたようだ。私はため息交じりに後を追った。

現実私の想定通り、大丈夫ではなかった。



都市に入ろうとする人間の列で、巨人種の姉とエルフの私たちは完全に浮いていた。行列の前後から視線で挟撃されたが、私たちはそれらの一切を無視した。

「お姉ちゃん、戸籍ってどうなるのかな。この世界の戸籍とか持つてないけど」

「戸籍なんてないんじゃないかな。異世界って中世ヨーロッパを元にしてるんでしょ？ 気になるのはそれよりも通行税だよ」

「ユグドラシル金貨でいいのかな」

「わからない、困ったね」

困っているようには見えなかった。

緩やかに進む列が城壁まで差し掛かると、私たちを発見した門番は順番を無視して駆け寄った。私に一瞥もしないとところを見ると、エルフは一般的な種族なのかもしれない。姉を見上げて凝視し、嫌な臭いのしそうな汗を流していた。

「失礼ですが……お名前を」

「山瀬舞子です」

さも当然とばかり、涼しい顔で本名を名乗ったので私は慌てた。

「お姉ちゃん、それ本名!」

「あ、そっか、間違えちゃった……ごめんなさい、やまいこっついていいます」

姉は小さく頭を下げた。体の感覚がずれているので、下げた頭が門番の兜に衝突しそうだった。

「……どこかで聞いたような。食人種……でしょうか?」

「違います」

「目的はなんでしょう」

「目的……観光かな?」

「私に聞かれても知らないよう……」

姉が私を見たので、門番も釣られて私を見た。目的地や目的など考えていないし、今は情報さえ持っていない。

「か、観光ですか? 種族を教えてくださいいただけますでしょうか」

「ネフィリムです」

「ねふ、ねふいりむ? 聞いたことない……。少々、お待ちください」

エルフは高飛車で人間嫌い、気の強い美人と描かれることが多いが、今の私はまさにそれだ。知らない人に口を開くのが億劫に感じられた。私の種族はいわゆる長命種だが、この体は何歳なのだろうか。アバターの設定年齢が関係しているのなら、体を動かすのが億劫な年寄りの可能性もある。

(実は数百歳とかだったりして……なんてね)

想像して怖くなった。

「ネフィリムってあまりいないのかなあ」

「そういう問題？」

「違うの？」

間違いないと思うが、議論しても仕方がないので言及を止めた。

「お姉ちゃん、門番が武器を持って走ってきたら逃げるからね」

「大丈夫だよ。優しそうな人だったから」

「基準はなんなの……？」

「お話し中、失礼。そちらのエルフは奴隷ですか？」

後方のおじさんが話しかけてきた。気安く話しかけられ、私の胸に不快感がこみ上げた。

「姉妹です」

「姉妹……ははは、面白い冗談ですな！」

よく見ると顔が脂でてかてかと輝き、体型も弛んでいる。姉の首を切った下劣な輩の人物予想図と重なり、口を利くのも嫌だった。姉は相手の容姿に気にせず、落ち着いて話をしていった。

「すみません、ここは何という街ですか？」

「あ、ああ……知らないのか。ここはバハルス帝国首都、アーウィンタール。帝都といえどこの国でもここを指す」

「へー」

何とか帝国と言われても想像が浮かばない。それよりも気になるのは、彼のいやらしい視線だ。私の頭から足先まで舐め回すように見られ、男性が女性を値踏みする、好色で不愉快な視線だ。

「帝都では魔導国に奴隷が買い占められて以来、エルフとは幻の奴隷です」

聞いてもいないのに下世話な話を始めた。姉の眉が顰められ、私の目つきが険しくなったが、相手はこちらの不穏な気配に気づかなかつた。

「冒険に連れて行ってよし、性の奴隷として使ってもよし。よろしければ言い値でお譲りいただけませんか？」

「はっ」



「いえ、ですから、そちらのエルフを高く買い取らせて頂けないでしょうか。今やエルフは希少な奴隷で——」

私が弓を構えたと同時に、姉の怒りの鉄拳が地面に落ち、大地に亀裂が走った。

「お姉ちゃん……」

「駄目だよ、明美ちゃん。そんなので人を狙ったら死んじゃうからね」

「……死ねばいいのに」

「明美ちゃん！ どうしてそんなこと言うの」

「もう逃げちゃったよ」

「あ……文句、言いそびれちゃったよ。失礼しちゃうよね、奴隷だなんて」

私にセクシヤルハラスメントをした下品な男は怯えて逃げ去り、列に並んでいた数名は亀裂に嵌まって助けを求めていた。喜劇的にして冗談混じりの光景は私の機嫌を修復した。

笛の音が鳴り、怒りの衛兵たちが駆けてくる。

「こらー！ そこ、何をしているー！」

「あらら……牢屋行きかな」

「それは困るよね」

安っぽい長槍を持って走る姿が、今一つ、真剣味シリアスに欠ける。もしかすると、この世界は冗談風味ギャグが強いのもかもしれない。「こらー！」と、怒鳴り声がかみなり親父風なのはこういうことだ。

「あけみちゃん」

「なに？」

「逃げようー！」

急発進した姉に引つ張られ、足先が空を向いた。列に並ぶ数名の男性たちにミニスカートから覗く下着が見られたが、羞恥心よりも衛兵を避けて都市内へ突っ込んでいく姉へ突っ込みたかった。どうしても外に逃げず、内側に逃げ込むのだ。

「衛兵さーん！ 穴に落ちそうな人たちを助けておいてねー！」

「あ、こ、こらー！ く、ま、ど、どうすれば……」

私は笑顔で手を振った。右往左往する兵隊さんは迷った挙句、穴に

嵌った人たちの救助へ取り掛かった。姉の見立て通り、優しい人なのかもしれない。

「手の空いたものから後を追ええ！ 絶対に逃がすな！ 探していた魔導王陛下の御友人殿だ、取り逃がしたら皇帝陛下に殺されるぞ！」  
後方で衛兵の怒鳴り声が聞こえた。どうやら私たちは尋ね人らしい。魔導王とは誰のことだろうか。

私たちは追いつがる衛兵たちを簡単に引き離し、とある廃墟へ逃げ込んだ。



全力で走ったにもかかわらず、姉は息一つ乱れていない。私は彼女を建物の中へ押し込め、影から街の様子を窺った。追手の騎士で騒然となった街も、逃げ込んだこの区画は静かだった。

「うまく撒いたみたい」

「よかった」

「良くないよ！ どうして外に逃げなかったの、お姉ちゃん！」

両手を腰に当てて怒っている私に、姉は嬉しそうに笑った。

「逃げ出すことで精いっぱいになっちゃった。ごめんね」

「もうっ……」

逃げ込んだ廃墟は今でこそボロボロに朽ちている。歩くと埃が舞い、床がギシギシと悲鳴を上げた。

「なんかこの辺、静かだね。廃墟なのかな？」

「奥まで見てみようか？」

もう少し、注意して進んでもらいたいものだ。巨人が穴にでも落ちたらエルフの私には辛い。

埃臭い廊下を進むと物音が聞こえ、私に冷や汗が流れた。椅子から立ち上がったような木材の軋む音と、男性の怒号。私と姉は無言で顔を見合わせ、聞こえた部屋の扉を隙間程度開き、室内を窺った。

「だから言っているだろう！ これは必要な消費だと！」

中から男性の怒鳴り声が聞こえ、私たちの体が跳ねた。

「あの糞つたれな愚か者が死ねば、我が家はすぐに貴族として復活するのだ！ 我が家、フルト家は足掛け100年も続く、歴史ある帝国貴族家。断絶するなど許されんのだ！」

乞食らしきみすぼらしい身なりの男性が、姿の見えない誰かと言い争っている。扉の隙間を広げても、相手の姿はどこにもない。一人で怒鳴っている浮浪者に、“狂人”という言葉が浮かんだ。

「ジェイムズ！ ジェイムズはどこだ！ 聞いてくれ、このわからずやの馬鹿娘が——」  
「げ」

立ち去ろうと予備動作を開始する間もなく、老人によって扉が開け放たれた。浮浪者は室内を窺っていた私たちを発見し、怪訝な顔をした。

「む、お前たちか。ジェイムズを見なかったか？」

「あ、ぼ、僕は——」

「まあ良い。お前から何か言ってもやってくれ。幾分か、同じ女性として、メイドの話なら聞く耳を持つだろう」

「だから、僕——」

「なんだ、そのエルフは。まさか、アルシェの下賤な仲間か！」

「明美ちゃんは僕の妹だよ！」

姉の叫びで会話の間が空き、静寂が際立った。

浮浪者は視線を左右に泳がしてから私たちを眺め、打って変わって優しく微笑んだ。

「そうか、妹がいたとは初耳だ。丁重にもてなしなさい。この家は好きに使っていいからな。それで、名は何というのだ」

「お姉ちゃん、誰と勘違いしてるんだろうね」

「しいっ！」

「んん？ どうかしたのかね」

姉をメイドの一人だと信じて疑わないようだ。この姿の姉が人間に見えるというのだから、狂人の独創的な理解力には恐れ入る。流れで私もメイドの妹にされ、名を名乗らなくても勝手に話が進んだ。

「家臣の家族であれば歓迎するのは当然だ。由緒ある我がフルト家へ

よくぞいらっしやった。自分の家のつもりで好きにくつろぎなさい。身の回りの日用品は妻と相談してくれ」

「は、はあ……」

「客間はいくらでも空いている。後ほど案内をしてやりなさい」

「あ、の、僕はメイドじゃなくて……はあ。明美ちゃん、外で待っててくれる？」

「お姉ちゃん、関わらない方がいいよ」

「ごめんね、放っておけないよ……」

優しいにも限度がある。目的も予定もないとはいえ、狂人に付き合っただけ情報収集もできず、社会から解放された姉の行動が阻害されるのは不愉快である。老人への敵意と害意が生まれ、私の体を内側から苛んだ。

脅してやろうと弓に手をかけると、皮のブーツに違和感があった。

茶虎の猫が私の足に食いついていた。

「おお、ジエイムズ！ そんなところにいたのか。客人の相手をしなさい」

ブーツを噛んでいた猫はジエイムズと呼ばれてから姿勢を正し、座って尻尾を左右に揺らした。全体的に丸々とした体と、ふわふわした体毛が「愛でろ」と誘惑した。

「あら、可愛い」

「明美ちゃん、おじさんと話をするから、外で待っててね」

「む……あまり感情移入しちゃうだめだからね」

猫は尻尾を立てて部屋を出ていき、私は猫に続いて部屋を追い出された。

優しい姉が猫を拾う感覚で浮浪者の相手をしているあいだ、退屈なので中庭の古ぼけたベンチに座った。町の喧騒は廃墟までよく聞こえてくるが、この区画だけ、世界から忘れ去られたように静かだった。「君の名前はなんていうの？」

私の隣に座って背中を丸めている彼は、座って庭を眺めていた。

「君もあの人の家臣なの？」

返事がない。見た目に反し、不愛想な猫だ。

「答えないならー……これならどう」

手近なところに生えていた猫じやらしを引っこ抜いて、顔の前で左右に振った。最初は無視を決め込んでいた彼も、たちまちにじやらしれ始めた。

股座またぐらにぼんぼりのついた雄猫オスは、姉が戻ってくるまで暇潰しに付き合っあって遊んでくれた。どれほどの猫じやらしを駄目にしても、一言も鳴かない猫だった。

ハムレスと勝手に名付けた。



猫じやらしを全滅させてしまい、一人と一匹は口を開いてベンチに座り、退屈を満喫していた。

「明美ちゃん、待った？」

姉の声で私と猫は同時に顔を向けた。

「お姉ちゃん、遅ーい」

「あ、ご、ごめんね、明美ちゃん」

「それで、どうだったの？」

四苦八苦して聞き出した話によれば、彼は没落貴族のようだ。しかも、彼の本来の屋敷は人手に渡り、ここは住人のいなくなった近隣の廃墟だという。

屋敷の主はいつの間にか姿を消し、後には大量の酒が残されていた。彼はそれで栄養を摂取していたらしく、吐息はたいそう酒臭かったと言った。

主の彼が贅沢暮らしをするために借金を重ね、その挙句に子供たちは逃げ出し、妻にも見限られ、家族だけでなく世界から捨てられた彼が行きついたのは、同じように世界から切り取られた静かな廃墟だった。

つまり、落ちぶれて放浪した末、酒と妄想に浸る生活を送っている狂人に捕まったわけだ。

「さ、気が済んだなら行きましょつか」

「ううん……でもね」

そう言うことはわかっていた。この先の展開も容易に想像できるが、抵抗せずにいられない。浮浪者の面倒を見るために異世界に呼ばれたのであれば、そんな運命は願いたい下げだ。姉は恋愛の末に誰かと結婚し、子供を産み、細やかで幸せな家庭を作らなければならない。

「お姉ちゃん。放っておきなよ。現実と向き合えなくて壊れちゃったんだから」

「でも……可哀想だし」

「はあー」

未来予想図と寸分狂わぬ展開に、深いため息が出た。

「あのね、お姉ちゃん——」

自分のことを最優先に考えてこそ、人は他人に優しくできる。今の私たちには力があるが、それは腕力だ。生活費も、立場も、権力だって今の私たちは持ち合わせていない。人の世話ばかり焼いても誰も助けてくれないなら、まず自分の満足と幸福を第一に考えるべきだ。「だからね、妹の私を含めて他人のことなんか考えず、自分のことだけ考えてもらいたいんだけどなあ」

長々とした私の話を、姉は申し訳なさそうに聞いた。

「あ、ご、ごめんね、明美ちゃん……」

図体の割にへこたれてしまった。肩を狭めて俯く姉に、寄り道くらいはしてもいいかと思った。

「それで、どうしたいの？」

俯いた顔が即、上を向いた。



不思議なことに、浮浪者の話は一見してまともだった。

「あなたはぼつら……帝国貴族なんですね？」

「む、現在、御家復興を目標に掲げている。現皇帝の改革で貴族の大多数が地位を追われ、自らの御家復興に追われている。この高級住宅街

も、空き家が目立つようになったものだな」

ロッキングチェアに腰かけ、黄色いひざ掛けをかけた老人は、後に揺れる椅子に抱かれて窓の外へ視線を向けた。

「具体的に何をしているのでしょうか」

「御家最高のため、娘が外で稼いでくる。私は帝国貴族として恥ずかしくないよう、ここで財産の管理をしているのだ」

理性は長続きしない。どれほどまともに見えようと彼は狂人で、いわゆるアシの早い理性でしかない。話はすぐに脱線し、衝突事故を起こした。

「……財産の管理とは？」

「絵画を集め、屋敷で招宴を開かなければならない。あの子も年頃だ、結婚の相手に相応しい貴族か王族と婚約しなければならない。あの馬鹿娘はどこにいったのだ。大体、娘たるもの、父親の言うことを聞くのが道理だろう。さっさと金を稼いで帰ってこい！ 異形種なんぞにたぶらかされ、家を捨てた親不孝者がっ！」

（家にいるのか、いないのか、どっちなんだろう……？）

「その伝手はあるんですか？」

「何を言うか。これでも帝国貴族の名は伊達ではない。私が一声上げれば、すぐに人が群がってくるわ。見えんのか、胸に輝くこの勲章がっ！」

（胸には何もありませんが……）

「そうだ、三軒先に住んでいる帝国兵士に頼もう。奴は少年期、庭の草むしりで手に入れた雑草を乾燥させ、独自の薬物を吸引して意識を天まで飛ばし、このままでは神様のところへいけないと喚き散らし、脱糞した勢いで天まで昇ろうとしていたぞ」

「ぶっ」

「踏ん張った姿勢で数センチ飛び上がっただけでも見事だが、着地のことを考えてなかったようだ。自分で拵えたモノの上に顔面から着地し、涙と糞を撒き散らして大騒ぎしていた」

一生の不覚。下品で不愉快ここに極まれりという話であったが、予期せぬ冗談に吹き出してしまった。

「奴の話ならまだある。溜めに溜めた小遣いで花火を買い漁ったが、串焼き露店の前で転んで花火を炭火の上に落とし、起爆した射出花火が大砲よろしく通行人たちに襲い掛かったそうだ」

「ふっ……」

「頭だの、背中だの、尻だのを花火で打たれた通行人から袋叩きにされ、露店の店主に焼いた肉の弁済を求められた奴は、花火で焼けた肉を売り歩き、身振り手振りで順調に売り上げを伸ばし、儲け<sup>アガリ</sup>で新しい花火を買った」

「ふ、ふーん……」

「今度は大玉花火だった。またも同様、魚を焼く露店の前で転んで導火線に引火したが、導火線は長めに作られていたのですのですぐには着火せず、大玉はコロコロと下水道に落下し、汚水処理用のスライムどもを吹き飛ばした」

「……」

「汚れたスライムの断片が排水溝から噴き上がって町中に付着し、残骸が辺り一面にへばりつき、汚水処理のできなくなつた下水溝の臭いも加えて、帝国を臭い街へ変えようとした不穏分子としてひっ捕らえられた。しばらく街の一区画に臭いは残り、奴はむち打ちの刑に処され、花火の代わりに魂を天まで打ち上げんばかりに叫んでおつたわ」

「ぶっくく……」

「ここまで弱みを握れば、言うことを聞かざるをえまい。えー……奴の名はなんといったかな……いや、これは私の話だったか？ まあ、誰でもよい。見つけてしまえばあとはどうにでもなる。どうだ、簡単な話であろう」

最後の妖しい台詞で、ここまでのやり取りの全てが水泡に帰した。個人的に内容は面白かったが、この調子で話を続けていては埒が明かないし、時間も際限なく食い続ける。ロッキングチェアに揺られる彼は、上から下まで一人前の浮浪者だ。何日も洗っていない頭髮にふけが絡まり、皮膚は数か月、下手をするとそれ以上、体を拭いていない。

衣服だって垢だの、埃だの、土だの、様々な色に薄汚れ、所々に穴



が空いてボロボロだ。

「家族はどこに？」

「長女は異形種に攫われたわ！ あの馬鹿娘、さつさと金を稼いでこいというのに」

「攫われた……帰ってこないのでは？」

「娘はそこにいるだろう！」

彼が指さした方角には飲み終えた酒の瓶が無造作に転がっている。

「ああ、駄目だ、こりゃあ」

「明美ちゃん……」

（なんでよりによってこの家に飛び込んだじゃったのかなあ）

他の家なら彼と出会わずに済んだものを、私たちの不首尾だ。

「あやつさえ現れなければ、長女の稼いだ金で復興さえできていたに違いないのだ！ どの馬の骨とも知れぬ異形種になびきおつて……馬鹿娘が」

最後の眩きだけ、妙に哀愁が漂っていた。

私は彼の背後にある謎の壁画を眺めた。血で描いたような赤色の逆十字と、黄色の歪んだ五芒星<sup>エルダーサイン</sup>、触手を生やした蛇の周囲を浮かぶ大量の球体。何を意味するのか知らないが、前の住人もまともな人間とは思えなかった。狂人は狂人を呼ぶのか。

この高級住宅街は彼と同様に没落した貴族の持ち家が多く、家を維持できなくなつて行方をくらませるのは日常茶飯事で、現実社会<sup>リアル</sup>に通じるところがある。実際、私たちが飛び込んだこの家の隣も、その隣も、向かいの家も隣の家も空き家だ。

「ジェイムズ！ いないのか、ジェイムズ！ 馬鹿娘はどこへ行つた！」

（さつきはそこにいると言つてたじゃん……）

どうにかしてやろうにも、こちらは狂人だ。初めから打つ手はなかった。

「お姉ちゃん……それで、どうしたいの？」

「理想は一人で暮らせるような環境なんだけ——」

《にやああ》

「ど、けど……明美ちゃん、猫の真似した？」

ハムレスが私の足に噛みついていていた。

中庭で遊んでいたときには鳴かなかったのに。

「ジェイムズ！　そこにいたのか、娘を見なかったか。彼女たちが来てから娘の姿が見えないが」

どうやらハムレスは、ジェイムズと名付けられた家臣のようだ。この家での序列は主の浮浪者を頂点に置き、猫のハムレスジェイムズが一番、姉が二番、私が三番だ。いつ瓦解しても不思議でないヒエラルキーに、頭が痛くなってきた。

「お姉ちゃん……ちよつと、外の空気を吸ってくる」

「うん。今のうちに換気しておくね。今日はここに泊まることになりそうだから」

「うげえ……」

窓の棧を指で擦ると、幾重にも重なった埃の層があった。簡単な掃除で積もった汚れは取れそうにない。ここで寝るなど御免被りたかったが、姉はその気になっている。

「おじさん、掃除するから、隣の部屋に運ぶよ」

「うむ、最近のメイドは力持ちになったものだ。空の散歩を頼んでくれるびやあきいにも見習って貰いたい。びやーきーかばいあくへーかどちらなのだろうな？」

「はいはい、隣の部屋で待っててね、おじさん」

面倒見の良い彼女は意味不明なことを尋ねる狂人を椅子ごと持ち上げて移動させ、掃除を始めた。尻尾を立てて出て行った虎猫に続き、私も部屋を出て行った。

私は外で深呼吸して肺の空気を入れ替え、一番の家臣に愚痴をこぼした。

「お姉ちゃんたら、優しいにも限度があるわよ。なんで簡単に切り捨てられないのかなあ」

《にやあおあおーん！》

「ハムレスもそう思う？」

《にやにやにや！》

「はあ……お姉ちゃんは昔からそう、人のことばっかり気にして」  
《にいやああ……》

何となく会話が成立しているような鳴き声だ。

猫と並んで中庭に出ても、見捨てられた廃墟は静かだ。

「あーあ、人助けじゃなくてさあ！ お姉ちゃんに幸せになつて欲しかっただけなんだよー！」

今度は返事をしてくれなかった。

茶虎の彼は門から外へ出て行こうとしている。途中、何度も振り返り、私が付いてきているかを確認した。放つておこうかと思つたが、暇潰しで猫に導かれるのも悪くはない。

私は外へ出た。

ハムレスは人気のない石畳を迷わずに進んでいった。どこへ行くのかと興味津々で後を追っている内、彼の足は止まった。

「エルフのお嬢ちゃん。冒険で手に入れたお宝なら高く買い取るぜい。ご主人に伝えてくれるかい？」

黒いローブの露店商人が話しかけてきた。ローブから覗く彼の顔は蛙に似ているが、笑顔は悪い人間ではなさそうだ。古物商らしきそこは、怪しい形の壺、魔方陣の書かれたスクロールなどが無造作に並べられていた。

「先に言っておきますけど、私は奴隷じゃありませんから」

「おっと、そいつあ失礼。帝国じゃエルフは奴隷って印象が強くてな、一人歩きは物騒だから気をつけな。もつとも、一人で歩けるくらいに強いんだろうが、馬鹿は相手の力を見抜けねえ。面倒事に巻き込まれる前に、このローブで顔を隠さないかい？」

黒いローブを差し出した。商売上手な彼の私見も一理ある。奴隷ではないにせよ、奴隷と間違えられて馬鹿どもの厄介事に巻き込まれるのは御免だ。厄介事は多重作業マルチタスクするべきではない。

「珍しい金貨とか、買い取ってもらえますか？」

「ほ？ 見せてくれるかい」

ユグドラシルの金貨は使い道がない。アイテムボックスで腐っている金貨を取り出し、駄目で元々とばかり、数枚の鑑定を頼んだ。彼

は金貨を掌に乗せ、鑑定の呪文を唱えた。

「ふーむ……彫刻……模様……珍しいが、金以上の価値はない、か。対等な金から手数料を引いた額でなら引き取るが、どうするね」

「何枚まで引き取ってもらえますか？」

「……そんなに大量にもつてるか？」

「100枚くらいは」

「う……ちよ、ちよつと待つてくれ」

店主は路地裏に引つ込んだ。

強面のお兄さんたちを連れて戻ってくるのかと思い、弓を構えて待つっていると、戻ってきた店主が突きつけられた矢に驚いて金塊を落とした。右足の甲に落として鈍い音がなり、大そう痛そうだった。申し訳ないので回復薬ポーションを分け与えると、回復薬の色が赤いことにも驚いていたが面倒なので無視を決め込んだ。

そのまま金塊を突き返し、手数料を引いてもらってこの世界の金貨に換金して貰った。

「これがこの世界の金貨か……これ一枚で、どれくらい生活できますか？」

「慎ましく過ごせばひと月は過ごせるわいな」

「そうなんだ……」

100枚ならしばらくは遊んで過ごせる。職探しの支度金には十分だ。ユグドラシル金貨の手持ち数はわからないが、臍げな記憶を辿れば、桁が多くて数えるのが面倒な程度には余っている。

これなら姉も彼に構わず、ようやく旅行ができる。

一緒に飲み食いもしたいし、この世界の化粧品やアクセサリーも見たい。

高級宿に泊まり、食って寝るだけの自堕落な生活を送りたい。

現金一括払いで宝石、化粧品、ドレスなどを買って漁り、大量の袋を荷物持ちに持たせ、帰ってから開封せずにベッドに倒れ込みたい。

資金力は夢を膨らませ、現実味を帯びた欲望が妄想の呼び水となる。一刻も早く、姉にも洒落た格好をさせなければならぬ。異形種とはいえ、そろそろ結婚適齢期だ。もたもたして高齢出産ともなれ

ば、様々なリスクが跳ねあがる。

人間を辞めた件に問題はあがあるが、私たちを呼び寄せた誰かなら人間に化ける方法くらい知っているだろう。

私は資金を得たことで浮かれ、急ぎ足で来た道に戻った。  
まったく、ハムレスは優秀な執事だ。



「凄いよ、あけみちゃん！ 流石は天才肌の妹だね！」

持ち帰った金貨を見て、両手放して喜んでくれた。

「でも、どうやったの？ 危ないことや、いけないことしてないよね？」

「ユグドラシル金貨を換算したのー」

「あ、そうなんだ……」

姉はアイテムボックスに手をつ込み、手持ち金貨を取り出した。

頼もしく、大きな掌には、ユグドラシル金貨が3枚だけ乗っていた。

「少なさー！」

「実は引退の時に、金貨は全部、宝物庫に置いちゃったんだ」

「それが全財産なの？」

「そうみたい。アケミちゃん、金貨はあと何枚ある？」

「うーん……」

アイテムボックスに手をつ込むと、腕の周囲が金貨で覆われているような感覚があった。

私の使う矢は消耗品で、使えば買わなければならない。それもゲームの引退間際は消費せず、際限のない貯蓄をしていた。全ての金貨を吐き出したら部屋が埋まるかもしれない。

「なんで三枚だけ残したの……？」

「覚えてないなー。全盛期は一億に届くかなってくらいだったけど、これじゃ仕方ないね」

「お姉ちゃんも換金する？」

「今後のことも考えて、案内してもらっていいかな」

「いいよ！ すぐに行こう！ ついでに観光しようよ！ 私、シヨツピングしたいな」

「明美ちゃんはこの世界でも変わらないね」  
それは違う。

エルフの種族が影響しているのかもしれないが、私は他人など興味ない。私にはお姉ちゃんだけいればいい。お姉ちゃんだけ、幸せになつてくれればいい。

金貨の入った袋をおじさんに手渡すと、袋の重みでロッキングチェアが激しく揺れた。

「おじさん、当面の生活費。大事に使わないとぶつ殺すからね」

「明美ちゃん、口調」

「これはありがたい！ 欲しかった絵を買いに——」

「ああ!? マジに殺されないの?」

「明美ちゃん！ 駄目だよ、そんな汚い言葉。お嫁に行けなくなつちやう」

緊張感のない姉にため息が出た。

私はおじさんを指さして叫んだ。

「金は使えば終わりがあつた。主食にしているお酒だつていつなくなるか分からないでしょ？ それはあなたの食べ物と新しい服、職が見つかるまでの生活費にしなさい、わかつた?」

「う、うむ、ありがたく使わせていただく」

やや横柄な態度に、理解が追い付いていないのか怪しい。ハムレスが椅子に腰かけているおじさんの膝の上に乗る、私をじーつと見上げた。

「なあに、ハムレス。あんたもそう思う?」

差し出したひとさし指の匂いを嗅ぎ、「ふんっ」と鼻を鳴らして鼻息を吹きかけた。

素直じゃない奴だ。

「お姉ちゃん、行こうよ。情報収集は大切だよ。外出する支度は終わつた?」

「これでどうかな?」

姉は壁にかかっていた黄色い外陰ロープを身に纏った。顔は影になつて見えないが、黄色い布切れを纏った巨大な彼女は、誰がどう見ても不審人物だ。もし、今の姉と現実世界で出会ったら、間違いなく怯えて逃げ出す。

「他には何もないの……？」

「ほら、ここは廃墟だし」

それでよく出掛ける気になるものだ。

私は違う意味で姉の精神を見直した。

ともあれ、私たちは街へ繰り出した。

私は姉と一緒に異世界に転移したことで浮かれ、調子に乗っていた。



追加で私の金貨100枚を換金して貰おうと思ったが、店主のほうに手持ちがなかった。姉の3枚だけ交換してもらった。

店主は巨人種に怯えていたので、私たちはその場を去った。

「ハムレスの御飯も買わないといけないでしょ……それに、掃除道具と……お姉ちゃんの服と……」

指が一本、折れる度、次に買いたいものが浮かんでくる。

「僕の服はいらないよ」

「真っ先に買うべきだと思うけど……」

「もつと金貨、持ってくればよかったね」

「数枚はくすねてきたよ」

「いつの間に……」

「これで宿でも取りたいところなんだけど……食料だけ買って帰りましょ。あの汚い家で寝るの、本当はいやなんだからね」

「う、うん……なんか、ごめんね。付き合わせちゃって」

「お姉ちゃん。あそこの飲食店からいいにおひが……」

「明美ちゃん！ ゾンビみたいになってるよ！」

ゾンビのように口を半開きにして、両手を前に差し出して歩く

森妖精<sup>エルフ</sup>と、全身を黄色い布で覆った巨人。すれ違う人間たちは目を見開いて私たちを見た。そんな視線など、今は関係ない。姉妹水入らずで、異世界を満喫しようとする大きな飲食店に入った。

「い、いらっしや……い……ませ？」

従業員はメイド服を着ていた。中世とはそういうものなのだろうか。

「女性二人で」

「女性!？」

「はあ、何か文句ありますか?」

私の攻撃的な視線がメイドの心臓を射抜き、彼女の足が痙攣と見紛うほど震えた。

「明美ちゃん。僕、そういうの嫌い。止めてよ」

「ひいー!」

私の横からずいっと前に出た巨人にメイドはひきつけを起こしていた。接客態度が悪すぎて、空腹の前に怒りが腹に溜まった。

「明美ちゃん、弓に手をかけちゃだめ!」

「社員教育がなってないから」

「だ、誰か助けてえ!」

「騒々しいぞ! 食事くらい、静かにさせてもらえないのか、この店は!」

両手に盾を持った、戦士にしては珍しい格好をした騎士が奥から出てきた。どうやって食事をしていただろうか。

彼もメイドと同様、姉を見て口を開いていた。どいつもこいつも、初対面で無礼な態度の人間たちにこれまで受けた教育を疑い、親の顔が見て見たくなった。

私がそう考えた数秒で彼は跪いたので、今度は私が度肝を抜かれた。

「ぶ、不躰ながらお聞きしたい。昼間に逃走した、アインズ・ウール・ゴウン魔導王閣下の御友人では?」

彼は頭を上げずに尋ねた。追手の存在など、今の今まで忘れていたが、彼の顔に敵意が無いので警戒せずに済みそうだ。



「確かに僕は、アインズ・ウール・ゴウンの一人ですけど」

「アインズ・ウール・ゴウンなんてニツクネームの人、いたっけ？」

「一人……とは？ 魔導王閣下の御友人ではないのですか？」

「アインズ・ウール・ゴウンはギルドの名前ですよ？」

「うーん……誰かが名前、変えたのかなあ」

「それにしても、ギルド名を名乗るかな？」

「変だよねえ……」

「私たちをこの世界に呼んだ誰かだよ、きっと」

「そう考えるのが自然だけど、ちよつと気になるんだよね」

顔を近づけて囁き合う私たちに、メイドの金切り声が聞こえた。

「早く誰か助けてええ！」

その後、事態の收拾を図ろうと騎士は思うままに罅を開け、私たちは個室へ案内された。騎士は部下に何事か耳打ちをし、外へ走らせた。彼は帝国4騎士、“不動”の異名を持つナザミ・エネツクと名乗った。

「“山の”不動ではないのですか？」

「……は？」

100年前の漫画を知らないらしい。てっきり、誰かがそれを持ち込んだことで影響をされたのかと思つたが、掻い摘んで話しても彼は理解を示さず、平身低頭で謝罪された。

「無知なもので、申し訳ありません。ここの会計は宮廷が持ちますので、ご自由にお召し上がりを」

「本当ですか？ あ……いえ、そう言うわけには」

「明美ちゃん、ここは御馳走になっておこうよ。ほら、ギルドのことも知りたいから」

「お姉ちゃん……」

姉は素直で優し過ぎる。外へ走らせた騎士がこの場所を包囲していたらどうするのだろうか。仕方なくメニューを開いたが、書いてある文字がわからず、蚯蚓ののたくったような字に眩暈がした。

「あけみ様。昼間は帝国の騎士が無礼を働き、そのお詫びだと考えていただきたい。魔導王閣下の御友人から金を取つたと皇帝陛下の耳

に入れば、私の首が飛びます。ここは私の顔を立てると思って」

彼は良く分かっている。こういう言い方をされると、優しい姉は相手の立場を考えて従うしかない。お姉ちゃん大好きっ子な私も、従わざるを得ない。料理の注文を彼に任せてから、話に耳を傾けた。

アインズ・ウール・ゴウン魔導王は、ギルドマスターだった“彼”と考えると間違いない。

「なるほど……道理で名前のセンスが、その……独特だったんだね」

姉はメンバーだけが知る何かに納得したようだった。目的地が分からなかった私たちは、魔導国を目指すべきだと早々にわかった。

「なんで騎士さんは私たちのことを知ってるんですか？」

「話せば長くなりますが……皇帝陛下に妾はいますが、お世継ぎを産む正妃を探しております。魔導王閣下の御友人となれば、その実力は保証されています。魔導王陛下の友人という称号は、全ての国で無条件通過が可能であると、周知の事実なのです」

「知りません」

「そこで御二方に、皇帝陛下へ謁見を願いたく」

「お断りだっ」

どこの馬の骨とも分からぬ皇帝陛下に、大事な姉を渡してたまるか。

「明美ちゃん、失礼だよ。そろそろ怒るよ？」

「ごめんなさい……お姉ちゃん」

調子に乗り過ぎた妹に、姉が怒りの鉄拳を握っていた。このままだと鉄拳制裁のたんこぶが頭頂部に拵こしらえられる。私は申し訳なさそうに俯いたが、騎士は私の言葉に反応していた。

「失礼を承知でお尋ねするが……その、人間であったとはいえ、今の種族は本当に女性……でしょうか？」

「むかつ、お姉ちゃんだって言ってるんだから、女性に決まっているでしょう！」

「明美ちゃん！ いい加減にしなさいー！」

テーブルを叩いて立ち上がった私に、姉の怒号が店内に響き渡り、遠くで陶器が割れたような音が聞こえた。

「だって……」

「謝りなさい！」

「……ごめんなさい」

腰を下ろした椅子の温度が冷たく感じられた。

「度重なり、妹が申し訳ありません。姉としてお詫びいたします」

「とんでもない！　こちらこそ、不躰なご質問をお許し願いたい」

姉が頭を下げようとしたので、騎士は慌てて立ち上がり、頭を下げた。コップに頭が当たって派手に零れた。

「わ、お姉ちゃん、タオルか布巾！」

「無いよ、そんなの！」

「誰かタオルかおしぼり持ってきて！」

彼の失態で場が和んだ。知っててやったのなら、なかなかの策士だ。

「あ、ぼー……私は女性です。現実世界では30ちよつとです。こちらは妹の明美で、まだ20代です」

「ほう……ねふいりむという種族ですか」

姉はフードをまくって顔を露わにした。騎士が物珍しそうに眺めていると、料理を運んできたメイドが足をもつれさせていた。しばらく巨人の頭部を凝視し、何事もなかったかのように料理を置いて立ち去った。態度に不満はあるが、指摘を始めたなら止まらなくなりそうだったし、料理の匂いに鼻が引き寄せられた。

「うわあ、美味しそう……お姉ちゃん、本当に食べられるのかな？」

「食べられるでしょう……多分」

「御二方とも、お詫びだと思ってお召し上がりを」

「半魔巨人って珍しいんですか？」

「聞いたことはありません。物語や神話、スレイン法国の教典など、様々な文献に触れましたが、巨人種について詳しい資料はありませんでした」

見た目に反し、教養があるのかもしれない。

それにしても、食事はとても美味しかった。

この店の等級がどれほどなのか知らないが、口から食べられる料理

は噛めば噛むほどお腹が空くようで、幾らでも入った。サラダ、肉、魚、デザートの甘味と奇妙なフルーツ、肉と魚は少し脂っこいのが難点だが、それでも初めて口から食べられる食事で心も体も満たされた。こんなペースで食べ続けられれば、あつという間に太ってしまう。

姉に怒られてもなお、私は本当に調子に乗っていたらしく、食べ過ぎて動けなくなり、騎士の話に耳を傾けざるを得なかった。

「魔導王閣下とその異形種の御友人方は単身で世界を滅ぼせるお力を持っています。改め、魔導国までご案内をさせていただきます。今はどちらへ滞在を？」

「実は……」

最強の魔法詠唱者と名高い魔導王陛下が探し求める友人、世界の強者ともあろう私たちが、没落貴族の狂人の相手をしていると聞いて唾然としていた。

「お止めください……そのような真似をさせているとわかれば、私だけでなく、私の家族まで首が飛びます」

「皇帝陛下さんって、随分と酷い人なんですね。元を正せば皇帝さんが貴族の地位をはく奪したからでしょう？　いつだって割を食うのは社会的弱者ですよ」

「それは違います」

はつきりとした強い口調で否定し、真つすぐに私を見つめた。

「現皇帝陛下は、国の未来を守ったのです。自分の家族、腹違いの御兄弟、反皇帝派・邪教徒に与する腐敗貴族、更には前皇帝を暗殺したと思しき母君までその手につけ、この国の地盤を確固たるものとなさつた。数万、数十万にもなる国民の生活を守るためとはいえ、どれほどの軋轢を生み、陛下の苦悩を必要としたのか、想像を絶する覚悟で、これこそ命を賭して行った大改革だったのです。現在、この国、特に帝都は魔導国の加護を受けながら更なる発展を遂げようとしています。全ての責任者である皇帝陛下の苦労たるや——」

彼の演説はとても長かった。

早い話、魔導国の属国にされながら、強かにそれを利用して帝国の繁栄に繋げようとする皇帝に心酔しているようだ。彼の話は個人的

な思い入れがちよくちよく混じり込み、若き皇帝とやらの人物像は掴めなかった。確実なのは、皇帝が若くにして頭が禿ハゲそうな苦勞人であることと、不動さんが暑苦しい体育会系という2点はわかった。

正妃候補としてお姉ちゃん、餡ネころさん、茶釜さん、おまけに私まで名前が上がっているらしい。半魔巨人ネと人間の間に子供は作れるのか知らないが、皇帝がいい男だったら姉を進めてあげてもいい。

異世界で一人の女として、平々凡々とした慎ましい生活が送れるなら、それに越したことはない。姉の性格を考えれば、教師として子供たちへ指導・鞭撻をして生きたいと言うだろうが、それは結婚してから続ければいい。

私一人ならどうにでもなる。

「失礼、話しが長くなってしまいました……。明朝、馬車のご用意を致します」

「話はわかりましたが、姉は没落した老人を気にしております。それが片付くまで結婚どころではないのではないのでしょうか」

「明美ちゃん……」

さりげなく結婚を匂わせたことで、姉が目線で責めていたが、これは私の妥協案だ。彼は私の意を汲み、強い目で頷いた。

「その貴族の復興ですが、皇帝陛下へ進言してみましよう。4騎士の私の意見であれば、皇帝も無下にはしないはずです。何よりも、御二人とこうして巡り合えたのは彼の功績といえましよう。しかし、問題は彼が狂人という点ですが……」

「お酒を断って変わることには期待するしかありません。今の境遇は正直なところ、自業自得だと思えます。何から何まで手を貸す必要はないので、出来る範囲で助けてあげてください。魔導国に行つて、彼の娘たちを探そうと思います。とはいえ、あまり助け過ぎても本人のためになりませんから、ほどほどで結構です。ね、お姉ちゃん？」

「う、うん……」

こうでも言っておかないと、姉は何から何まで手を貸す。きっと彼の娘を探して、彼の狂気を払い、御家復興を果たしてからと考える。そしてあのおじさんは、また同じことを繰り返す。優しさは時として

相手のためにならないのだ。

「どちらにせよ、急いだほうがいいでしょう。皇帝陛下は魔導王に招かれ、魔導国の首都へ滞在しております。明朝にここを立てば、まだ間に合うはずですよ」

騎士は私が望んだ話をしてくれた。

「ありがとうございます。早速、帰って話してみます。浮いた金貨で彼らの食料を買って帰らないといけないので」

「手土産はこちらで用意させましょう。その貴族の苗字をお教え願いますか？」

「フルト家です」

ここまで順調に進められていた会話が滞った。彼は緩んだ空気を呑み込み、神妙な顔で何かを考えていた。

「どうかしました？」

「以前、邪教徒に関与の疑いのある貴族に名が挙がっていたような……」

「勘違いではありませんか？ 変なおじさんなんか、邪教徒さんの方から願い下げだと思えますけど」

「む……心配に越したことはありません。近頃、連中の動きが活発です。魔導王が人間ではないという点を最大限に利用し、帝国を秘密裏に乗っ取ろうとしている節さえあります。空き家の目立つ高級住宅街を根城にしている輩も多い。御二方の実力はお墨付きですが、くれぐれもご注意ください」

彼の話が進むにつれ、取り返しのつかない失態を演じたような原因不明の焦燥感に駆られた。一刻も早く帰るべきだと、頭のどこかで警笛が鳴っている。

食事を済ませた私たちは屋敷の場所を伝え、翌朝、現地で落ち合うと決めてから、人助けの目途がだったので、私たちは帰路を急いだ。

☆

「でも、よかったよ、本当に」

「あとはおじさん次第だからね。何でもかんでも手を貸しても、おじさんのためにならないんだから」

「う、うん……そうだよね」

まだおじさんの未来について心配をしている。フルネームも知らない、精神がややぶつ壊れたおじさんに腹が立った。

収入もないのに借金を重ねた結果、家族に見捨てられ、家を取られるのは当然の報いだと思う。そんなダメ人間が姉の手を煩わせているのが気に入らない。姉は自分のことだけ考え、自分の幸せだけに生きればいいのに。

不穏な考えをしているうち、気が付けば廃墟に着いていた。

「ただいまー」

扉を開いてから濃厚に香る、鼻を突く嫌な臭い。埃ではなく、生々しく新鮮な鉄錆の臭い。血の匂いだと本能的に悟り、私は弓を構えた。

「お姉ちゃん……気を付けて」

「明美ちゃん？」

「血の匂いがする」

「っ！ おじさんー！」

姉は家に飛び込み、家の暗がりにもつれた。

「お姉ちゃん、だめえ！」

慌てて後を追った私は、おじさんの部屋にて怒りで拳を震わせる姉を見つけ、その視線の先に血反吐を吐くおじさんを見つけた。倍に腫れあがった顔と、体中に赤と青の痣を拵え、刃物で切り裂かれた腹部から内臓が見えた。酷い暴行の跡だったが、私は存外、落ち着いていた。

部屋の中に放置されているのは死にかけてたおじさんと、金貨の入っていた空つぽの袋。山のように積み重なっていた酒瓶は全て消えていた。

そして、おじさんに寄り添って眠るハムレスの遺体。

「ハムレスー！」

小さな猫の体はずっしりと重く、無情な冷たさを帯びていた。全身

に付けられた刃物の傷と潰された両目、剥き出しの胸部から折れた肋骨が心臓に突き刺さっているのが見えた。

手遅れだとはつきりわかる。既に子猫の魂はここにはない。体温の冷たさが、十分な時間経過を教えてくれた。

「ハムレス……どうしてよお……」

私の目から涙が流れ、赤くなったハムレスの死体に零れた。血で汚れるのに構わず、小さな子猫を抱きしめた。姉は回復魔法を使い、必死でおじさんの治療をしていた。

「おじさん！　しっかりして！　すぐに回復魔法をかけるから」

「アルシエ……か？」

「喋らないでー！」

「アルシエ……ジエイムズを……」

まともに体も動かないはずなのに、彼は私の方へ這った。

「駄目だよ、おじさん。この子はもう……」

「クーデ？　ウレイか？　大きくなったなあ……私も年を取るはずだ」

おじさんは私を見て嬉しそうに笑った。

「意識が……明美ちゃん、手伝って！　ポーションがない！」

「許せない……」

「どうして!?　回復魔法の効果が薄い！　明美ちゃん！　早くっ！」

私はポーションを放り投げてから立ち上がった。

脳の奥深くから湧きだす黒く泡立つ何かが、私を報復に駆り立てる。索敵スキルによれば、周囲の家屋に複数の反応がある。おじさんとハムレスをこんな目に合わせた相手かはわからないが、何もせずにはいられない。

私は姉のように優しくくない。

「おじさん、意識をしっかりと保って。明日、帝国の人がこの家を復興するために来るから！」

「そうか……ありがとう、アルシエ。これで私も……死ぬる」

「死なないですよ！　明日だよ！　やっと貴族に戻るのに……何ですよ！」



姉の回復魔法、私の回復薬は期待の効果をもたらさなかった。穴の開いた風船に空気を入れていているようで、もしかすると魂が剥がれかけているのかもしれない。

「私は役目を全うした……これからは……お前がフルト家の領主だ」  
おじさんは穏やかに笑った。彼にこんな顔ができるとは思わなかった。

「アルシエ……父さんは……立派だろう？」

娘と勘違いしている姉の顔を、おじさんは優しく撫でた。姉は敢えて否定せず、娘らしい言葉で返事をした。

「うん……お父さんは凄いや」

「妹たちを……」

妄想に囚われ、最後の言葉まで口数が足らず、本当に下らなかつた。そのまま安らかに眠らせてやるべきだ。今は一人ではなく、寄り添って眠る小さな家臣がいる。下らない狂人は、最後に娘を思う心を取り戻した。あるいは、家の再興を聞いて安堵し、魂まで抜けてしまったのか。

「おじさん！ おじさん！ おじさん……どう……して。全部、これからだつたのに……」

姉がどれほど声をかけ、体をゆすろうと、彼の目が開くことはなかった。

私の目から涙が溢れた。

「お姉ちゃん、ハムレスとおじさんの側にいてあげて」

「明美ちゃん……」

「私は狩りに行ってくるから」

「明美ちゃん！ 駄目だよ！」

姉の制止も聞かずに私は飛び出した。

姉の頼もしい両手は、誰かを裁くものではない。これは、成長する過程で優しさをどこかへ捨ててきた、出来損ないの妹の仕事だ。信賞必罰、人を殺してはいけないというのは現実世界の法だ。人間を辞めた私たちが、なぜそんなものを守らなければならない。

賊は無警戒にも二軒先の家で祝杯を挙げていた。

物陰から様子を窺うと、ローブに身を包んだ魔法詠唱者らしき彼らは、奪った酒をがばがばと飲み、奪った金貨を積み上げて下品に笑い、奪った2つの命を称え合った。

「傑作だ！ 暇潰しに金持ってるエルフの後を付けたら、金貨100枚も持つてやがっただぜ！ 最高だろ？」

「お前はいいな、気楽で。俺はあの猫に片目、持つてかれちまったよ。あーあ、付き合うんじゃないかった」

「猫だと思ったら魔獣の子だったとはな。まあ、お前の片目を治しても予定の枚数は達成したんだ。そんなに怒るなよ」

どうやら私は尾行されていたらしい。ハムレスは猫ではなく、猫科の魔獣だったようだ。彼は主人を守るために、ぼろ雑巾のようになりながら必死で戦ったのだ。

殺してやりたかった。

(許せない……今度は私が奪ってやる)

弓を握る手が震え、私の目から涙が流れた。

「本当はエルフを転売したかったが、まあ、仕方がないな」

「盟主様に献上するなら美しい女の方がいいが、金貨だけでも十分だ。どこかで奴隷を仕入れればいい」

「後でもう一度、あの屋敷に行かないか？」

「お前も大概、好色だな。エルフなんて気が強いから止めとけよ」

「私もそう思うよ」

私は暗がりから出て行った。

弓の標準を合わせ、いつでも彼らの命を刈り獲れる。彼らが瞬時に臨戦態勢にならなかつたのは、私が泣いていたからだ。

「……おい、鴨がネギ背負って現れたぞ」

「へっ、エルフ、泣きながら俺たちを相手にすんのか？」

「誰か防護魔法を展開しろよ。後方から奴を無力化してやつから」

「伊達に邪教徒やってねえんだよ、エルフの姉ちゃん」

もはや救いがたい。放たれた矢は最前列にいた男の右大腿部から下を食い千切った。矢は勢いを殺すことなく、賊の右脚を持ったまま壁を突き破り、どこか遠くへ飛んでいった。

瞬間、彼らの顔色が変わる。

「こいつ強いぞ！」

「魔法展開、急げ！」

もう遅い。速射系のスキルを使えば、数秒で彼らの命を奪える。

「あなた達が誰かなんてどうでもいい。これは私の個人的な復讐。私をすつきりさせるために、死んでくれる？」

彼らの魔法などたかが知れている。低位魔法無効化の障壁を破れず、放たれた魔法は掻き消えた。降り注ぐ魔法を全て受けながら、人差し指で標準を合わせた。

躊躇わずに顔面を打ち抜こうとしたが、何かとても重たいものが私にぶつかった。壁まで飛ばされてから横を見ると、姉が本気で怒っていた。

「お姉ちゃん……」

「明美！」

彼女は私に近寄り、大きな両手を私の肩に置いた。

「どうしてそんなことするの！」

「……ねえ。逆に聞くけど、どうしてこいつらを殺しちやいけないの？ ハムレスとおじさんを殺したじゃない！」

「人を殺しちやいけないんだよ！ どんな理由があっても、人を殺したら償わなければいけないんだよ！」

「だって……こいつら……酷いことをしだも”ん”」

私の叫び声に嗚咽が混じった。

「わかってる。わかってるよ、明美ちゃん。だから、あとは僕がやるよ」

「お姉ちゃん、私が殺すからそこをどいて！ お願いだから殺させてよお！ 二人が可哀想よう！」

「明美ちゃんはそんなこと、しなくていい。全部、お姉ちゃんがやってあげるからね」

優しく頭を撫でられ、強張っていた力がどこかへ逃げ、私はその場に崩れ落ちた。

新手か味方かを決めかねていた彼らも、自分たちに近寄る姉の姿に

恐怖を覚えたようだ。しかし、彼らの膝は大そう笑っている。姉の巨大な拳は大きさに反して素早く、身動きが取れずにまともに食らった。

思うままに蹂躪する様子は、まるで一陣の竜巻だった。

手加減しているとはいえ、彼らは一撃で壁にめり込み、白目を剥いて痙攣していた。生死は怪しいが、一仕事終えた姉は脱力する私を優しく抱きしめた。

「明美ちゃん、もう大丈夫だよ。彼らは明日、不動さんに引き取ってもらうからね」

「ぢがっ……うもん……わだじ」

せき止めていた嗚咽が混じり、言葉は濁っていた。説明しようにも唇が震え、声は嗚咽となつて口から零れる。私はただ、彼らが許せなかったただけだ。そこには彼らへの慈悲などなく、殺意を伴う憎しみに突き動かされていた。

「えっ……えっ……」

「優しいね、あけみちゃんは」

私は優しくなれない。

老人がこうなったのは自業自得で、ハムレスだつて着いていく主人を間違えたただけだ。彼女は哀れな老人と子猫の死を心から悼んでいる。私が泣いていなければ、彼女が泣いていたはずだ。

私は……自己中心にして利己的で、我がままで、痛みが分からない悪い子だ。考えれば考えるほど、涙は絶えず流れ続けた。姉の胸を借りて、静かに泣き続けた。

「可哀想だったね……今は、好きなだけ泣いていいからね」

私もそう思いたい。

彼らの死で見えない涙を流したい。

いい子になりたい。

お姉ちゃんみたいに、優しい大人になりたい。

現実を捨てた方がいいのは、私の方だったのだ。

だから私にだけ手紙が来た。



姉の胸を借りて泣き腫らした朝。

赤を基調にした装飾の馬車を屋敷に乗りつけ、不動さんは挨拶もそこそこに尋ねた。

「それで、フルト家の方はどちらに？」

「……死にました」

「……畏まりました」

ふん縛られている賊たちを見て察し、彼はそれ以上、尋ねなかった。賊を部下に任せ、私たちはすぐに出発した。

不動さんも同乗するかと思ったが、彼は別の馬車を手配した。姉妹だけの方が気兼ねなく旅に出られるという配慮があった。草原に行く馬車の中、私は頬杖について窓の外を眺めた。開いた窓から緑の匂いがする風が吹き込んだ。

今ごろ、風通しのいい廃墟で、おじさんと一番の家臣は寄り添って眠っているだろう。薄汚れたカーテンレースと開け放された窓、入ってくる風に埃が舞い上がり、二人が御家復興を喜んでいる姿が浮かぶ。

「明美ちゃん、なんか嬉しそうだね」

「ん？」

指摘されてはじめて、私は自分が微笑んでいると気付いた。

「ねえ、おじさんさ、娘の名前、何て言ってたっけ？」

「え、と……確か、アルシエとその妹って。クーデとウレイって言ってたっけ」

「そ」

魔導国で彼の子供たちを探し、いつかまた会いに行こう。そのときは、今度こそ彼を可愛そうな人だと思えるような優しさを携え、優しい私になつていよう。

(また来るよ。おじさんとハムレス)

夢半ばで朽ちた老人が、今わの際に理性を取り戻したのか、今となつては分らないが、さして重要ではない。確かなことは一つ、子猫ハムレス

はいつまでも彼の忠実な家臣でいる。

「明美ちゃん……？」

「あ、お姉ちゃん、見て！ 遠くで虹色の何かが飛んでるよ！」

「本当だ！ 何だろうね、あれ！」

彼女は誰かを守り、気にせずにはいられない。教職は彼女の天職だ。姉にのんびりと守られながら、優しい私になればいい。アラサー間近ながら独り立ちできないようにで憂鬱だが、大樹に寄りかかるのも悪くない。

「お姉ちゃん、魔導国に着いたらギルマスさんに挨拶してから、皇帝さんとお見合いだね！ ついにお姉ちゃんも結婚かあ……」

「明美ちゃんたら……僕はそんなの興味ないよ。でも、元気になってくれて良かった」

私たちの明日はもう見えている。

## 評議国の商人 上巻

『自由人の心は、クループ・ル・アハラトリ 秘密の墓』クブール・ル・アスラーリ

とわざ

——イスラムのこ

実際に異世界に来て分かったが、現実で擦り切れた人間には少しも面白くなかった。楽しもうにも、ろくでなしが支配する現実で心と体をすり減らし過ぎた。人間、三十路も超えれば感情が薄れ、感動も失せる。

俺の視界は鈍色に染まり、色づく取っ掛かりが見つからず、眩い希望の明日が見えることもない。駄目押しに、世界が異なっても弱肉強食の摂理から抜け出せないのだから、出来の悪い喜劇でも見せられていたようだった。

「悪の権化や正義の味方の噂は聞きませんか？」

背が低く小太りだが、全体で見れば愛嬌のある酔狂な商人は動きを止め、ゴミを捨てようとしてゴミ箱を開いてゴキブリでも見つけたような顔をした。少しだけ間を空け、白いパイプに煙草を詰める動作が再開された。

「誰の思想や宗教かね？」

「素顔も知らない、大事な友人の主義です」

「それは美しい。友人のいない私には、いささか羨ましくもある」

アイテムで火をつけると、紫煙が輪っかを描いて登った。

たつぷりと時間をかけて待ったが、それつきり返答がないところを見ると、やはり彼は来ていないのだろう。

俺のやる気は萎れて枯れた。

体からやる気が急激に失われていった。真夏のアスファルトに氷を落としても、ここまでは急速には溶けない。成長した俺の信仰と彼の主義を激突させて火花を散らしたかったが、夢は芽さえ出ずに散った。

「このパイプ、どう思うかね？」

落ち込む俺の目前に、白いパイプが突き出された。

「象牙ですか？」

「ゾーゲという言葉は聞いたことが無いが、これは魔獣の牙を削って作ったものだ。怪しい行商人から買い付けた」

「鑑定するスキルは使えますが、鑑定しましょうか？」

「君は若いな。見たまえ、生つちよろい異質な白、異様な光沢、漂うは異形の気配……ここにほれ込んだのだよ。本物が偽物かなど、私にはどうでもいいことだ。仮に、これが人間の骨であっても、ね」

俺の返事など興味が無いようで、勝手に話が続いた。

「私はね、自分の直感を信じ、愛している。死に別れた妻よりもね。だから君を拾ったのだよ」

パイプから煙を噴き上げ、せり出た腹の底から嬉しそうに笑った。俺は目を細めたが、商人の意図はわからない。人間、素直が一番だと、人間を辞めた俺は単刀直入に聞いた。

「その直感に従うのなら、これから俺に何をさせよう？」

「そりゃあ、君。出来るときに出来ることを、だよ。いつだってそいつが重要さ」

「悩む時間はありますか？」

「有意義に使ってこそ、君の品位は守られるだろう」

彼は何の役に立つかもわからない俺に、食事と酒を振る舞ってくれた。顔も知らない料理長は優秀で、手料理の初体験に感動して身を震わせる俺に、世界の情勢を話してくれた。

俺のいるここは都市国家、アークランド評議国で、亜人種の国家だ。議員制を採用し、政府や国王は存在しない。永久評議員の竜王を含め、各亜人種から選抜された評議員で議会を開催し、国を統治しているようだ。他に、十三英雄だの、魔神だの、八欲王だの、神話や歴史を話してくれたが、目の前に並べられている料理に勝ることはない。話の大部分が、空洞になった俺の耳を右から左へ通過した。

「つまり、独裁国家なんですか？」

「少し、違うな。武力の強さが意見の強さにはならないよ。しかし、竜



王様は長命で、それなりに発言力もある。何しろ神に近い存在だからね」

「神を信じているのですか？」

「信じたくもなる。人間が護衛もつけずに外をうろつけば、たちまち、野獣の胃袋へ直行だからね。先日、魔導国から買い占めたルーン武器、護衛の冒険者ランクにあとほんの僅かでも経費を注いでいけば、魔獣の晚餐を免れて莫大な利益をもたらしたに違いないのだよ」

「困ったときの神頼みですか」

「自分を偽ることも重要だよ。人間に生まれたが故の処世術だ」

たとえば彼がこの世界に来ていれば、悪は悪なりの平和な国家に尽力したと確信があった。弱肉強食の世界、最後にこぶしを握って立っている者は正義に変わる。そうやって世界征服した末、彼の治める国家は平和になることだろう。

それは儚くも人の夢、まぼろし。蜃気楼は常に揺らぎ続ける。ある種、現実リアルと同様、連綿と続く絶望に相違ない。この世界の正義や悪は、何千年が経過しようとエゴの領域を出られない。今日も弱肉強食の夜が来て、また弱肉強食の朝が来る。

しかしながら疑問に思うのは、ここは本当に異世界なのか？

もしかすると異世界に來た夢を見ているだけじゃないのか？

現実の俺は、自分の部屋で魂の抜け殻として居座っている。あるいは、現実を異世界に見えるような感覚に変わったただけで、全てが幻ではないのか？

夢の最後に現れた銀色の門も気になる。あれが俺の知る銀の門だった場合、事態は最悪だ。俺は夢から覚めない肉の塊として、自分の部屋にいることになる。

このまま死ぬまで夢を見るなら問題ない。覚めない夢に溺れるは、デイストピア愚者の樂園に産声を上げた泡沫の生だからと納得できる。

最悪なのは、万が一、夢から覚めるような事態にでもなれば、長期に渡って無断欠勤した俺に職場復帰する道は無い。無一文の俺に待っているのは、ドブネズミが羨ましくなるような死だ。目が覚めて全裸でスラム街に横たわり、汚染済みの体でアスファルトを舐めるよ

うな地獄の生は願い下げだ。

だから俺は、今日も無為な一日を過ごしている。

客間を用意すると言われたが、老いた駄馬にも値せず、何の生産性もない俺は馬の納戸を申し出た。幸いにも馬は売り払っていたらしく、一人部屋が有難くて涙が出そうだ。

夕刻、俺の住む納戸の扉が開き、商人の娘が食事の乗ったトレイを運んできた。この屋敷にはメイド、執事、使用人はいない。人件費の無駄だと言っていたのは彼らしくないと思われたが、俺は強く共感した。優秀な料理長は、彼の一人娘だったようで、大そうな美人だった。まるで理解できないのは、その美しい一人娘を異形種の世話に回した事だ。

俺の1人部屋の隅々まで、朝から元気な声が響き渡る。

「おはようございませーす！ 何かお話しませんかあ？」

俺が無言で首を振ると、彼女は寂しそうに笑い、何度も振り返りながら出て行った。これが毎日、朝と夕に繰り返される恒例行事だ。

誰もいなくなつたのを確認して、俺は食事を始めた。

顎の上下運動で脳が回転し、意識が覚醒する。食事を終えて藁の布団にもぐると、補給した栄養が脳に回り、頭が勝手に過去の記憶を映写した。

あの日、手紙が届いた夜、指示通りにユグドラシルのアイコンを押すと意識が途絶えた。銀色に輝く門の内側から濁流が押し寄せる夢から覚めると、俺は水の中にいた。異世界に転移して早々に溺死し、土左衛門水死にクラスチェンジするところだった。泳いだ経験もないのに、良く助かったものだ。

思い出してもぞつとするが、青くて深い海には漫画やゲームに出てくる怪物がたくさんいて、俺が餌か浮遊物かを値踏みしていた。

冷静さを欠いた俺は両手足を出鱈目に振り回し、這う這うの体で浜に上がった。しこたま水を呑んで腹が膨れ、疲労も加わって動けなかった。

空を眺め、膨らんだ腹を撫でて吐き気を堪えていると、いきなり腹

が蹴飛ばされた。当然、俺は腹にたまった水を、胃液のおまけ付きで吐き出した。えづきながら涙目で顔を上げると、身なりがいいが背が低く、腹の出た小男が覗き込んでいた。

「生きたいかね」

死ぬ理由はわからなかったたので、俺は頷いた。名も知らぬ商人は破顔し、俺を馬車に乗せた。

ゆえに俺はここにいる。



納戸に朝陽が差し込んで、夢から覚めた。同時に扉が開き、娘が朝食を運んでくる。

「おはようございまーすー!」

彼女は毎日、納戸を訪れては目を輝かせて何らかの話をしやがんだが、俺が断ると寂しそうに部屋を出て行く。朝はいつも寝たふりをし、退場願うのだが、この日に限って居座った。

「本当は起きてませんかあ?」

瞼を下ろした闇の中、彼女が近寄る気配がする。花の芳香に似た髪の毛の匂いが鼻をくすぐった。

「起きてくれないと、朝食、食べちゃいますよー?」

美しい乙女の芳香にくすぐられている俺の鼻に、藁が突っ込まれた。いきなり奥まで入れられたもので、かなり痛かった。

「っ……放っておいてください」

「初めて口、聞いてくれましたね。うふふのふー」

言われてみればそうだったかもしれない。俺は彼女の名前さえ聞いていない。彼女は無神経にも藁を一気に引き抜き、鼻に痛みが走り、眠気は完全に飛んだ。これまでの無下な対応に少なからず罪悪感を覚えていた俺は、殊勝な考えを後悔した。

体を起こすと彼女が地べたに座り込み、満面の笑みで俺を見ていた。食事のトレイは二人分あり、朝食を共にするつもりようだ。人

間が異形種に食い殺される世界だというのに、恐怖は見て取れないどころか、子供が新しいおもちゃを手に入れた無邪気な輝きを宿していた。

「今日は一緒に食べましょう！」

女心に造詣は浅いので、思春期のお悩み相談はご遠慮願いたいものだ。俺の耳は左と右で繋がっている空洞に早変わりし、食事に集中した。

「それで、魔導国では異形種と……さては私の話、聞いてませんか？」

「……」

「もうっ！ 返事しないとご飯を没収しますよ！」

「……食事中はお静かに願えませんか？」

俯いて咀嚼する俺の返事を聞き、目を見開いてから笑った。

「ふふ、ごめんなさい。食べてから話をしますね」

退室するという選択肢は選ばなかった。食器が空になってようやく自分の出番だとばかり、まくし立てた機関銃級の話で蜂の巣にされた。

要約すると、物価の価格が崩壊した魔導国から商品の仕入れが上手くないかと言った。

「へー……そーなんですかー」

「興味が無さそうですわね。魔導国には元人間の異形種さんがいらつしやると聞いていますの。種族は聞いたこともない希少種だそうです。あなたもそうではありませんか？」

「……なぜ？」

「女の勘です」

答えになっていないが、その勘は正しい。

「なんでも、魔導国では異形種と人間が御婚姻なさっているとか」

「それは難儀ですね」

「下手をすると、同じ人間と婚姻するよりも仲睦まじいと言われているますわ」

「弱者は献身的ですね」

「もう、ひねたお考えはお止めになってくださいな。ところで、宗教は

信じていますか?」

「ええ、信じてますよ」

「まあ、それは意外です。どんな神様なのですか?」

「信心を消し、情緒を失い、神をも殺す、銭ゲバって奴ですよ、お嬢さん」

「……素敵」

眩しいくらいの眼差しは意味が分からないが故だろうか。

俺の親父は去年、亡くなった。

物心ついてから、命の炎が消え入る最後の瞬間まで、彼の宗教は一貫していた。

《大人になつて愛だの、平和だの、人生だの、考える時間は短い。金のことを考えている時間が一番、長いだろう? 世の中、金が全てだ。金を持っている人間ほど、愛だの、平和だの、道徳だのとほざきやがる》

当時の俺はまだ青臭く、反論するだけの経験を持たなかった。

幸いにも貯金があったので葬儀は滞りなく行えた。職場の事故で両親を失い、遺骨さえ帰って来ず、雀の涙がありがたく感じる見舞金で口を塞がれた彼に比べれば、俺は恵まれていた。

親父の遺言は、年齢が近づくにつれ、痛感している。血は争えず、今では俺も金が全てだと思っている。

金を持たない人間に世界は優しくくない。世界は数字でできているのではない。世界は金でできている。一部の金持ちが金で金を産み、積み上がった金で次の金を産む手段を得る。生きるために必要な金は金だ。資金力こそが純粋な力で、可能性と未来を作り出す手段だ。この真理の前に、正義も悪もない。どちらも力がなければ成り立たない。

生への渴望も、家族への愛情も、金でこそ満たされる。望みに見合った資金が無ければ、何一つとして満たされない。

「だからね、悪に拘る意味はないんですよ……」

「何かおっしゃいましたかあ?」

気が付くと、至近距離で顔を覗き込まれていた。

平然と人の個人領域を侵す彼女の神経は豪胆だ。俺はかぶりを振って、湧き上がった感情を押し戻した。

「いえ、昔を思い出したもので」

「全ての感情は過去からお越しになりますものね」

過去最高の笑みを見せてくれた。

「すみませんが……お名前は、なんでしたっけ」

「いやですわ、先日……あら、いやだ、私ったら。名乗った記憶が見当たりにせんわ」

「……」

「私はジェシカと申します。アインズ・ウール・ゴウン魔導国には――」

俺は両眼を見開きすぎて、眼球が裏返りそうだった。

「今……何と言いましたか」

「私はジェシカです」

「そこじゃなくて……」

「全ての感情は過去から――」

「いや、ですから……ああ、だから、アインズ・ウール・ゴウンとは？」

「あ、そこですか。魔導国とは――」

恐らく、朝に魚の開きを干せば、すっかり干物が出来上がったに違いないほどの時間をかけ、彼女の口は閉じた。よくもまあ、湧き水が作る川のごとく流暢に言葉が出てくるものだ。

世間話や個人的見解をふんだんに織り込まれた話を解体して残骸を眺めれば、魔導国はギルドの誰かが作った大国だ。

一般常識として、異形種は人間と婚姻を結ばないが、そこでは異形種と結婚した人間がいる。容姿が似ている人間種、森妖精<sup>エルフ</sup>やドワーフなら可能性はあるが、それでも奇跡に等しい希少種だと言った。

ならば、人間と結婚した異形種は、俺と同じく元人間でしかありえない。死骸と変わらないのは心臓が動いていることだけだった俺に、ようやく光明が差した。

「魔導国と評議国の関係は良好ですか？」

「友好国ですが、良好とは言いかねますの。お互い、素知らぬふりをしているようで、白々しく思えますわ。あ、でも、永久評議員の一人、白金の竜王様が、魔導国で余暇を満喫しているとか。アインズ・ウール・ゴウン魔導王と仲がよろしいようです」

「魔導王とやらの種族は御存じですか？」

「アンデッドとお噂に聞いています。私も拝見したことはありませんのよ」

モモンガさんの人知を超越した成り上がりように、感嘆の吐息を漏らした。出世魚など憤ましいものだ。なぜギルド名を名乗っているのか理解に苦しむが、俺の行動方針は決まった。白金の竜王と友好関係にあるというのなら、長い目で見て評議国を手中に収めようとしているのは固い。凶悪ギルド、アインズ・ウール・ゴウンに世界平和の道は無い。

俺たちが異世界に来て、世界征服以外に何をしろというのか。

立ち上がった俺に、彼女は天の川のような両眼を輝かせた。黙って見ていれば左目から右目に流れ星が観測できただろう。

いつか、ウルベルトさんと出会う可能性があるなら、いつまでも腐って死んでいる場合ではない。

「魔導国の友人に会いに行きたいですが、その前にこの国でやりたいことがありますので、明日、ご案内をお願いしてもよろしいですか？」

「はい、喜んで！」

「昼食は作らなくてもいいんですか？」

「はい！ 父は会合で出かけていますので！」

「……私の昼食ですが」

「あ……えへへ、お話に夢中で忘れてました」

「……困りますね」

いつ死んでもいいよう、親交を深めるつもりは欠片ほどもなかった。だからこそ、俺は偉そうに食事の催促をしたつもりだったが、何が気に入ったのかわからぬまま自由奔放な天然娘に好かれてしまった。

俺は彼女の手作り料理を味わい、簡単な事前情報だけ聞き取りし、藁に

包って眠った。

名実ともに貧乏人の俺に暇はなく、明日から忙しくなる。



翌朝、朝食を済ませた俺は、娘に案内されて商人の執務室を訪れた。「お父様、お客様がお出かけになりたいと」

書類の塔に包囲されていた彼は応接セットのソファへ移動し、神妙な顔でアルビノのパイプを啜えた。どういうわけか、娘は俺の隣に腰かけ、俺の横顔を凝視した。

「この国で商売を……か。それにはいくつかの条件を満たさなければならぬよ。たとえば――」

「商業ギルド？」

「国内の商いを調整し、独占を禁止、監視している組合だ。それが無い国もある。これは、魔導国の物価が下がったことによって出来た、産声を上げている赤子のような仕組みだ」

「所属しないとどうなりますか？」

パイプに火が灯り、紫煙が応接間に漂った。

「そりゃあ、君。評議国で商いができなくなる。勝手にやれば評議会の目に留まる。下手をすると、次の議題は君を国外追放するか否かになるだろうよ」

「竜王とは強いのですか？」

「その質問には、全く以て的確に答えられない。君の強さを知っていれば明確に答えられたのだがね」

「評議員になるにはどうすればいいですか？」

「ふーむ……」

彼は立ちあがり、おもむろに窓を開けた。

「太陽が昇ってから月が昇るまでぐうぐうと寝ていた君が起き上がった良い朝だ。魔導国から仕入れた茶葉で、特級の紅茶を煎れて差し上げよう」

「今は先に話を――」



「アインズ・ウール・ゴウン魔導国の靈感を借りれば話も弾むだろう。そよぐ風向きは南、揺れる古木の囁きでも聞いて待ち給え。あれらは思い出を語っているのだよ。邪魔をするのも無粋というものだ」

彼の退室を見計らい、娘が呟いた。

「お父様のああいうところ、正直、苦手です」

初めて気が合った。



彼の持論は正しく、紅茶は話を円滑に進めてくれた。

この国で商売をするには、商業ギルドに所属しなければならぬ。評議会へ店舗の内容と場所を申請し、議会で受理されてからギルドへ向かい、所属申請と税を納めるのが一般的だ。

しかし、差別とまでは行かないが、人間がこの首都で暮らすには分を弁えた振る舞いというものがあり、尚且つ長命種の亜人たちは独自の生産体系を確立している。万国共通、新参者は排他的な視線や態度に抗わなければならぬ。彼はここまでくるのにそれ相応の金と時間をかけたのだと言って笑った。

礼節を欠いて失態を演じれば、亜人たち、最悪は竜王に目をつけられ、国外追放もあり得る。この国には、人間を食料として見る種族もいる。

「評議国を裏で支配し、魔導国への手土産にするのは、思ったよりも時間がかかりそうですね。もっと手っ取り早く済むかと思いましたが」「本気でそんなことを考えていたのかね？ 私これから訪れる夜を心地よく眠るために、自信に足るだけの根拠を聞かせてもらいたいのだがね」

「私は、魔導王の友人です」

「ほう……」

「やは……まあ、そうでしたの」

天然娘のわざとらしい反応はさておき、商人の目には老獪さが見て取れた。しかし、俺の予想とは違った展開に進もうとしていた。

「魔導王公は人間を妾にしていると聞く。魔導王に限らず、彼の国では異形種と人間が婚姻を結んでいるそう。君にはその手の趣味、嗜好はあるかね」

「結構です」

「君の隣におわす愛娘はなかなかの美人だと思っただが、好みの顔ではないのかね？」

「浪費は好みではありませんね」

視線を感じたので隣を見ると、娘が口を開いて愕然としていた。目が合つて口が閉じ、目を逸らすと視界の端で口が開いた。ふざけるようだ。

「私は今年で32歳です。この世界の基準でいえば、適度に老いています。まだ10代の娘さんを——」

「私は21歳です」

「……うら若きお嬢様を——」

「私の名前はジェシカです」

「……ジェシカさんを色恋の——」

「色恋ではなく、結婚の」

「ちよつと黙ってください。話が進まないじゃありませんか」

紫煙を吐く商人の呼気に笑い声が混じった。父の眼前にいる娘に對して褒められた振る舞いではないが、彼は止める気配がなく、それどころか生温かい目で見守っていた。だから俺も弁えなかった。

「これ以上、邪魔するなら、お尻叩きますよ」

「触りたいのですか？」

「……お灸をすえますよ？」

「まあ……怖いですよ」

両の握りこぶしを目にあて、しくしくと嘘泣きを始めた。体全体から立ち上るのは、構って欲しいというろくでもない気配だ。俺は彼女の意向を踏みにじり、無視を決め込んだ。

「結婚の対象にしろというのは、いかななものでしょうか。相手が人間ならまだしも、化け物の私に」

「面白そうじゃありませんか」

いつの間にか嘘泣きは止めていた。理屈でこない相手は苦手だ。ため息を吐いて父親に助けを求めると、彼は微笑んで紫煙を漂わせた。

「結論を急ぐと損をするよ。娘を貸し出すのは問題ない、資本金も工面しよう。しかし、分かっていると思うが、商人とは——」

「売り上げが全てですか？」

「いいや、夢を見ないことだ」

彼は娘を一瞥した。

「肝に銘じておきます」

「そう願うよ」

商人は立ち上がって机の引き出しから小袋を取り出し、金貨の入ったそれを手渡した。

「ありがとうございます。必ず、利子をつけて返します」

「制限とは、時に自由よりも重要な意味を持つ。利子をつけることで君の行動に変化があるのならそう願いたいね」

ありがたく受け取り、俺はジェシカと街へ繰り出した。

紙装甲の衣装で足元を見られるのも困ると思ったが、人間の服が着られるとも思えず、応急処置に黒いローブを纏った。ユグドラシル時代、PKを警戒して二足歩行の種族を選んだ、過去の俺の功績だ。人間に擬態する術もあるが、この国は異形種の方が自然だろう。

「そういうえば、御父上の経営する店の名前はなんですか？」

「シャイロック商会です」

「……これも運命なんでしょうね」

まったく、ふざけた運命だ。



どこよりも先に優先するのは、評議国古参の鍛冶屋だ。埃っぽい武器屋の戸を開くと、髭の小男がカウンターに座り、お茶を啜っていた。俺たちに気付くと、視線で上から下まで舐め上げられた。

「この店で一番、切れる武器を見せてください」

「切れ味はどれもそう変わらんぞ」

俺の視界は真つ暗になった。

「……鍛冶職人にお会いしたいのですが」

「ワシじやい」

「……マジでえ？」

「まぢでえ」

ジェシカが俺の真似をしてふざけている。彼女に外で待機するよ  
うに言って追い払い、改めてドワーフらしき小男に取引を持ち掛け  
た。

「ここが評議国でもっとも古い鍛冶屋だと聞いています。その腕を見  
込んで、竜王を切れる武器を鍛えてほしいのです。理想は投てき武器  
です。円月輪とか、ライジング・サンは作れますか？ アストラルや  
トマホークでは重いので、肉切り包丁や獄刀でも構いませんが」

「はん、武器なら一通りそろえているだろう。投てき武器などは好か  
ん。だいたい、竜王様を敵に回すような武器を欲するならこの国から  
出て行け」

「確かに、ここにある武器はどれも弱すぎますね」

怒りで立派な髭が逆立った。酒でも飲んでいるのかと聞きたくな  
るほど赤くなり、拳を握って机に叩きつけた。

「ワシはずつとこの国で鍛冶やってんじやい！ お前さんの種族は知  
らんがな、舐めるなよ、小僧！」

「仕方ありませんね。それでは取引を申し出たいのです。近隣を荒ら  
す魔獣の死体を買って取ってください」

「……はあ？」

「こちらの理想はあなたを専属鍛冶職人に雇うことです。私が魔獣を  
倒し、素材を提供し、武器を作る。報酬は生活の保証です。私の商店  
で働けば、バフ効果のアイテムを生産し、技術を向上させましょう。  
ギルドに金を払う必要もなくなりますし、武器を売った利益は還元し  
ますよ」

「……お前さん、何者だ」

「詳しい話はまた後日にしましょう。今日は剣をいくつか買っていき

ます。粗悪品ですが、魔獣ならこれでいいでしょう」

店主は全力で舌打ちをし、忌々しいものでも見たように手を払った。

「私は南門の外の露店にいます。またお会いする日を楽しみにしています」

「商業ギルドや竜王様に喧嘩を売っ——」

「先を急ぐので、失礼」

交渉は失敗だ。彼の話を通り切って扉を閉めた。次はもつと上手くやろうとあれこれ想像し、喧嘩腰のドワーフをいなして店を出ると、ふぐのように膨らんだジェシカが喧嘩を売ってきた。

「遅いです。女性を待たせて平然としているなんて」

「……次に行きましょう」

「待たせたお詫びに、腕を組んでもよろしいですか？ 魔導国を見習って、恋人を偽るといふのも——」

「過程を楽しむつもりはありません」

「同感です。結果が全てですもの」

「それには同意しますが、人肌は必要ありません。金にならないのは好きじゃありません」

「格好いいです！」

火星か金星あたりの宇宙人と話しているような気分になった。

結局、彼女は俺の腕に纏わりついた。



次に俺は、薬師を訪ねた。

森妖精<sup>エルフ</sup>の女店主は美人で、見惚れるほどだった。ミロのヴィーナスなど、彼女に比べれば土を捏ねた粘土細工だ。異形の俺としがみつく娘を見て、こつぴどく振られた元恋人に路地ではったりと再会したような酷いしかめっ面を見せてくれた。

「すみません、ポーシヨンを見せてください」

出されたポーシヨンの色は青く、俺は揶揄われているのだと思っ

た。

「このポーシオンではありませんよ」

「このポーシオンしかありませんよ」

「これは下級治癒薬マインナーレヒーリング・ポーシオンですよね」

「ポーシオンですよ」

「ですから、ポーシオンの色が——」

しばらく下らないやり取りが続いた。娘が腕に胸を密着させた狼藉で俺も冷静になり、この世界全体のレベルが低いことを思い出した。個々のレベルだけではなく、流通している商品までレベルが低いとは想定外だ。

「失礼、錬金術溶液はどんなものがありますか？」

「鉱物を元にしたものですが、何か？」

これまでのやり取りで彼女の心がささくれ立っている。失言をすれば噛みつかれそうなきつい目だ。

「ゾルエ溶液などはありませんか？」

「……は？」

「黄金の秘薬は？」

「ひ、飛躍……？」

ポーシオンの作り方からして、俺の常識が通用しなかった。既存のポーシオンに魔法付与や、俺の生産系魔法で簡易バフなら掛けられる可能性が高いが、それは検証してみなければわからない。

「仕方がないので、このポーシオンをください。一本、いくらですか？」

「……金貨5枚と銀貨4枚です」

「金貨5枚!? こんな弱いポーシオンにですか!？」

「……悪かったですね」

悪意はなかったが怒らせてしまった。それにしても、ここで大枚をはたいて浪費すれば、市場で欲しいものが買えない。瓶は最低限にとどめ、薬草を大量に買い占めたが、それでも想定より大幅に金貨を使ってしまった。

「はあ……こんな低品質な薬草に……」

森妖精が釣り目で睨んでいた。

「ところで、商売は順調ですか？」

「はい？」

「薬師が一人ほしいと思っていました。ギルドに税金を払うことなく、より効果のあるポーション制作に携わる気はありませんか？」

ジェシカが絡めている腕に力を籠め、何かを言いだそうとしたエルフを睨みつけた。

金にならないし、下らない。

「ジェシカ、ご退場願います」

「え？ 私がですか？」

案山子並みのいい加減な顔で俺を見た。

「情報より重要なものではありません」

「なるほど、勉強になりますわ！」

彼女は出て行くことを拒否したので、絡みつく彼女の腕を解いた。カウンターに身を乗り出すと、美形の森妖精が身構えた。今度こそ、交渉を上手く行わなければならぬ。

「私はアインズ・ウール・ゴウン魔導国、魔導王の友人です。あなたを雇い、技術を向上させましょう。生活の保証はします」

「……嘘」

「本当です。私たちのいた世界では、ポーションは赤いんです」

「神の血……」

「ご存知でしたか」

「……」

口を開いていたので言葉を待ったが、なかなか顔を覗かせない。曇みかければ即効性の毒が回っただろうが、これだけ驚くのなら十分だ。これは種まきの一環で、すぐに成果が出る行為ではない。水と時間がなければ芽は出ないし、今は彼女に払う人件費が無い。

「何かあればご相談に来てください。南門の外に露店を作ります。軍資金がなければ言うてください。金貸しもやっていますので」

水をやりすぎても腐ってしまうので、失語症の森妖精を無視して外へ出た。

再び小娘の腕が絡みつき、俺の歩行速度を鈍らせた。

「もう……好色なのですわね」

「残念ながら、金より愛を優先するつもりはありません」

「よかった、安心しました」

「？」

「ところで、私は21歳、独身、現在、恋人はいません」

「はあ……」

「この言い方だと過去に恋人がいたと匂わせているように感じますが、その辺りの事情は気になりませんか？」

彼女は自由だ。レベル100の強者で、しかも異形種の俺に対し、やりたい放題、言いたい放題してくれる。

「ところで、お名前は何でしたっけ、ネラワレタ様」

「私を狙うのはあなただけですよ」

「まさか！ 狙うなどと恐れ多いです！ 一人の親愛なる、未来の婚約者として振る舞っておりますわ。ところで、お名前は……」

俺は見せつけるようにわざとらしく、見下ろすと吸い込まれそうな深い溜息を吐いた。

「音改ねあらたです」



それから、大量の肉、魚、果物を買って漁り、アイテムボックスへ放り込んだ。オーガ、トロール、ハーFRING、シーリザードマン、森妖精エルフの店主に、ギルドへ金を払わなくていいから俺に雇われろと、種をあちこちでばら撒きながら。

全ての店で共通しているのは、ユグドラシルと同様、商人の常時発動スキルで、モブキャラ店舗の彼らからは3割安く買った。恐らく、売値も3割は乗せられるはずだ。いともたやすく差し引き6割の利益が出るが、それが目的ではない。

金貨を使い果たしてから帰宅し、購入した商品を中庭に並べていった。



大量の木箱に積まれた食料品が並べられていく景色を眺め、シャイロック氏はベンチに腰かけてぼやいた。

「どういうわけだね、これは」

「安く買えました。これが上位の商人の力です」

「……どうやら、私の想定した以上の存在らしいな」

「その……間違っていたら訂正してください。シャイロックさんは、もしかして金貸しだったんじゃないませんか？」

彼からいつもの余裕が消えた。

「やはり、強欲である卑しい性分は足を洗っても流しきれないのだね」「そういう意味ではありませんよ。これは私の勘です」

「私の父はバハルス帝国の金融——と言えば聞こえがいいが、ただの金貸しだった」

やはり、名前が示した通りの人物だったようだ。《ヴェニス商人》がこの世界にあるとは思えず、説明しても理解できないので黙っていた。

「どちらかと問われれば、行儀の悪い部類に入る。私自身、それなりに手も汚している。父から引き継いで順調に売り上げを伸ばしていたあるとき、異形種がふらつと店を訪れ、見たこともない大金を積み上げ、債務者たちを攫っていった。そこが私の引き際だと思ってね。元より私は、父より引き継いだ金貸しという商売が好きではなかった」

彼は話を切った。

終わったのかと思いき横目で盗み見ると、何かを躊躇っているような顔だった。

「しかし……仕事を部下に引き継いで評議国へ行くと打ち明けてから、娘と険悪になってしまっただけ」

冗談を言っているのかと思ったが、彼の顔は真剣だ。あの娘とどうやれば険悪になれるのだろうか。

「君が来てからだよ。娘が楽しそうにはしやぎ始めたのは。それまでは、まるで手負いの獣のようだった」

噂の彼女は、俺たちが話しているのを盗み聞きしようと林檎の詰まされた箱の影に隠れている。発見されて怒られる前提で顔を出してい

るので、箱に向かってその辺の小石を投げつけた。

「商品の整理をお願いします。痛んでいるものは破棄してください」

「はいー!」

スカートを翻して走っていく様子は、どこからどう見ても中二病の夢見る少女だ。

「あれらはどこで売るのがね」

「南門の外へ露店を設置します」

「ギルドへ所属していいだろう」

「商売で戦争を始めるんです」

俺には正義も悪もなく、仁義も筋も通さない。通すつもりがない。どの世界であろうと、金が無ければ死ぬしかないのだ。商売にそんなものを求めることが間違っている。

「君よりも物好きな人外は、この先、数百年は現れまい。評議会とギルドへ同時に喧嘩を売ろうと言うのだから」

彼はパイプに火をつけた。

「強欲は罪だ。父親として、娘を巻き込まないでくれと言うべきなのだろうが、一人娘に笑っていてほしいと願うのもまた、親心なのだろうね」

「いえ、巻き込むつもりはありません。彼女には道案内だけ求めたつもりでしたが」

「私の意見は聞く耳を持たんよ」

「……そうですか」

父親のお墨付きで娘を預かる羽目になった。一般的には美人の娘と一緒にいれるのだから喜ぶべきだろうが、俺の望みはそんなところにはない。正直、面倒に思えた。

「仕方ありませんね……ジェシカさんの身の安全は保証します。御二人のどちらか、評議員になってもらいたいです」

「君の頭の中には高名な画家でも住んでいるのか」

馬の糞でも触ったような顔だ。

議会の懐に入りさえすれば、時間をかけて根を生やせばいい。評議国の多数決が俺の意のままに操られ、事実上、魔導国の支配国となる。

そのためには、竜王を俺の前に引きずり出さなければならぬ。これは出会い頭に顎アギトを殴りつける必要工程だ。

世界征服を目論むモモンガさんへの手土産に、評議国なら悪くない。

「しかし、そう簡単にはいかんだろう。仮にだ、君が竜王猊下よりも強いとしても、力で意見を捻じ曲げてくれるようなお優しいドラゴンに、竜王の称号は手に入るまい」

「私の目的は、私が評議国から追放されることですよ。そうせざるを得ない状況を作るには、彼らが最も嫌がることをすればいい」

「君の頭に飾られている絵画に、お目にかかれるのを楽しみにしているよ。さぞ、見事な美術品なのだろうね」

「褒められたやり口ではありませんので」

「これは俺の宗教が正しいと証明したい、個人的な我儘も含まれている。そのための商売戦争だ。」

「店の名前は聞いてもいいことかね」

「そうですね……」

そこは考えていなかったもので、俺はジェシカが呼びに来るまでの時間を思考に浪費した。

「銭ゲバ商会……でしようか」

言い切ってから恥ずかしくなった。



翌朝、俺たちは早くに評議国の都市部を出た。草原をそよ風が走っていく。見通しの良い、評議国から近すぎず、遠すぎず、条件に合致する場所を見つけ、アイテムボックスから商品を取り出した。一通り並べてから、魔法を唱えた。

「オーブン・ストリート・ストール  
《露店開設》」

手をかざしてスキルを唱えると、簡易な露店が出現した。ギルドの旗が風になびいている。この旗を見る限り、俺はまだアインズ・ウール・ゴウンの一員だと思えた。他の生産系を取得した友人、あまのま

ひとつさんなどがいれば作業工程がいくつもすつ飛ばせたが、そこま  
で贅沢は言えない。

これから対峙する竜王猊下のレベルが、100でないよう祈るばか  
りだ。

「朝食ができましたあ」

相変わらず、娘は俺に付き纏っていた。食事は商品を食べばいいの  
で彼女は用済みだが、何を言っても帰ろうとしない。

「……それが終わったら家に帰ってくれませんか」

「料理ができます」

「認めます」

「歌も歌えます」

「認めません」

「結婚しましょう!」

「ふざけていますね?」

「えへへ、ばれちゃいました?」

未だ、俺に付きまとう彼女の心の内は読めていない。

恋愛感情とは思えず、何か言い表せぬものを感じて得体が知れない  
ので不気味だ。食事中も彼女は俺を凝視し、気が休まることがない。  
その居心地の悪さときたら、正義と悪が大喧嘩をしている最中に居合  
わせてしまった時に酷似している。

仕方ないので店番を任せ、俺は後ろで横になった。社長である俺の  
本番は夜の来客への対応だ。ジェシカはいつまでも俺に語り掛けて  
くる。

「お客さん、来ませんねー……」

「そうでしょうね」

「ヒマですねー……」

「昼寝するので静かにしてくれませんか」

「添い寝は——」

「結構です」

「もう、つれないですわ」

「マジに黙らないとクビにしますよ?」

「はーい……」

どうせ開店初日、客は来ない。

重苦しい夜が周囲を覆ってから、俺は火を起こして肉を焼いた。

「ネラワレタさまー、夜に肉なんて焼いたら魔獣が寄ってきますよう」

「そうでなくては困ります」

彼女の言う通り、暗闇に浮かび上がる露店の明かりの周囲を、肉の焼ける匂いが漂った。

「魔導国の領内から追い出された魔獣は、評議国にも逃げ込んでいますから、この辺は数も多いんですよ？」

「望むところです」

すぐに夜の闇に紛れて光る目がやってくる。焼いた肉の匂いに誘われ、もつと新鮮な肉を食らうために。昼間、店番を彼女に任せて昼寝しておいてよかった。時間経過で光る目は増え、小さな星空にも見えた。

「うわー……魔獣がいっぱいですう」

「食べられないように、隠れていてください」

腕試しと検証の時間だ。ギルド内の腕っぷしで言えば、俺は下位に分類される。それでも、この世界のレベルや魔獣の種族を考慮すると負ける気がしない。俺は手近な剣を掴み、群れを率いているひとときわ大きいバジリスク種の前に立った。相手は食事を前にして涎を垂らしている。

「弱い者いじめは趣味じゃないが、弱肉強食だと思って諦めてほしい」

石化に抗う魔法を付与した下位ポーションを飲み干すと、力、速度、抵抗力が上がった。剣に炎を宿して斬りかかると、面白いように斬れた。彼らを惨殺するのに、1分とかからなかった。

開店初日の損失は下位ポーション2瓶、金貨16枚相当で、収益はバジリスク種たちの死骸だ。明日の夜は、彼らの肉を焼いて魔獣をおびき寄せれば商品を消費せずに済む。

敵の気配が完全に消えてから、娘に見張りを任せて仮眠を取った。しかし、流石に二人で店を回すのは辛い。特に、彼女の身に何かあつては、金主のシャイロツク氏に顔向けができない。

翌日の午前中、冒険者の護衛をつけた旅の商人が、都市内で買うよりも安いと喜んでまとめ買いをしていた。都市内の物価を調査しておき、3割乗せて売れると想定した値段設定で良かった。

収入は金貨2枚だが、口コミが広がることに期待しよう。

「売れましたね！」

「御父上の商売、手伝わなくていいんですか？」

「いいんですよ。唸るほどお金があつて、働かなくてもいいんですから」

「羨ましい限りですね」

仕事が趣味になれば余裕ができ、ああいう性格や言い回しになるのか。

「ですから、お金をくすねて、料理に必要な家財道具も持ってきたんです」

「だからいつも通り、食事が出てきたんですね」

「私たちの愛の巣ですもの……うつつふ」

「お黙りなさい」

「これでお客さんが増えても大丈夫です。もっと儲かったら、食堂でも開きましょう！」

ちやつかりしているものだ。愛の巣という下らない意見は捨て置き、簡易食堂を作るのは悪くない案だ。

「儲かったら資本金として返さないといけませんね」

「わ、私をお嫁さんに——」

「その申請は却下です」

夜、バジリスク種の死骸を焼いて香ばしい臭いを漂わせていると、大地が揺れた。夜の来客、魔獣は二足歩行の恐竜だった。爬虫類独特の目で俺を見下ろし、舌なめずりをした。生え揃った鋭い牙は、高値で取引できそうだ。

「暴君龍<sup>レックス</sup>か。ユグドラシルが元だと、北欧神話の魔物だけとは限らないんだな」

「きゃー！ 犯されるー！ 助けてー、音改さまー！」

有難くも何ともないが、少しも緊張感がない。

俺は少しでも経費を削減しようと、ポーションを消費せずに戦いを挑んだ。気が付けば、恐竜の首を両手に掴んで草原に立っていた。

この日も俺の圧勝で終わった。下位物理無効化を貫通するほどの敵にはお目にかかれず、命を取られる心配はないどころか、かすり傷ひとつ負っていない。ポーションやバフを掛けるのが馬鹿馬鹿しくなってきた。

この日の獲物はこの二体だけだった。朝方、返り血を洗い流す水がもつたないので、血なまぐさいまま食事をとり、眠った。

3日目の朝、ジェシカの声で目を覚ますと、薬師の森妖精<sup>エルフ</sup>が唐草模様の風呂敷を背負って店を訪れた。美しい顔と相反した唐草模様様に、夜逃げしてきた娼婦のようで笑いをこらえるのが大変だった。

「あのー……雇っていただけじゃないでしょうか」

なぜ彼女だけがこんなに早く陥落したのかが気になり、理由を問い詰めた。

「魔導国に私の故郷、エルフ王国を滅ぼされたもので……」

「それは……申し訳ありません」

俺は頭を下げたが、彼女は萎縮していた

「あ、いえ、感謝しているんです。娼婦まがいの奴隷だった国民は解放され、魔導国領で自由が許され、希望者は友好国へ亡命の手引きもしていただきました。私の家族は散り散りになりましたが……みんな過去を忘れたいんです」

故郷を滅ぼされたのに感謝をしているらしい。状況がよくわからないが、彼女が謀<sup>はかりごと</sup>を巡らしているようには見えなかった。

「それでは、ポーションを作り続けてください。薬草の調達などもお願います。魔獣が出たら私が対応します。そのうち、製造方法の打ち合わせをしなければなりませんね。それから、ポーション販売の利益還元ですが——」

「うっ、酷い。あの、血なまぐさいので、手を洗ってきてもらえませんか」

「水がもつたいないのもので」

「ここから西に1キロほど行けば小さな川か泉があると思います」

「わかるんですか？」

「水の匂いがあります」

半信半疑だったので打ち合わせを先に行いたかったが、彼女は鼻を摘んでそれ以上の話を拒んだ。仕方なく西へ走ると、彼女の言った通り、澄んだ小川が流れていた。俺が血なまぐさい両手とおさらばして店に戻ると、ジェシカとエルフが談笑していた。

「ですから、たとえ年上だろうと何だろうと、音改さまを口説かれるのはやめてください。順番でいえば、私が先なんです」

「それはないから安心してよ、ジェシカちゃん」

「本当ですかあ……？」

「あ、お帰りなさい」

「ジェシカ、変なことを吹き込むのはやめてください」

ともあれ店番も増え、俺もよく眠れるので助かった。

エルフの美女が店番をしている昼間、心なしか客足が増えている。耳の尖った招き猫は男受けがすこぶる良好ではあったが、ジェシカは頬を膨らませていた。膨らんだ頬を指で押すと、風船のように空気を吐き出した。

「何するんですか！ 破廉恥な！」

「失礼」

「フンだ」

笑顔を隠すことなく、嬉しそうに逃げていった。



昼は都市内よりも安価に食品やポーシオンを売って噂を流布し、夜は森妖精エルフと小娘が手に汗握って見守る中、俺は魔獣を狩った。

他に特別な事態が起きることはなく、順調にその周期サイクルを繰り返して、客足が増えていった。とはいえ、増えたとは言い難い程度の来客数だ。空き時間を利用し、森妖精エルフにポーシオン制作の指導を行ったが、成果が出るのはまだ先だろう。



そろそろ武器がほしいが、ドワーフはいまだに訪れない。離れた場所に積み上がる魔獣の死体から、風に乗って腐敗臭が漂っている。死体を捌く肉屋も急ぎで必要だ。

商品の在庫も減ってきているので追加購入に出向く必要がある。各種店長へ雇用する再交渉を行い、生活魔法について調べるべきかと思いはじめたころ、ついに蜥蜴が釣れた。

店の裏で昼寝をしていると、強風で叩き起こされた。

何事かと店の前に出て行くと、空と同じ色をしたドラゴンが俺を見て口を歪めた。

「あ、い、あ、いい、いらつさいませー……ようこそ、錢ゲバ商会へー……」

「ジェシカ、奥へ入っていないさい」

「は、はあい、店長」

そんな名で呼ばれたのは初めてだ。次から社長と呼ぶように指導しなくては。ジェシカは硬直するエルフの背を押し、店の奥へ引っ込んだ。俺はいかにも店主ですと言わんばかり、手近な椅子へ腰かけ、足を組んだ。

「いらつしやいませ」

「私が客に見えるのか」

青い鱗が輝いた。

鱗一枚とっても目玉が飛び出そうな高値が付くと踏んだ。

「客ではないのですか？」

「お初にお目にかかる。私はスヴァリアーⅡマイロンシルク。永久評議員の1人、青空の竜王だ」

「それはどうも、ご丁寧に。私はこの店主、音改です」

「ギルドに所属せず、安価な商品を領内で販売している真意を聞きた  
い」

「生きるため」

相手は俺の長台詞<sup>いいわけ</sup>を希望していたらしく、返答が短すぎでずっこけそうになっていた。

「ふざけるのは止してもらいたい。生きるためなら、評議国内で商売

をすればいい。他に何か企んでいるはずだ」

「理由はそれだけで十分では？」

「ここで商いを続けければ国内の相場が乱れる。その言葉を信じるのなら、早急にこの地から立ち去るか、正式な手順を踏んで国内で店を開いてもらいたい」

「お断りします」

俺の声は凍てついていた。

「貴様……やはり八欲王のような下衆プレイヤーだな？　評議国を手に入れようと思っっているなら——」

「我々は何も違法なこととはしていません。手に入るものを売っているだけです。行商人や冒険者も、旅の途中で休憩や補給をしたいでしょう。あなたの——」

俺は身を乗り出し、竜王を指さした。

「高値が尽きそうなその翼や鱗は、弱い人間や亜人からすれば遥かな高みでしょう。強さとは縁遠く、魔獣の恐怖に怯えながら旅をする彼らの補給地点になっています」

「あの積み上がる死体がそんなのか。確かに、ここ最近、魔獣の被害が減っていると聞いたが……しかし」

「私たちは店を守っているだけですが、ついでに領内を荒らす魔獣まで討伐し、評議国の平和にも貢献していますが、何か問題でも」

「……」

竜王とは、意にそぐわぬ者を消すような種族かと思っていた。当ては外れ、青空は敵意を示さない。この場で解体し、ドワーフへの交渉材料にしたかった。

「君は金が欲しいのか？」

「金を欲しがらないのは偽善者か宗教家と相場が決まっています」

「いい事を教えてやろう。魔獣は死体を冒険者ギルドへ納品すれば金になる。あそこで腐らせておくより、有意義だと思いがね」

「……情報、感謝します」

「情報料として、領内からご退場願うのは可能か？」

「それは難しいでしょうね……」

「ふむ……」

竜王は腕を組んで悩み始めた。

「竜王の意にそぐわぬものを殺すような、独裁国家ではないのですか？」

「悪いが喧嘩を売る相手は選ばせてもらう。今は手持ちがないので、買う予定もない。私の考えが正しければ、下手な争いは大戦争の引き金となるだろう」

「それでは、何か召し上がりませんか？ お金はいただきますが」

「それも不要だ」

竜王は組んだ腕を解き、大地を揺らして顔を近づけ、至近距離で俺を眺めた。

「君の処遇については議会で意見が割れている。特に良い話は聞かないが、今の罪状は商業ギルドを無視して商売をしている一件だ。新たな情報、魔獣の間引きという話を持ち帰るべきなのだが……一つだけ教えてもらいたい」

「駆け引きは苦手なんですよ」

「君は恐らく、異世界の住人だろう。私たちはプレイヤーと呼んでいる。それも厄介なことに、君はアインズ・ウール・ゴウンの仲間だ。ここまでは間違いないな？」

「ええ、まあ」

「君は悪か？ 善か？」

竜王は懐疑的な目線で俺を射抜いた。恐らく、返答を間違えば戦闘になるのだろうが、俺の反応に相手は戸惑っていた。

「ふっ……ふふ……失礼」

なぜ笑ったのか自分でもわからないが、この失態で竜王の視線は緩み、竜王を解体するのは失敗に終わった。

「私には善も悪も興味はありません。金勘定が趣味です」

「その言葉に、嘘偽りはないな？」

自分でもこの後の対応は理解できないが、俺は全てを話したくなかった。

「ギルドマスターであるモモンガさんが望めば世界征服をするでしょ

う。彼とは会いましたか？」

「……済まないが、モモンガというプレイヤーに出会ったことはない」  
「魔導王が多分、それですよ」

解せぬとでも言わんばかりに、竜王は尻尾を貧乏ゆすりしていた。

「私の聞いているのは、彼は世界征服など望んでいない。望みは41人の仲間との再会だそうだ」

「そんな馬鹿な。アインズ・ウール・ゴウンが世界征服をしないなんて……下らない嘘をついていたら許しませんよ」

立ち上がった俺に対し、彼は何の感情もあらわさなかった。自らの返答になんら後ろ暗いことはない、体全体から漂う空気が物語っている。

「そちらに関しては、魔導王と親交の厚い竜王がいる。後日、彼をこちらへ寄越そう。今日はこれで失礼させてもらう」

竜王は俺に背を向けた。敵対する意思がないのだと信じて疑わないようだ。その考えは正しく、俺も背後から襲いかかってまで竜王と敵対するつもりはない。

「それから……竜王の意にそぐわぬものを殺すような、そんな低能に評議員は務まらない」

「商業ギルドからどれくらいもの賄賂を貰ってるんですか？」

「あれは魔導国の物価低下による弊害の1つだ。いまだ実験運用の域を出ず、存続の可能性も低い」

それさえも魔導国の仕業だったわけだ。これまでの全て、俺の早とちりの可能性も考慮する必要が出てきた。少しだけ出ていた俺のやる気が、再び萎れていくのが分かった。

「他にも何かあるか？」

「……強風で飛んだ食料品の弁済をお願いしたいのですが」

「無下に断つたらどうなる」

「皮膚を剥ぎ、翼を挽ぎ、角を削り、血を溜めます。ドラゴンは美味しい魔物です。血の最後の一滴まで、高値が付きますし、あらゆる分野の素材に使えますから」

「……腹立たしいが、ここは素直に従っておこう。金貨2枚で勘弁願

おうか」

「武力行使はしないのですか？」

「魔導王の勢力を敵に回し、血みどろの惨劇を招くのは困るのだ」

「そうですか……」

俺はこれ見よがしに肩を落とした。

「ありがとうございます」

「次はもつと離れた場所に降りるとしよう。解剖されてはたまらないからな」

青空は離れた場所まで歩いて、店に損害を出さないように気遣いを見せた。ドラゴンの紳士的な振る舞いに、俺は感謝よりも失望した。

落胆はすさまじいもので、青空が去ってから案山子のように立ち尽くした。

「はあ……もつたいない。血の一滴まで何かに使えたはずだったのに」

「音改さまー」

隠れていたエルフとジェシカが駆け寄ってくる。事情を知らぬ者が見れば、二人の女性を手籠めにした遊プレイボーイび人に見えただろう。しばらくそんな気分になる予定はない。

「あの竜王様を相手に一步も引かないなんて、さつすがは私の未来の婚約者様！ 魔導王陛下の御友人ですう！」

「す、すみません……それほどの強さをお持ちとは知りませんでした」  
「何を喜んでいるのか知りませんが、最悪ですよ。本来なら、彼を解体して竜王の素材を手に入れたかったのに」

「でも、あの竜王様相手に金貨を2枚もせしめたなんて！」

「2枚」しか、手に入らなかつたんですよ。彼を解体し、素材をあちこちで売り払えば、どれほどの利益が出たことか。それこそ、数年は遊んで暮らせたはずなのに……今日は大赤字です」

耳の尖った美女は不遜な物言いに言葉を失っていたが、ジェシカは盛り上がっていた。

「なるほど！ 銭ゲバ神さまは、常に金のことだけ考えるのですね！  
これしか儲からなかつたと考えることで、常により金になる道を模

索するなんて、勉強になりますわ！ 私たちの未来にも、ゼニゲバ神様の御加護が——」

「ジェシカ、銭ゲバとは拝金主義のことで、ゼニゲバという神を信仰する宗教ではありませんよ」

「え、あ、そ、そうなんですか……恥ずかしい」

本気で赤くなっているように見える。彼女の心の内側はよくわからない。それにしても、青空は襲い掛かってくると思っていた。本当に、そこだけが悔やまれてならない。

「考えると腹が立ってきました。そろそろ買い出しに出掛ける頃合いです。評議国で宿でも取り、食事も外で済ませましようか」

「お支払いは経費ですか？」

「まあ……それくらいはいいでしょう」

少ない売り上げを使い込むのも気が引けるが、息抜きも必要だと納得させた。

「宿のグレードは上げませんか？」

「やったああー！ ジェシカちゃん、暖かいベッドで眠れるよう！」

森妖精<sup>エルフ</sup>が万歳して叫んだ。至近距離で叫ばれたもので、耳鳴りがした。

「ええー、音改様と一緒に寝たいのにい」

「ジェシカちゃん……年頃の娘が節操ない振る舞いをするのは止めなさいー」

「だってえ……ん？ そういえば何歳ですか？」

「あ、あら……おほほ、エルフは長命種ですから」

「音改様は32歳でしたよね？」

「ええっ！ そ、そんな……私の10分の1以下だったなんて」

眩きはしつかり聞こえていた。俺は敢えて何も言わず、紳士然とした振る舞いを心掛けた。巨大複合企業の社長が、社員の個人情報<sup>ツール</sup>を気にしてはいけない。美しさはそれだけで貴重な道具だ。この先も、客寄せとして力を発揮していただく。

俺が店を畳んでいるあいだ、彼女たちは年齢について盛り上がった。

(それにしても、あの容姿で300歳以……いや、下手をすると400や、500の可能性もあるのか。長命種はよくわからないな)

「もしかして、本当の年齢って……」

「いやあああ！ お願いだから言わないでええええ！」

「そろそろ行きますよ、二人とも」

店を畳み、商品の買い出しへ向かった。

評議国内の中級宿屋に部屋を取り、ベッドに横になるととても心地が良かった。心がささくれ立っていなければ、よく眠れただろう。

部屋の壁は薄く、隣部屋のジェシカとエルフの笑い声が聞こえた。聞き耳を立てるのも悪いと思い、早々と明かりを消してベッドに横たわった。

夜になっても昼の損害が悔やまれた。

永久評議員が文化人らしさを身に着けているおかげで攻撃する口実が無く、魔導国と友好国なので、俺一人の判断で戦争を起こす訳に行かない。

やる気を出そうにも、肝心のウルベルトさんが来ていないのだ。馬鹿の多い異世界であれば戦闘は避けられず、今ごろぼろ儲けして楽しめただろうに。

ちまちまとした売り上げを累積させ、常に俺が魔獣を狩り、人を増やして人件費もかさばる。いつになれば魔導国へ行けるのかと、気が遠くなりそうだった。

結局、仕事なんて毎日、同じことの繰り返しだ。

「……つまらないなあ」

## 評議国の商人 下巻

二人は俺が寝坊し、余計な時間を散在している最中、着々と親密度を上げているようだった。遅い朝食でも食おうと食堂へ向かうと、デザートを取り合っているエルフと小娘の姿が見えた。

「ジェシカちゃん酷いよおお。最後にとつておいたのにいい！」  
「だって、まだ21歳の小娘だもん！」

朝っぱらから騒々しいので、俺は他人の振りを決め込んだ。考えられる限り最も遠い席へ腰かけ、一人、優雅な朝食を摂った。明け放された窓では、雀たちがおこぼれに預かりたいと機を狙っていた。

俺がパン屑をそつと置いてやると、待つてましたとばかりに雀たちは食事を始めた。

「ジェシカちゃん……年齢の話は」

「そうですよね！ だって、実は6——」

「やめてええ！ 私の大切な情報を迂闊に話さないでえええ！」

あちらの雀たちはまだピーピーと騒いでいたので、俺はあちらが気付くまで待つことにした。

「平和だな……」

つまらない朝だった。



買い出しの前に、はぐれドワーフの鍛冶工房を訪れた。躰されている女性たちに「待て」の合図を出すと、時間でも止められたように固まった。

俺が扉を開くと、突然に朝陽が撃ち込まれたもので、店主のドワーフは鼻に蜘蛛でもたかっているような顔をしていた。申し訳程度に「いらっしやい」と挨拶をしてくれたが、来客が俺だとわかって早々、塩でも投げつけてやりたいと言わんばかりの態度に変わった。

「なんじゃい！ 帰れ！」



「あなたは、気に入らない客にはいつもそんな対応してるのですか？」  
「まさか、相手は選んどるわい。評議国に敵対しようとする異形種に  
ちようどよかろう」

「私に対する誤解が、なるべく早く解けるよう願っていますよ。武器  
がぼろぼろになってしまいました。新しいものをください。投てき  
武器がほしいのですが、刃を輪つか状に鍛えてもらえませんか」

「ああん!? わしは投てきなど好かんと——」  
「この素材はいくらで買ってもらえますか？」

最初は無下な対応をしていた髭の小男も、バジリスク、恐竜、キマ  
イラ、巨狼など、魔獣の頭部が並べられていくうちに顔色を変えた。  
今日び、信号機だつてここまで手早く色が変わるまい。

「いくらですか？ 理想は金貨10枚くらいがいいんですが」  
「……う、あ……く、組合へ行け！ 冒険者組合へ！」

「登録とか手続きが面倒なんですよ。代わりにやってくれませんか？  
手数料と対価は払いますので」

「お前さん……頭が壊れとるわい。神殿へ行け。治る保証はないが  
な」

「失礼ですね。当初の予定通り、素材をお持ちしましたよ。これで竜  
王を殺せる武器が作れますよね」

「馬鹿者！ 最強の竜王、白金の竜王であらせられるツアインドルク  
Ⅱヴァイシオン様がおるんじゃ！ お前に加担すれば儂まで目を付  
けられる！」

「じゃあ、ずっと私の下で働き続けなければいいじゃありませんか」  
売り言葉に買い言葉となったのは否めない。互いの声量は徐々に  
熱を帯び、大きくなっている。交渉の体裁は早々と掻き消えた。

「その白金が出てきたとき、腹を割って話をすればいいんです」  
「……帰ってくれ。お前さんに雇われるには、工房が無くては話にな  
らん」

「それでは、移動する手段を考えましょう。かまどならすぐに移動が  
でき——」

「帰ってくれ！ 儂を一人にしてくれ！ 金貨なら渡す！ お願いだ

から帰ってください！ この通りじゃ！」

最後は拜み手で懇願された。

髭の小男は魔獣の頭部に対する金貨を押し付け、俺の背中を押して外へ追いやった。体温を感じない無情な扉は閉ざされ、カチャッと鍵が閉まる音が聞こえた。彼の心と同じく、入口は閉ざされている。

ため息を吐き、店の軒先で談笑する女性陣へ向かった。こちらが何も言わずとも、全て悟られていた。

「また駄目だったんですかあ？」

「上手くいかないものですね。こういう交渉は苦手です」

「もう、仕入れと販売はお上手なのに、交渉は下手くそですよ」

「不慣れなもので」

所詮は商人の職業をとっているだけの一般人だ。新興企業の社長が初めから何でも上手くできては世界が成り立たない。俺は天才肌ではない。

「ジェシカちゃん……女の子が糞とか言っちゃ駄目よ」

「間違っていないもん」

「あの、わ、私がやりましょうか？」

年増の招き猫が挙手した。そうやって片手を上げていると、ますます招き猫化が進んでいるようだ。腕を組んで悩みながら彼女を凝視していると、恥ずかしいのかもじもじと足踏みをはじめ、隣にいたジェシカまで挙手した。

「あ、じゃあ、私がやります！」

どちらかと言えば、金貸しの血統であるジェシカに分があるように思えた。

「勝算は？」

「あります！」

「理由を教えてくださいませんか？」

「だめええ」

何回か問い詰めたが、両手を顔の前で交差させ、頑として動かなかった。彼女なりの企業秘密があるのだと思い、鍛冶工房で分かれた。

「あの、店長」

「社長と呼んでください」

「しゃ、シャチョーさん。私でも上手くいきそうでしたのに……」

「街を案内してもらうのに、彼女は騒がしいもので」

「ごもつともです……」

改めて街を歩くと、人間の姿は見え、ファンタジー 通行人の種族は空想剥き出しだ。純粹な疑問を訪ねる俺に、エルフ 森妖精は笑いながら教えてくれた。

「冒険者、商業、神殿やギルド、組合などにはいます。細かい仕事が可能ですから」

「そんなもんですかね」

訪れた肉屋のトロールは作業中だった。声をかけると、鮮血滴る出刃包丁を置いて応対してくれた。

先ほどのドワーフよろしく、魔獣たちの首級を並べ、信号機に見立てたトロールの顔色を青くしたり赤くしたりして暇を潰していると、交渉を終えたジェシカが駆けてきた。

「明日、ドワーフさんが来てくれるそうです！」

彼女は俺が思っていたよりも優秀だ。彼女の手腕に感心していると、放置されていたトロールが言った。俺にではなく、駆け寄ってきた小娘に。

「給料、いくらくれる？」

「必要な道具はありますか？」

「肉を調理する道具がいる。包丁などは揃っちゃいるが、燻製の木材が必要だ」

「他の店の交渉を手伝ってくれるなら、こっちで全部用意します」  
「乗ったあー！」

トロールが手を差し出し、ジェシカと握手を交わしている傍ら、積み木で出来たバベルの塔の足場材が消えた気分を味合わされた。

「ジェシカ、経費はそんなに——」

「やりましたね、店長！」

「よろしく頼むぜ、店長！」

「……社長と呼んでください」

吸血鬼も青ざめる満面の笑みに頭が痛くなった。



ジェシカの口車に乗せられ、トロールは交流のある店長たちを脅し、宥め、透かし、柔軟に懐柔してくれた。俺の店は従業員が増え、諸経費が出鱈目に積み上がり、倒壊せしめし塔の残骸が俺の背中に積み上がっていく。

銭ゲバ商会の看板は偽りだらけで、跳ねあがった人件費を考えただけで俺の顔は硬直し、愛想笑いさえ浮かばない。

エルフ、人間、俺の3人で回していた店に、肉屋のオーガとトロール、魚屋のシーリザードマン、果物屋のエルフの少年、資材調達のナーガまで加わり、雇用した彼らの店で使われていた家具は俺の店で流用された。

「オープン・ストリート・ストール  
《露店開設》」

「と、こうして店ができるわけです。出し入れは店長の自由自在なんです。凄いでしょ？」

「早く商品を並べてください」

「はい」

よく使い込まれた家具や、匂を迎える商品を設置して眺めたが、形だけなら老舗オープンカフェの様相を呈していた。

商品を並べただけで夜になってしまい、各々が好き勝手に野宿を始めた。早々に宿舎を作らなければならないが、今は二の次だ。本来、先立つべきものが手元がない。

俺は魔獣を警戒、迎撃する夜勤の合間、星空の下で今後の経費を考えなければならなかった。不慣れた作業は過剰に時間を浪費した。

やがて空が白み、太陽が天頂に差し掛かる青空の下、ようやく完成した計画表を眺めたが、商品個別の価格設定が今まで通りだと厳しい。料理の金額を高めに設定しなければ、当面どころか、まるで利益が出ない。素材に高値がつきそうな青空の竜王が戦闘を仕掛けてこ

ないかと蒼天に願ったが、天は青空の味方だろう。ドラゴンと鳥人には青空が良く似合う。

魔獣の死骸を冒険者ギルドで換金しても、俺とジェシカの人件費で消える。手っ取り早いのは、バフ効果を付属させたポーションの値上と、飲食物の値上げだ。

(評議国は手に入らないし……いつになったら大金を持って魔導国へ行けるんだ)

ため息を吐いて顔を上げると、ジェシカが至近距離で覗き込んでいた。

「距離が近いですね」

「心の距離を詰めたいと思っっていますの」

「余計なお世話です。ジェシカ、各々の取り扱っている商品を料理に使う場合、私たちが有料で買い取る形でなければなりません」

「でも、食事の経費は差し引いてもいいって言ってますよ」

「それとこれとは別です。彼らは自分の店を畳んでまで私の店に来てくれたのに、今まで以下の給料では厳しいでしょう」

「……まあ、そうですね」

「休日も与えなければなりません。空いている時間で、レストランの給仕も手伝ってもらいましょう。しかし、それは彼ら本来の仕事ではないので、働いてくれた時間に対して対価を支給しなければなりません。モチベーションの維持は上に立つ者が考えるべきことです」

「もちべえ？」

「やる気のことです」

彼女のやる気が依然として大気圏を目指している理由は謎だ。得体の知れない彼女に、俺は敬語がやめられない。彼女の顔を見る度、脳の奥で何かが俺を萎えさせていた。

「でもお、そんなにお金ばかり払っていたら、儲かりませんの……」

「雇った人間に給料を払わないわけにはいかないでしょう。誰があんな大量に、しかも同時に雇ったのですか？」

「えへへ……そんなに褒めないください」

「少しも褒めていません。あなたのお陰で、私たちは責任を取ってタ

ダ働きです。給料はありませんよ」

「ええーそんなあ……」

「人件費以外にもどんな経費が掛かるのかわかりません。魚担当のシーリザードマンは海まで行かなければ仕入れができません。往復するだけで1日が潰れるでしょう。そちらに加え、魔獣の素材を売りに行くのにも護衛が必要です。生活魔法だって、彼らの使える魔法は限られています。無駄遣いはできません」

先日のお礼参りとばかり、俺は機関銃のような言葉でジェシカを撃ち殺した。死体には沈黙こそ相応しいのだが、彼女は頑丈だった。

「それでは！ 私のお給料は口づけ一回でいかがで——」

「その口、接着剤で塞いであげましょうか？ この表を見ても同じく元気でいられますか？」

俺は簡単な貸借対照表を作って見せてやったが、異世界では数字の形が違うらしく、まずその説明からしなければならなかった。口を動かし過ぎて乾いた口腔から砂が出るかと思った。

異文化交流に手間取った挙句の果て、前日から引き続き、夜勤は寝不足で来客の応対をしなければならなかった。

朝陽が見えたので小休止しようとその場に横になった。少し横になるはずが、体がヘッドロのように溶けていき、意識は一瞬の緩みでドロ沼の底まで沈んだ。

あくまで体感的にだが、意識はすぐに呼び戻された。

太陽の位置が大きく変わっているので、半日は寝ていたのだろう。体を起こすと、俺の体に掛けてあった毛布がめくれた。食欲をそそる匂いが俺の意識に石を投げ、波紋は体の奥から広がっていく。

三大欲求の食欲には勝てず、少しだけ眠って満たされた睡魔は、悪霊よろしく退散させられた。

「つまり、手の空いた時間でレストランを手伝って欲しいんです。主な仕事はできた料理を運んだり、野菜や果物の皮を剥いたりです。時間に応じて相応の給料を払います。次に料理ですが、肉を焼くときはこうやって、炎を弱くして蓋をし——」

キッチンではジェシカが異形種へ指示を出していた。全員、異形種

なりの真面目な顔で彼女の話を聞いていた。

「おはようございます」

「あ、おはようございます！ 遅いですけど、朝食、食べますか？」  
「お願いします」

「座って待っていてください。みんな、店長さんの相手は私がやりま  
すからね！ これは絶対の法ですから！ 破ったら鞭で百叩きです  
！」

「社長と呼んでください」

「わかりました、シャチョーさん」

それにしても、無国籍な、無節操な店舗になったものだ。オーガと  
トロールは食人種のはずだが、ジェシカに対してなんら関心を示すこ  
とがない。

種族の違いによる軋轢に思いをはせていると、目の前に料理が置か  
れた。

「はい！ いつもの朝食です！」

見慣れた香ばしいベーコン、目玉焼き、パン、牛乳が並べられた。

「トロールは食人種ではないのですか？」

「うふふ、おかしなことを聞きますわね。私たちだって、家畜にする牛  
や豚を愛玩動物として愛することもありますし、見境なしに殺すなん  
てしませんわ。話せばわかりますけど、気さくな御二人ですよ」

「強者の余裕でしょうか」

「あ、でも、エルフさんたちは仲が悪いみたいです。果物屋さんの少年  
エルフさんは、薬師のエルフさんをクソババアって言っていました。ト  
ロールさんは蛇さんが苦手みたいです。なんでも、別の場所での遺恨  
がなんとかって」

どうやら店内の人間関係でも頭を悩ませなければならぬらしい。  
「こうやってみんなで楽しく店ができるのも、音改様のお陰なんです。  
尊敬しています。そろそろ私をお嫁さ——」

「憧れや尊敬は、相手と一線を引く感情です。憧れてるうちは、何が  
あっても相手を越えられませんよ」

「……わかりました、社長」

これまでの彼女らしくない、信仰する神へ祈りを捧げるような顔をしていた。俗物だった表情が悟りを開いた顔へ早変わりする芸のようだ。彼女が黙っているのをいいことに、俺は食事を始めた。

まだ睡魔は俺の後頭部付近を隙あらばと狙っていた。適当に食べてからまた眠ろうと思ったが、気違い沙汰の旨さに全て食べてしまった。

恐ろしい娘だ。

「ジェシカ、随分、腕を上げましたね。とても美味しかったです」

「え？ えへへ……いい奥さんになれますか？」

「無理でしょうが、どうやって焼いたのか興味があります。ベーコンなんて、フライパンで適当に焼いただけではないのですか」

「いやですわ、もう。料理はそんなに簡単ではありませんのよ。それが夫に出す愛妻料理であれば！」

「前置きは結構です」

「つれないです……香ばしくするにはベーコン独自の脂で蒸すように仕上げないといけません。卵だって、弱火で少しも目を離さずに焼かないと、全体がふっくら仕上がりにません。互いの相性が殺し合ってしまえますので」

「焼き方を教えてくれますか？」

「はい！ 夫婦初めての共同作業ですわ！」

「そういうのは結構です」

俺はジェシカに案内されてキッチンへ入った。つまみを捻ると炎が出るアイテムにフライパンを乗せて軽く熱してから、薄切りのベーコンを二枚並べた。

突然、俺の意識が途絶えた。

復帰したとき、炭化したベーコンが怒りの炎を上げていた。状況が分からず、黒煙にむせ返りながら戸惑っていると、ジェシカがバケツの水をぶっかけ、キッチンは水浸しになった。

「……何が起きたんでしょうか」

「……片づけないといけませんわね」

「はい……」



どうやら料理は職業に料理人が無いと駄目のようだ。しばらくはジェシカがやってくれるが、長い目で見ると料理人が多くないと辛い。今後の主力商品は彼女を料理長とする食事だ。

その後、焦げ付きの残るフライパンを手に何度か試みたが、その都度、俺の意識は失われた。傍らに置かれた皿には、失敗作の消し炭が積み上げられていた。

「それ、どうなさるのですか？」

「……食べますよ。もったいないので」

この日、俺の食事は真っ黒い炭だった。

過度のストレスで死んでもおかしくなかったが、俺は元気なままだった。



文化の違いによる軋轢は俺だけの問題で、店は問題なく回っていった。

全員参加の会議にて、肉屋は魔獣の解体と仕入れ時の護衛。他の店長は仕入れと、魔獣の死体を組合へ引き取らせ、金貨を持ち帰る。俺は魔獣の討伐と、薬師へポーシヨン作成の指導、ジェシカは賄いと料理人。ドワーフは魔獣の素材を作って武器の販売。蛇は木材の調達へ森に出向く。森妖精<sup>エルフ</sup>同士は年齢差が激しいので相性が悪く、決して同じシフトで仕事をさせない。

この法則<sup>ルール</sup>で10日ほど店を回した結果、客足は順調に増えた。

評議国の見える場所に陣取り、客寄せに料理の匂いを漂わせる商店は、弱肉強食の魔獣が現れる評議国の草原にタケノコのように飛び出したオアシスとなった。魔獣に追われて逃げ込んでくる商人や、冒険者・ワーカーの補給に一役買った。集まってくる魔獣は俺の手で惨殺され、店の裏で肉屋に解体され、料理の材料にされた。

そうした経緯から、魔獣の肉を評議国内よりも安く買える事実に加え、青空の竜王相手に一步も引かない店長がいる店と、全くもって有難くない荣誉までいただき、客足は十分に増えていた。道中、魔獣に

襲われてもこの店に逃げ込めばいいのだ。

従業員への賄い食を好みによって作り分け、ジェシカは着実に料理の経験値を貯蓄し、今では一介の料理人に近い。

そろそろ俺とジェシカの人件費を考慮すべきかと考えたころ、一人の老婆が店を訪れた。

夜行性の魔獣の襲来に備え、昼間は睡眠に集中していた俺は、老婆の要望で叩き起こされた。寝惚け眼で席に座らされると、対面に黒いローブを着た老婆が食事をしていた。

「お前さんがここの店主かい？」

「ええ、そうです」

「気持よく寝ていたところすまんおう。お嬢ちゃんに無理を言って相席させてもらったわ。それにしても、ここの飯は旨いわい」

「看板商品ですからね」

「魔導国の宮廷前の食事ほどではないが、それに迫るものがあるな」

「はあ、そうなんですか？」

「知らんのか？」

「まだ魔導国には行ったことがないもので。あなたとこのような議論をすると知っていけば、先にあちらへ顔を出したでしょうね」

「そいつあ、残念じゃな」

しばらく無為な沈黙が続いた。俺が相手の意図を探りながら料理に舌鼓を打っていると、店内の客が捌け、俺たちだけになってから老婆の雰囲気が変わった。鋭い目つきは、これまでみた誰よりも高レベル者であると感じさせた。

「お前さん、何が狙いじゃ」

「はい？」

「魔導王、アインズ・ウール・ゴウンの友人と聞いたがの」

「そうですよ」

俺はこともなげに言った。

「確かに、私はアインズ・ウール・ゴウンの1人です」

「情報通りじゃな。100年の揺り返し、ユグドラシルからこちらに流れてくるプレイヤー……今回はアインズ・ウール・ゴウンと41人

の神々か。しかし、こうも時期をずらして来られると、こちらも困るわい」

「神々……？」

俺は寒空の下で浮かべるような笑顔を作った。心なしか口端が引き攣っていた。

「歓迎パーティを頼んだ覚えはありませんし、老婆に知り合いはいませんがね」

「ろ……無粋な男じゃな。あそこの嬢ちゃんに見切りをつけられるぞ」

「願ってもないことです。是非、そうしていただきたい」

「それにしても、全員が武闘派だと思っておったが、商売の神までおつたとは」

どこの誰がそんなデマを流したか気になった。異世界転移して神を名乗るなど、中二病も甚だしく、社会人なのに恥ずかしくないのだろうか。

「勘違いしていますよ。元人間が神なんて傲慢でしょう。私はただの商人です」

「その元人間というのが厄介なんじゃ。人間が力を持つと碌なことをせんわい。世界に協力するならともかく、今のあんたは評議国を乱そうと企んでいるようにしか思えん。順調に売り上げを伸ばしているあんたの店の処遇じゃが、議会で議論が白熱している。面倒事は金にならんぞ」

「そうでしょうね」

リグリッドと名乗った老婆は、俺の心を透かして見ようとしていたが、俺はポーカーフェイスを貫いた。

「……しかし、本当に異形種41人で構成されとるギルドとやらがあるんじゃな。あそこの嬢ちゃん、嫁にでもするのかねえ」

「元人間なのでそうなってもおかしくありませんが、今は仕事が全てです。働かないと生きていけませんよ」

「そこじゃよ、わしがもつとも聞きたいことは」

彼女は挑むような目になって身を乗り出した。

「魔導王がおわす魔導国へいけば、働かなくても生きて行ける。なぜ評議国で大騒ぎを起こし、なおも居座ろうとするのじゃ」

永久評議員の竜王5体は、よほど強者が疎ましいらしい。竜族特有の傲慢も影響し、俺がここで売り上げを伸ばすことが耐えられないのだろう。だから竜王の誰かが彼女に使者を頼んだ。

「そんなところではありませんか？」

「……御見通しじゃったか。傲慢が理由ではないがな」

「出て行くのはやぶさかではありませんがね。議会に最も強い影響力のある竜王と合わせてほしい。それがあなたの御友人であれば有難いのですが」

「勝手に話を進めるのは気に入らんがのう。儂の思惑と一致しておる。評議国に落とされたので、商人の職業特性を生かして小遣い稼ぎでもしている商売の神には、早々とご退場願いたいのがのう」

「管理された商売など、品質が低下する一方ですよ」

俺は嗤った。

「やはり、お前さんは怪しいわい。近いうちに、わしの友人、白金の竜王が訪れる。それまでに悪巧みに見切りをつけておくんじやな」

リグリッドは立ち上がったが、俺は食事に戻った。地味な色のスカートを振り乱し、ジェシカが駆けてきた。

「あ、リグリッドさん！ もうお帰りですか？」

「ああ、嬢ちゃん。また来るわい、今日は挨拶だけじゃからな」

「ええー……もつとゆっくりしていけばいいのにい」

「今度はゆつくり来るから、落ち込むんじゃないぞ。美人が台無しじゃ」

「えへへ……」

「この嬢ちゃんを不幸にしたら承知せんぞ」

「……私が不幸になりそうです」

未だに、俺の給料は金貨1枚程度しか出ていないのだ。考えることが多すぎて、ここしばらく安眠とはご無沙汰だ。

「お嬢ちゃん、この男と結婚するのは止めておきなされ」

「ええー、でもお」

「男を見る目は経験が養うんじや。年寄りの言うことは聞いても損はないわい」

「私たちの恋は無敵です!」

「……それは本物の恋なのかのう」

妙に二人の仲は良かった。

それから、リグリッドは数日おきに店を訪れた。大抵、訪れるのは昼間で、夜勤で疲れている俺と会うことはなかったが、ジェシカは逐一、報告してくれた。

「それで、魔導国では護衛アンデッドが高値でアンデッドが販売されているそうです。リグリッドさんも死霊使いらしいんですけど、そおうるいいたー? とかは難しいみたいでえ」

「いくらですか?」

「え?」

「だから、ソウルイーターはいくらですか?」

「そこまでは知りませんの」

「次、リグリッドさんが来たら聞いておいてください」

「これで社長も楽ができますね」

「金額次第でしょう。あまりに高値だと、今の売り上げでは払えませんからね」

「リグリッドさんも、たまには留守番くらいは引き受けてくれるそうです! 頼んでみましょうよ! そして私と遊びに行きま——」

「金にならないので、遠慮します」

最強の竜王が訪れないまま、ひと月が経過しようとしていた。退屈な割に苦悩が多い零細企業の代表取締役の精神疲労は限界で、伸び切ったゴムが千切れる寸前まで神経をすり減らされた。



暗闇に目を凝らし、そこへ佇む人影を発見するのは気持ちの良いものではない。ぼんやりと店番をしていると、何かが光った。暗がりを目を凝らすと、闇を切り裂く白銀の全身鎧が訪れた。

「虹色の忠告もたまには従ってみるものだね。君がネラワレタかい？」

「私は音改です」

値が張りそうな鎧が俺の目を眩ませた。竜を模した装飾が施されており、それだけでも高価なアクセサリーとして販売ができるだろう。無表情を取り繕うと思っただが、眼球が凍り付いたように目が閉じなかった。

「リグリッドに聞いたよ。君が評議国を荒らしているプレイヤーだね」

「最強の竜王だと聞いていましたが」

「君たちと比べると嫌味にしかないよ。最強かはわからないが、白金の竜王は私だ」

「そうですか。食事は済ませましたか？　ウチの食事は美味しいですよ」

「気遣いは悪いのだけど、この体は食事ができない。すぐに本題に入りたい。君が思っているよりも、事態は切迫しているのですね」

竜王の化身は椅子に腰かけた。店内にはエルフの給仕と俺たちしかいない。密談にはうってつけた。

「君が立ち退きに応じるつもりがないので、魔導国に直談判へ行くべきかと意見が出ている。私としても、アインズ・ウール・ゴウンと――」

「アインズ・ウール・ゴウンではなく、モモンガさんですよね？」

「ああ、そちらの名前の方が良かったかい？　新たな仲間を得て戦力を爆発的に増強した彼らと、事を構えるのは避けたい。君たちの武力は世界の調和を乱すからね」

「おかげで、この店の鍛冶屋は腕を上げましたよ。今なら竜王でも倒せそうです」

あれほど嫌がっていた投てき武器でさえ、はぐれドワーフはジェシカの一声で作ってくれた。理由を聞いたが、照れくさそうに笑って誤魔化された。その甲斐あって、不意打ちを仕掛ければ高値の鎧を小分に分断できそうだ。

「ところで、その鎧の中身は竜がすし詰めになっているのですか？」  
「これは私が遠隔操作しているに過ぎない。君との交戦を考慮してね」

「それは物騒ですね」

「これは君個人の問題ではない。魔導国と評議国の国際問題にすり替わろうとしている。竜王国でも何かが起きているようで、そちらも気になるところだが、大方、君たちの仲間がそちらに転移したのだろうか？」

「……それは知りませんでした」

反射的に首を傾げた。

「音改、私たちは八欲王の血みどろな紛争を避けたいと考えている。これは評議会に名を連ねる竜王の総意だ。あの戦争は竜族が絶滅する覚悟を決めたからね。しかも、今度の相手はアインズ・ウール・ゴウンだ。彼は何かがあっても、仲間に出した者を許さない」

傾げた首の角度がさらに大きくなった。

「仲間たちと会う日を心待ちにしている穏健派の彼と、その仲間が原因で戦争するのはあまりに悲しく、無駄ではないだろうか」

「そこまで仲間同士の絆という、一文にもならないものに拘る性格だっただろうか。ギルドマスターと仲が良い順位表では、俺は下位に分類されるが、そんな性格だった記憶もなく、話しも聞かない。」

「覚えがありませんが……」

「ここで小遣いを稼がなくても、君たちの拠点には十分な財宝があるだろう。君がここにいる以上、評議国の相場が乱れ、国内の治安情勢まで波紋が及ぶ」

「竜王にとって都合の良い法律を決めるのが評議会なのでしょう？」

それはつまり、平和で都合がいいなら退化しても構わないという意味ですよ。意にそぐわぬ者は追放し、残るのは竜王の意見にNOと言えない都合の良い種族だ」

白銀の右手が剣にかかったのが見えたので、俺も輪っか状の投てき武器を指でくるくると回した。互いの声は穏やかであったが、一触即発だ。

「君は八欲王の最悪さを知らないからそう言える。彼らは本当に最悪だった。人間の醜いところ、汚いところ、罪深いところ、全てを鍋にぶち込んで煮込んだような連中だった。どれほどの竜王、眷属が素材に利用されたことか。二度と悲劇を繰り返さぬよう、守られるべき世界というものがなければならぬ」

「欲望こそ、技術を進化させるために必要不可欠なエッセンスです。あれがほしい、これがほしい、あれがやりたい、こうなりたいと思い、必要な手段として金を欲しがるからこそ、技術は進歩していく。だから評議国の食品と技術は生温いんじゃないやありませんか？」

「生温い……君は金がほしいだけだろう？」

「文句があるなら、金なんて捨てて生き抜いてください。事実、この店の商品は国内で生産しているものより質が上がっている」

「モモンガは世界征服など望んでいない。君や、他の仲間たちと再会することだけを願っているのに……41人も多種多様な者がいるのだね」

「資金力は可能性です。金がなければ道は狭まり、選べる選択肢も急に減る。そんなこともわからないで竜王とは、いかにも傲慢な竜族に相応しいですね」

「……君の種族は……悪魔か？」

口角を吊り上げた歪んだ笑みを浮かべ、俺は身を乗り出した。

「NO。私は守銭奴です。そしてあなたは、自らに都合よく調律されたドールハウスを管理するドラゴンだ。どちらが、より悪魔らしいでしょうか」

「……ここで君を、殺してしまう選択肢もある。モモンガには、君の存在を永遠に隠匿すればいい」

「なるほど、いかにも自分が最強であると思いがった種族に相応しい判断だ。私は自分の命に執着などありませんが、やるのなら抵抗させていただきます。ただでは死にませんよ」

「どうしてわかってくれないのだ……。君がこの国から出て行きさえすれば、評議国と魔導国の平和が守られるというのに……」

俺はたつぷりと間を空けて、悩んでいる姿を見せつけた。ここまで



こぎつけるのに、どれだけ退屈な時間を浪費したのかわからない。費用対効果は最悪だが、俺の機嫌は良くなった。

「確かに、戦うのは余計な損失を出しますから、私として避けたいのですが……こちらの出す条件を呑んでもらえますか？ 約束を必ず守るのなら、それで私は評議国から永久追放されます」

「……聞かせてほしい」

「聞くだけなら無料ですからね」

「悪いけど、嫌味は聞き飽きているんだ。魔導国の王都には君よりも知性の高く、嫌味が天才的に上手い変態がいたからね。それで、君の望む条件とは？」

「商業ギルドの撤廃、及び私の推薦する者を評議員に推薦。それが私の条件です」

白銀は全身鎧なので、表情はわからない。しかし、体全体を覆う空気が産業廃棄物で汚染された沼地から漂うものに似ていた。うっかり素手で触ると八つ当たりされかねないほど困っていた。

「商業ギルドはすぐに撤廃する。あれはまだ実験段階で、君の言う通り、評判が悪かったからね。しかし、評議員とは……簡単に言ってくれる。人間のような——」

「ほら、やはり傲慢だったでしょう？」

「……考える時間をくれないか？」

「我々がこれ以上、力をつける前に結論をお願いしますよ」

俺は嗤い、立ち去る白銀を見送ろうと店の前に立った。数歩だけ歩いてから、白銀は振り返った。

「それから、勘違いをしないでもらいたい。こんな店、武力行使しようと思えば、君に悟られることなく消し飛ばせる。話し合いで済まそうとしているのは、野蠻で愚かな人間ではない君へ、最大限の敬意を示したつもりだよ」

「それには感謝します。この店には、無力な亜人、人間もいますから」  
「竜族は全体で見れば傲慢かもしれない。しかし、悠久を生き永らえ、知恵をつけるに従って欲望を律し、世界のあるべき姿を守ろうとする。もちろん、個々の意見は食い違う場合もあるが、世界の調和を乱

し、混沌を呼ぶプレイヤーへ好感情を抱くものはいない」

白金は少し間を空けた。

「だから我々はこう呼ばれるのだよ」

「竜王と」



翌日の夜、日勤と夜勤が後退する前に会議を行なった。議題は当然、俺の追放による従業員の行き先だ。ジェシカは評議員となり、時間をかけて議会へ根を張り、この店の従業員を陥落させたときと同様、評議員たちへ取り入ってもらわなければならない。評議員は手に入らなかったが、評議員と強いパイプが手土産なら十分だろう。

「私からは以上です」

説明を終えたが、誰も口を開かなかった。重苦しい沈黙の中、幾重にも重ねて語られるのは店じまいという俺の指示のみ。

「これ以降、商業ギルドに税を納める必要がなくなります。全員、同じ場所で商売をしても、前より利益が出るでしょう。これで店を閉め、皆が同じ場所で前と同じ生活を送るわけです。ジェシカは評議員になって、魔導国や商売に都合の良く適宜をはか——」

ジェシカが会議用テーブルを叩いて立ち上がった。

「お断りします!」

「ジェシカ……?」

「お断りします!」

「一体、どうし——」

「お! こ! と! わ! り! します!」

彼女は手負いの獣のように怒っていた。その鋭い目つきも、剥いた牙も、俺の知る彼女にできるようなものではなく、内側のある殺意にも似た獣性をそのまま顔に剥き出していた。

「私の目的は、ずっとこの店を続けることです! そんなに出て行きたいなら、勝手に出て行けばいいでしょう」

明らかに俺よりレベルが低い人間の小娘に、口が挟めずにいた。

「そうでしょう、みんな！」

俺たちが雇われ亜人種の顔を右から左へ見渡すと、皆が露骨に目線を逸らした。彼らの返事はそれだけで分かった。

「……すみませんが、なぜそうなるのですか？ この店でやっていても、この先、大した利益はできませんよ？」

「だって、楽しいじゃないですか！ みんな、それなりに満足しているんですよ。私たちを雇ってにおいて、後は勝手にしろなんて、あまりに冷酷じゃありませんか！」

「それがみんなのためにな——」

「余計なお世話です！」

埒が明かず、俺は交渉先を変えた。

「ドワーフさん。あなたは確か、評議国を敵に回したくないと、仰ってましたよね？」

「あ、ああ、いやー……嬢ちゃんの飯を食って、気楽に商売をするのもええかもしれんと、思つとるがの」

「薬師のエルフさんは腕を上げた。新たに店を構えた方がいいと思いますが」

「ええ？ でもお……ジエシカちゃんが心配というかあ……」

「魚の仕入れはここでは不便でしょう」

「あ、その……今のところ、不都合はありません、店長」

「……資材の調達も、森から遠すぎるのでは？」

「蛇なもので」

などとどれもこれも似たようなもので、この店が楽しいからもっと続けさせてほしいと、形や量を変えても意見は一致していた。

「意味が分かりません」

「本当にわかりませんか？」

「わかりませんね。金になる道を捨て、なぜこの店の存続を選ぶのですか。仮に、楽しいからという理由だとして、ジエシカはなぜ評議員になるのを拒むのでしょうか」

「だって、金にならないじゃありませんか」

「この店を続けるにせよ、辞めるにせよ、評議員になれば都合がいいと

「思いますが」

「大事なのは店の存続です。今、皆が放り出されてしまえば、職を失ってしまいます。もう、音改さんは必要ありません」

「彼女と同じ意見の者は拳手してください」

テーブルを囲んだ多種多様な亜人は、皆が天の岩戸並みに口を閉ざしているが、満場一致で手が上がった。既にここまで根回しを終えていたらしく、彼女はさも当然とばかりに頷き、俺を正面から見据えた。挑むような視線は、ふざけていた彼女よりも美しく感じた。

ここは代表取締役の俺が作り上げた総合商店だ。腹立たしく思わないわけがなく、俺の頭に浮かび上がったのは同じような企業を作り、吸収合併する手段と、もう一つ。

「今この場で、ジェシカの首を刎ねることもできる。それどころか、皆殺しにして他の人間に首を挿げ替えることもできる。それでも俺に刃向かうのか？」

「うふふ……音改様、やっと気色悪い他人行儀を止めてくださいましたね」

「……今はそんな話をしていない。ジェシカを裏切り者として処断し、見せしめに死体を張りつけにすることも、俺には躊躇いなくできる」

「音改様の作ったこの店が大好きだから……みんなで協力して楽しく仕事をしたいからです。それでも私を殺すなら、それで構いません。リグリッドさんの言う通り、私を見る目が無かったんです」

脅しは通じない。彼女は俺の内心を俺よりもわかっているかもしれない。吸収合併も恫喝も、現実で権力を握っている企業と同じやり方で、実際に試そうとは思わない。まんまと店を乗っ取られる流れだが、不思議と怒りは沸いてこない。

「もう少し、賢いと思っていたよ」

「だって、そうでもしないと追いつけないじゃありませんか」

「誰に？」

「あなたに」

俺が感じたのは彼女への称賛だ。

これまで彼女は、天然娘で俺を慕う演技を続けながら、店を軌道に乗せてから自分が手に入れる算段を考えていたに違いない。この時に向け、鋭い牙をより鋭く研ぎながら。彼女の父親が言っていた、手負いの獣という意味が分かった。

守銭奴が最も嫌うのは、金にならない慈善事業や、何も生み出さない博愛主義だ。彼女こそ、金貸しを始めた祖父の血を受け継ぐシャイロツクの後継者に相応しい。シェイクスピアが聞けば、さぞ感涙にむせぶことだろう。

「私の、負けですね……」

ジェシカを除いた全員が安堵の息を吐いた。

「音改さま。勝敗は初めから決しています。全ての勝利は音改さまのお膳立てがあつてこそなんですわ。交渉が上手くいったのだから、私の力じゃありません。全部、これまでの全部！丸つと全てが、音改様がみんなに嫌われるような交渉をしたからこそ、私が付け入ることができましたの」

「ああ、そうか……優しい刑事怖い刑事って奴か」

「……時々、わからないことを仰るのですね。この世界の御方ではないのですか？」

「ええ、地獄から逃げてきた逃亡者ですからね」

だから俺は、彼らを信用していなかった。もしかすると、初めから自分を上位の立場に置いていたのかもしれない。自覚はなかったし、粗雑な扱いを心掛けた覚えはないが、彼女に対して俺は冷たかった。敬語がやめられなかったのは、その証左だ。

敗因を探るとすれば、それだろう。

「今は幸せですか？」

「幸せではないでしょう。店を乗っ取られたから」

「……本当に、ごめんなさい」

彼女は頭を深く下げた。

その姿は、俺を神格化する敬虔な信徒でありながら、己が神を越えようとする不遜な使徒でもあった。

「はあ……ジェシカ、銭ゲバはただの主義です。しかし、極めれば宗教

に相違ない。神はどこにもいませんが、あなたは立派な拝金主義の女性だ。一人の管理者として、強者に刃向かってでも店と従業員を守ろうとしている」

「はい、社長」

「商売は結果が全て。商売は夢を見てはいけないと、お父さんも言っていたでしょう。私を上手く扱いながら、影で根回しする手腕は称賛に値する。今後、私が消えるとして、魔獣の相手は誰がやるのですか？」

「あ……えへへ、実は、リグリッドさんが暇潰しにしばらくいてくれるそうです。儲かったら金貨で護衛のアンデッドを買ってきてくれるそうです」

そんなことだろうとは思った。

老婆との初対面こそ竜王の指示だっただろうが、それ以後も顔を出しているのは損得勘定ではあるまい。金で動かない人間を取り込める社長は強い。一見して博愛主義に近いが、実のところ金以外の何かで動く者を手に入れた彼女は、これから更に力を増すはずだ。

「ジェシカ、最後にあなたを試したいのですが」

「はいー」

衆人環視の最中、俺は立ち上がって彼女の隣に跪いた。ゆつくりと顔を上げ、彼女の手を優しく取り、目を見て真剣な表情を作った。

「私と結婚してくれませんか」

「お断りします」

「なぜですか？」

「だって……お金になりませんもの」

「ぷっ……くく、くくっ、ははは！ あっははははー！」

俺は笑った。

こんなに腹の底から笑ったのは初めてだった。

商店には俺の笑い声が響き渡り、全員が黙ってそれを聞いていた。「合格です、ジェシカ。あなたは見事な拝金主義者です。この店は任せますので、後は好きにしてください。私は予定通り、魔導国へ行きます。評議員にはあなたのお父さんか、あるいは話そのものを無かつ

たことにしておきましょう」

「評議員の件、ごめんなさい。あと、結婚も断ってしまつてごめんなさい……」

表情の転がりを見る限り、前者に未練はないが、後者にはありそうな顔だった。だが、その手には乗らない。愛で俺を繋ぎとめようとしても無駄だ。

「拝金主義と決めたものが、規則を中途半端に捻じ曲げてはいけませんよ。大企業の頂点は心や感情を捨てるべきだ。人間性を捨ててこそ、多くの人間・亜人を養える」

「音改様！　今まで、ありがとうございますあ！」

《ありがとうございますあ！》

全員が立ち上がり、折り目よいお辞儀をしてくれた。雲丹のように脳へ居座つて気分を萎えさせていた何かが弾けたのが分かった。

「俺は何もしていない。君たちが勝手に頑張っただけだ」

「そうですね！　ちよつと安く買つて高く打っただけで！」

「たまには遊びにこい、若造！　投てき武器を作つて待つとるぞ！」

「うう、買つてくださるようなポジションを作りますう……」

「ババアが涙ぐんでんじゃねえよ……可愛くねえぞ」

まるで定年退職する老人に向けた激励だ。馴れ合いには慣れていないので、早々に打ち切らせてもらった。俺は涙ぐむジエシカの頭を撫でた。

「不慣れな独裁社長についてきてくれてありがとう。あとはお任せるけど、困ったら魔導国まで来るといい」

「ネアラタさまあ……グスッ」

「それから、明日の朝食は、いつものベーコンと卵とパンにしてください。ここで食べる最後の朝食ですから」

「つ……うああああん！」

俺を裏切った小娘は、涙を流して俺に抱き着いた。迷子になって泣き喚く幼児をあやすように、俺は裏切り者の肩を優しく撫でてやった。

しかし、俺を拾ったのが彼女の父、いわゆる人間だったからこそこ

うやって楽しめたが、食人種に拾われていたらどうなっていたらだろうか。

俺は彼女を殺しただろうか……。

夜勤中、哲学的な悩みに答えを出してくれるゼノンはいない。俺が追放される最後の夜、仕事に取り掛かった。

異世界をこんな楽しめるとは思わなかった。



翌日、話を聞いた白銀は悶絶した。

「とういうわけなんだ、白金の竜王さん。評議員にはシャイロック氏を推薦するけど、彼が辞退したら無かったことにしてくれて構わないよ」

「名乗るのが遅れたが、私はツアインドルクⅡヴァイシオンだ。ツアーと呼んで構わないよ。モモンガもそう呼んでくれている」

「ツアー、そんなわけで、店はこのまま残ることになった」

「うーん……いや、そんな……うーん……困るよ、そんなこと……こんな」

「元を正せば、リグリッドさんが彼女と仲良くなった件にも原因はあると思うけどね」

「……それを言われると弱い」

頼んだ相手を間違えたと言わんばかりに頭が下がった。

「俺がいなくなれば相場が破壊されることはないから」

「そうかい?」

「保証するよ、俺が」

「……この前と雰囲気が違うね、君は」

「部下に裏切られ、一文無しで放り出される貧乏人に相応しいと思うけどね」

「こう言っては失礼かもしれないが、悪徳プレイヤーには相応しい末路だ」



「よほど、プレイヤーが嫌いなんだね。それに、俺は満足しているよ。彼女はやつと、自分が自分らしく振る舞える居場所を手に入れたんだ。俺を踏み台にしてね」

俺は敬語が話せなくなっていた。どうやら、やつと異世界という舞台上に降り立ったようだ。裏切られた末、追い出されたのだから扱いの悪さに何も思わないでもない。思い起こせば、彼の父親も水を吐き出させるために俺の腹を蹴飛ばしていた。扱いの悪さは父親似なのだろう。彼女が他者を粗雑に扱う独裁的手腕を振るい、ユダのように頭から真つ逆さまに墜落して内臓をばら撒かないか心配だ。

白金の手配してくれた馬車に乗るとき、俺は振り返らなかった。全員が手を振って俺との別れを名残惜しんでくれているが、立ち去る敗残兵に言葉は必要ない。

「挨拶はしないのかい？」

「朝食を食べたからもういいんだよ」

俺に刺激されて育った野心と理想のため、恩人の俺を体よく利用しながら礎にした彼女は立派だ。錢ゲバ商会はあの場所ですばらく名を売り続けるだろう。護衛はリグリッドが何とかしてくれるし、放っておいても流れの強者が専属の用心棒となり、評議国と魔導国の中継場所として栄えていく。いずれ、あそこに小さな都市ができてしまいかもしれないが、俺には関係ないことだ。あとは議会在勝手に決めればいい。

「厄介な火種を残してくれたね」

「俺のせいじゃない」

「君は……彼女が好きなのだと思いますよ」

「語るのが白銀なら、黙るのは黄金だよ、ツアー」

「君も面倒な性格だね」

「アインズ・ウール・ゴウンの41人に、素直な人間はいないよ。モモンガさんくらいじゃないかな？」

「……」

新しい入れ歯が合わない老人のように、モゴモゴと言ってから静かになった。彼は黙って座っていると、生きているのか、死んでいるのか

か、眠っているのか分からない。

「ところで、モモンガさんは何か困ってないかな？」

「評議国を支配するつもりはないよ」

「それはもうわかったよ。たとえば、金が足りないとか、国の維持がで  
きないとか、貿易が赤字とか」

「そう……だね。王宮の執務室で、ナザリックの維持費に頭を悩ませ  
ていたな。黒と桃色のスライム、バードマンも一緒に困っていたよ」  
「それは楽しみですね」

俺に求められているのは、ナザリックの維持費対策だ。それがあや  
ふやな状況で正義・悪が降臨して世界を巻き込む大喧嘩をしたり、墮  
天使がやりたい放題に暴れ回って大損害を出すのは最悪だ。弁済は  
全てナザリックがやる羽目になる。

モモンガさんと仲の良かったギルド創設に関わっている最初の9  
人や、正義や悪を差し置いて、こんなに早く呼ばれた理由がわかった。  
それにしても、ナザリック地下大墳墓まであるとは思わなかった。  
先に知っていればさっさと合流したが、今となつては無駄な妄想だ  
し、結果的に一人の女性を導き、評議国を支配する取っ掛かりになる  
火種を置いてきた。

あとはモモンガさんと相談し、ゆっくりと世界を征服しよう。

ウルベルトさんと会う日を待ちながら。

誰かが後を押すように、風向きは追い風だ。

馬車の窓を開くと、緑の匂いがする風が舞い込んだ。

「綺麗な世界だ……。俗悪な人間に汚されたくない気持ちもわかる  
よ」

「部下に裏切られて店を取られたのに楽しそうだね」

「今の俺は、一文無しの貧乏人だからね。何も持たない方が自由に楽  
しいよ」

俺はモモンガさんのように、成り上がって楽しいとは思わない。

たまには彼らの様子を見に来よう。

魔導国で、新たに複合企業を作るのもいいだろう。

ジェシカのように若い才能を育て上げ、また誰かを導くのも面白

い。

デスペナを食らってレベルを下げ、生産魔法の勉強をするのも楽しそうだ。

維持費に貢献しながらナザリックでのんびり過ごし、隠居生活をするのも悪くない。

魔導国に着いてから真っ先に行うべきは、下らない勘違いをして合流が遅れた件をモモンガさんに謝らなくては。

「ツアー、魔導国には面白そうな人間はいた？」

「人間とは交流がないな。フロスト・ドラゴンロードの息子があそこで議員をやっているよ。他にも、他国から寄せ集めた人間が議員だそうだ。評議国を見習ったんだと、モモンガが嬉しそうに話していたよ」

「それは面白そうだね」

「あの国には竜王が、私を含めて4体もいる。配下ではなく、知恵を借りる友人としてね。その中でも七彩の竜王、虹色と呼ばれているが、彼は人間と結婚している変態だ。今は自分の国に戻っているが、機会が合えば会おうといい」

「噂の賢いドラゴンだね。やることが多くて忙しいな」

まったく、貧乏人は忙しく、そして楽しいものだな。

## 真・異形編

この子の七つのお祝いに

神はいつでも公平に機会を与えて下さる。

——アルベルト・アイ

ンシュタイン

立ち昇る紅茶からは湯気が立ち上り、芳醇な香りを狭い室内へ満たしている。

「エピグラフにアインシュタインを引用する君の人格形成を俺は心底疑っている」

眼鏡をかけた神経質そうな男が、対面に座る細身の男に言い放った。細身の男は項垂れて、反論もない様子だった。

「大人になるとは何だと思うね」

「はあ……さあ」

「はあ？ さあ？ お前は沖繩人か」

「……いえ」

「さあ、答えなさい。次がつかえている」

「あーと……ペロロンチーノさんは忘れることだと——」

「ベルリバーさんは受け入れることだと言った」

「……」

眼鏡の位置がずれることが許せないらしく、彼がこの場に現れてから小一時間しか経過していないのに、何度も眼鏡の位置を正していた。フレームそのものがたがきいているように思えた。

「彼があの世界に飛ばされ、平和な物語を紡ぐとでも思ったのなら間違いだ。君には考察する知識と知性が足りない。知識は状況を理解し、知性が総合判断する。そのどちらも足りていないようだな、馬鹿もの」

細身の男は居心地が悪そうに座り直した。ばつの悪さで、背後で佇んでいる二人の女性の顔も見れない。

「そして蛇にそそのかされ、林檎の果実は今日も実る。人間は原罪を犯す業を、子々孫々へ継承する。始祖<sup>イヴ</sup>より受け継がれるそれは、人が人であるという罪に他ならない」

「意味がわかりません」

「全ての人間が現実に満足していない、異世界への渡航を受け入れると考えるのは傲慢だ。まさに、楽園<sup>エデン</sup>で始祖をそそのかした蛇たる業に他ならない」

「悪かったツスよ……」

「ああ、まったくだ。仮にこのまま進んでいけば、正義と悪はこの世界に来ることを拒否した。事態の重さを受け止めろ、そして反省をしろ」

「海より深く反省します」

「ふざけているな？」

彼の説教に終わりは見えない。何をどうすれば許してもらえるのか、未だに糸口はつかめない。ただ一つ、なぜ三人しかいない部屋にティーカップが四つあったのかだけは理解できた。

「まさかあんたがここに来るとは……」

「蓄えた知識と、それを使用する状況判断をする知性、どちらもなければ成し得なかったよ」

「それで、これから何を？」

「その前にエピグラフを訂正する。彼の異世界滞在記にはアインシュタインよりもユングこそ相応しいだろう」

「知らないんですが……」

眼鏡を正した会話の隙間、背後の二人の女性を一瞥してから続けた。

「人間関係とは化学反応に似ている、互いに作用しあったのならば元には戻れない」



人間に限らず、生きとし生けるもの全てに適用できると思いますが、この世界は平等ではない。だからこそ、公平と言えるのです。

あらゆる生命体は無秩序に万遍なく産み落とされ、不公平という理不尽な摂理に支配されます。不条理な世界で、最善を尽くして生きるよう強いられます。そして自分の生活に満足していない者が、口を揃えて叫ぶのです。

この世界は不公平である、なんて腐った世界だ、と。  
つくづく実感しました。

私はあなた達の知っている魔導王と同じ、異世界から来たプレイヤーです。

お恥ずかしい話ですが……現実逃避が造り出した産物、下らない妄想の世界に行けると知って、筆舌にしがたいほど浮かれてしまいました。しかし、それは仕方がないとご理解ください。

なぜなら私たちの世界は、人間が人間を道具のように扱う世界なのです。呼吸すらままならない文字通り息苦しい世界から解放されるとなれば、誰だって浮かれるのを禁じ得ません。

そんな私の気分は、一日で粉微塵に砕けてしまったのです。



目を覚ますと、どこまでも闇でした。手探りで動き回った結果、どこかの地下室だと知ったのです。どれほど先に進もうと、扉らしきものは見つかりませんでした。

ずっとこのまま薄暗い地下から出られないのではと、浮かんだ疑問は私に絶大な恐怖をもたらしました。

意識が明瞭のまま、永遠の闇に囚われる。

なんと恐ろしい地獄でしょう。きつと私の意識は、思考を破棄して狂ってしまう。唯一の光明は、ユグドラシルで手に入れたこの体です。本物の体よりも思い通りに動いてくれましたし、培った技術スキルや魔法はその全てが的確に理解できました。現実とは違う、体の奥底から

溢れてくる力の本流が、諦めを踏破しました。

闇の中、出鱈目に暴れまわりました。

上を目指すべきだと、生にしがみ付く私の勘が告げてくれたので、ひたすらに上へ目指しました。幾度となく瓦礫の雨を浴び、息が詰まるような粉塵から抜け出し、タケノコのように地上に顔を出したときの感動は、今でも鮮烈に覚えています。

赤みを帯びた大きな太陽、むせ返るほど鮮烈な空気、鳥たちは母を呼びながら山へ帰っていく、この世ならざる者との邂逅を予期させる逢魔が刻のなんと美麗で狂おしいこと。身を震わせる感動で、私の体は硬直してしまいました。

太陽がすつぽりと夜に埋もれた頃、ようやく意識は世界に戻ってきました。やはり、異世界にきて私は浮かれていたのです。その場で横になって土の匂いを嗅いだり、草むらに飛び込んでごろごろと転がったり、自然が剥き出しの美しい世界というものを堪能しました。

一人ぼっちの私は、草原でケラケラと笑っていました。

夜は世界をあまねく覆い、世界は一変しました。そよ風が草原を撫で、寒くも熱くもない夜、心地よいのでそのまま眠ろうと目を閉じました。まぶたの内側の闇、静寂に耳を澄ますと、誰かの泣き声が聞こえてきたのです。一度、気になりだすと無視ができなくなるもので、私は眠気を払って起き上がりました。

星の明かりだけで、かなり遠くまで見通すことができました。

改めて私が生えた場所を見ると、どうやら滅亡した国家が形成する瓦礫の下に転移したようです。何か、とても巨大な者に踏み潰された瓦礫の山と、所々に残る稚拙な文明の残骸。夜の静寂と合わさって空恐ろしい景色でした。瓦礫の影から、今にも得体の知れない魔物が顔を覗かせるかのように。

背筋の怖気を振り払い、私は鳴き声に導かれ、ふらふらと歩いていきました。

異世界で最も心躍らせるべきは、出会いです。異性に焦点が当てられるケースが多いのは、それだけ異性に満足していない人間が多いからでしょう。私の場合は、この美しい世界で生きている誰でもいい、

何者かと話があったのです。

泣き声に導かれて辿り着いたのは、小さな共同墓地でした。

浮かれ気分で近寄った私は、泣いている子供たちの後ろ姿に固まりました。

……。

失礼、まだ私の中で消化できていないのですね。涙腺が簡単に緩んでしまいは年を取ったのせいでしょうか。子供が親の墓の前で丸くなって眠ったり、餓死した妹や弟の体を抱きしめて泣く情景は悲しいものです。

数名の大人が子供の近くで死んでいるのです。恐らく、子供のために自分の食べる分まで分け与えたのでしょう。残されるのは、親の死体に縋りつく子供たちだけです。

浮ついた気分を木端微塵に砕く刃獄<sup>リンボ</sup>、涙が作る嘆きの川<sup>コキユートス</sup>でした。大自然は弱肉強食。万遍なく訪れる命の奪い合いに一切の不公平はなし、何者であろうと定められた世界の掟に従い、生きるために戦って負けたら死ぬ。

子供であろうと同じ、本物の平等な世界だとわかっていたつもりでした。頭で理解していましたが結局のところ、頭でしか理解していませんでした。

疲弊した生を捨て去って異世界へ逃避した末、精神の挫折が待ち構えています。

あちこちで泣いている子供を見て、異形の全身からふわっと力が抜けていくのがわかりました。その場に座り込んだ音で、子供たちが私に気付きました。その眼に宿っていた明確な感情は諦めでした。

無言の墳墓へどれほどの静寂が流れた頃でしょうか。

いつまでも襲って来ない異形種にしびれを切らし、子供たちの中でやや大きい一人が近寄ってきました。

僕らを食べないのかと、彼はそう言いました。私と彼らの体は違い過ぎた、異形の私を侵略者と考えたのも致し方ありません。

皆が見つめる最中、私の口から出たのは“心配ないからね”でした。



なんと場にそぐわない、支離滅裂かつ間拔けな返答でしょうか。軽い黒歴史となつてしまい、思いつくと顔面が熱くなります。

とにかく、そうして私たちは出会いました。

ぼつりぼつりとお互いの話を少しずつ、本当に少しずつゆつくりと進めました。私が彼らを滅ぼした魔導王と同じ存在だと知った彼らの警戒網を解くのは、生半可な努力ではすみませんでした。

彼らは壊滅した獣<sup>ビーストマン</sup>人国家の軍隊、散り散りになった敗残兵の生き残りでした。竜王国へ進軍していた彼らは魔導王に敗走し、軍隊としての形さえ維持できずに国へ逃げ帰る途中、自国が魔導王に滅ぼされるのを目の当たりにしたのです。先にも進めず、後にも戻れず、陸の孤島に取り残された彼らは魔獣を狩って細々と暮らしていたようです。

備蓄食料を幼いものへ与えて大人たちは狩猟に出掛ける、決して効率が良いとは言えません。獣<sup>ビーストマン</sup>人と魔獣のレベルには開きがありました。種族レベルというシステムが影響しているのかもしれない。とにかく生き残ることを優先し、敵の強さが高ければ逃げ帰り、倒せる敵だけを確実に仕留めて命を繋いでいたのでしょう。

そんな崖っぷち生活では長く続きません。大人たちは満足に食べることをさえできなくなり、消耗した体では狩猟も上手くいきません。徐々に力尽きていく同胞の命で食いつないでも、その場しのぎでしかない。ジリ貧の生活で大人たちは一人、また一人と死に絶えていき、自らの死体さえも子供たちに与えた結果、幼いものが残されたのです。

《獣は大地にいらないんだ》

会話の切れ間、世界の全てを悟ったかのような顔で呟いたのです。彼の表情を私は一生、忘れないでしよう。

身の内からこみ上げる感情を抑えつけ、彼らを説得しました。彼らには、共食いするしか道が残されていないからです。餓死は本当に辛い死に方です。飢えに抗う手段が、自分の家族や友人を食べるなんて、あまりに惨たらしい。

それに比べて私たちの世界は、何て幸せな世界なんでしょうか。

自暴自棄になっている子供たちをあやし、警戒の網を一枚ずつ解きながら説得を続けました。空腹で頭の回転さえも止めた状況では、私の話が右から左へ抜けていくようでした。

困り果てた私は言葉の説得を諦め、あちこちを駆けまわってようやく見つけた魔獣を殺しました。

お恥ずかしいことに、私は生き物を捌いたことはありません。それどころか、哺乳類の死体を見たのもこの手で命を奪ったのも初めての経験です。ここはもう、ゲームではないのです。まだ暖かい死体を前に困り果て、何もせずに引きずって行きました。新鮮な肉だから食べられるように言っても、彼は首を振るばかりです。

ですが、飢餓は堪えられないものではありません。血の滴る新鮮な肉の臭いに彼らは集まり、涎を垂らして獲物を見つめていました。

「食べてもいいんだよ」

私の声を号令に、一斉に群がりました。牙を獲物の体に突き立て、肉を食い千切る様は肉食獣の野性そのものでした。

お腹が丸く張り出るまで食べ過ぎた彼らは、あちこちに寝転がって苦悶の声を上げていました。空腹が満たされたことで本来の子供らしさを取り戻したようです。

俯いていた顔は前を向き、仲間と肉の奪い合いまではじめました。子供の喧嘩など他愛のないものです。放っておけばすぐに仲直りしていました。

夜、たき火を囲んで談笑していると笑顔も見られました。お腹いっぱい食べられる、それだけのことなら私が面倒を見てあげたい。

そうして彼らへ手を差し伸べました。

私に限ったことではありません。異世界から誰が来ようと、目の前の飢えた子供を無視するのは難しいでしょう。人間は、同等の知性を感じる生物を見殺しにはできないのです。

それが人間に仇なす獣人だとしても、出会ってしまった二人は、出会う前に戻れないのです。

獣人保護生活の始まりでした。

弱肉強食の世界では、幾つもの種族が生まれて、滅びていきます。

強者は弱者を食べなければなりません。もつとも、それは私たちの世界でも同じことです。常に奪う者と奪われるものに区分けされる世界の真理。この世界で言うならば、私たち転移者は生態系を破壊する外来種といったところでしょうか。

異世界転生の本質が環境破壊とは、皮肉なものです。

外来種である私たちが、世界の均衡を崩してはいけません。どんな世界であっても、守られるべき調和があるのです。それでも私は、滅びゆく彼らを守ろうと思いました。私こそが、絶滅の一途をたどる獣人を保護すべく世界に放り込まれたひとさじの蜂蜜、滅亡する世界へ木を植える者なのでしょう。

お腹が空いて泣く子の前に力を持った一般人が遭遇したのなら、手を差し伸べるのは必然です。

夜も更けてきたので草原に横たわり、緑の布団に包れて好き勝手に雑魚寝しました。ネコ科・イヌ科に拘らず、似たような格好で丸くなって眠るのは微笑ましい光景でした。

明日の予定をぼんやりと考えながら眺めていると、数名の子供たちが泣きながら眠っていることに気が付いたのです。

共食いという行為は生物の本能に刃向かう行為で、やはり相応に子供たちの心を蝕んでいたのです。私は彼らの頭を撫でながら決めたのです。せめて、彼らが人間を食べなくても良いように教えてから他のみんなと合流しよう。

人間を殺さずにいられないのなら、人間のいない土地で静かに暮らせばいい。誰に言われたでもなく勝手に決めたのです。これまでの自分の倫理に反すると知りながら。

ですが、愚かにも私は気付いていませんでした。

異世界に降り立った自分は、まだ人間を辞めていないということに。



子供たちはわずか13名でした。狩猟に出るに伴い、私は悩みまし

た。全員で隊列を組み、索敵、追いつみなど役割分担するのが合理的ですが、彼らのレベルが低すぎた。

悩んだ末に、狩猟に出る人数を半分に分けました。これは、彼らのレベルアップも兼ねた食料の調達です。私の作った避難小屋に半数を残し、残りの半数を付き従えました。

私にとっては余興ですが、子供たちにとっては命懸けのレベルアップでした。彼らを餌に魔物をおびき寄せ、私が手傷を負わせて弱らせ、息も絶え絶えのそれを子供たちが寄って集<sup>たか</sup>って切り刻む。

涙目で絶叫し、魔獣から逃げる獣人の子は良い餌を演じてくれました。食べられる恐怖で本当に泣いていたのかもしれませんが。

《ぎゃーっ！》と叫びながら涙や鼻水を撒き散らして逃げる獣の子と、涎を垂らして追いかける大きな魔獣を見て、岩のような顔をした私が笑い転げるといふ、とても和んだ日々が続きました。

生餌<sup>ルアー</sup>扱いされた子供は本気で怒っていましたが、怒る姿も可愛らしいものです。号泣しながら両手をぐるぐると回して殴りかかってくる子へ、頭を乱暴に撫でました。

子供は単純なもので、お腹が満たされれば怒りも収まります。獲物を引き摺って帰宅し、待機組が食事を作ってくれました。飲食を獣の子供たちと共にするだけの、何事も起きない平坦でありふれた時間でした。現実で心を虚無にする歯車となっていた時分、生きることが諦めていた弱者の自分には考えられないほど、穏やかで安らぎに満ちた森の生活。

たった一週間しか続きませんでした。

いつも通り、私が半数を引き連れて魔獣を狩り、獲物を引き摺って避難小屋へ戻ると、血の匂いが出迎えてくれました。静かで小さな森の中、木漏れ日に照らされる避難小屋の扉を開くと、子供たちの死体が転がっていたのです。

私は動揺しました。朝に小屋を出かけたとき、笑顔で私たちを見送ってくれた彼らは、蠅が蛆を産みつけようと集る肉塊となっていたのです。

やはり、私は愚かでした。

獣と人間の敵対構造。幾重にも重なった怨嗟の呪縛は、どちらかが絶滅するまで続く争いの螺旋、弱肉強食の摂理を突き詰めた憎悪が結びつける絆なのです。獣の残党へ討伐隊が差し向けられると、どうして想像できなかったのでしょうか。

若い獣人の惨たらしい死体は、どれほどの恨みや憎しみを込めて殺されたのか、それは雄弁に語ってくれました。

小屋の中央で解剖されている子は、生きたまま解剖されたのでしよう。乗せられたテーブルには激しい抵抗の痕跡が見られました。他の子たちもそうです。殺すだけなら、剣で胸を突けばいい。心臓動力モーターを破壊された子供はすぐに倒れる。

彼らの死体の損壊はそんな生易しいものではなかった。四肢を切断され、顔面をめつた打ちされ、敢えて心臓を避けて大量の剣を突きさされ、生きたまま炎に包まれ、口から剣を突きこまれ……。

人間と獣人の和解は不可能なのだ、悟るに十分でした。

私は想像力が働かなかった自分を怒り、彼らの亡骸を抱いて泣きました。それは吠えたという方が正しいほどの慟哭でした。当面、涙が出なくなると思うくらいに私は泣き続けました。他の子供たちが心配して毛布を掛けてくれるほど、私の怒りと悲しみは凄まじいものでした。剥き出しの感情、これも異世界に転移したが故なのでしょう。

おや？ 震えていますよ。寒いのですか？

……お気づきになりましたのですね。

私は、あなた達が殺した子供たちの話をしているのです。

寄って集って子供を痛めつけ、惨殺して恨みを晴らすのは楽しかったですか？

竜王国から遣わされた討伐隊の皆さま。慌てて逃げなくてもいいじゃないませんか。人間と話すのは久しぶりなんです。もうちよつと元人間の話に耳を傾けるのが、人情というものではありませんか？

私は人間を止めちやいましたけどね。

もう言うまでもないですが。

私は人間の敵となることを選んだのです。

◆  
痛みは取れましたか？

四肢を切断されるのは痛いでしょう、泣いてしまうほどに。あの子どももそうだった。あなた達の誇る最強の戦士がアダマンタイト級だと聞いて、失礼ながら笑ってしまいました。

セレブライトの彼はそこに転がっています。芋虫のようになっていますが、まだ生きています。私は恨みや憎しみで人を殺したりはしませんから。

私があなた達を見て最初に思った感情は、話しがしたいという欲求でした。

ですが、人間という種族に対しては……いえ、これは恐らく獣人の子に対してもそうだったのでしようが、虫けらでも見ているような気分です。そう、もつとも適切な表現がゲームのモブキャラです。多少なりとも感情移入すれば助けてやろうと思いますが、すれ違うだけのキャラへは感情移入が足りず、死んでも悲しいと思えないものです。

ユグドラシルが元の世界という点に加えて、何しろ、私は人間から異形種へ生まれ変わった化け物ですから。

倫理観がどれほど働くのかという実験も兼ねてセレブライトの彼を痛めつけましたが、行きつくところまで行っても遂に、私に罪悪感  
は芽生えませんでした。

今さらですよね。

とにかく、そうして私たちは半数を失いました。残った子供たちはたった7人です。最初に私と話をした白い子猫は、どうやらホワイトタイガーのようでした。現実世界ではとうの昔に絶滅してしまった希少種と出会えたのは本当に運が良かった。

彼は狩猟を続けた一週間で目覚ましい成長を遂げました。今では少年兵のリーダーです。その彼も、仲間を殺された時は参っていました。

《僕たちは生きていいの？》

私の涙が枯れ果て、声が飢えた頃、そう聞きました。彼らの保護者を気取っていた私は、何も言い返せなかった。

現実世界で生を実感することなく逃げ、簡単に手に入れた異形の体。生を途中で投げ出した元人間の異形種が偉そうに説教するのは傲慢極まりない。

黙っている私に苛立ち、白虎は胸倉を掴んで叫びました。

「なぜあんたはそんなに弱いんだ！ 僕らにはもうあんたしかいない！ そんな簡単に止めるなら、初めから手を差し伸べるなよ！」と。

私の魂は激しく揺さ振られました。

そう、私は彼らと最初に出会ったのです。これは獣人の行く末を私に委ねる、彼らに舞い降りた最後の機会なのです。絶滅していく彼らを保護しなければ。そう決意し、私は起き上がって空を見上げました。

絵でさえも見たことのない、美しい配置の星空でした。中央に浮かんでいる満月は、人間の発狂を後押ししているようです。

私は努めてゆつくりとした動きで、埋葬すべきか、食べるべきかと判断に困られている子供たちの死体を見下ろしました。一人を優しく抱き上げれば、周りの皆が息を呑むのが分かります。

つい先日まで笑っていた彼らを蘇生する術は所持していません。私はレベル100ですが、ユグドラシルで重要なのはレベルを100に上げることでは無いのです。職業と種族が多様に選べる状況下においては、理想とするプレイスタイルが自由に選べますから。私が森祭司ドレイドを選んだのは必然で……と、これは余談ですね。

抱き上げた獣の子は、時間経過で冷たく、固くなっていました。体中を駆け巡っていた血液が停滞し、固まっているのがわかります。私はしばらく目を閉じ、黙祷を行いました。粛々とした空気が、小さな森の小さな墓地へ流れました。

覚悟を決めた私は目を見開き、岩のような口を開き、躊躇わず幼子の首に食らいつきました。

生肉が美味しいはずがありません。こみ上げる吐き気を力で押し戻し、引き千切った獣の肉を何度も噛み締め、食らったのです。胃袋

へ落ちていく感触は不快感でしかなく、吐き気はずっとこみ上げていきました。

ですが、私はそうしなければならなかった。

恨みを込めて惨殺された彼らの命を無駄にしない方法は、それしか思いつきませんでした。

私の行動を見て、生き残った子供たちも死体に食らいつききました。一人の例外なく、彼らは泣いていました。これまでも共食いを続けてきた彼らが今さら泣く意味がわかりませんが、食人種なりに感じるどころがあつたのでしよう。命を無駄にするのは人間だけですから。

私の頭のねじが弾け飛んだのはこの満月の夜でした。人狼は狼に代わり、吸血姫は蝙蝠に化けて獲物を探し、魔獣達は涎を垂らして吠える夜。私は獣の生肉を食らい、人間を辞めたのです。

これまで自分を束縛していた倫理観が崩れ、敢えて考えないようにしていた選択肢がいくつも浮かんできます。倫理観は私の目をかくも曇らせていたのです。

私はもう人間ではない、化け物に生まれ変わった。ならば人間に殉じた価値観に囚われるのは間違っている。どうせ人間など勝手に増えるし、絶対数で言えば人間の方が遥かに多い。人間を間引いてこそ環境保護だ。

そう考えられるようになってから、獣を生かす道はどれも簡単に思えました。

そして私は、あなたたちの村を襲ったのです。



竜王国最強の人間である貴方たちにこんな話をするのはどうかと思います。人間は本質的に醜い生き物だと思っんです。家族を失ったそのあなたは過去に執着し、食人種への憎悪で呪縛されて進めない。実に人間らしい、素晴らしいことじゃないですか。そんな風に苦しめるのは、人間に許された特権とも言えます。



私は現実世界に何も持たない、執着の欠片もない人間でした。ですが、それはとても寂しいことなのです。だからこそ、獣の子供たちに執着したのでしよう。家族を持たない私に、新たにできた可愛い子供たちへ。

虐げられ、共食いで精神をすり減らした獣の子供たちに必要なのは、人間のような醜さです。

これまで無視していた選択肢、人間を餌にするという行為に必要なのは、主食の人間に勝てる力です。人間を襲い、喰らい、彼らに負けない力を得なければなりません。

近くに村があると、事前の偵察で知っていました。これまでの私は、手つ取り早く村を襲って人間を食べるという選択に、どうしても踏み切ることができませんでした。そのときは反対に、人間を殺さなければ先に進めないと考えていました。

散り散りになった獣の残党を探す、食人の他種族に協力を頼む、そんな選択もありましたが、私は何よりも先に人間を殺したかった。どちらにせよ、獣人側につくのであれば殺人・食人は避けて通れない。

不思議と私の心には、殺された者たちの恨みや憎しみは毛ほどもありませんでした。成すべきことをする、それが生きるということです。

目的の村は、すぐに辿り着きました。

防衛線は簡単な城壁で、貧相なものでした。子供たちの侵攻は防げたかもしれませんが、私には通用しません。軽く撫でるような様子見の一撃で、村を囲っていた壁に大きな穴が空きました。後は、雪崩れ込んで皆殺しにするだけです。

人間同士の戦争では女性の生存率が高いものですが、今回は単純明快な食料調達の戦争です。かつては同種族だった人間を老若男女問わず、目に着いた先から片つ端に殺していききました。その日は幸運にも、主戦力となる男手、つまりはあなた達が首都へ出払った向かった日でしたね。

わずか100人程度の村人、子を守ろうとする母親、若者を逃がそうとする老人、私の殺戮は分け隔てなく平等に襲い掛かりました。特

に、まだ幼い子供の体を私の腕が貫いた時、自分の体から何かがスーッと抜けていくような感覚がしました。

大量の返り血で私の体が紅に染まり、私は獲物の死体を前に吼えました。

その咆哮を皮切りに、背後で獣人の子供たちが呼応して吠え、武器を取って手近な獲物へ襲い掛かりました。魔獣相手に比べれば、随分とぬるい相手だったようです。

何事も初体験は衝撃的なもので、獲物の死体を一か所に集めてから、私はその場に嘔吐してしまいました。

眩しすぎるほどの月光が、村に流れる赤い血潮を照らしていたのを鮮烈に覚えています。人間の気配が村から消え、目の前には死体が積み上げられました。死体の山を前に、私は自分を抱きしめて震えました。

自分がどれほど愚かな行為をしているのか、しばらく一人で苦しみ続けました。

本来、彼らを人間と共存するように導くべきでした。もしかすると、そのために獣人国家へ転移させられたのかもしれない。神様の意志ってやつでしょうか。当初、そうするつもりだった私は、取り返しのつかない行為に恐怖しました。

世界の弱者は人間ですから、他のみんなが人間に肩入れする気持ちも分かります。

白虎の子が、武器を掲げて勝鬨を上げました。成すべき狩猟が肉食獣の本能を呼び起こしたのでしょうか。自分たちはビーストマン、人間を食料とする者だと、口々にそういつて叫び、物言わぬ死体に食らいつきました。人間を食べる場合、料理の必要がないようでした。

私は彼らを守るために死体を踏み引き、喰らわなければなりません。

まだ頭を抱えて落ち込む私に、最初に出会った白虎の彼は瑞々しい肉をお皿に盛ってくれました。その笑顔を見ていると全てが許されるようでした。みんなでご飯を食べようと嬉しそうに笑う彼に、今さら何を言えるのでしょうか。

この日、私は人間を口にしました。

胃が痙攣して、何度も肉片を吐き出しました。痛ましい目でみる子供たちの視線を受けながら、無理矢理に押し込みました。飲み込むと同時に、雷に打たれたような衝撃が私の魂を襲ったのです。

まるで、自分が得体の知れない怪物へ変容していくような恐怖、取り返しのつかない失態への後悔、共食いとはこんなにも恐ろしい疲弊を与えてくれました。

私が真の意味で人間を辞めたのはこの時でしょう。狂ったと言い換えてもらっても構いません。

滅びた村は、野営キャンプのかがり火となっていていつまでも燃えていました。私たちは住んでいた森を捨て、大量の携帯食料を得て旅に出たのです。プレイヤーだけが使えるアイテムボックスは、食料の鮮度を維持してくれました。旅に出るには最適なシステムです。

散り散りになった獣人軍の残党を探し、保護する旅に出たのです。行き着く未来は人間と戦争……つまり、人間側のプレイヤーとの殺し合いが待ち構えていると知りながら。



不思議なことに、獣人の全てが人間を同じ命だと思っ

ています。彼らは、食料に対してある一定の敬意を抱いていました。他の場所で細々と暮らしていた獣人の全てが、人間を同じ大地に生まれた命だと思っていました。そして、私のような異世界からの来訪者の力は借りない、と。

合流した獣人たちは当初、私の加勢を断ったのです。

難航するかと思われた彼らの説得は、その晩で決着がつかしました。彼らは等しく、飢えていたのです。

彼らの陣営のすぐ隣、人間を食す私の子供たちを見て、彼らは簡単に懐柔出来ました。涎を垂らして近寄ってくる彼らを拒否せず、等しく全員へ人間を分け与えました。子供の死体はいつも奪い合いです。

そこからは簡単でした。

何しろ、竜王国にも私と同じく異世界からの転生者がついているのです。こちらに私がつかなくてはフェアじゃありません。

私たち食人種連合軍は、雪だるま式に人数を増やしていったのです。それもこれも、魔導国という強国が食人種を虐げてきた結果、人間を口にしていない飢餓が成せる業でした。

散り散りに暮らしていたビーストマン、瓦礫の山を漁っていたトロール、森の奥でひっそりと暮らしていたオーガ、人数が増えるにつれて必要な食料も増えていきます。

あなたの家族が何番目の村にいたのか、私にはわかりません。はつきり言つて、モブキャラモブの顔なんていちいち確認しませんから。

そうして兵糧を順調に増やし、節約しながらこうして竜王国首都郊外の森で、牙を研いでいるのです。いざ戦争が始まれば、敵の死体はこちらの兵糧となる。これはこちらにとって非常に有利な要素です。

私たちの次の目的地は、人口の多い竜王国の首都になりました。

勘違いしないで欲しいのですが、狙いは和平交渉です。戦争など、数を減らすための行事でしかない。もつとも、戦争ならそれも止むを得ないでしょう。いづれにしても死体が出るならそれを食べて過ごせばいいのですから。

さて、七つの大罪を所持する種族、人間として今の気分はいかがですか？

獣を殺すというのは人間の総意なのでしょう。森でひっそりと暮らしていた獣の子供たちを惨殺したのも、人間たちがそう決めたのならそれは正義なのでしょう。

人間はこれまで獣人たちに奪われ続けたから、今度は奪い返してやるのだと、唾棄すべき屁理屈ですがそれは正義なのでしょう。

正義とは、自らの行為を正当化する弁でしかない。そんな下らないものに拘るのは人間だけです。ですから、外道だ、悪だと、人を罵るのはその辺で止めていただきたいものです。

獣を殺して気を晴らすのは、己のつまらない人生の憂さ晴らしですよ。本当に、反吐が出る。世界に獣人はもう、たったこれっぽっちし

かない。復讐とは、自らの心を納得させるためだけのエゴだ。そして人間は世界から何かを奪い続け、私たちの荒廃した世界が出来上がる。

ああ……何を言ってもあなた達にはわからないのですね。

家族を殺され、同胞を殺され、恨みつらみに凝り固まったあなた達の心には、世界全体を考えるオツムがない。もともと、外来種の私の意見を聞く必要があるのかと言われるれば、無いのかもしれませんが。

結局、どこの世界でも同じように繰り返される、人間という傲慢な種族の輪廻。世界は自分たちのものだと考え、失われた種族を思い出しもしない！

抱え込んだ大罪でさえ、七つでは足りないでしょう。

私は人間が大嫌いです。

そうだ、遅くなりましたが自己紹介をいたします。私、アインズ・ウール・ゴウンに所属していたブループラネットと申します。

さて、羊の皆さま、あなた達は復讐という闘志を燃やし、武器を握り締めてここへ攻め込んできたつもりでしょう。自分がすることを相手もすると考えもしない、傲慢極まる人間の皆さま。私たちが準備万端で待ち構えていたと知る由もなく、獣の口に飛び込んでくれたただ羊なのです。

憎いですか？

恨みたいならご自由に。

私にはその覚悟ができています。

何人、戦えますか？

どちらかが死ぬまで、戦いましょう。ここで私を倒せば、人間たちの勝利でございます。物理無効化を外し、獣人の糧となるべく俺に殺されるあなた達の痛みが少しでもわかるように致しましょう。

私も彼らに倣って、獲物へ最大限の敬意を払わせていただきます。

あなたの死体を首都へ放り投げ、開戦の狼煙にしましょう。

これは弱肉強食の摂理に則った、獣と人間、最後の大戦なのです。

酷い死相ですが、きつとお互い様でしょう。

私の敵がどう思うのか、少しだけ楽しみです。

◆  
「満足か？」

金髪の女性が煎れてくれた紅茶が香る。眼鏡を正した神経質な男は、繰り返す同じ言葉を問う。

「満足か？」

やせ型の男は俯いて答えない。

「満足かと聞いている」

「知るか……どいつもこいつも。俺はこんなの望んでねえっつーの」

「人間を舐めるなよ、馬鹿野郎。彼女一人で満足しておけばよかったものを、余計な手を出すからこうなる。七つの大罪保持者の人間を舐めるなよ。一度だってお前の思い通りにはならないさ」

「何とかありませんか？」

「こうなった以上、徹底的に争わせ、未来に蹴りをつけるしかない。現に、お前はそうしただろう」

「まあ……確かに」

ティーカップを掴んで、眼鏡の男は立ち上がった。

「俺たちはここで見ているしかない」

「まだ居座るんですか……そろそろ出て行ってほしいんですが」

「るし★ふぁー」

その名を聞いた瞬間、細身の男の体が跳ねあがった。

「彼には動機がない。いい加減な場所に放りだせば、必ず世界を崩壊させる大戦争が起きる。この物語の肝は、彼と正義と悪が握っていると言っても過言ではない」

そういつて紅茶を啜った。

「君は舞台に降りないのか？」

「それ何度目ですか……。いやー……俺はもうイイツスわ。十分楽しんで」

「嫁を置き去りにするのは気が咎めるか」

「……」

何度同じことを聞いても、彼の返答は変わらない。蛇とはかくも愛情深い者か。ならば、舞台の内側から舞台そのものをぶっ壊し、責任者を呼ぶしかないだろう。

「俺を含めた4人を任せてもらいたい。これから始まる最悪の悪夢を、お前はそこで見ているがいい」

「それで、竜王国はどうするんですか」

「ああ、いくつか考えていることがあるが、開き直ってこんな策は——」

彼の提案を、細身の男はすんなりと受け入れた。彼にとっては、確かにそれ以上の妙案も思いつかなかっただろう。彼が二人の嫁を引き連れて喧々諤々と旧式PCの前で作業している最中、眼鏡の男は本を読みながら呟く。

「幼くとも男に災厄をもたらすもの、心弱きものよ、汝の名は——」

## あまくち体質の女

別れ話は何度やっても慣れない。私はいつも泣いているし、男はマニュアル化されているように、口並み揃えて同じ台詞セリフを言う。

「お前さあ……もつとサバサバした女かと思つてた」

水っ鼻をすする音が情けない自分を際立たせる。よりによつて週末に別れ話をするこの男の神経を疑うが、そんなのを彼氏に選んだ自分の神経も疑わしいものだ。

「心弱きものよ、汝の名は女なりつて言うだろ？」

(……知らねえよ、馬鹿)

「じゃあ……泣いてるうちに帰るわ」

「二度と来るなバカ野郎お！」

辛うじてそれだけは言つてやった。振り返つて顔をしかめたが、何も言わずに出て行つた。荒れ狂う感情が右手を操り、放り投げた花瓶がドアに当たつて碎けた。割れたガラスが象徴している婦女子の傷心ブロークン・ハート。

こうなることは予定調和だ。別れの到来は少し前から薄々、勘付いてはいた。あの男では最後まで辿り着けない、私の人生を捧げるに値しない。あの男の子を生み、結婚して育てる未来は想像できない。

悪い方の予想に限つて的中するもので、理由は奴の浮ついた気だつた。

(言うに事欠いて、《お前は一人でも生きられるけど、あいつには俺がいなきやだめなんだ》だと？ 典型的な最低男がっ！)

サバサバした女じゃなくて悪かったな。別れ際になつて引き留めてやったらジメジメして鬱陶しいと抜かしやがつて。勝手に誤解して勝手に失望して、何て身勝手な男だ。

「こつちだつてなあ！ あんたなんか願ひ下げだよ、粗チン野郎！ 甲斐性無し！ ごく潰し！ ろくでなしがっ！」

沸騰した怒りが冷めやらず、傍らに置いてあつたゴミ箱を蹴飛ばした。空中を回転するそれは、嘔吐して紙屑を撒き散らした。



「痛っ」

数日前に届いた、くしゃくしゃに丸めた封蝋の手紙が顔面へ飛んできた。ご丁寧な封蝋の部分がおでこにぶつかってコーンという音が骨身に響いた。

「……畜生。紙屑まで馬鹿にしやがって」

思い返せば長所というものが存在しない男だった。稼ぎは悪いし、平然と私の部屋に押し掛けては家事をしないし、デリカシーがなく氣遣いもなく自己中心的で、体の相性だって良くなかった。なぜっちは私の話を聞いて「その男はやめておけ」と言っていたし、駄目な男だと付き合っただけに分かっていた。

知ったところで私は別れられなかった。

「だって、寂しいじゃんかあ……」

こぶしを握って涙を拭った。

可愛いワンコを失った心の隙間は、抱かれれば一時的に埋められた。糞のような男でもベッドの上では優しかった。それだけのために付き合っていた男。

失恋直後は悲しむ以外にすることがないものだ。

部屋を暗くして、死んだ犬の写真立てを抱きしめて眠った。存外、失恋の痛手はすぐに癒えた。所詮は駄目男、精神的苦痛は可愛いワンコを失った時の痛手と秤にかければ、釣り合うはずもない。強がりかもしれないが、悲しんでいるよりは幾分か良い。

次の男はマシなのをとっ捕まえればいいのだ。私の年齢を考慮すれば失敗はできないが、私を大事にしてくれる優しい男を結婚を前提に付き合えばいい。どうせ世の中、数で言えば男が多い。

そう言い聞かせると楽になった。

だが、却って眠れなくなった。

どうせ週末だ、ネットサーフィンでもしてから寝よう。そういえば、私の顔面に攻撃を食らわせた手紙の件、ユグドラシルのアイコンはどうなったんだろうか。

新しい出会い系に登録して、ついでに覗いてみよう。PCの椅子に腰かけてヘッドギアを被った。

「はあーあ……寂しいなあ」

独身アラサーOLなんてこんなものだ。何しろこの社会では飲食がタブレット化され、快樂を得る手段は睡眠とセックス、娯楽はネットのゴシツプやゲームしかない。

「死ぬ前に、一度でいいから菓子食いてえ」

一人きりの部屋に零れる<sup>ツイト</sup>眩きが虚しい。

「辞世の句……なんちゃって」

口にしたその言葉通り、こんないい加減なものが辞世の句になった。



ベッドに腰かけて上目遣い。シナを作って相手の目線は右斜め上。某国の王子様がそこに立っていると仮定して、落とす言葉はこんなところだろう。

「ふにゆう……私、寂しいのにや。だから、今夜は一緒にいてほ——」

「誰と話しているんじゃない！」

寢室の扉が足で蹴破られた。彼女は常に、扉の外で様子を伺っていたようないい場面で邪魔をする。ベッドの縁に腰かけて頬を赤らめ、俯き加減の私を見て、太々しい顔の少女は他の誰かを探した。

残念ながら誰もいない。

それはとても残念で、惨めなことなのだ。

「イマジナリーフレンドなの」

「はあ？」

「あー……あはは」

「笑って誤魔化すな。どこに隠した。忘れているがここは私の寢室だぞ。勝手に男を連れ込むな！」

「あのね、だからつまり、妄想なの」

「……悪かった」

彼女に潮らしくされると、余計にこちらが惨めな気分になる。恥ずかしさを黙殺し、ベッドへ横に転がった。

「だって暇なんだもん」

「さつさと魔導国へ行け。邪魔で仕方ないわ。この王宮にいるもの全て、お前の扱いに困っているぞ」

「……そうなんだ」

遂にお荷物宣告を受けた。モモンガさんのメールと彼氏と過ごす時間、天秤にかけて男を優先した私が、どの面下げて魔導国へ行けるのだ。

「いつまでも先延ばしにはできんだろう」

「もーっ、言われなくてもわかってるよう」

彼女は薄紅色のドレスから寝間着に着替え始めた。こういうとき、女同士だと気を使わなくていい。小さい方の体だと衣装代が安上がりだと、一国の女王らしからぬ庶民的な節約法を自慢していたのを思い出した。

「会議は終わったの？」

「いつも通りだ。やるべきことが多すぎるし、手はいくらあっても足りない」

「お疲れ様、ドラちゃん」

「そういえば頼まれていた菓子、そこに置いておいたぞ」

指さされたベッド脇のサイドチェストに、煎餅の缶が置いてあった。

「ええー！ また煎餅？ ケーキが無いなんて信じられない」

「何が不満なんじゃい、ごく潰し」

「しょっぱいんだもん。甘いのが食べたいっ！」

「魔導国にいくらでもあるわ！」

彼女は右手を魔導国の方へ向けた。三秒ほど、互いの動作を停止させて睨み合い、何事もなかったかのように戻った。

「ねえん、作り方教えるからやってよー」

「甘ったるい声を出すな。同じ女にその手は通じんぞ」

「わかってるよ……」

「お前に外を出歩かれると困る。不満があるならいつでも魔導国へ帰っていいわい。むしろ早急に帰れ」

「異世界の観光の件は？」

「お前はなぜ、獣を土台にしてしまったのだ……」

竜王国は食人種の国家と距離が近い。異形種に対する恐怖と憎悪は世代交代しても受け継がれ、精神の根っこまで汚染している。

「見た目は可愛いでしょ？」

「否定はしないが、獣は困る」

「だよね……」

過去の自分を殴りたい。見た目で選んだ私が迂闊だった。ユグドラシルで獣<sup>ビーストマン</sup>人を土台<sup>ベース</sup>にしてした私が出歩こうものなら、結果は火を見るよりも明らかだ。

だから私は今日も明日も、終わりのない軟禁をされるのだ。いつでも客間は別で用意されているので、ドラちゃんの私室へ侵入する意味はないのだが。

ベッドから起き上がり、中二病患者がするように両手を広げて天井を見た。

「おお、神よー！」

「ああん？」

「なぜ私を竜王国へ落としたのですかー！」

「まったくその通りだ。直で魔導国へ落としてくれればどれほど助かったことか……」

私の異世界転移は別れた彼氏並みに粗雑な扱いだった。転生を悟った私は美しい神様が現れて乙女ゲームを始めてくれるのだと身構えたが、何のメッセージもなかった。

銀色の門を潜り抜けた先、汚染されていない美しい青空に感銘を受けること数秒、自分が下へ落っこちているのがわかって全身が逆立った。

天高く放られた私はもがきながら軌道修正し、隕石よろしく落っこちたのは竜王国の首都、宮廷の庭だ。土をふんだんに使<sup>ファンデーション</sup>って化粧をした私が周囲を見やると、スズメバチの巣に火のついた爆竹を放り込んだ騒ぎになっていた。

阿鼻叫喚とした騒乱の最中、矢だの槍だのが無作為に飛んでくる。

怖かったので頭を抱えて縮こまったが、武器は地面にぽとぽと落下し、私に傷ひとつつけることはできなかった。

どうしたものかと困惑している私に、冷ややかな顔をした男性が歩み寄った。

目と目で通じ合わない異文化交流と異種間交流、言葉が通じるか怪しかったので取りあえずお辞儀をした。真似をしてお辞儀をする男性の後方、隣からちよいと顔を覗かせた少女が、小っちゃい方のドラちゃんだ。彼女は私が危害を加える意思がないと確認し、近くまで歩み寄って聞いた。

「アインズ・ウール・ゴウンを知っているか？」

それが一ヶ月以上前の話。それからずっと、私は女王の寝室でニートをしている。なぜドラちゃんの寝室なのかと言われれば、客間よりも寝心地のいいベッド目当てと、彼女に私と同じ匂いを感じたからだ。

彼女は本気で追い出そうとしなかった。

「ねえ、甘いのが食べたいの。煎餅はもう飽きちゃった。特に、クリームをふんだんに使ったケーキ。特大イチゴのショートケーキ、甘く煮つけた栗が乗ったモンブラン、甘さ控えめのクリームと果実、生地を折り重ねるミルフィーユ、クレープ生地にしたミルクレー——」

「自重という言葉は知っているか？」

「これでも随分、我慢してるんですけどお」

「働かない者が偉そうにするな」

彼女は一貫して私の我儘に否定的だ。

「だってさあ、甘いものをテーブル一杯に並べて、吐くまで食べるのが小さいころからの夢だったんだよ。夢が叶ったら働くってば」

「魔導国へ行けば好きだけ食える。なんなら一緒に行ってやる」

「えー……」

遅かれ早かれ、私の行くべき場所は魔導国だが、何事にも心の準備が必要だ。そうして先延ばしにして早一ヶ月、そろそろ何らかの行動に移すべきだろう。

「ねえ、ドラちゃん」

「なんじやい」

「どうして彼氏、作らないの？　大きい方のドラちゃんだったらモテモテっしょ？」

「大きい方、言うな」

「違うの？」

「一国の女王となれば立場がある。おいそれと簡単に股は開けん。特に、あのロリコンがこの国からいなくなると非常に困る」

「いい年したロリコンなんて止めなつて。はつきりいつて気持ち悪いよ。いくら強いつて言つても、私たちの足元にも及ばないんでしょ？」

「アダマンタイト級冒険者は国力の一つだ。私自身が餌になつて国に縛り付けなければならん。遊びで恋などしている暇いとまはないのだ」

世知辛い。私たちの世界よりもよつぽど不健全だ。

「じゃあ、まだしばらく処女だね」

「……ふん」

「うわ、否定しないよ。マジで処女なの？」

「餡ころお、無礼な態度を取るなら追い出してやるぞ。なんなら、魔導王陛下を招集してやる」

「ごめんね、ちよつと引くわ。よわい数百年の美女が喪女とか……半端なく絶望するんですけど」

「悪かったな、この野郎！」

「ヤローじゃないよ、女だよ。ドラえもん」

「やかましいわい！」

彼女は寝間着に着替え、ベッドへ飛び込んでから枕を放り投げた。うつ伏せになって顔をベッドへ埋め、しばらく足をばたつかせていた。耳を澄ますと、シーツを伝って念仏のような小言が聞こえてくる。

自らの境遇を愚痴っているようだ。

「あー……でも、男にとっては理想だよ。異世界転移に両手放しで飛びつくオタクさんは、女の処女性を重視するもんね」

どうやら琴線に素手で触ってしまったらしく、返事がない。

「ギルドのメンバーの男は38人……37人かな。片っ端から紹介するから、誰かに惚れたら教えてね。相手の情報をいくらでも教えてあげるから」

「……全員、異形種じゃないか」

「ドラちゃんだつて厳密には人間じゃないんでしょう？」

顔が上がった。

「アンデッドはモモンガさんだけよ。選べる種族が多かったから」

「その多い種族の中で、なぜお前はよりによって獣を選んだ……」

「もういいでしょ、その話は！ ねえん、私にもいい男紹介しよう」

「……その能天気さが羨ましいわ」

実のところそうでもない。

人間を辞めた私の人生は終わったも同然だ。中身が人間でも外身は異形、私の婚期は追えばどこまでも逃げていく、決して辿り着くことない蜃気楼だ。彼女の言う通り、人間と異形種の結婚は難しいだろう。元人間の異形種でプレイする乙女ゲームは、馬鹿みたいに難易度が高い。

「お前の友人、魔導王陛下にはな、種族を問わず女性が惚れるらしいぞ。友人のお前は違うのか？」

「ドラちゃんも？」

「私はその、神の花嫁は荷が重い。それに私はヤ……」

「ヤ？」

「いや、や、役に立たん色恋は後回しだ。興味が無いわけではないが、そんな甘いことを言える状況ではない。魔導国の属国となったこの国はいくらでもやることがある。居候、お前も少しは働かんかい」  
「それはいいけど、何をすればいいの？ だって、私がこの街を歩き回ると大騒ぎになるんでしょ？」

「幾らでもあるぞ。アダマンタイト級のロリコンを連れて領内の視察とか、ビーストマンの残党の搜索とか、冒険者の育成とか」

「あー、そういうのパス」

ネットゲームで強くなつた人間が、この世界で必死に暮らしている人たちへ何を指導すればいいのだろうか。ゲーム理論が通じるとも

思えないし、敵を倒してレベルを上げさせるにしても、倒せる敵の確保が難しい。

それでは、村の開発や発展に貢献するのはどうだろうか。

農業、生産、料理、この世界の人間が当たり前のように出来ていることができない私は、精々が荷運びくらいだ。長く居座れば居座っただけ、役に立たなさが浮き彫りとなる。自動的にモモンガさんの評価まで貶め、あちらの邪魔に成り得る。

「私なんか、何の役にも立たない人間だよ？」

「強いじゃないか。それだけで一財産だぞ。嫌味か？」

「本当に何にも知らないんだよ？」

「強ければ馬鹿でもいいという領主、貴族は多い。お前が男だったら私を抱かせてやったものを……つくづくこの国は運がない」

少しだけ、肩が震えていた。私はとても申し訳なく思えてきた。

王族として生まれ、国を守ることを考えてきたドラちゃんと変わらないどころか、私はそこいらの平民にさえ至らない。転がっている石ころの方が余程役に立つ。

面倒になり、私はドラちゃんの隣に転がった。

「一緒に寝る？」

「私にその趣味はない」

「私にもない」

「お前がそこにいるから、私はいつまでも大人の姿に戻れんじゃないか」

ベッドはキングサイズだが、大人の女性と異形種が寝るにはやや小さいように感じた。

「友達でしょ」

「トモダチ……か」

当たり前前の小さな幸福が手に入らない、生き遅れた女同士の共感。私は彼女と癒着しようとしている。

「襲うなよ？」

「へーきへーき」

百合ではなく、同じベッドで寝る友人として、私たちは眠った。



そろそろ何らかの仕事を見つけよう。  
微睡に素晴らしい名案がいくつも浮かんだが、目覚めたら消えていた。



デスペラードなフラれた女がブローケン・ハートを再構築して傷を癒すこと一ヶ月あまり。ドラちゃんのお陰で傷もすっかりと癒えた。

お忍びで透明化して国内を見回り、国民たちの生活を秘密裏に勉強し、時には幽霊さんとして人助けもやった。孤独を埋めてくれた彼女への恩返しだが、いい男へのマーケティングも兼ねていた。

化け物に抱き枕として扱われ、安眠を妨げられ続けている小さい方のドラちゃんの怒りが頂点に近づいたところ、夜になって彼女は飛び込んできた。

「餡ころお！ 曾祖父様が来るぞー！」

「そうふか」

私はファッション雑誌らしきものを読みながらせんべいを食べていた。興味がわかず、生返事しかでてこない。それにしても、この世界の人間はなんと美形が多いのだろうか。

「ふぎけるな！ 曾祖父様、七彩の竜王様が何らかの異変を察知してこの国に来る！」

「ふーん」

「なんだその舐め腐った反応は。よく考えろ、お前を魔導国へ連れ戻しに来るかもしれないんだぞー！」

それは困る。私は煎餅を口に押し込み、座り直して彼女を見た。

「私のことがバレたかな？」

「メッセージで、何か隠し事があるなら先に話すようおっしゃったのだ。曾祖父様がメッセージの魔法を使うなど前代未聞だ。絶対対にいい！ 何らかの確証を掴んでいる」

「いつ来るの？」

「明日の朝」

「マジか」

道理で朝から王宮全体が騒がしいと思った。

「どんな人なの？」

「曾祖母様が大好きな人」

「……愛妻家？」

眠くなるまでの短い時間を使い、×1曾孫持ちドラゴンの人物像を教えてもらった。

年寄りの意見は聞いておくものだ。子供を産んだ経験はないが、案ずるより産むがやすしというのは本当だった。人払いをされた宮廷の玉座へ引きずり出された私は、岩石のように凝り固まった体が瞬時にふやけることになった。

「やはり、か」

厳めしいドラゴンではなく、頭髪が虹色に輝く美少年だった。

「ドラウディロン、なぜこの件を魔導王へ連絡しない。魔導王が仲間を探していると知っていると知っているだろう。隠すような行為は、竜の尾を踏むと同義で——」

「あら可愛い」

ユグドラシルを元にしていただけあって、秘密裏に行った社会科見学で美形が多いと知っていた。虹色の頭髪を風になびかせる少年は、その中でも特別に秀でていた。顔だけで選ぶと失敗すると、過去の経験から学んだ私は少年シヨタに引き付けられなかった。

「ぼく、何歳？」

「……なるほど」

「館ころ、竜王様に無礼な態度を取るな。敬語を使え、敬語を」

「だって、まさかこんな可愛い少年が来るなんて思わなかったんだもん」

「無礼者！」

人間に化けると小さくなるのは遺伝らしい。肝心の少年は馬鹿でも見る目のため息を吐いた。

「プレイヤー、私の容姿が幼い人間であろうと、君の数百倍も生きている年長者であることに変わりはない。君が魔導王の友人でないのなら、

ら、早々に魔導国へお引き取り願いたい」

「あ、はい……すみません」

私は頭を下げるしかなかった。礼節を無視した私が悪いのだ。私を居候させてくれている小さい方のドラちゃんも立場がない。隣のドラちゃんは自分まで怒られたような顔をして俯いていた。

「改めてプレイヤー、名乗りたまえ」

「私は餡ころもっちもちです」

「ユグドラシルは名前に統一性が無い。遊興ゲームが故なのだろうが、こちらからすれば迷惑極まりない。その得体の知れない名前の由来は何だ？」

「お菓子の名前、です」

「……そうか」

少年の表情は、「これは骨が折れそうだ」と言っていた。

虹色さんは応接間に茶菓子を持ってくるようにドラちゃんへ指示を出し、私を連れて行った。事前情報通り頭の良い人だったが、瞳の奥に見え隠れする冷たさもまた賢いもの特有だった。ありがたいことに皆まで言わずに察してくれるので、話は一度も滞らなかつた。

「ふむ……」

知りたい情報は全て渡したはずだが、彼の表情は暗い。

「……どう思うかね」

「何が……ですか？」

「君は運命を信じていない、神も想像したことはない」

「ええ、まったくその通りです。そもそも宗教がどこにあんのかかわかんないし、ゲームで神様の名前が引用されても特に何もか——」

「そうだろう、そうでなくてはならない。アークロジから隔絶された汚染区域で生を傍受する人間という歯車テロルに神への妄信がはびこるのなら、死を恐れぬ暴虐者の生誕を招くだろう」

「私たちの世界に詳しいツスね……」

「伊達に長く生きていない」

少年は足を組み、背もたれに寄りかかった。

「疑心暗鬼に思えるか細いものでありながら、決して無視することの

できないもの。これは予感であり、同時に確信でもある。41人中  
で、獣系から派生した種族を選んだ者は少ないのではないか？」

「ええ、多分そうだと思います」

「竜王国の仇敵の獣を土台とした種族、ビーストマンに近い姿のプレ  
イヤー。よりによつて君がこの地へ転移したことに、何らかの意味を  
感じずにいられない」

「意味なんかないんじゃないですか？」

「思考の放棄は愚者がすればよい。意味がないのであれば、意味がな  
いなりに理由が必要だ。君は今しばらく、この地へ留まりたまえ。獣  
を土台とする異形が落とされたのは、獣を毛嫌いする竜王国の首都、  
その事象に理由をつけるまで」

それは願ってもないことだ。全てに理由や意味があるとは思えな  
いが、国家の祖が許してくれるなら大手を振って観光ができる。

「あとう」

「なんだね」

「この国を見て歩きたいんですが……一緒に行きませんか？」

「断る」

声は恐ろしく冷たかった。まるで、触れられたくない古傷に許可な  
く振れられたような怒りを感じた。

「ドラウディロンに頼むといい。私の許可が出たとなれば、国家の友  
人として首都を案内してくれるだろう」

「せっかくなので竜王さんも一緒に」

「諄とい」

彼は立ち上がり、扉へ向かって歩き出して話を、というより私を拒  
絶した。男に拒絶されるのは何意味わつても慣れない。扉の取っ手  
を掴んで引く直前、私に顔を向けた。

「最後に、君は人間側か？ それとも異形種側か？」

「えっ？ ……ごめんなさい、質問の意味が」

「人間と食人種、どちらにつくかと聞いたのだが」

「……はい？」

詳しく説明するような優しさは見受けられず、少年は静かに返答を

待っている。私は、彼の聞きたいことが理解できなかった。元人間に聞いた時点で知れているし、頭のいい彼ならそれを知らない筈がない。

「だって、私たちは人間ですから、考えるまでもなく人間側につくんじゃない——」

「甘い……甘過ぎる。君を見た誰もが、食人種側の異形だと考えるだろう。その姿になって鏡を見たことはないのか」

嫌味を言っ出て行った。

甘いものを食べたいとは思いますが、自分が甘いとは思えない。結局、美少年との楽しい社会科見学は私の脳内にて企画倒れとなった。



「異形種とは種族固有の本能を所持する。黄色いローブを身に纏い、人間に紛れてこの国を見学してくるといい。君たちの言葉を借りるのならば、験がいいというやつだ。体に宿った野性の血が目覚めたと、き、運命の歯車は噛み合い、世界の本質に迫る問いを投げかけてくれるだろう」

少年は言い終えてからソファアへ寝そべり、分厚い本を開いた。救世主の生誕を待っている賢者のようだった。それ以上の話を拒否し、手のひらをひらひらと舞わせて出て行けと催促する彼に、私とドラちゃんは顔を見合わせてから出て行った。

「ほれ、これを被ってみろ」

玉座の間の近くにある衣裳部屋で、ドラちゃんは薄汚い黄色いローブを私に差し出した。

「だっせえ……」

「文句言うな。特注だぞ」

「いや、ただの布切れじゃん。女の子にこんなものを被れど?」

「女であっても“子”じゃないだろう」

「うっさいなあ……」

明らかに使用済みのように見える、私のためだけに誂あつらいえたと言い張

る黄色いローブには何の防御力もなく、ただの布切れ以外の何物でもなかった。深々と顔を隠す私は、小さい方のドラちゃんに後に続き、馬車に乗り込んだ。

「エスエム女王様が王宮を出ていいの？」

「エスエム……？ お前、たまにわからんことを言うな」

「冗談よ」

「後のことは宰相に任せてある。あれでなかなか使える男だ」

「ふーん、昔はもつといい男だったよね、あの人」

「先に言っておくが、奴は家族がいるから駄目だからな」

「不倫はしない主義なの」

私たちは首都を見て回った。

小さいドラちゃんはどこに行っても人気者で、すぐに取り巻きができていた。

私は馬車の中から目に着いた露店に片っ端へ、近衛兵さんを好き放題に使い走らせて食料調達させ、むしゃむしゃと貪りながらぼんやりと眺めていた。

自分で買い物をする勇気がないのだ。

クリスタルティアという冒険者、アダマンタイト級ロリコンのセレブライトは女王の隣を離れず、民衆が女王を質問攻めにするのを上手くいなしていた。アダマンタイト級は伊達ではなく、育ちも良く教養のありそうな彼は民衆を上手く捌いていた。ロリコンでなければいい男に違いないが、時おりドラちゃんに向ける視線がねばついているのが生理的に受け付けない。

終始、ドラちゃんはみんなを安心させようと笑顔を崩さず、馬車に戻る頃には口元が引き攣っていた。

食べ飽きて昼寝をしていた私が馬車の揺れに目を覚ますと、小さい彼女はこう言った。

「昼寝とほいい身分だな」

「うん……女王様も大変ね」

「いつになったら元の姿に戻るのやら」

「まあ、世の中、大半の男がロリコンよ」

「……」

やや重たい沈黙だった。

女王陛下の民衆激励巡礼の舞台裏、私の買い食いツアーは首都を一周し、宮廷に戻るのかと思ったが馬車は首都を飛び出して郊外へ向かった。

「どこ行くの？」

「復興した村の視察だ。ところで、曾祖父様はお前に何と言った？」

「そういえば、人間と異形種、どっちにつくのかって聞かれたかな」

「どっちだ？」

「え？」

「だから、どっちにつくのだ」

彼女にしては真剣な顔だ。真面目な彼女は子供に擬態していても、やはり女王らしき風格がある。私は姿勢を正し、彼女を見据えて言った。

？

「あの大先生にも聞かれたけど、その質問に意味はあるの？ 私は人間なんだから、人間を助けるに決まってるじゃない」

「……そうか」

道中、別の都市で宿を取り、その都市長や町長だのと話をし、数日かけて首都から最も遠い村へ着いた。

真っ先に馬車を飛び降りた私は、全身で伸びを行なった。

「うーん……空気が綺麗で気持ちいいねえ」

「館ころ、ローブは脱いでいいんだぞ」

「あ、そうだった」

「私は村長と話があるから代わりに近衛兵を一人つける。詳しい話はそやつに聞くといい。それから、魔獣が出たら頼むぞ」

「バトルはなるべく避けたいな」

「馬鹿を言え。館ころより強いものはこの国にいないのだぞ」

「わかったよー……」

とはいえ、無益な殺生は好かない。だいたい、戦闘なんて現実の生活では皆無だ。どこにでもいるOLに犬や猫、ネズミでさえ、いき

なり殺せと言われても難しい。鼠やゴキブリの類は、正直なところ触るのも嫌だ。

鼻歌交じりのスキップで、ピクニック感覚だった異世界転移は、この訪問を機に溶けていった。



モモンガさんは敵対国、ビーストマン国家をぶっ潰したので、戦争は終わっていると思っていた。

それなら、なぜこんなにも高い城壁が村に必要なのだろうか。

「館ころもつちもち様、女王陛下より御伴するよう仰せつかった近衛兵でございます」

「あ、はい……よろしく」

男の人にその名で呼ばれるのがちょっと恥ずかしい。もっと可愛らしい名前にすればよかった。的外れな羞恥心を抑え込みながら、村の散策へ足を踏み出した。

これまでの過去、かくも歪な人間を見たことはない。

例えば、村に入っつてすぐ手を繋ぐ母と子が挨拶をしてきた。とても仲の良い親子に見えたし、何の違和感もなかった。

「こんにちはは、魔導王陛下の御友人の御方ですか？」

「あ、はい、そうです、こんにちは」

男の子はニコニコと笑い、母親の手を握っていた。

「仲がいいですね」

「ええ、まだ家族になったばかりなので」

「へえ、そうなん……はい？」

「館ころ様、今は納得してください」

近衛兵さんの耳打ちに、私はそれらしく頷いた。

「あ、はあ……」

「それでは、失礼します。これから畑に行くもので。魔導王陛下に、村人一同、深く感謝しておりますと、よろしくお伝えくださいませ」

「あ、はい、さようなら」



「ばいばい、館ころさまー」

「ばいばい」

彼らが立ち去ってから衛兵さんに聞くとところによれば、夫と子供を殺された女性と、両親を殺された子、失ったものを補填するように引っ付いて親子になったのだという。

「惨いものでした……あの母は生まれて一月目の赤子を、避難の際に落としてしまった。半狂乱する彼女の夫が慌てて走りましたが、拾い上げた我が子もろとも串刺しにされ、そのままビーストマンに食べられました。彼女は、夫と赤子を目の前で食い殺されたのです」

「そっか……」

「今でこそ笑えますが、虚ろな目で徘徊し、どこからか拾ってきた首のない赤子の死体を抱きしめていました。蛆が湧き、肉が腐敗して溶けるまで、どろどろになった白骨死体をいつまでも胸に抱いていたのです。どこの子供なのかも分からない死体を……いつまでも」

事前に予想した重たい話など、軽く凌駕する狂いっぷりだった。

「ビーストマンたちは戦利品の獲物を宴でいたぶるのはご存知ですか？」

「狩猟本能が獲物をなぶり殺しにするんですよね、確か」

「竜王国の民であれば、幼子であっても知っています。想像力はそのとき残酷なもので、あの少年は、毎夜、両親が死ぬ前に味わった地獄を夢に見ては、顔を掻き毟って絶叫しながら目を覚めますのです。毎夜、毎夜、決して終わることのない悪夢と顔面の自傷。幼い精神は崩壊し、あの子は狂いました。狂ったことで、本当の母が戻って来てくれたと信じている」

「……」

「差し詰め、ビーストマンへの憎悪が繋ぐ親子の絆でしょうか」

私が蘇生術を使えば状況は変わったのだろうか。モモンガさんが犠牲者を蘇生したらどうなっていたのか。

簡単に手を差し伸べるのは間違いだ。一人を蘇生するのなら全員を蘇生しないと不自然だし、不公平だ。それは国家に不和を招く行為でしかない。

全てを蘇生するには数千、数万、あるいは数十万にも及ぶ蘇生を行なわなければならないし、蘇生した片っ端からまた殺されていく可能性もある。モモンガさんが悪いのではなく、そう考える私がか上から目線なのだ。

半端に手を差し伸べるくらいなら、初めから何もしてはいけない。相手が死ぬまで面倒を見る覚悟でなければ、手を出すべきではない。飼えない人間は、初めからペットを飼ってはいけない。

私は尖った歯を食いしばり、衛兵さんの後に続いた。

「館ころ様、こちらの方々がアインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下の件でお礼を言いたいと」

「は、はあ……どうも」

「あなたが陛下の御友人でございますか。この度は、忌々しい獣どもを滅ぼしていただき、感謝に尽きません！ この場をお借りして礼を申し上げます」

「つまらない場所ですが、何泊でもゆっくりしていらしてくださいな。私たちは魔導王陛下のためなら、この命だって惜しくありませんのよ」

頭髪が真っ白な老夫婦は涙を流して握手を求めた。モモンガさんへの感謝をこれでもかとまくしたて、何度も振り返って頭を下げてから去った。

「なんか、よくわかんないけど。お爺ちゃんお婆ちゃんに感謝されると嬉——」

「二人とも、まだ30代です」

「うっそお!？」

どこからどう見ても60代の隠居した老夫婦にしか見えなかった。曾孫までいると言われても素直に納得しただろう。

「彼らは三人の子供たちを全て、獣に攫われました。魔導王陛下のピーストマン国家壊滅後も子供たちは帰らず、彼らは骨をかき集めて標本を作りました。我が子の骨かどうかさえ分からないというのに……」

「わー……」

「組み立てたそれを椅子に釘で打ち付けて座らせ、家族団欒の妄想を再現していたところを私が発見しました。女王陛下へ、この地への派遣を進言したのも私です。あれは人間でありながら……おぞましい異形の晩餐でした」

酷い惨状を思い出したのか、近衛兵さんは口を抑えた。

もつと単純に、家族を失った者たちが寄り添って村を復興しているのだと考えていた。間違っではないが、現実を軽く見た私が甘かった。数百年にも渡る人間と食人種の敵対構造は、敵対国家を滅ぼしたくらいで収束するような生易しいものではない。

現実に胃もたれしてきたが、衛兵さんの村人ツアーは続いた。

死んだ兄弟の皮膚を移植した青年は、「これで兄弟は永遠に、ピーストマンと共に戦います」と言っただけで朗らかに笑って見せた。つぎはぎの体が、フランケンシュタイン博士の怪物に似ていた。

我が子の骨を体に埋め込んだ父親は、二度と離れ離れになりませんと言っただけで、やはり朗らかに笑った。歪に盛り上がった体のあちこちへ、対応する子供の骨が埋め込まれているのだろう。

両親の骨を粉々に砕いて保管し、スープに混ぜて飲むことで過去の楽しかった記憶を夢に見ようとする少女は、姿の見えない父と母に話しかけて笑った。凄惨なマッチ売りの少女のようだ。

我が子を永遠に忘れまいと、自らの子宮を剣で突き刺した女性。農作業の途中で物思いに耽り、獣を惨殺する妄想を浮かべて薄ら笑う男性。獣たちの体を溶かす薬を開発することに固執する薬師。男女問わず、家族ごっこをしてくれるなら無料でいいという街娼と、それに母親役を求めている30代らしき男性。顔面を縦断する裂傷の傷が生々しい青年は、小さな人形を背負って畑仕事に精を出していた。その彼と談笑しながら半裸で畑仕事をする青年の背中には、立派な大蛇が獣を一飲みにして入る入れ墨が彫ってあった。

畑の側にある木には獣を模した人形が釘で打ち付けてあったし、憎悪を込めて叩き壊された人形は損壊を木にまで及ぼしていた。

「……最低」

何もかも、私の認識が甘かった。

昔を懐かしみ、幸せだった過去を捨てられない。笑いながら暮らしても、少しだけおかしくて、とても可哀想な人たち。キャパを超えた惨い現実能耐え切れず、私は建物の影で自分を抱いて蹲った。

「こんなものって……もう戦争は終わったのに」

「人間を辞めた餓ころもつち餅様を、私は化け物とは思いません。あなたは真正正銘の人間に違いない。なぜなら、人は人でありながら、心はかくも異形になってしまう」

近衛兵さんは悲しい顔で私を見た。

「きつとみんな……とても幸せだったんだよね」

例外なく、ここにいる人間は幸せで仲の良い家族だったのだろう。そうでなければ、ここまで苛烈に執着しようと思わないはずだ。

「餓ころ様は復讐についてどうお考えになりますか？」

復讐は、血で錆びた剣を血で研ぐようなもの。最後に刀身は残らず、血で研いだ赤い粉だけが残される。復讐などすべきではないと、そう教えてくれた正義の人は反対派だった。

「……悪いことじゃ、無いと思う」

本人たち見て悪だと言えるわけがない。

「彼らは今を生きていないのです。獣たちが奪ったのは家族ではない、過去そのものだ。ここに集められたのはそうした者たちです。それらを固く結びつけているのは——」

「ビーストマンへの復讐？」

「老若男女問わず、全員が武器を手に修練を絶やささない。いつか、どこにいても知れないビーストマン残党の首を切る、その日を夢見て」  
竜王国をモモンガさんが救ったとき、大半の人間の復讐心は満たされた。近衛兵さんも他の人たちと同様に、復讐だけに生きてはいけな  
いと悟った人間だった。

それでも多種多様な人間なら、前に進むことを拒否する者はいる。そう言った者たちを寄せ集めて構成されたこの村は、ビーストマンの残党を狩るために組織された部隊であり、彼らの侵攻を妨げる防波堤のようなものらしい。

いつか、遠い未来でビーストマンたちが復興し、再び竜王国を襲う

日に備えて。

「そんなの……酷過ぎるよ」

「同感です」

復讐が悪いとは言わない、過去に蹴りをつけなければならぬ場面は現実でもある。しかし、憎悪を未来永劫、子々孫々まで継承するのは間違っている。

一泊する予定だったらしいが、ドラちゃんや村長さんへ挨拶を終えてから足早にその村を去った。右腕と右脚が義体の村長さんは、恩人にするように何度も頭を下げてくれた。

「今度は是非とも、ご宿泊をなさってください。村を挙げて歓迎いたします」

「……はい」

村長の逸話を聞く余力は残っていない。

去り際、嬉しそうに私を見送ってくれたあの男の子の言葉が忘れられない。

「ぼく、お母さんが大好きなんだ」

何か言わなくてはと思いい口を開いたが唇が震えて声が出ない。必死で絞り出そうとした言葉に代わり、涙が流れた。彼を抱きしめて頭を撫でてやりたかったが、きつとそれをすれば泣き崩れ、子供のように泣き喚いてしまう。

逃げるように馬車へ乗り込んだ私は、夜に行く馬車の中で黙り込んでいた。黙って気を使ってくれたドラちゃんが、唐突に大人の姿へ戻った。

「……そっち、あんまし好きじゃないわ。おっぱいの揉み心地は良さそうだけどね」

「餡ころ、人間から異形種になって歪んでしまった心は、初めから人間の私にはわからん。だが私は、お前を人間の友人と思っている」

「……あんがと」

「先ほどはよく堪えたな。滅多なことでは他人に貸さないが、友人になら私の胸で泣くことを許してやってもいいぞ」

「……ふん、いらぬよ」

言葉と体がちぐはぐに、勝手に動いた。気が付くと、私は彼女に抱き着いて泣き喚いていた。

幼子が母とはぐれて泣くように、夜の馬車の中で私は泣き続けた。まるで、自分は人間だと主張するようだった。



翌日、たつぷりと眠った私とドラちゃんは虹色大先生を訪ねた。ドラちゃんは報告、私は相談と、目的は少し違う。

「——というわけで、復興は順調です」

「結構。獣への憎悪に呪縛された、呪われしものどもの平和な村を見たプレイヤーの感想はいかがかね」

「……本当、厭いやな世界」

「それを知ってこそ真にこの世界へ降り立ったと言える」

虹色の少年はソファアに寝そべったまま、読んでいた本を閉じようとしないうし、対面の椅子に座る私たちを見ようともしない。いくら結果が分かっているとはいえ、目にあまる太々しさだ。超年長者兼自称賢者は扱いが難しい。

「戦争は終わったのに……」

「彼らの戦争は終わっていない。ビーストマンの残党を探し出して皆殺しにしたとして、食人種そのものが世界から一掃されない限り、彼らの明けることなき昏くらき夜は続いていく。永遠に覚めぬ黒き憎悪の夢、鮮血の歴史で培われた真紅の鎖、戦争の副産物」

私の拳が痙攣し、彼を殴れと怒っていた。

「彼らを救う方法はないの？」

「救うだと？」

少年は初めて私を見たが、眉間に皺が寄っていた。

「自らの考える幸福を押し付けようとするのは、プレイヤーという強者の立場にものを言わせ、哀れなものを見る度に振れる安い同情心にはならない。彼らは既に救われているとなぜ受け入れられない。優しい世界など妄想の中にしか存在しないと思え。現実には常に一定の

残酷さを以て、我らへ選択肢を突き付ける。いつまでその甘さを維持している。いつまで妄想に浸り、現実の直視から逃げ続ける」

「逃げてないもん……」

反論の余地もなくまくしたてられ、それしか言えなかった。どうやら、彼の機嫌を損ねてしまったらしい。

「桃色の脳髄は想像し、理解するためにある。人間たちが苦しんでいるのであれば、同様にビーストマンも苦しんでいると、少し考えればわかるはずだ。魔導王に蹂躪された彼らは散り散りになって生き延びている確率が高い。表立って人間を襲えなくなった彼らの絶望と飢餓を考えたことはあるか？」

「だって仕方ないじゃん！ そうしないと、人間が生きられないんだから！」

椅子から立ち上がって声を荒げると、少年は姿勢を正して私を見た。

「それでいい。君は人間から異形種へ転身したプレイヤーだ。あらゆる立場に立てる、特異な存在に違いない。現実を受け入れ、後悔のない選択をしなければならぬ。身を引き裂くほどの苦悩の末、出した答えにこそ黄金の価値が付与されるだろう」

「私は……化け物なのかな」

「己が在り方に苦しむのは人間の特権といえる」

「ありがとよ……」

口を歪めた少年を、一発でいいからぶん殴ってやりたくなくなった。

「だいたいさあ、ビーストマンなんてまだ生きてんの？ いるかいな  
いか分からないような相手を憎み続けるなんて馬鹿げて……」

私の脳に閃光が走った。

「あ、そっか。分かったわ！」

少年は頷き、話の続きを促した。

「ビーストマンがいるかい分からないなら、はつきりさせちやえばいいんだよ。搜索隊、討伐隊に冒険者を雇えばいいじゃん。ねえ、ドラちゃん、お金貸してよ」

「金はこちらで持つわい。戦力はクリスタルティアだけで大丈夫だろ

うが、お前はどうするんじやい」

「搜索隊はロリコンを隊長にして、あの村人たちから選ばばいいじゃない。私は国内の武力強化に動いておけばいいのよ。本当にピーストマンの残党がどこかにいて、戦争を仕掛けてきても今度は人間たちだけで乗り切れるように」

我ながら名案だ。

盛り上がった私は足早に部屋を出て行こうとした。自分で訪ねておきながら身勝手極まりないが、女は身勝手で我儘な生き物だ。これで何も見つからなければ、彼らの未来も少しだけ明るいものになるし、見つけて討伐すれば恨みも少しは晴れる。

「待ち給え、餡ころ」

「え、ナンですか?」

咄嗟のことでイントネーションが妙な場所にくつついていた。

「君の中に抑え込まれている、煮えたぎる溶岩にも似た獣性は目覚めたかね。それとも、未だ覚醒の刻限を夢見ながら蛹の中で胎動しているのか」

「……ごめんなさい、意味不明」

「忘れるな、君の中にいる獅子はまだ惰眠を貪っている。遺伝子に刻み付けられた理性なき負の力、沈黙の長さに比例して蓄えられる爆発力は常人に制御しきれるものではない」

「……はあん?」

「心せよ、それは反動と呼ばれるものだ」

それ以上は語らず、彼は再びソファーへ転がって分厚い純白の本を開いた。賢者は扱いが難しい。詳しい説明がない上、勝手に納得して勝手に終わらせる。これが彼氏だったら引きずり降ろして話をさせたところだ。

ともあれ、私とドラちゃんは宮廷の食堂へ移動した。串に刺さった茶色く焼かれた丸い物体が差し出された。

「なにこれ?」

「焼きもちだ」

「ジェラシーのこと?」



「はあ？ 小麦をこねて、調味料を塗りたくって焼いたものだ」  
「またしよっぱい菓子じゃん！ こんなのしかないの？」

「贅沢言うな！ さっさとお前の考えていることを聞かせてくれ」  
「凡人の知恵でもいいの？」

「凡人かもしれないが、お前はプレイヤーだ。聞く価値はある」  
「そっか、そうだったわね。あまのまひとつ、って言葉に聞き覚えはない？」

「なんだそれは？」

「ううん、何でもない。国全体を強化するなら質のいい武器と防具が必要だと思うのよ。魔導国に武器と防具の買い出しに行ってもらつてよ。目利きのできる、武器と防具の商人さんが行くのが理想かな。あと、兵隊さんを中心に魔獣を遊撃する部隊を編成して」

「誰が引率するんじゃない？」

「隊長は私。モンスターをおびき寄せるアイテムがあれば嬉しいかも。私の武器は爪か双剣なんだけど、作れる？」

「後で鍛冶屋と打ち合わせをするといい。費用はこちらで持つと伝えておけ」

「よし！ 明日からバリバリ働くぞー」

尖った歯で餅をぐしゃぐしゃにしていると、ドラちゃんが神妙な顔で言った。

「私も覚悟を決めるべきか……」

「何が？」

そろそろセレブライトを婿に取る頃合いかもしれないと、思い詰めた顔で言った。当然、私は即答で猛反発したが、彼女は譲らなかつた。「仕方がないだろう。奴を雇う資金も馬鹿にならん。冒険者もワーカーも費用が高すぎる」

「あんなロリコン野郎の人身御供になることないじゃない！」

「他に手があるのか！」

私にわかるはずがない。私なんか口を出していい問題ではないが、友達の身売りを見過ごせるわけがないじゃないか。

「じ……じゃあ、私がお見合いをセッティングするよ！ 私の仲間の

誰かを婿にすればいいじゃない。強いし、暇人だし、おっぱいの大きいドラちゃんのためなら喜んで働くよ！ なんならモモンガさんが

「魔導王陛下を相手にするのは難しいだろう……他にプレイヤーがいるとは聞いていないが」

「いるよ！ 私だっってここにいるじゃん！」

「……期待はしないが、ありがとう」

悲しそうに笑う彼女に、私は何も言えなかった。

これまでの馬鹿馬鹿しいやりとりで近くにいたような気がしていた彼女は、私からとても遠い場所で苦痛に耐えていた。

恐らくは、初めからずっと。

人間を辞めた私に接する、彼女なりの優しさだったのだ。

つくづく、自分の甘さを痛感し続ける。

弱肉強食の世界に、私のような人間は相応しくなかった。異世界転移を望んだわけではなく、あれは単なる事故だったが、そうだとしても私はここにいるべきではなかった。

齧っている茶菓子はうすしお味だが、自らの甘さにうんざりした。



翌日から兵隊さんを200名ほど引き連れ、首都郊外の魔獣狩り、つまりレベルアップに出掛けた。ドラちゃんがないので彼らが言うことを聞いてくれるか不安だったが、その点については何の問題も無かった。

「魔導王陛下の御友人と御伴できるなんて光栄です！」

鳥の巣で餌を待つ雛のように、口々に同じ意味合いのことを言って喜んでいた。

モモンガさんってすごい。

骨だけだ。

戦争の爪跡も真新しい竜王国の兵隊さんたちは、集団行動に統率が取れていた。彼らは獲物を上手くひきつけ、時には攻撃をかわし、少

しでも役に立とうと防衛線や罾を張り巡らせ、私の邪魔にはならなかった。

かぜつちはヘイト管理が上手く、タンク役のプレイヤーな上、指揮官系のクラスまで取得している。彼女がいれば数倍も捗っただろうが、到来を待ってられない。

しかし、他の何を差し置いて、最も上手いかなかったのは、私の精神だった。繰り返し、私は自分の甘さを見せつけられる。

(女の子は砂糖菓子でできてるから……って、んなわけねえっつーの)  
「何かおっしやいましたか、館ころ様」

「何でもない。敵が来たから剣を構えて」

敵が単体の場合、相手が動けなくなるまで一騎打ちだ。お借りした兵隊さん、多種多様な職業の200人が固唾を吞んで見守る草原を舞台に、踊る私は魔獣を倒していった。

キマイラらしき生物の首を切り落とし、バジリスク種らしきものへ頭から突っ込んで心臓へ爪を突きこんだ。グリフオンの派生種らしきものは翼で空から現れたが、ジャンプ力と空中戦には自信がある。アンデッドは下位種しか現れず、さほど強くもないから私が出るまでもなく、兵隊さんたちは協力して倒してくれた。

相手の数に関係なく面白いように敵を倒したが、爽快感を得られたことはない。弱い者いじめをしているような胸糞悪い感覚は常に残されていた。

子連れのグリズリーとアルケニーは情に訴えられるので堪えた。

負傷した親熊は子供を庇うようにその身を盾として、私の前に立ちはだかった。

「逃げるなら追わないけど……?」

そんな甘いことを言っていられる場合でもない。言葉が通じる筈もなく、兵隊という餌を前にして引くわけもなく、親熊は襲い掛かってきた。

数秒と持たずに親熊は絶命して草原に転がった。親の亡骸に縋りつき、悲しそうに「キューンキューン」と鳴く子熊も、躊躇いながら殺すしかなかった。ここで見逃せば成長した未来で人間を殺す。私

はそんなに甘く、愚か者ではない。

しかし、子熊たちの命を奪うまで随分と時間を浪費した。爪先から滴る生き血に胸糞悪さを覚え、人間らしい優しさが零れていくような思いだった。

アルケニーは蜘蛛の胴体に人間の上半身が引つ付いたような魔物だ。人間部分は戦いを効率よく行う知恵と、言葉を介して許しを乞う知性を所持していた。

八本の足を矢鱈滅多羅に切断され、蜘蛛の糸まで無効化され、打つ手のなくなつた魔物の人間部分が両手を合わせて拝んだ。

「助け……て。二度、と……人間を襲いません……助けて」

「……ごめん」

一思いに首に爪を立て、首を切り離した。素早く殺そうとも、私の爪は命を奪つた感触を確実に内側まで伝えてくる。

アルケニーを殺した夜、耐え切れなくなつた私は激しく嘔吐した。晚餐に食べた豆のスープが形状をそのままに草原へ吸い込まれていった。

若い兵隊さんたちは地に伏せる私に集まり、タオルを渡し、こぞつて私の武勲を称えて慰めてくれたが、結果的に私自身の脆弱さを浮き彫りにした。勝手な都合で命を奪うという行為は、こんなにも惨たらしい。不満を言いながら、なあなああの歯車として社会で生きてきた私は弱く、甘つたれている。

そして、そんな世界を必死に生き抜いている彼らは本当に強く思えた。

（心弱きもの……汝の名は女……か）

みんなが夕食を兼ねた野営の支度をしているとき、私は料理を手伝うこともできない。包丁を持って食材の前に立った瞬間に意識はどこかへ飛んでいく。花嫁修業が不可能な体になってしまった。

料理をしてくれる衛兵さんたちを、岩に腰かけてぼんやりと眺めるしかなかった。

「……ごめんね、役に立てなくて」

「やめてください。その強さこそ我らの憧れ。この国を守り、女王陛下

下のために尽力する見本そのものですよ！」

「そうです、強きこそが全て。民を守るために、我々は力が欲しいのです」

「私たちは御供ができて幸せです！」

本気でそう考えているのだろうが、私の脆弱さも本物だ。

人間側に着くのなら、人間に仇なすモンスターを殺すしかない。狩猟は命を奪うときに多大なストレスを溜め込み、発散はできていない。

(……中立って選択肢もあつたのかな)

迷っている私の背中には誰も押してくれない。

食事という行為は快樂の一つで、この時は誰もが緩んだ空気だ。あちこちで笑顔が見えるし、みんなも世間話をしてくれる。私も、大勢で食べる御飯がいつもより美味しく感じられた。

「餡ころ様、生前……で、合ってるかわかりませんが、かつては人間だったのですか？」

「そうだよ。企業に勤める一般OL」

「おーえる？」

「キギョー……とは？」

「えーと……働く一般女性のことね」

「気になっていることを聞いても？」

「どうぞー」

「どんなお姿だったのですか？」

「独身ですか？」

私の実年齢よりも一回りほど若いであろう兵隊さんは、初心で可愛らしいものだ。端正な顔立ちの若者たちは私よりも経験豊富に思えるが、化け物の私にも興味を示してくれている。女としては、社交辞令でも嬉しいものだ。

「独身だよ。ここに来る直前、彼氏と別れちゃったんだよ。他に好きな子が出来たから浮気されちゃってさ。お前は一人でも大丈夫だからってほんと最低男だよね」

「何たる無礼な！」

「縛り首にしましょう！」

「許せん……餡ころろ様になんたる無礼な振る舞い。憎んでも憎み切れないほど」

魔獣を狩っているときよりも殺気立っていた。逆ハーレムとも言える状況下でありながら、人間だったときのような嬉しさは感じなかった。人数が多すぎて顔と名前も覚えられないし、感情移入するほど時間が経っていない。

「いや、みんな怒り過ぎでしょ。異形種になっちゃったし、もう結婚は難しいかなあ……」

「魔導国には異形種が人間に化けると小耳に挟みましたが」

「そのようなアイテムの開発も進められているようですね」

「な、なんならこの私が——」

「お前はすつこんでろ！」

「抜け駆けすんな！ ぶっ殺すぞ！」

「なに、それ？ もしかして私に惚れちゃったの？ あっはっは！」

実際にどう考えているかはさておき、暗くなり過ぎないように気を使ってくれているのだろう。御蔭で何となく気持ちがほぐれた。

私が魔獣達を弱らせて、衛兵たちが袋叩きにするという一連の流れをこなし続けた。

虹色少年の謎かけが解けたのは、しばらく先の三日月の夜だった。



悪魔の笑顔に思える三日月の晩。

星空の下、私は若い男の子たちとたき火を囲んで談笑していた。

「へえー、魔法書で勉強するんだー……それだと習得に何年もかかるよね？」

「他にやり方がわからないのです」

「じゃあ、戦って経験値を積みながら勉強したらどうかな。何事も経験値が必要なのがゲームのルールだし、試してみたら早く習得でき——」

「館ころ様」

「ん、なに？」

「現れました。今夜の敵はバジリスクと、グリズリーの群れです」  
「仲間の敵討ちに一族総出でやってきた感じかな」

今宵の敵はいつもより多く、にわかには緊迫した空気が訪れる。

私は最前線に立ち、爪と爪を擦り合わせて研いだ。金属同士を擦り合わせる不快な音で戦意を高揚させていると、頭の中で呼び出し音が鳴った。《伝言<sup>メッセージ</sup>》を使った連絡は初めてだ。

こめかみへ指をあててみると、ドラちゃんの声が頭の中で聞こえた。音声チャットよりも精密な会話ができるシステムに感動した。

《館ころ、いつこっちに戻る？》

《わかんないよ、しばらく補給しなくても平気だし》

《そうか……》

《なによ、私に会いたくなっただの？》

《いいか、私の話を落ち着いて聞け》

《なによ、改まって》

《あの村がビーストマンに襲われ、一人残らず皆殺しにされた。セラ  
ブライト率いる捜索隊は別の場所で補給をして不在の日を狙われた。  
戦士系の男手が出払った深夜に、女子供、老人など一人残らず……》  
不意に、風が止んだ。

ドラちゃんの声が遠ざかっていき、私の視界は紅に染まっていく。  
あの母子の顔が思い出され、記憶が燃えて灰になる。三日月が私を  
笑っている。愚かな私をせせら笑う。

「グオオオオオオオ！」

根源的な恐怖を呼び覚ます獣の咆哮が轟いた。

それが自分の声だと気付いたのは、魔獣だけでなく人間たちまで震  
えていたからだ。

結局、私は甘かった。

可哀想な村人たち、彼らの末路はどこまでも可哀想だ。私が甘かつ  
たから、可哀想な村人たちは全員、ケダモノどもに食い殺された。私  
が殺したのだ。

その通り、私が甘かった。

ビーストマンは皆殺しにしなければならぬ。そうでなければ、いつまでも人と獣の戦争は終わらない。共存共栄など甘ったれた夢に他ならない。笑わせるなよ、馬鹿野郎。

私のせいで可哀想な村人たちは全員、殺された。私が甘かった、甘いから、甘いから、甘いから、甘かった、甘かった、甘いから、甘かった、甘いから、甘かった、甘いから——。

「ぎげんじゃねえよケダモノがあああ！」

叫ぶと同時に、頭の中で伸びたゴムがブチンツと千切れるような音が鳴り、体の奥で何かが発射した。心を守っていた壁をぶち抜き、呪縛する倫理の鉄鎖を引き千切っていく。全身を巡る血液が沸騰しているように熱く、私を前に駆り立てる。

衝動が敵を殺せと喚き散らし、体が勝手に走り出す。

《心せよ、それは反動と呼ばれるものだ》

私のアバターに込められた野性は今、多大なる反動を伴って目を覚ました。

獣の群れに飛び出した私は、怒りのままに目に着く者を殺した。これまでの最低限な殺しではなく、快楽のための殺し。敵意と殺意は殺したくらいでは満足せず、何度も死体を切り刻み、牙を立てて肉を食い破り、子供だろうと容赦なく爪で引き裂いた。

一度でも爆ぜた野性の熱は冷めることなく、次の殺戮へ駆り立てる。どれほど殺して満たされない。生き血が口を満たし、躊躇うことなく飲み下し、引きずり出した内臓を千切って食らった。食らうたび、体の奥から熱いものがこみ上げ、心の形がぐにやぐにやと変容しているような気分だった。

ものの数分で、草原に臓物の絨毯が敷かれた。

動くものがいなくなり、積み上げた獣の死体を登り、てっぺんに乗せられたバジリスクの頭を踏みつけた。

とても気分がよかった。

「ウオオオオオオオン！」

私は全力で月に吼えた。



野獣の咆哮は遙か彼方まで轟き、血の匂いが他の魔獣達を呼び寄せ  
る。次の獲物を、殺すべきケダモノどもを招集する。爪も牙も、獲物  
を狩るために研ぎ澄ませるもの、ケダモノたちを殺すもの。

繰り返される宴、臓物と鮮血に彩られた草原を舞台に、現れる獲物  
の命を刈り取るために舞い続けた。

静かに、笑う三日月が踊る私を照らしていた。



翌日、私たちは帰路についた。

道中、若き兵隊たちは口々に私がどれほど美しく、強かったかを称  
えたが、一晩明けて熱が冷め、やらかしてしまった私は借りてきた猫  
のように大人しい。

随分と遠くまで行ってしまったため、私の魔獣討伐軍はたつぷり一  
週間かけて首都へ帰還した。到着して玉座の間へ走り込んだ私に、ド  
ラちゃんは言った。

「血まみれだな……」

「体を洗い忘れたの!」

「返り血くらい落として来い。血生臭いから、体を洗え。話はそれか  
らだ」

「なによっ! 女王なら我慢しなさいよっ!」

「いいから行け!」

しばらく見ないうち、彼女の心労は更に増したように見えた。

しぶしぶと井戸で水浴びをして、ついでに毛づくろいを済ませ、  
すっきりした私は改めて玉座の間に向かった。

「セレブライトは襲撃の報告を最後に消息を絶った……どう思う?」

「……最悪」

ビーストマンという種族には、個として強い者はいない。一個小隊  
程度ならセレブライト一人で間に合う。何の連絡もなく消息を絶つ  
という現実には、考えられる選択肢は少ない。

それは、最悪にして最低と言える。

「まさかとは思うけど……プレイヤー？」

「……お前が、私のために暗殺したのかと思ったほどだ」

「勘弁してよ、兵隊さんを引き連れて暗殺も何もないでしょ」

「……だよな」

世界最強の実力を持つ戦士、いわゆる英雄に匹敵するのはアダマンタイト級冒険者だ。獣に後れを取るとは考えられないが、連絡もなしに消えるとなればそれ以外にない。

「襲われた村の調査に向いた者も戻らず、どれほどの被害が出ているのか把握もできん」

物憂げな表情の彼女を哀れに思った。

「虹色大先生は？」

「……後ろ」

「魂は少しの物質しか必要としないが、肉体は多くのものを必要とする。このような時、人間は酒を飲むのだ」

いつの間にか、茶色い瓶を抱えた美少年が壁に寄りかかっていた。

「いま一度問う。君は自らの本能を呼び覚まし、運命の歯車は噛み合った。悲鳴を上げて走り出す鋼鉄の運命は、弱肉強食の摂理を突きつけている。荒れ狂う大海原に投げ出された人と獣、本能を呼び覚ました人食い鮫の君は、どちらを先に食すのかね」

「……るっさいなあ」

私はきつと、中立になりたかった。人と獣、互いに相容れないのであれば、相容れないなりに共存共栄し、平和な世界にしたかったのだ。血が流れた今となつては、何もかも遅すぎる。

私の内側から聞こえてくる本能は、敵を殺せと絶叫している。

「私の敵はビーストマン」

「中立を望むのだと予想していたが」

人と獣、互いに相容れないのであれば、相容れないなりに共存共栄する選択肢は確かに存在した。ビーストマンの国家を復興し、あちこちから集めた死刑囚を餌として提供すれば、こちらは刑務所の設置をする必要がないし、死刑の手間も大幅に省ける。人間側が持つ積年の恨みつらみを見れば、国家として悪いことでは無い。

「恋と哀れは種一つ。恋愛体質気味の君は、人間に同情したのかね。哀れなる人間を守りたいと同時に、人間との甘い恋愛を望んでいるのか」

「そ——」

そうだと言いかけて私の口が閉じた。

頭にフラッシュバックしたのは、最後に別れた男の言葉。

《お前は一人で平気だけど、あいつは俺がいないと駄目なんだ》

(死ねや……)

あの男と同じだとしたら、あまりに身勝手な振る舞いだ。私は恋愛依存症ではない。過ごした時間が短く、誰かにこいをするほど時間を共有していない。

かといって哀れみも感じていない。私が惨殺した子熊の方がよっぽど可哀想だった。餌を探して静かに暮らしていた彼らは、出会った獣に一家惨殺されたのだ。それは、私がこの目で見たからに他ならない。

それでも私を人間側に寄せようとするのは——。

「気に入らない。ビーストマンが気に入らないから……私は、ビーストマンが嫌い。そう思ったから人間側に着く。それ以外の意味なんかない」

そうだ、それだけでいい。私はもう、人間ではない。化け物の私は気に入らなければ殴るし、ムカつけば殺す。

少年の持つ酒瓶を奪い取り、一気に飲み干した。初めて飲んだお酒は、水と変わらず飲み干せだし、飲酒による酩酊は起きなかった。私は濡れた口元を乱暴に拭い、笑う少年に向かって言った。

「……満足した？ 私はもう化け物だよ。酒なんて水と変わらない。人間のように酒を飲んで酔っ払って楽しむことだって、私にはもうできない」

「餓ころ……」

「私は、人間を守る……とか考えず、獣がムカつく。だから殺す」

「餓ころ……」

「ごめんね、ドラちゃん。私、聖人じゃないんだ。まあ、ドラちゃんの

代わりに汚れ仕事をぜーんぶ！ 私がやってあげるわね」

小さいドラちゃんは私に歩み寄り、そつと私に抱き着いた。私からは見えないが、泣いているように思えた。

「済まない……餡ころ。私はお前に」

「あーそういうのいいから。取りあえず離れてよ、動きづらい」

「……お前は変わらないな」

「結構だ。プレイヤーの望んだ世界の改変、ビーストマン殲滅会議を執り――」

「女王陛下あー！」

国の女王、プレイヤー、竜王が一堂に介した玉座の間に飛び込んだ異物。伝令を伝える近衛兵の顔は酷く青ざめていた。

「魔導王陛下の御友人と名乗る方が謁見を求めています！」

「私はここにいますよ？」

「そ、それが、また別の、その……はあ、はあ……ブジンタケミカツチと」

「え？ ……え？ 誰だつて？」

私は近衛兵の肩を掴み、激しく揺さ振っていた。

「餡ころ！ 止めろ、そんなに揺さ振ると死ぬぞ！」

「誰が来たつて!?! もういつペン言つてよ、早く！」

「武人建御雷……」

両手を離れた途端、彼はその場に崩れ落ちた。更に事態は混迷を辿っているようだ。

黙っている私の耳は、少年の呟きを逃すことなく拾い上げた。

「変革の始まりだ……」

## いざ燃やせ、陽の当たたる侍道

※共通

例えば、現代社会において食人鬼が出現したのなら、末路は安楽からほど遠い悲惨な死だろう。異物に排他的な社会は、人食いに生きる権利を与えない。これに関しては議論の余地がない。

ならば、食人種が犬や猫並に、あるいはそれよりも当たり前に種が確立された社会、弱肉強食の世界ファンタジーならどうだろうか。

人間の優位性が保証されない世界に生まれたのなら、生きるために戦うしかない。食人種の視点で見れば、やはり生きるために戦い、喰らうしかない。

どちらに生まれようと、戦い続けるしかない。

しかしその根本は現実と変わらない。弱者は常に犠牲・供物にされ、強者は積み重なった屍の山の上に拳を振りかざして正義を叫ぶ。自分の敵は誰か、現代社会という複雑なシステムの中で難解かつ回りにくい手法で覆い隠されているだけだ。異世界だからこそ、この問題を考えるというのは、思考放棄して生きてきた証明に他ならない。

何人であろうと、戦いの宿命から逃れることはできない。

●私は現実の残虐性を理解した上で、異世界へ飛び込むのだ。他者を圧倒する強さを携えた、本物の化け物として。

◆※表

私は異世界へ“熱”を求めた。

魂を焼き尽くす熱情を。灰になるまで身を焦がす業火の生を。命まで燃やし尽くす刹那の紅炎を。たった一つの命を散らすことになろうとも。どうせ遅かれ早かれ人は死ぬ。

一騎当千、一騎駆け、混沌の世界を切り裂く一本の刀として、戦いの世界へ身を投じたい。一瞬だけ煌めいては儚く消える火花のような生、それはとても魅力的な生き方だと私は思う。血に塗れた修羅の

果て、戦鬪狂の馬鹿馬鹿しい生き様は、かくも私を魅了する。意のままに振る舞えぬ歯車の生と比べ、如何ほどに充実した生だろうか。

これは唯一無二の、天が与えた奇跡だ。

望むべき役割演技は、武士のみのふ。立ちほだかるもの、情け容赦なき刃にて切り捨て御免。戦地に赴くは侍の生き様にて御座候。

「我が名は武人建御雷！ 信念に従い、最強の聖騎士を討ち倒すものなり也！」

深夜、気分の高揚に堪えきれず、盛り上がって叫んだ。懐かしきユグドラシルのアイコン、適度に愛でてからクリックすると視界は闇に飲まれ、遠くに銀色の門が見えた。

そして到着した異世界、見渡す限りの大草原が出迎えてくれた。

優しく顔を撫でる風が心地良い。空気は味がするほど濃密かつ鮮烈。太陽は空に居座り、平和な草原へ陽光を降り注いでいる。異世界はのどかで平和で、戦乱の痕跡は見られない。

不意に背後から、血の飢えた獣の息遣いが聞こえた。急いで振り返ると、そこには誰もいなかった。

「誰かいるのか？」

呼びかけに返事はなく、自分以外に生物の姿は見えない。唐突に敵と遭遇する危機は回避できた。

武人を演じる自分が手ぶらなのがどうにも収まりが悪い。装備品の所持はしていないが、囚人服のようにいい加減で簡素な服を身に着けていた。全裸でいきなり草原に放り出される危機もまた回避していた。

1キロほど先、都市が見えたので何も考えずそちらへ足を向けた。

近づくにつれて同方向へ向かう人間が増えていく。手近な人物へ気さくに手を振って会話を求めるも、相手は怯えて逃げだした。記憶していた自分の姿と、現実の姿に激しい乖離があるのは厄介なものだ。意思の疎通の前段階、階段を一步登ろうとしたところで踏板が引っこ抜かれたようだ。

それもまた致し方なく、私は無言で歩き続けた。武士が気さくにあちらこちらへ話しかけるのはおかしい。サムライとは硬派なもの、口

数も忍者に次いで少ない。清貧や体面を重んじなくて何が武人か。海をかち割った聖者に倣い、人の群れをかき分けて作った一本道を都市へ向かった。

高い城壁に囲まれた巨大都市の入り口の前で顎をガチガチと鳴らして考えていると、堅牢な門扉から雪崩でできた兵隊が取り囲んだ。槍だの剣だの弓だのの切っ先は一斉に私へ向けられたが、武器の程度が低すぎて命の危機を感じない。

「お、おい！ 言葉は通じるか！」兵隊の誰かが叫んだ。

返事の代わりに頷くと、一名がおっかなびつくり近寄って職務質問が始められた。書類と鉛筆を広げる彼を見ると、どこかでカタカタと鳴る音が聞こえた。音源を探すと、目の前に立つ青年の口の中、上下の歯が小刻みにぶつかり合っていた。

「そこまで恐れずともよい」

「しゃ、喋った!？」

「当然であろう」

「そ、そうだな……」

「うむ」

彼も彼で混乱しているように見受けられる。会話のかみ合わせが悪く、何度も間ができた。役割演技を間違ったのだろうか、心に不安の源泉が湧き上がった。

「な、名前！」

「我が名は武人建御雷」

「えー、所属は？」

「所属か。所属は異形種ギルド、アインズ・ウール・ゴウン、41人の一人。序列は11番。即ち、西向くサムライなり」

取り囲んでいる兵隊たちがどよめき、口々に何かを囁き合っている。何らかの反応が見られたので、横に並ぶ複数の目で周囲を窺いながら待った。

不意打ちで背後から叫び声が出たもので、驚いて叫びそうになった。

「ここでお待ちくださいー！」

「失礼いたしましたあ！」

私を取り囲んでいた全員、家主に見つかった泥棒がするように足をもつれさせて方々の体で逃げていった。都市の入り口で、決して近寄ろうとしないがその場を動こうともしない野次馬から遠巻きに囲まれ、しばらく放っておかれた。

(あの雲は猫っぽいな)

剥きだした歯をガチガチと噛み合わせながら、上空を漂う雲の形で連想ゲームをしながら暇を潰していると、先ほどの衛兵たちよりも装備のグレードが上の青年が現れた。

こちらを見上げ、目上の者にするように深々と一礼をしたので、私も習って頭を下げた。

「アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下の御友人とお聞きしましたが」

「魔導王？ 誰だ、それは」

「え……ご存知ありませんか？ アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下のお知り合いと」

「魔導王など知らぬ。私が知るのは異形種ギルド、アインズ・ウール・ゴウン。魔導王とは何者か」

「え、いや、あ……餡ころももち様はご存知ですか？」

「勿論、知っている。彼女はここにいるのか？ 私は今日、こちらへ来たばかりで」

「し、失礼いたしましたあ！」

どうにか納得してもらえたようだ。これより待遇は一変し、宮廷まで送ると言われて馬車を手配された。背の高い異形種になった私に馬車は手狭で、頭が天井にぶつかっていた。狭苦しい社内で身動きすらまともにできず、物置に放り込まれた気分だ。

それにしても先客がいたとは幸い、詳しい話は彼女から聞けばいい。

小窓から伺えるのは異世界の都市。観光を試みたいが、今は彼女と会わなければならない。石畳を走る馬車の揺れに身を委ね、案内されるままに宮廷へ着いた。いかにもファンタジーらしき宮殿だが、地味で簡素な造りだ。



兵隊に導かれた玉座の間で、小さな少女と館ころもつちもち女史が待っていた。久方ぶりに見た彼女のアバターは、本物の肉体が持つ生命力と美しさを携えていた。オフ会で会った時とはまるで違う魅力が彼女から発せられている。

(なんと美しいアバターだ……)

女性に不慣れな私は動揺をぶつ殺し、心の奥底まで沈めた。眉間に皺を寄せた館ころもつちもちが手招きの後、右手を差し出して向かいに座るよう促した。

「お久しぶり、館ころも——」

「あー、挨拶はいいから、さっさと座って」

「あ、はい……」

知り合いを前に役割演技は難しい。旧知の間柄では羞恥心への抵抗力が要求される。加えて彼女はなぜか機嫌が悪い。

恐る恐る腰かけるとソファアがずっしりと沈んだ。目と目では何も通じ合わず、会話の糸口を探す沈黙を経て、館ころ嬢が尋ねた。

「で？ そつちから何か言うことではないわけ？」

「な……ナニが？」

深いため息を吐いて彼女は続けた。

「あのさあ……確かに、建御雷さんと私じゃあ、やり合ったらそつちが勝つよ。多分、いや、間違いなく建御雷さんの方が強いと思うの。それは認めるけどさ、だからってビーストマン側について村を襲撃したり、竜王国の冒険者を殺すなんて最低よ。本当に人間辞めちゃったの？ 他のメンバー、そんな姿をみたら悲しむと思うよ」

「いや、あの……話が見えな——」

「しらばっつくれないでよ！ 全部、知ってるんだから！」

館ころの視線には旧友へ向ける温かみがなく、嫌悪が宿っている。隣の可愛らしい少女も、私を懐疑的な目線で見つめていた。痴漢の濡れ衣を着せられた冤罪者の気分だ。被害者の少女を庇う大人のお姉さんと、明確な容疑者の私。

二人の女性から嫌疑を掛けられて尋問されるのは初めてだが、新鮮であつても気分の良いものではない。背骨を汗が滑り落ち、緊張で体

中が熱くなる。

求めた熱とはほど遠い、厭な緊迫感だ。

気が付けば素に戻って弁解していた。

「あ、館ころもっちもちさん、再会していきなり何ですか。何が起きているのか説明くらい、してもいいんじゃないですか?」

「だからあー!」

苛立ちが頂点へ届いたらしく、机を叩いて立ち上がった。今にも襲い掛かってきそうな雰囲気、でかい凶体の芯が縮こまる思いだった。

「竜王国の村をケダモノどもと襲ったでしょう? 可愛そうな彼らを殺したことはあ! 絶対、許さないんだから!」

「はい?」

反応が鈍く、黙っている私を見て、館ころの顔から陰が消えた。ここで勘違いだと気付いてくれる人で本当に良かった。

「あれ?」

「誰と勘違いしてるんですか?」

「……マジで何も知らないの?」

「知るも何も、私は今日、ここに来たんですが」

「……マジ?」

「まじまじ」

会話の切れ間、唇のない剥き出しの歯がガチガチと噛み合った。意識してやった行為ではないので、アバターの癖かもしれない。

疑いが晴れたとは言い難いが、少女と獣娘はヒソヒソと何かを囁き合った。向かいで囁いているので時おり「話が違う」だの、「こんなはずでは」だのと言葉の切れ端が聞こえている。内緒の話は別の場所で済ませてもらいたいものだ。

結論が出たらしく、互いの顔を見て頷いてから館ころが立ち上がった。

「ターイム!」

両手でTの字を作って叫んだ。少女の手を引っ張って走り去る館ころはレベル100相応の力があるらしく、少女の両脚は天井を向い

て、めくれ上がったスカートの中に純白の下着が見えた。

そのまま扉を蹴破って出て行き、私は一人で残された。異世界に来た初日、私は頻繁に放置をされる。

「何だかなー」

シャボン玉よりも弱い眩きが割れた。際立たせた静寂の最中、入口の扉が少しだけ開かれ、餡ころが頭を覗かせた。

「建御雷さんてロリコンだっけー？」

「いいえ、違います」

「そか。すぐ戻つから待っててねー！」

また頭が引つ込んで、再び静寂が玉座の間へ訪れた。情報不足の私へ、何が何だかわからないまま、何が何だかわからない事態は続く。

ギイイと悲鳴を上げて扉が開き、餡ころが戻った。

「お待たせ！」

「ちよつと餡ころもつちもちさん、一体なんなんで——」

振り向いた私の言葉は鈍化<sup>スロウ</sup>を掛けられた。視線を釘付けにして体を硬直させたのは、餡ころの後ろから追従する一人の女性だ。

「すかあ……」

言葉は尻すぼみになって消えた。

特権階級者の前にしか降臨することのない女神、夢や妄想の世界にしか存在することない大輪の花、飢えた狼の欲望を刺激して理性を奪う神の作りし芸術。

どれほど称賛を込めた形容をしようと、ここにいる絶世の美女の魅力を伝えるには言葉が足りない。真に絶世の美女とは、こうも男の視線を釘づけにしてしまう。

視界の片隅、餡ころがしてやったりとほくそ笑んでいる。そうと知りつつ、私の視線は彼女から離れられない。立ち上がって手を伸ばせば届く距離に、生身の美女が息づいている。

彼女は緊張を匂わせるぎこちない動きで対面のソファアへ座った。腰かける際、やや俯き加減で豊満な胸が強調され、更なる膨張を求めているかのように揺れ動いた。

「はーい、注目ー！」

館ころが手を叩き、視線を呼び寄せる。そこでようやく私は我に返って咳払いをしたが、少しも誤魔化しきれないだろう。視線は断固として胸の谷間への帰還を請求し、未練がましく何度も視線が動いた。

まったく、武士が聞いて呆れる。

「こちらの淑女はね、私の友達で竜王国の女王なのです。何とまだ処女で、今ならこの国を救ってくれるヒーローに全てを捧げる所存なのでいす」

「おい、館ころ……間違っていないが、そんな説明をするな」

顔に似合わぬ太々しい口調だったが、美はその程度で揺るがない。その姿では何をしていても様になるものだと、館ころと会話している数秒間だけ見惚れた。

「いいじゃん。ドラちゃんだってこの姿の方が気楽でしょ?」

「う……ん、まあ……」

「顔良し、胸良し、立場も良し! こんな優良物件、なかなか無いよ?」

私は静かに頷くと、顔を赤らめた美女は小さく頭を下げた。

「確かに、美人だ」

「あ……ありがとう」

何も通じ合わないが、私たちはお互いに見つめ合った。館ころが大袈裟な咳払いをするまで、出会った男女は静かに見つめ合っていた。

「ゴホン! ゴツゴホ! ウオツホン!」

「は……失礼」

「ドラちゃん!」

「あ、は、ゴホン!」

風邪が流行っているらしい。

「お初にお目にかかります、武人建御雷様。私はこの竜王国を統べる女王、ドラウテイロン・オーリウクルスでございます。先ほどの小さな少女は、私が変化した姿。曾祖父様で国家の祖である、フライトネス・ドラゴンロード七彩の竜王の曾孫にあたり、変身能力は遺伝でございます。支配国である魔導国を束ねる魔導王陛下の御友人として、以後、お見知りおきを」

「あ、よ、よろしくお願いします」

「なあにー？ 照れちゃってえ、かーわーいーい！」

冷やかしの通り、私は美女を前に照れている。事前に考えていた役割演技ロールプレイなど何処かへ飛んでしまった。異世界転移の役割演技ロールプレイは初日から転びっぱなしだ。

焼きたての食パンのように、反射的に指で押したくなる豊満な胸と純白の素肌を持つ美女を前に、動揺しない男がいるのならお会いしたい。視線を動かした隣で、館ころ女史が自分の胸を強調するように腕を中央に寄せた。

「それとも私の方が好みだった？」

「い、いや、早く説明を……」

「では、女王の私からこの国をかいつまんでお話を——」

「ちよつと待って、ドラちゃん」

館ころが急に周囲を見渡し、美しい女王は眉間に皺を寄せた。

「虹色大先生は？」

「彼の帰還を聞いて、さつさと出て行つたぞ」

「何だよ。冷たいんじやあなあい？」

「今度こそ世界の革新をこの目で見届けるのだ。……と言いながら立ち去られた。曾祖父様のお考えはよくわからん」

「絶対、なんか知つてたよね」

「私もそう思うが、何か深いお考えがあるのだろうか」

「そうかなあ……」

「あのー……話の続きを」

武士の名が廃るが、美女とお近づきになっている館ころもつちもちが羨ましい。



unnecessary 三時のおやつ休憩で煎餅が振る舞われた。ガリガリと噛み砕きながら話は滞りなく進み、説明されること小一時間。聞く一辺

倒に努めた甲斐あって、モモンガさんの作った魔導国、その属国である竜王国の状況は把握できた。

戦場を駆けるいくさ人に垂涎ものの舞台だ。私と館ころ嬢の転移時期の差は、各々が望む舞台のために調整してくれているのかもしれない。

「そのタイミングで私が来たら誤解するかもしれませんがね」

「本当は、まだちよつと疑ってたりして……」

「館ころさん……」

「本当にタケちゃんじゃないの？」

「タケちゃん……？」

「あん、だめえ？」

人差し指を唇に当てながら上目遣いする獣娘に反論ができない。距離の詰め方が上手いのは、累積した恋愛経験値が成せる業だろう。思わせぶりな態度も何らかの思惑があるに違いない。間違いなくそれはずだ、そうでなくては困る。

「でも、タケちゃんが来てくれて本当に良かった。ドラちゃん、彼は41人中、上から数えたほうが早い強さなの。魔法は使えないけど、物理的な攻撃力ならモモンガさんより強いんだから」

「そ、そうなのか？ 魔導王陛下より上がいるのか」

「だよね、タケちゃん」

「装備が本来であればの話ですよ」

彼女の言う通り、装備を整えれば上から数えたほうが早い。作りかけの武器を完成させたうえで、他の必要な条件が揃えば、最強の正義と互角以上に渡り合えたと自負している。

「せっかく来てくれたから色々と話したいんだけど、今日は来たばかりだからゆつくり休みなよ。ドラちゃんが部屋を用意してくれるから。明日、何かしたいことがあるら聞けけど？」

「そうですね……武器が欲しい、かな。できれば刀が。それと、この国で一番強い騎士に稽古をつけてもらいたい。戦闘訓練は必要でしょう」

「あー……そっか、今日来たから何も知らないんだよね。あのね、この

世界の英雄のレベルは低いよ？ 30で英雄級っていうから、まず物理関連の無効化を貫通出来ないよね。大抵のプレイヤーは雑魚対策でその手のパッシブ取得しちやってるし」

「はっはっは、面白い冗談ですね」

「いや、マジ」

「嘘でしょう？ 嘘と言ってください」

「本当だってば」

「はああああ……」

やる気のない深い溜息後、私は頭を押さえて項垂れた。

英雄が30レベル相当の世界に降り立った私は、レベル100の異形。今より強くなれないという結論に失望を禁じ得なかった。世界が弱い系の話はすぐに行き詰まる。私の人生は既に終わり同然だ。

「死のう……」

「ええ？ なんですよ。だって、何もしなくても最強なんだよ？」

「鍛錬の成果がないのが虚しい。弱者が己の力での上がって戦場を駆けるのが理想だった」

「成り上がるならドラちゃんど結婚すればいいじゃない」

隣の女王が館ころを睨んでいた。

「権力的な意味じゃなくて、戦いたかったんですよ」

「バトルマニア系？ あ、でも、敵はいるよ。これからビーストマンの残党を皆殺しにして、英雄級の冒険者を殺した敵プレイヤーを倒さなきゃいけないんだから」

「館ころさんもだってでは最強級なんでしょう？ 横から入って活躍するつもりはありませんよ」

「いやいや、異世界でPVPって、負けた方は死んじゃうでしょう？」

私、痛いのも死ぬのも嫌だもん。タケちゃんがいれば1対2で楽勝でしよ」

「しかし、それは殺人に——」

言いかけて口を噤んだ。戦場の修羅になると豪語した者が、何と下らないことを言おうと思ったのだ。この異世界において殺人という行為は現代社会ほど厳しくはない。敵大将の御首みしるしを上げずになん

する。

「この国を助けてくれないの？　こんないい女が困ってるのよ。」

現代の倫理は机上の空論だ。そんなものに縛られると、継るような目で私を見ている女王のように困っている善人を見殺しとする下劣な性悪論だ。

獣娘の手が美女の肩に置かれた、女王が私を真正面から眺めた。

「タケミカヅチ様、私にできることならば、どんなことでも致します。妻になればというならば、あなたが死ぬまで尽くしましょう。魔導王陛下に頼めば、人間に化けて世界を楽しむことができます。情交も人間と同様にできます」

「私は化け物ですが」

「構いません。お望みのまま、破瓜の痛みに耐えて見せます」

女王陛下は追い詰められた顔をしている。彼女の身に纏っている影が、駄目男に捕まって生活に疲弊する人妻のような色気を醸し出していた。これはとても魅惑的な提案で、私の中で構成されている武人が蜃気楼のように揺らいでいる。

この場で無下に断ることはできない。元人間の私が異形種側につき理由がないし、私の反応を観察している餡ころと戦闘になりかねない。

脳裏に浮かんだ正義の幻影が私を惑わせる。

『困っている人がいたら、助けるのは当たり前！』

鳴門海峡の渦巻きよろしく、ぐにやぐにやと思考が歪んだ。

「女王陛下。拙者、己が剣を捧げるに足る主君の旗の下で戦わせていただきたい。ご助力の件、しばし時間をいただきたいでござる」

「そうですか……」

侍の態度に困惑が見て取れた。

「わー、実機でロールプレイしてるよ。それ、サムライ？」

「餡ころさんはロールプレイとかないから楽ですね」

「そんなことないわよ。私はもうロールプレイしてるけど」

「何の？」

「女」



人差し指を唇に当て、思わせぶりにウィンクした。性別は役割演技ロールプレイが必要だとは知らなかった

「大丈夫だよ、ドラちゃん。これでもタケちゃんは優しいんだから」

「今日、初めてタケちゃんと呼ばれましたが」

「館くろお、適当なことを言うな。困っていらっしやるじゃないか」

どちらかと言えば、気さくな態度で私にも接して欲しい。

姉妹のように仲の良い二人の女性を前に、疎外感を禁じ得なかった。



武士と騎士。両者の明確な違いの一つとして、仕える主君が挙げられる。

武士は己の矜持のため、騎士は主を守るために戦う。ここで女王陛下を助けるべく剣を取り、敵プレイヤーの前に立ちはだかるは騎士の戦いくさ。彼女をものにしようと思うなら即答で従うべきだ。そう考えてしまうほどに、彼女はいい女だった。

それでは、私はなぜそうしなかった。

魔法道具の照明がぼんやりと照らす室内。キングサイズベッドの中央に大の字で転がり、天井を見上げながら鼻歌を口ずさむ。

「鬼おにに会えば鬼を斬りい、仏ぶつに会えば仏を斬りい」

私は熱くなりたいのだ。己の生を全うし、修羅の道を行く武人。武士は食わねど高楊枝、女に骨抜きにされる侍など侍にあらず。

自分で思うより、私は我儘だったらしい。

一騎当千は男の夢。私の求める熱は騎士ではなく、武士もののふにあり。私はこの世界へ闘争を求めた戦闘狂、殴り合っ分合ぶんあり合える単細胞を演じきたい。

式式炎雷さんと互いの背中を守りながら、共闘して戦場を踏破する妄想は血が騒ぐ。女一人に惑わされる私は、ザ・ニンジャさんから何を言われるか分かったものではない。

『建やん……サムライのロールプレイは現実に忘れたか?』

腕を組んでこちらを見下ろす彼の姿が天井付近に浮かんでいる。女王を娶るなどと、とても彼に顔向けできない。

不意に扉がノックされ、忍者の幻が消えた。

「建御雷さま、夜分に失礼します。ドラウデイロンです」

「どうぞ……」

必死で諫めたここまでの自己啓発が、彼女の声を聞いただけで揺れている。欲望は御しがたく、男とは実に救いがたい。

ベッドから体を起こすと、薄手の寝間着に着替えた彼女がしずしずとこちらへ歩いてくる。彼女と目が合うたび、心臓が跳ねあがるので溜まったものではない。戦う前に心筋梗塞で卒倒しかねない。

「何か？」

「その……人恋しいもので」

「それは難儀ですな」

自分でも何を言っているのかわからない。シースルー生地のスリジエを身に纏い、下着まで透けている彼女に理性が消し飛ばされようとしている。

「昼間に話したのは全て本気です」

彼女は無言でベッドの縁へ腰かけ、私に背中を向けた。

「な、なんなら、これから私を抱い——」

「どうにも解せんのですが、尋ねても良いでしょうか？」

「……どうぞ」

誤魔化しがてらの話題転換に、怒っているような返事が聞こえた。

「戦争はモモンガさんが終わらせている。餓ころもつちもちさんが協力すれば、ビーストマンの残党や敵プレイヤーなど物の数ではない。助けるも何も、餓ころさんがいれば結果は見えている。あなたが私に身を捧げる必要も無ければ、次の戦争が起きることもない」

「弱者の苦しみがわからないのですね……」

「そうだろうか」

「おっしゃる通り、敵国家は既に壊滅され、残存兵力などたかが知れている。それでは此度の戦で勝利を挙げ、皆さまが魔導国へ帰った未来、この国に何が待つのかわかりませんか？」

今回の戦争が終わって、何が残るのかと問われている。しつとりとした雰囲気を壊さぬよう、慎重に答えを選んだ。

「何も残らない……か？」

「ビーストマンが絶滅したとしても、せつかくこの国に舞い降りた建御雷さま、餓ころはいずれ魔導国へ向かう身。強者の消滅したこの国で暮らす人間たちは、食人種や魔獣達に怯えながら次の強者を待たなければならぬ。この国を守ってくれる存在を」

「それこそ魔導国へ要請するべきでは？」

彼女のしなやかな手が、私の大きな手を鍵盤をなぞるようにそつと置かれた。

「あなたがこの逞しい腕で剣を振れば、戦況は変わってしまう。プレイヤーの強大な力を目の当たりにした民は、貴方を戦神として崇めるでしょう。しかし、戦争が終われば魔導国へ行かれる身。長きにわたって食人種に虐げられた竜王国の民は、強者へなびきやすい体質になっている」

「なるほど、魔導国の手配した守護者では役不足か」

「私とあなたが婚姻を結べば、憎悪で綴られた竜王国の歴史に、純白で裝飾された安息の日々が始まる。強者に守られるという安息とは甘美なもの。国を統べる魔導王の友人、人間に慈愛を注ぐ異形の強者。国民を安心させるにこれ以上の話題はないのです」

しなやかな手が、私の二の腕を登り、胸へと移動する。背筋へぞくぞくとした悪寒が走り、鳥肌が浮き立った。彼女の行動が求愛ではなく打算だとしても、その誘惑を突き破るには相応の胆力が必要だ。

「あなたは竜王国の救済を感じさせてくれた。私の夫になっていただけなら、この体を好きになさって構いません。欲望に身を委ねて何度でも私を抱き、好きだけ子を孕ませることが出来る。その後で、後宮も好きに作ればよろしいでしょう」

突き詰めれば、ここに降り立ったのが他の男性メンバーでも同じことを言ったのだ。ならば、ここで私が彼女を抱く必要はない。彼女にその身を捧げるプレイヤーは、41人の中で一人くらいはいるだろう。

「全てのプレイヤーが異性や情交に重きを置くと思わないでいただきたい。遅かれ早かれ、他の者たちも来る。41人もいれば、誰かがあなたを愛してくれるだろう」

「……うっさいなあ。さっさと抱けばいいものを」

唇を尖らせ、拗ねた顔で文句を言う彼女が、素の表情を見せてくれているようで嬉しかった。これで私の数十倍も年上だといふのだから異世界の法則には驚かされる。

月明かりが差し込んでいる窓の端、黒い影が動いた気がした。私は彼女を退けて窓際へ立つ。開け放つと、新鮮な夜の空気が舞い込んできた。周囲を見渡しても誰もいない。ここは宮廷の上層階で、人間は存在できない場所だ。

振り返って私を籠絡しようとする女王を眺めた。

「訪問客の私に敬称は必要ない。館ころと同様に接して貰って構わん」

「そうか……?」

「女王ドラウディロン殿、誰かれ構わず身を捧げる必要はない。やがてその身を尽くしてくれるものが現れる。私は女王との婚姻を望まない」

「……ならば聞かせてくれ。お前は这个世界で何を望むのだ」

「炎の如く燃え上がる生を」

「お前……もしかして馬鹿か?」

そう言われて悪い気がしないどころか、褒められているようで口が勝手に歪んだ。にやけている異形の私に、彼女はため息を吐いてベッドから飛び降りた。そつと音を立てずに近寄り、華奢な手が私の右手を掴んで自らの胸へと誘導する。

「それでも男か。こんないい女を前にして、抱きたいと思わないのか?」

私のロールプレイ演技は再構築するたびに瓦解する。私はそつと優しく、たんぽぽの綿毛を撫でるように彼女の胸を揉んだ。とても揉み心地が良く、劣情に身を委ねるのも悪くないと思わせた。

そう悩んだ短い時間、私の右手は彼女の乳房を揉み続けていた。

「ふつう……」

「……御免」

女王の紅潮した顔に喘ぎ声が艶めかしい。いつまでも味わっていただくような心地よい感触を差し止め、右手を離した。

「私は人間ではない。こんなことをしても、人間だった時ほど喜びはない」

どの口が言うのかと自分でも思う。

「人型に近い相手を選ぶでござる」

「ゴザル？」

「自分の部屋へお帰り願いたい」

「面倒な奴だな」

彼女は背伸びびして剥き出しの歯を奪おうとしたが、背が高くなった私には届かない。

無骨な武人に甘い恋愛劇は無用の長物。

彼女は頭を抑える私の手を潜り、拳句の果てにベッドへ飛び込んだ。枕から羽毛が複数枚、吐き出されて眼前を舞い落ちた。

「今日はここで寝る。光栄に思え、女王が添い寝をしてやるのだ」

「……なにゆえ？」

「私に惚れるがいい。そして離れられなくなればいいのだ。これでもずつと我慢していたのだ、小さい体では色々と不便でな。私の本当の体はいい女だろう」

「ふふん」と挑むよう笑って靴を脱ぎ捨て、その胸を両手で持ち上げて揺らした。なんと下品な振る舞いだ。

「これにて御免」

「え？ ……あ、待てこら。待たんかい！」

打算の夜這いを回避する策は逃走のみ。

異世界初夜、私は王宮の片隅で野宿する羽目になった。本物の流浪人になったようで気分がいいが、明日以降、全く同じ状況が繰り返されるのだと考えると億劫だ。

(異世界へ女抱きに来たわけじゃない。わけじゃないが……)

畜生、本当にいい女だった。

私は欲望を鎮火すべく、人目のない場所を探し回った。



賢者モードを引き摺りながら王宮の庭で横になっっている浮浪者の私は、心地よい朝に立ち上がって大欠伸をした。

「おっはよー！」

「うおわああー！」

館ころもつちもちが明るい笑顔で不意打ちをかました。油断していた背中に平手打ちをされ、涙ぐむほど痛かった。プレイヤーに対抗するにはプレイヤーだと痛みで思い知らされた。

「痛ったあ……館ころさん、手加減を」

「それでも武人かい！」

「……すみません」

「うふふ……武器屋、行こっか！朝食も食堂に用意してくれてるみたいだから、案内するね」

食堂で用意されていた朝食を食べさせられ、足早に私たちは外へ出て行った。食事に感動する時間をまともに与えられず、まくし立てる館ころの話に対して聞き役へ回された。

「だからね、魔獣とビーストマンは違うの。慣れないうちは知性のない魔獣を倒すといいわ。私もこの兵隊さんたちのレベルアップも兼ねて夜、外回りしてたもの。タケちゃんも戦闘訓練なら夜、外で魔獣を——」

彼女はとにかくよく喋る。

武器屋へ案内してくれるのはありがたいが、館ころ女史の密接な距離感が気になり、武器屋の打ち合わせも上の空だ。ひん曲がった刀ができないといいのだが。

通行人たちの好奇と恐怖の入り混じった不可思議な視線にぎくぎくと刺され、武器屋を出てすぐ宮廷へ戻った。獣娘の胸の感触がいつまでも右の上腕二頭筋あたりに残され、もはや観光どころではない。

食堂にて用意されていた昼食を食べるが、彼女の唇、胸、くびれの

曲線など、一度、意識してしまった現状、彼女は私の中で女になってしまった。女性らしさを感じる場所へ視線が吸い寄せられ、砂でも食っている気分だった。せつかくの食事だというのに、性欲に支配された男とは御しがたい。

(野獣、死すべし)

「——でね……ってタケちゃん、聞いているの?」

頭を前に押し出すように顔を覗き込む彼女に、顎を開いて見とれてしまった。彼女のように明るく、こちらへ関心を示す女性は大半の男性が好みだろう。恐らくは、こちらを窺って遠巻きに囁き合っている衛兵たちも同様に。

「聞いてなかったでしょ!」

「あ、はい……すみません」

「もうっ。午後は兵隊さんたちの稽古をつけるから付き合っ。若い子なんて可愛いもんよ。なんか教師になった気分ていうか」

「やまいこさんがいれば良かったですね」

「うーん、でもやまちゃんは優しいから、この国には合ってないと思うな。話ができる魔獣は殺せないと思う」

「そうでしょうか」

「侍のロールプレイは止めたの?」

「……かたじけない」

「なんか違うくない、それ」

それにしても言葉が尽きずによく喋る。女性は男性の三倍も話すというが、彼女は私を基準にして軽く五倍は話している。

「——ねえ、前向きに考えておいてよ」

気が付けば、机に置かれた私の手に餡ころの手が重ねられていた。

「あ、は、え? 何の話でした?」

「ドラちゃんとタケちゃんの結婚よ」

「な、なにゆええ?」

「美人で女王、しかも処女。加えてタケちゃんも童貞っしょ?」

「……」

「ドラちゃんはヒロイン以外の何物でもないわよ。早い者勝ちだよ?」

他のメンバーにドラちゃんが取られてもいいの？　ギルメン同士のマジギレPVPが始まるかもよ」

「そうでしょうか。式式炎雷さんなんか、女に現を抜かすとは思えません」

「男は初めての女を強く意識するものでしょう？」

「……経験ないから知りませんし、どうでもいいです。それより、この手、早く離してください」

「だーめっ」

私が手を引っ込めようとするも、館ごろの力は緩まない。加えて獣特有の可愛らしい瞳で見つめられ、反論もままならない。異世界でプレイヤーと対等な女性は同じプレイヤーだ。彼女は女王とはまた違った立場の存在だ。

「あのね、セックスは崇高なものじゃないのよ？」

ガキリと顎が噛み合った。

「私だって、寂しいからろくでもない男と付き合ってたし、何の生産性もなく抱かれてた。本当に駄目な奴でさ、浮気して私を振ったんだよ。でも、やっぱり一人は寂しいもん」

「……へえ」

少しだけ、本当に少しだけ、その男を殴ってやりたくなった。

「あの小さな女王様はね……数百年も、誰にも頼れず、誰も好きにならず、逃げられもせず、竜王の名誉と国を守る重圧にたった一人で耐えてきたんだよ。追い詰められたドラちゃんを救えるのはタケちゃんだけなの……」

重ねた手が震えている。私を覗き込む彼女の瞳は、いつしか継るようなものに変わっていた。

「お願い」

「……」

「タケちゃん」

「わか——」

突如、会話を切り裂くガラスの破碎音。それがなければ私は「わかった」と言ったに違いなかった。婚姻フラグをバッキリとへし折つ



た方角へ顔を向けて知ったが、若い青年兵隊が一人残らず敵意を込めて私を睨んでいた。彼女を美しいと思っっているのは私だけではないらしい。

手を離して騒ぎの渦中へ向かうと、人垣が通路を空けてくれた。

投げ込まれた異物を見たとき、餡ころの食いしばった歯がギリリと強い音を出した。切断されて間もない白髪男性の生首が床に転がり、新鮮な血が滴っていた。頭蓋は何ものかに齧られたように一部が欠損していた。

「ぎげんなよ……畜生」

「知り合いですか？」

彼女は答えなかった。正直、生々しい死体に触れるのも嫌だったが、彼女や若い青年たちの前で情けない素振りを見せられない。ずつしりとした感触の頭を持ち上げると、齧られ頭蓋の欠損部分から桃色の脳が覗いていた。

（気持ち悪いな……）

卒倒ものの光景だが、血の気が引いて少しだけ顔が涼しくなった程度で済んだ。やはり私は人間を辞めたようだ。落ち着いて観察してみれば、首の断面図から紙きれが覗いていた。

そこへ指を突っ込んでぐちゅぐちゅと音を出しながら引き抜くと、女王宛の手紙だった。

「手紙ですね」

◆  
召集令状<sup>紙</sup>は日本語で書かれていた。

『和平申し入れ』と書かれた羊皮紙の手紙には、日時、場所の指定以外の文面は無かった。我々をこの世界へ呼んだ者と同様、相手を安心させるような気づかいは見られない。明日の正午、竜王国近郊の草原でピーストマン側の何者かが待っている。

恐らくは、敵対プレイヤーが。

館ころもつちもちは毘だと断定し、兵隊たちを組織して討伐に乗り出す準備を始めた。

「全員、整列！」

「ちよつと館ころさん……和平と書いてあるんですから」

「なに、文句あるわけ？」

「いや、和平に軍隊で乗り込んではずいでしょう」

「あのね、タケちゃん。数か月先に来た先輩として教えておくけど、ケダモノどもは皆殺しにしないと人間が安心して生きられないのよ。だってあいつら」

館ころは震える拳を強く握り、牙を剥いて吠えた。

「幾つの村が奴らに壊滅させられたのかわからない。女子供だったたぐさん、やつとみんな幸せに笑うことができるようになったの……村にいた人たちを皆殺しにしたケダモノは絶対に許さない！ 奴らは皆殺しにしないと人間が生きられないんだから、当然、あなたも人間側に着くよね？ そうでしょう？」

「う……ああ」

「そうよね、よかった」

彼女は私が人間側と答えなければ襲い掛かっていただろう。そう感じさせる敵意で両目が燃えていた。女性はどうしても感情的になりやすく、このままだと和平会談は決裂間違いなしだ。

夕食を終えてからずっと、客間で考えていた。このまま進めば交渉は決裂し、開戦の狼煙へ早変わりする。私は私なりに一手を打つしかない。

「ふにゆう……私、寂しいのにや。だから、今夜は一緒にいてほ——」

「お断りだ！」

「あ、ちよつと！ このへタレ！ 鼻毛——」

結果的に私を誘惑する館ころもつちもちから逃走できたのは、独断専行を目論む私の後押しとなった。王宮内の草むらに身を隠して仮眠を取り、太陽が昇る寸前の明け方、人目を忍んで王宮を出た。

当然、予定時間よりも早く現地へ着く。

和平会談は手ぶらで向かうが筋であると同時に、相手の正体を知る絶

好の機会だ。そもそも、アインズ・ウール・ゴウンの二人がいる竜王国側に負けは無い。世界級のアイテムや神ゴッズクラス級で身を固めたプレイヤーが出ない限り、我々の敵と成り得ない。

その油断は正確無比な狙いで撃ち抜かれた。

草原に着いた私は小さな小屋の扉を叩く。森司祭ドルイドが好んで作る避難小屋に酷似していた。ノックに応じて扉が開かれ、武装した白い虎の子どもが驚いた顔で私を見上げた。

「竜王国のものだ」

「まだ早い」

「君たちの指導者に会いたい」

「しどーしゃ?」

「ボスに会わせていただきたい」

「なににする?」

言語体系が違うらしく、日本語を覚えてたての外国人に思えた。

「話がしたい」

「入れ」

屋内の造りは簡素なもので、机と椅子が適当に並べられている。仄かに鼻を突くのは鉄錆、これは血の匂いだ。綺麗に掃除されているが、付着した血の痕跡は簡単に消せない。そう遠くない過去、ここで凄惨な何かが起きたはずだ。

やがて扉が開かれ、何者かが入室してくる。朝日の強烈な逆光で顔と姿は影しか見えなかった。私は立ち上がり、一礼を行なった。

「予定時間より大分早いが、先に私が話をさせていただきたい。私は――」

「建御雷、さん……」

そこには見覚えのある岩石のような顔が立っていた。

「驚きましたね、お互いに」

「ブルー・プラネットさん?」

「ええ、お久しぶりです。餡ころもっちもちさんが人間側のプレイヤーと聞いていました」

「実は私も一昨日、この世界へ来たんですよ。あちらでは世話になっ

たもので、いわゆる一宿一飯の礼と、敵情視察という奴です。あなたはなぜそちらへ？」

「話せば長くなるんですが――」

およそ一万五千文字ほどの説明で、彼の置かれている環境が拗れていると理解できた。館ころもつちもちは人間側、ブルー・プラネットが獣側、真つ二つに分かれたこの竜王国付近、導火線に火が付く寸前に私が到着した。

敢えて理由をつけるなら、この和平会談を成立させるためだろう。

「建御雷さん、モモンガさんは何も考えずに彼らの国家を滅ぼしてしまった。しかし、彼らはただ生きたいと願っただけだ。ビーストマンの避難地を作ることも容易だったはずなのに、彼はそれをしなかった。これは同じギルドのメンバーとして、贖罪するのが筋でしょう。いまや、ビーストマンは絶滅危惧種だ。人間の数とビーストマンの数、天秤にかければどちらを選ぶなんて考えるまでもない」

彼の意見にも一理ある。人間の十倍強いビーストマンも、今となれば人間の方が多い。モモンガさんの超位魔法が彼らの国家を壊滅させた結果が今だ。ビーストマンは世界の外から飛来した生物に侵略され、絶滅されようとしている。ならばそれを保護するのもまた、外なる強者の役目。

いかにもブルー・自・主・義・者・プラネットさんらしい結論に感心したと同時に、致命的な決別に寂しさを禁じ得なかった。

「建御雷さん。モモンガさんというプレイヤー、外来種に食い荒らされた彼らを守らなければなりません。正義の味方がいれば、きつとそうしたと思うんですよ。建御雷さんはビーストマン側についてもらえますよね？」

彼は私の勧誘を始めたが、選択は正しい。三名は本来の装備ではないが、データ量が低くとも刀さえ手にすれば私が頭一つ、あるいは二つほど秀でる。私を引き込んだ側は確実に勝利を掴む。

かつての仲間を殺し、その屍を越えて。

現実とは皮肉で残酷なものだ。今、逃げ場のない私に選択を突きつけている。獣側か、人間側かではなく、ブルー・プラネットと館ころ

もっちもちのどちらを殺すのか。

しかし、私には第三の選択肢が見えている。

「ブルー・プラネットさん。俺たちは中立になるべきではありませんか」

「は？」

「ごつごつと岩に似た顔の彼は、聞き間違いを疑って耳の穴をほじった。

「すみません。多分、間違いだと思いますが。いま、中立とか寝惚けたことを抜かしましたか？」

「……ええ」

「舐めてるんですか？」

「私は真剣です」

「中立……中立だど!？」

青い惑星は立ち上がり、テーブルに手を叩きつけた。

「人間を守るためという大義名分を振るい、ビーストマンたちを絶滅寸前まで追い詰めておきながら、人間に都合が良いから仕方なかった、必要な犠牲だったと都合よい口でほざく。中立を掲げ、次に人間はどうする!？」

「メンバー同士で争う必要はな——」

「彼らを保護する振りをして人間の奴隷にするのか？ その後で人間は人間同士で殺し合い、積み上がる屍を礎に巨大国家を築く。人間以外の種族の亡骸を地盤に造り出される一大国家は、巨大な狂気の山脈だ!？」

私がギルドに在籍した数年間、彼が本気で怒った場面を見たことはなかった。使命感を背負った彼は何かあるうと決して引かない。戦力的に上位者の私に食って掛かっているが、既に自らの命さえ省みない覚悟を決めているのだ。

「……共存共栄はいけませんか？」

「ああ、失礼……取り乱しました」

彼は咳払いをして座り直した。

「中立が……悪いとは思わないですよ。しかし、この『中立』とやら

が成立する前提が厄介でしてね。ビーストマン側が主体にならないれば成立しない。人間はいつまでも何かと争い続ける、救いがたい狂った生命だ。獣だけが彼らを守り、一定の数を保ちながら安寧の国家を築くことができる。人は管理されなければならない。そうしてこそ人は人を殺さず、人は人と争わず、必要な数だけビーストマンに間引きされて世界に命が回っていく。森羅万象、世界の調和を考えた真の共存共栄とはそういうものでしょう?」

互いに手を取る選択肢は彼の前に出現しなかった。

ここで反論できない自分が不甲斐ない。人間同士の醜い争いは防げるが、長い目で見れば獣への小さな憎悪をチリチリと燃やし、暴動の種を遠い未来へ先送りとする。その規模によっては、結果的に人間が滅びる可能性もある。

しかし、それらを踏まえてなお、納得できない問題点が残っている。

「館ころさんと殺し合うんですか?」

「それも覚悟していましたが、建御雷さんがこちらへつけばそうはならない。2対1で戦闘を仕掛けるほど彼女も馬鹿じゃないでしょう。正義さんの背中を追いかけていたあなたがよもや、ビーストマンを絶滅させてまで人間側に着く悪だったなんて……あり得ませんよね?」

「どちら側とかではなく、なぜ私たちフレンド同士で代理戦争をしなければならぬのでしょうか」

「始まったからでしょう」

「何がですか」

「戦争が」

いつの時代も、戦争は個人の思惑から外れ、独立した生命体のように動き出す。一度、動き出したら誰にも止められない。この戦争を止めるには、開戦の狼煙が上げられる前、今しかない。

「オラあー!」

扉が蹴飛ばされ、破壊された木片が私とブルー・プラネットさんに降り注いだ。どうやら、私の独断専行を察知した獣娘が到着したらしい。全身の毛を逆立てて怒り心頭だ。

「建御雷い! 勝手な真似をしてどういうつも……り?」

胸倉を掴み上げようと近寄った彼女は、対面に腰かけている彼を見つけて動きを止めた。途端、嬉しそうに喜ぶ嬌声が室内を反響し、彼女はブルー・プラネットへ抱き着いた。

「ブルー・プラネットさん！ きゃー！ 久しぶりいい！」  
「うわぶ」

岩のような顔が柔らかかそうな胸に挟まれ、ゴロゴロと谷間を動いていた。もがき苦しんでいるように見えるが、彼女の拘束が緩められる様子はない。

「いやーん、いつ来たのよー！ 連絡くらいしてよ、もう！ 大変だったんだから！ 人間とビーストマンで戦争が始まろうとして——」  
「その辺りで離してあげては？」

可哀想なブルー・プラネットは、女性の胸に埋もれて声を封じられ、館ごろの腕をタップしていた。異形とはいえ彼女の胸に顔を埋める彼が羨ましい。

「ああ、ごめんごめん」  
「ブハッ！ い、いきなりなんてことをするんですか！」

「なによ、照れる年じゃないでしょう」  
「そっちだって！」

「レディに年齢を指摘しないで、野暮天！」  
「はいはい、二人とも落ち着いて席に着きましょう。こうしてギルド、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーが三人もこの場に集まったんですから」

雰囲気が緩むのは願ってもないことで、千載一遇の好機だ。憎むが本義か、捨てるが道か、迷って判断の胸を有耶無耶にしてみせよう。部外者のプレイヤー三名が中立となれば、戦争そのものが立ち消えになる。

「さて、それでは和平会談を始めましょうか」

「どうも、館ごろもっちもちです。独身です」

「どうでもいいです」

「むっ」

「……すみません」

横目で何うと、ブルー・プラネットは笑っていた。

「どうも、ブルー・プラネットです」

「知ってるわよ、自然主義者さん」

「ピーストマン側のプレイヤー、ブルー・プラネットです」

言い切った瞬間、屋内の温度が下がり、どこかでガラスに亀裂の走る音が聞こえた。

「あー、ごめんね。なんか耳が詰まって聞き間違えたみたい。もう一回、言ってくれる?」

「何度でも言いますよ、人間側の館ころもつちもちさん。私はね、ピーストマン側のプレイヤーなんですよ」

「……ふざけてんなら怒るよ?」

「竜王国の最強戦士、アダマンタイト級冒険者、セレブライトでしたっけ? 彼は両手両足を腕いでやってから、芋虫のように転がしていたらいつの間にか絶命してましたよ。笑えますよね」

館ころから物騒な波動が立ち上る。それを受け、ブルー・プラネットは冷笑しながら絶望の波動で迎え撃った。並の人間が存在できなくなった小屋で、舵は私が取らねばならない。

「館ころさん、ここは和平会談の場ですから、話を先に進めましょう」  
「……だって、ムカつく挑発するんだもん」

明らかに不貞腐れているが、この議論を粛々と進めなければならぬ。異形種になって更に昂りやすくなった彼女の感情は、恐らく自分でもコントロールできていないのだろう。

「ブルー・プラネットさんも故意に怒らせる話し方はやめましょう」

「……仕方ありませんね。今日はあくまで和平交渉ですから」

「それでは始めましょう。まず、獣側のブルー・プラネットさんの希望をお願いします」

「なんでそつちからなの?」

「既に国家を滅ぼされている方から聞くのが筋でしょう?」

「……ぐっ」

竜王国の女王を仲間外れにして始められた三者面談は、獣側のプレイヤー、ブルー・プラネットの意見が出揃うまで駒を押し進めた。



概ね、獣側の意見は三点に集約される。

1つ、人間を取引商品とし、犯罪者を獣側の餌として提供する和平条約の整備。

2つ、獣の都市の再興への協力。資源は竜王国、あるいは魔導国から提供され、場所は竜王国の首都近郊を理想とする。これは1つ目の取引を行う際、旅路を短くする配慮である。

3つ、ビーストマンの身の安全の保護のため、不可侵条約の設立。もし、人間側が過去の遺恨によって手を出した場合、和平条約の全てを破棄してブルー・プラネット率いる食人種連合は全軍で首都へ攻め入る。

やや獣目線に偏っている意見ではあったが、互いの共存を望むなら避けては通れない項目だ。館ごろを窺うと、やはり彼女は怒りを堪えて拳を震わせていた。いつ、獣娘の口が開かれ、涎の糸を引く犬歯で食いついてきてもおかしくない。

一触即発の状況でブルー・プラネットが言った。

「この近辺の食人種は全て私が束ねました。幸い、備蓄食料はあと数日間なら持つでしょう。それまでに女王陛下と打ち合わせをお願いします」

「あのさあ……確認しておきたいんだけど。村をいくつも襲ったよね？」

「ええ、襲いましたよ。当たり前じゃありませんか。みな、納得いく食事量には到底、ありつけていないが、これでもかなり我慢をさせているんですよ」

「初めから首都へ和平交渉に来れば、村を襲う必要はなかったよね？単純に肉が欲しいなら家畜の肉を分けて和平交渉した方が滞りなく進んだでしょう。どうして？」

「どうして？ いま、どうしてと聞きましたか？」

ブルー・プラネットはおもむろにアイテムボックスへ手をつっ込んだ。小さな白い何かを七つ、机に丁寧に並べていく。

それは、やや小柄な、獣の頭骨だった。

「近隣の村で組織されたビーストマンの討伐隊が、森の中で静かに暮

らしていたこの子たちを惨殺した。どれほど苛烈な拷問を加えて殺したのか、死体が教えてくれましたよ。ほら、この頭蓋骨なんて頭部に穴が空いているでしょう?」

ブルー・プラネットは愛おしいお宝でも愛でるように穴の開いた頭蓋骨を優しく撫でていた。

「先に仕掛けてきたのは人間だ。ただ殺すだけでなく、過剰に痛めつける人間は醜悪極まりない。その報復に、近郊の村を滅ぼした。おかげで真つ当な食事にありつけましたよ。人間を食べることに何か問題がありましたか?」

「みんな、やつと幸せを手に入れたのに……お母さんと嬉しそうに手を繋いで笑っていたあの子はもういないんだ……お前が殺したからあー!」

館ころの爪が宙を切り裂く。和平会談はこの瞬間、文字通り決裂した。ブルー・プラネットは並べた頭骨を抱きしめ、机を蹴り上げて防いだ。切り裂かれた机の天板の残骸が私に降り注いだ。

「女性は感情的になりやすいですね。一時の感情で和平会談を御破算にするなんて考えられません。大局の見えない馬鹿ですか?」

「ぞけんじゃねえよ! これが人間のやることか!」

「なら逆に聞きますが、獣たちは人間が憎いから殺したんじゃない。食べて生き延びるために止む無く殺した。もちろん、その自覚もある。そんな幼いながらも必死で生きてきた彼らを、拷問して、過剰に痛めつけて楽しかったですか? あなたの知り合いがどの餌場にしたのか知りませんがね! 少なくとも殺された子どもたちには、人間に手を出さないように教えるつもりだった!」

「二人とも落ち着きなさい!」

私は二人の間に割って入った。二人の利き手を掴み上げ、全力の殴り合いを必死で阻止したのだが、単純な筋力で大差ない。子の均衡もいつまで持つか分からない。

「どいてくれよ、建御雷さん。なんならこの場で決着をつけても構わないんだ」

「上等だよ、この外道。異形種になって狂ったプレイヤーなんていら

ないから」

「ここで二人が殺し合うな！」

「タケちゃんは結局、どっちに着くわけ？」

「ビーストマン側ですよ？　正義はこっちにあるんですから」

「ドラちゃんが可哀想でしょう！　ずっと一人で生きてきた彼女を助けてよお！」

「このままだとビーストマンは絶滅してしまう。俺たちが何とかしないといけない。俺たちにしかできないんだ！」

両者、自分の主張を掲げて引かないが、この争奪戦は無効だ。

「私たちが戦うのは止めましょう」

「……あ？」

「はああ？」

「私はここに！　中立をてい——」

「どっちつかずの優柔不断は黙ってろやあ！」

「下らない平和主義は引っ込んでくれよ！」

中立を宣言しようとした私の体は二人に蹴られ、壁を突き抜けて草原に倒れた。縄張りの覇権を争う野獣の喧嘩に割り込んだ部外者、小屋を突き破って飛ばされる私の脳裏にそう浮かんだ。

大の字になって青空を眺めていると、穏やかだった草原に充満する殺気に気付く。体を起こすと、東には館ころの引き連れてきた人間の軍勢が、対面では食人種の連合軍が涎を垂らして武器を構えていた。この和平会談を成立させるに必要な武力だ。

頭の芯が熱を持ち、冷静な思考が霞んでいく。私を支配しているのは理不尽な状況に対する純粹な怒りと、理想の未来を求める力。

頭の中からけたたましいファンファーレ、墮天使どもが嘲笑いながら喇叭を吹き、戦いの開始を告げている。自分でも知ってはいたが、私は二人よりも遙かに馬鹿だったようだ。

だが、私に後悔はない。

心の炎を燃やすのだ。

立ち上がった私の目が赤く発光する。小屋に開けられた風穴、二体の異形が牙を剥き出して争う巣穴へ、立場を同じとする異形として飛

び込んだ。取っ組み合う両者の腕を掴みあげると、即座に怒りの声がかかる。

「離して！」

「邪魔だ！」

「わかつたんですよ」

「何が！ 次は本気でやりますよ？」

「我々の求める未来はみな同じ。ただ、立っている場所が違ったただけだよ」

「何が言いたいのか！」

「我らアインズ・ウール・ゴウン。求めるは戦争の終結のみ」

「だからあ！ 何なんだよお！」

「いざ、ここに、我ら三名による代理戦争を！ 混戦式PVPを提案する！」

叫んでから二人を双方の軍隊へ放り投げた。三方向に開けられた風穴によって小屋の骨組みが破損し、私一人が瓦礫に飲まれた。

拳を上げて上の瓦礫を突き上げ、私は一人、瓦礫に立つ。

自軍プレイヤーを放り投げられた双方の軍から罵詈雑言の野次が飛んできた。口々に私を責め立て、争う両名の意見は一致していた。これぞ中立、私が求める戦争の阻止だ。

「館ころ様に何をする！」

「裏切り者！」

「穢れた人間のような怪物！ 引っ込め！」

「消え失せろ、怪物！」

「人に仇なす異形種があ！」

「お前は俺たちと同じ命じゃない！」

白熱する罵詈雑言が矢のように飛び交い、私を貫く。体の芯が熱くなる。熱く、上限の見えない熱。まだ足りない、もっと熱くなれる。私の求めた熱はきつとこの先にあるはず。

「黙れえい！」

叫んでから顎をガキンと鳴らした後、耳が痛くなる静寂。

「人と獣、立場が違えど同じ大地に生まれた命。共に同じ時間を共有

した星の同胞たち。ならば、初めから争う必要は皆無なり！」

殺気立った両者が私を挟撃しようと近寄る。私は、互いの存亡を懸けた聖戦に水を差す異物。しかし、プレイヤーが互いの意見を支持して双方へ肩入れするのなら、そのどちらでもない私が中立者として戦争を阻止するもまた自由。

なぜなら、プレイヤーもこの大地へ転移した特異なる命だからだ。

「建御雷い！ 一体あんた、何がしたいんだよ！」

「いま一度、問う！ 何ゆえ戦う道を選ぶ！」

「はあ？ さつき言ったでしょう。俺はビーストマンたちの保護をするって」

「人間を守るためにビーストマンが邪魔。だいたい、私はあいつら嫌いだし」

「違う！ 異形の我らに理由は必要ない。戦いたいなら戦えばいい。私は中立者として、この戦争を阻止させていただく！」

絶望のオーラが二人の怒りを教えてくれる。私も同様に、英雄のオーラで黒の波動を押し止める。

手ぶらの武人として、私は瓦礫の上で宣言した。

「我が名は武人建御雷！ 争いを阻止する調停者である！」

しばらく辺りが静まり返ってから、誰かが拍手をした音が聞こえた。それも長くは続かず、館ころとブルー・プラネットが私を嘲笑う。「バカじゃん！ 手ぶらのサムライがあたしたちに勝てると思ってるの？」

「不動明王にでもなったつもりでしょうが、装備が本来のものでないのなら、大した実力差はありませんよ？ 意味わかりますよねえ？」私が彼らと本気でやり合えば、互いに無事では済まないだろう。特に私は深刻で、本来の実力を半分も出せないまま死ぬ。

それもまた、是非もなし。

「無論！ 命果てるまで戦う所存！ それが漢の花道、侍道！」

私は大地を殴りつけて叫んだ。

「武士道とは死ぬことと見つけたり！」

「馬鹿が……」

一度でいいから言ってみたかった台詞を言いきって自己陶醉する私に、水を差すような眩きが聞こえた。誰が言ったのか分からなかった。

「ほんとバカ。んで、馬鹿サムライさんはどんなルールがお好み？  
どんな風に私たちに殺されたいの？」

「き、希望くらいは聞いてあげますよ。どうせ死ぬんですから」

二人とも怒りのあまり表情が痙攣している。それを知りながら私は役割演技を止めない。これこそが求めた生き様、今宵限りの命と知りつつ咲かす命の花。現実で何の価値もない人間として死ぬよりは、これ以上ない理想的な散り様だ。

「明朝、三名によるPVPを行う。我が死を以て開戦の狼煙とし、戦うものはこの屍を踏み越えて行け。それまで、拙者が倒れるまで、一兵たりともここは通さぬ！」

「弁慶かつつーの……」

「タケちゃん、狂っちゃったなら私が殺してあげる。ドラちゃんを助けない薄情者の男なんかいらねえわ。つーか、さつさと死んじやつてよ」

「言つときますけど、武器は渡しませんよ。勝手に手ぶらで戦って、勝手に死んでください。餓ころさんもわかってますよね」

「当たり前でしょう。そつちこそ、勝手な真似しないでよ」

「命を懸けてかかってくるがいい！」

どちらも答えず、唾を吐いて自軍へ戻っていった。

私は一人、寝転がって朝を待つ。餓ころは竜王国の兵隊全員と女王を動員するべく首都へ帰還し、ブルー・プラネットも獣の群れを引き連れて近隣の森へと消えた。

ぼちぼちと、丸齧りされた月が空へ向けて登り始めた。彼方から聞こえてくる、獣の遠吠えが夜の到来を予期させる。

今宵は満点の星空、見下ろす三日月、明日は晴れるだろう。

死ぬにはいい日だ。



東西に分かれ、簡易的な駐屯地が開かれて双方の明かりが私のいる場所まで届く。開戦の気配が漂う草原の夜、私は大きい方のドラウデイロン女王陛下と並んで瓦礫に腰かけ、具無しおにぎりを食べていた。

「館ころが言うには、ブシノナサケというものらしいぞ」

「武士の情けか」

館ころに教わりながら、女王自らぎこちない手で作ったというおむすびは、塩気が利き過ぎていた。おまけに形も不格好で、知識として知っているおにぎりは三角形だったはずだが、どれもこれも歪んだ台形の形をしていた。

「あれ？ おにぎりが消えた。まだ三つもあつたはずだが……お前だな?! 私の目を盗んで食べただろう！ まだ三つもあつたのだぞ！」

「知らん」

「私が食べてないならお前しかいないぞ！」

「言いがかりだ。自分で知らぬうちに食べたのだ」

「せっかく美味しくできたのに……」

「塩気が強すぎる。それにしても、数百年を生きる女王の食い意地は衰えないのだな」

「うっさいわ……ばか」

絵になる顔であつたが、口の周りに付着する米粒でしっとりとした雰囲気が台無しだ。彼女は一体、どれほどの米粒を付着させれば気が済むのか。

米粒の化粧を丁寧に落としながら女王が言った。

「お前、これから死ぬとは思えんほど落ち着いているな」

「散って果てるは武士の本懐」

「……馬鹿だな」

「サムライは馬鹿でいい。馬鹿なくらいでちようどいい」

「死ぬのが怖くないのか？」

怖いに決まっている。一般人らしく、死を恐れる私は震えている。

その場の空気に押し切られた自分の宣戦布告をどれほど後悔した

ことか。敵意を剥き出しにした餡ころとブルー・プラネットを同時に相手するならば、本来の装備ではない私が圧倒的不利だ。

二人きりだからこそ素直にそう零した私に、女王の痛ましい顔が向けられる。

「建御雷、今ならまだ間に合う。人間側に寝返れ。お前と餡ころが協力すれば、相手プレイヤーを止められる」

「今さら、後には引けまい」

「これも全て、私が魔法の犠牲に百万の命を奪い、それらの死を背負う覚悟があれば、お前たちは争わずに済んだのだ。全て私のせいだ……私は女王失格だ」

ぐずぐずと水っぽい声と鼻をすする音が聞こえた。子供が泣いているときに発する音だ。

「泣いてい——」

「誰が泣くか、馬鹿者！ おにぎりの塩が多すぎたのだ」

子供のように泣き喚きたいのだろうが、女王にそれは許されない。私は勝利の女神の代替品の頭を撫でた。

「餡ころは初めてできた友達だ。随分と若いが、兵隊たちにも人気があつてな、きつとその内、我が国の兵隊と結婚したかもしれない。そなたつたらこの国で平和に暮らしてくれただろう。お前、本当はあいつの方が好きだったんじゃないのか？ だから私を抱かなかつたのか？」

「そんなことはない」

「私は……友達に面倒なことを全て投げてしまった。竜王の血を引く子孫など、ただのお飾りに箔をつけるだけの称号だ。いっそ、私一人が死んでこの戦争を終わらせることができれば」

嗚咽を零す彼女を慰めるべく、そつと優しく彼女を抱き寄せた。これが最後と思えば大胆になれるもので、彼女の胸のそつと手を伸ばす。本当に、いつまでも触っていたくなるほど柔らかく、私の手で形が歪められる。

「あつ……ん」

せめてもの情け、死の恐怖を紛らわす慰みとして、彼女を抱きしめ



ようと手を回した。

直後、私を射抜く強烈な害意。全身に怖気を立たせるこれは館ころとブルー・プラネットから感じたものと同様、上位者の敵意だ。

「……んっ。な、なんだ、どうした」

「しっ、何かいる」

急に立ち上がり、女王を庇うように立った私を不思議そうに見上げていた。何者かの気配が遠ざかっていく。草原の草がかき分けられる音が徐々に小さくなっていった。索敵関連のスキルを所持していない私には、それ以上のことはわからない。

「何も見えないぞ」

「……去った」

背筋を粟立たせた冒流的であり、魂まで射抜く攻撃的な視線はかき消えているが、この戦は何かが起きる、そう感じさせる不穏な兆しだ。もしかすると私は、生還できないかもしれない。

それでも私は、どちらかを選んで攻め込む戦に臨む気にはなれない。どちらかを選ばなければならぬのなら、どちらも選ばずに済ませたい。片方が死ねば、残されたものたちは悲しむしかないのだ。既にどちらも、双方にとって重要人物となっている。

それで私が死ぬとしても。

「女王、自軍に戻れ。既にことは始まっているのだ。こうなった以上、誰にも止められはしない」

「私が言うのも何だが……死ぬなよ。お前が死んだら私は、この首を以て魔導王陛下へ詫びなければならぬ。私の立場も考えてくれ」

「死もまた厭わぬ身でありながら、勝利のために死力を尽くすが武士の本懐」

「お前も、七面倒な奴だな……嫌いじゃないが」

何か、とても懐かしいものでも見たように女王は笑った。夜を背景に笑う彼女は勝利の女神に見えた。そうであってほしいと思った。

どちらかに夜這いされて快眠を邪魔されることなく、満腹になったことで今夜はよく眠れた。

夢の中、私はぶくぶく茶釜と音改とPVPを行い、四肢に大きな欠

損をしながらどうか生還を勝ち取った。それは、言い換えればその2人程度の戦力でなければ勝てないという結末の示唆でもあった。

飛び起きた私は、自らの全身が震えるのを感じていた。

これは武者震いではない。

朝は必ず訪れる。東の空に赤みが差し、周囲が見渡せるほど明るくなる。ぼちぼちと戦力を整えた両軍、武器の金属音、戦士たちの鼓舞が聞こえてくる。最前列で私を見ているのは餓ころもつちもちとブルー・プラネットだ。

そろそろ私の死ぬ日に陽が昇る。

戦いの刻、来たれり。

## 裏道に立つ獣の即断、人の迷い

### ◆※共通（読み飛ばし可）

例えば、現代社会において食人鬼が出現したのなら、末路は安楽からほど遠い悲惨な死だろう。異物に排他的な社会は、人食いに生きる権利を与えない。これに関しては議論の余地がない。

ならば、食人種が犬や猫並に、あるいはそれよりも当たり前前に種が確立された社会、弱肉強食の世界ファンタジーならどうだろうか。

人間の優位性が保証されない世界に生まれたのなら、生きるために戦うしかない。食人種の視点で見れば、やはり生きるために戦い、喰らうしかない。

どちらに生まれようと、戦い続けるしかない。

しかし、その根本は現実と変わらない。弱者は常に犠牲・供物にされ、強者は積み重なった屍の山の上に拳を振りかざして正義を叫ぶ。自分の敵は誰か、現代社会という複雑なシステムの中で難解かつ回りでどい手法で覆い隠されているだけだ。異世界だからこそ、この問題を考えるというのは、思考放棄して生きてきた証明に他ならない。

何人であろうと、戦いの宿命から逃れることはできない。

●私は現実の残虐性を理解した上で、異世界へ飛び込むのだ。

他者を圧倒する強さを携えた、本物の化け物として。

### ◆※裏

生まれつき、加虐的行為に悦楽を感じる人間がいる。そう言った手合いは、先天性、後天性に関わらず、倫理の柵が低い。私は偶然、そのように生まれてしまった。

怪物へ転生する機会を得て、私は迷わなかった。躊躇いさえ見られない自身の心の形が、薄ら寒く感じるほどに。

息苦しい現実という戦場から逃げ出した先で、優しくも暖かい世界

が待っているとは思わない。どんな場所で生まれても、それなりに辛いことはある。破壊と殺戮は人間の根幹で、歴史が証明している。人間は、理由さえあればいくらでも残酷になれる。

命の価値が軽い世界、倫理基準の低さ、それは私のような不適合者にとって、楽園のような場所だ。世知辛い弱肉強食の摂理に支配された世界は、絶大な魅力を以て私を惹きつける。

様々なドラマを得て出会った相手の人生を、虫を潰すかのように狩り取るのは残酷で無惨で胸糞の悪い行為だ。同時に、甘美なものを感じずにはいられない。

他者の苦痛は我が愉悦なり。顔をぐしゃぐしゃにして地を舐める敗者の姿を思い浮かべると、背筋をゾクゾクした悪寒が走り、口角が歪んでいく。

一切の躊躇なく、私はユグドラシルのアイコンを押した。  
きつと、私の顔は歪んでいたのだ。

意識が明瞭でありながら一面の闇、こちらへ迫る銀の門を潜って辿り着いたのは、光の世界。

いつしか目が眩む光は集束し、見渡す限りの草原に立っていた。体毛で覆われた体に新鮮な空気が浸透し、意識を驚くほど覚醒させた。深呼吸をして辺りを見渡せば、汚染されていない美しい空気は遙か遠くまで見通せる。

ぼんやりしていた私の眼前へ、巨大な光が落ちた。

草原に穴が空くほどの衝撃後、一塊の光が消えてから巨体が姿を現す。その姿には見覚えがある。鎧こそ纏っていないが、彼は武人、かつてのギルドの仲間だ。

そこまではわかる。

臃げな彼の名前を浮かべてから、自らが抱える大問題に気が付いた。

(……………私は、誰だ?)

数年前に引退して以来、思い出すことすらなかったゲーム。当然、名乗っていたハンドルネームなど忘れていた。手紙には書いてあったように記憶しているが、若かりし日々の思い出は懐郷よりも羞恥が

勝る。局所的ピンポイントに読み飛ばすのは当然だった。

「グルルルル」

飢えた野獣プレデターのように喉が鳴った。

「誰かいるのか？」

透明化してから茂みに飛び込み、呼びかけをやり過ごした。今や、互いに人外の化け物だ。敵と判断されて殺されるのは最悪な展開だ。私たちは互いに一軍だ。丸腰の彼なら勝算はあるにせよ、こちらも無事では済まない。

幸い、彼の知能はさほど高くないらしく、こちらを一瞥しただけで納得してくれた。出会い頭に殺し合わずに済んで安心した。

人は自分なりの解釈で不安に折り合いをつけると、迂闊な行動をとる。彼の頭の中には油断が居座り、透明化した怪物がすぐ背後にいるなど考え及ばぬようだ。名を思い出すまでの余興と思い、尾行を始めた。

一度、機を逃すとどうしたらいいかわからなくなるものだ。

デカブツは竜王国の首都入口で騒ぎを起こし、狭い馬車へ押し込まれて宮廷へ運搬されていた。

サムライだけで満員御礼ギチギチになった馬車の上、胡坐をかいて脳をスパークさせたが、名前以外にも様々なものが思い出せない。私が作ったNPC、彼女を作ったとき、寝る間も惜しんで入れ上げたものだが、名前はおろか姿さえも曖昧だ。

（ギルド名は……アインツ……ツアール……ロイガー？ NPC……種族は、狼？ いや、山猫か？）

記憶の書庫は枯れ果てて、取っ掛かりとなるべき心の凹凸も擦り切れたレコード並みに平らだ。

（困った……さっぱりわからない）

目を閉じようとした視界の片隅、何かが虹色に煌めいた。



景色に見惚れるのは、転移した者の通過儀礼だ。

夜の空気は澄み渡り、吹き付ける風が心地よい。汚染されていない  
大気は夜になっても見通しがよく、満天の星空を照明に遠くまで鮮明  
に見える。この世界に來た全員が今の私と同じことを考えるだろう。

自然愛好家などは、身に余る感動で失禁・脱糞してしまうだろう。  
そこまでは酷くはないだろうが、いつそ面白いからそうなつてほし  
い。それを発見し、手を叩いて笑い転げる自分を想像すると、口角が  
吊り上がった。

ここは竜王国の宮廷、とある部屋の屋根の上。タケミカズチが大の  
字で寝そべる客間の上だ。室内の動向にそれとなく注意を払い、縁に  
腰かけて足をプラプラと揺らした。

それにしても、武人と館ころの会話は笑いを堪えるのが大変だつ  
た。でかい凶体に豪胆な雰囲気の武人が、二人の女性に追い詰められ  
るのは見ものだった。あれでは狩人に追われる野狐だ。姿を隠して  
いたおかげで良い物が見られた。

一応、小さな収穫もあった。自分はこの世界における強者、それも  
比肩すべき者なき上位者だ。

それを知った今、竜王国の煌びやかな夜景もガラス細工に思えてく  
る。美しさと脆さは表裏一体。簡単に壊れてしまうから美しさが際  
立つ。だからこそ、簡単に壊してみたくなる。

右手を広げて手のひらの上に夜景を乗せた。尖った犬歯をギリギ  
リと噛み合わせながら、そつと力を込めて拳を握る。

都市で暮らす数百万、数千万人間たちの阿鼻叫喚となった滅びの声  
が、拳の中から聞こえてくるようだ。

「あー……思いつきりぶつ壊してみたいなあ」

いつそ、超位魔法でも叩きこんだ日には、どれほどの快感が得られ  
るだろうか。街の明かりの一つ一つに人生ドラマがあり、家族や恋人、友人  
などがいる。それらを一瞬で滅ぼすのは惨たらしく残虐非道な行為  
だ。

館ころ女史も、デカブツも、私をこの世界へ呼んだ何者かも、決し  
て許さない。彼らがどんな顔をするのか想像しただけで、私の口角が  
限界まで吊り上がる。背筋を悪寒が走り、自らを抱いて快感に酔いし

れた。

どの程度なら殺しても許されるかと算段を始めた頃、足元から男女の喧騒が聞こえた。

屋根に寝そべり、縁から頭を下ろして伺うと、デカブツと女王が至近距離で見つめ合っていた。しっとりした雰囲気は濡れ場が始まる直前だ。乱入してぶっ壊そうかと迷ったが、デカブツの女性体験を判断する絶好の機会なので、私は見<sup>けん</sup>に回った。

「……うっさいなあ。さっさと抱けばいいものを」

大きい方の女王は唇を尖らして俯く。

まったくその通りだと、屋根の上から同意した。女が股を開くなら、男はさっさと突っ込めばいい。その美しい顔で心を揺らされない男はそういない。傍観している私でさえ、その顔を苦痛で歪ませてみたいと思っている。

私の口が愉悦で歪み、噛み合わせた犬歯がギリリと音を出した。

（そのでかいイチモツで蜘蛛の巣が張った膜を貫け！ いけ、武人喪女殺し！）

往々にして現実は無気なく、期待外れだ。デカブツは窓を開いて誤魔化すという、考えられ得る限りの中で最も凡庸な行動をとった。真下の窓が開かれたもので慌てて頭を引っ込めたが目が合っていた。それ以上に搜索する様子も見られえず、濡れ場らしい雰囲気も消し飛んでいる。

どうやらこの場で女王を抱くような胆力は持ち合わせてないようだ。豪胆を常とする理想の侍<sup>サムライ</sup>とは遠すぎる。

（萎えるわ……でかい図体してタマついてんのか。童貞決定だな、これは……ツマンネー）

童貞とは失って初めて、価値が無いと知る。女性経験のない人間に許された、一つの負の称号だ。簡単に女へ手を出さぬ行為は、かえって女性の気持ちに踏みにじる。女に恥をかかせた彼は、据え膳を食わぬ男の恥さらしだ。一度でも女を抱いた人間は、セックスなど大した問題ではないと知っている。

「馬鹿馬鹿しい……チエリー野郎が」

私は屋根に寝転がって星を見上げた。

他にすることも思いつかないので、当面は青臭く、生温く、甘ったるくもへタレな武人<sup>おもちゃ</sup>で遊ぶと決めた。

昼間、竜王国は食人種と戦争をするような話をしていた。選ぶべきは、武人の邪魔をする側に立つことだ。

戦争するなら、開幕と同時にデカブツを仕留めるのが面白そうだ。十中八九、彼は人間側だろう。戦力の要となるべきデカブツがいきなり地に伏したら、目撃したものの全員が絶望するに違いない。あるいは、もっと効果的な策を模索するべきか。

彼の目の前で女王をぼろ雑巾になるまで痛めつけてから惨殺する。敵へ動き出した瞬間、横やりから思い切り殴りつける。

勝利を確信した直後に、背中から不意打ちを仕掛ける。

彼の仲間、あるいは部下を、不在時を狙って皆殺しにする。

新たにできた人間の仲間を、動けぬ彼の前でバラバラに解体する。彼に不意打ちを仕掛けて動きを止め、ゆっくり時間をかけて皆殺しにするのはどうだろう。餓ころと、獣側のプレイヤーの嘆き悲しむ姿まで見ることができると。

いや、単に殺すのではなく、食べるのはどうだろうか。

墮天使がいれば、きっと私の思いつかない奇抜な案を出してくれる。

楽しい妄想を星空へ浮かべている内に、眠気が襲ってきた。



屋根の上で寝たはずが、目を覚ますと顔面が地面にめり込んでいた。畑の主に無視されて成長し過ぎた大根のような頭部を引き抜くと、地面に私の顔面が刻印<sup>スタンプ</sup>されていた。よく窒息しなかったものだ。見上げると、ここは寝そべっていた屋根の真下らしい。寝返りを打って落っこちたようだが外傷はなく、落下してもダメージを受けないうようだ。

寝起きで頭が働かず、胡坐をかいてぼんやりしていると、付近の窓



から館ころと女王の声が聞こえた。

「逃げたあ？ ……チツ、あのクソ童貞め」

「私は……魅力がないのか？」

「バカね、童貞なんてそんなもんよ。自信持ちなつて、ドラちゃんは私よりも美人で可愛いから」

「本当か……？」

「本当よ。もし失礼なこと言ったら、私が八つ裂きにしてあげるからね！」

「八つ裂……やり過ぎだ」

「そのおっぱいはある種の凶器よ。禁断の果実って奴？ あ、淫乱の果実かな。ちよつと揉ませてよ」

「朝っぱらから触るな。それより、今日はどうすんじやい」

「丸腰のお侍さんに武器を買ってあげるの。ついでに欲望に火をつけておくわ。ムラムラしたムツツリ助平すけへにまた夜這いしなよ。欲求不満なら手を出してくるって」

「その……初めてはやはり痛いのか？」

「すつごい痛い！ 体が内側から裂けるみたいな」

「………脅かすな」

「なによ、愛する国民と国家のためでしょ。痛いだけなら我慢しなさい。今となつちや、アダマントイト級ロリコンもないし、タケちやんの方がいい男よ」

「……私ワイルド・マジックさえ始原の魔法を使っていれば」

「今さら、それを言っても始まらないじゃない。もう犠牲者が出てるんだから」

隠し玉を持つているような女王の言葉が気になった。

それにしても懲りない二人だ。ヘタレ童貞を国家へ縛り付け、守護の象徴に据え置きたい、打算的であざとい魂胆が透けている。こんな手に引つかかるのは童貞くらいだが、策が露呈したときに夢見がちのチエリー侍は失望するだろう。

私はあくびをしながら立ち上がった。

人目を忍びながら、武器屋へ向かってイチャコラする馬鹿フレイヤーどもを

見届け、散策へ向かった。

城壁をよじ登り、平均台よろしく両手を伸ばして高い城壁を歩く。私を階下へ落下させようと強風が吹き、体毛がそよぐ。何気なく草原に向き直った視界の片隅、何か白いものが動いている。

人外との邂逅を期待して飛び降りた。死なないと分かっているも落下距離が長く、股間が縮こまる思いだった。着地は満点、私の両脚は草原に円形の落下痕を作り、そこを中心に衝撃波が広がって草をそよそよと鳴かせた。

空から落ちてきた私を見て動きを止めたそれは、白髪の男を引き摺る白い虎だった。

メス豚ビッチどもの噂に聞く、最果ての村を破壊したビーストマンの一派だろう。戦争に備えて敵地偵察とは感心だ。それにしても、毛並みが悪い。あちこちが剥けており、場所によつては変色している。くたびれた老猫に見えた。

「ビーも」

気さくに声を掛けたつもりだが、体が数センチ浮き上がるほど体を強張らせ、酸欠気味の金魚のように口をパクパクと開閉した。

「怯えなくてもいいんすよ、御老人」

質の悪い白の毛並みが、足先から頭頂までウェーブのように逆立つのが見えた。掴んでいた人間を放り投げ、白髪の男性がごろごろと転がっていった。

「お前！ はぐれたビーストマンけ!」

「いいえ、異世界からの来訪者ですが、ナニカ?」

「ブルーと同じだ!」

「誰?」

「お前はブルーを知ってつか?」

「シラネ」

私が質問に答える前提で聞かれても困る。素っ気ない態度を気にすることなく、私と出会ったことがとても嬉しかったらしく、こちらが黙っているのをいいことにあれやこれやと教えてくれた。

自然愛好家ブルー・プラネットは、精神の均衡が振り切つて獣人側

に立った。館ころと武人チエリー侍が人間側で、ブルー・プラネットと敵対。それなら私は、獣側に立つべきだ。それでこそ力が拮抗する。竜王国の周辺に四人のプレイヤーが降臨したのは、戦力を拮抗させるためだろう。

——と、考えるのは、無個性な患者のすることだ。

(んなわきやねえだろう)

私は老猫に声を掛けた。

「じいさん」

「俺、まだ子供」

「うっそお?」

言われてみれば、毛並みはぼろ雑巾と見紛うほどだが、顔つきは幼く感じる。共食いという行為はこんなにも種を摩耗させるものなのか。

「あー、その……ブルー・プラネットさんは人間を食べた?」

「……食べてない。吐き出した」

「ふーん。じゃあ、彼は人間側よねえ?」

「違う、ブルーは俺たちの仲間」

「仲間あ?」

きつと私の口は、酷く歪んでいたのだ。

「人間を食べてない、元人間の異形種が? 同じ釜の飯を食えなかったのに、ビーストマン側にいながら人間を食えないような奴が? それでもビーストマン側ツスカあー! へええ?」

「殺された仲間のために泣いてくれた。俺たちを守ると言った」

「おい、おい、ハゲ散らかした馬鹿猫ちゃん」

彼の首に手を回して絡みつき、鼻先へ向けてため息を放った。

「ブルー・プラネットさんは元人間。そんなのを仲間にしても本当にいいんすか? もしかしたら人間に情が湧いて裏切るかもしれないッスよ」

「俺たちの……仲間」

白猫の、付け焼刃の自信が揺らいでいた。

「人間だって、どうせ元もと猿だよ。猿のペットに成り下がって恥ず

かしくない?」

「俺たちは……誇り高きビーストマン」

「はっ! 誇りい? どこが誇り高い?」

私は小馬鹿にするように口を歪め、周囲を見渡した。私が小馬鹿にして会話が滞るたび、眉間のシワが深くなるのが面白かった。

「ブルーの力を借りて最後の戦いを——」

「おー、おー、そりや立派ツスねえ! 泣けるじゃないスカあ。元人間の力を借りて人間相手に戦う他力本願な自称誇り高き獣。部外者であるプレイヤーとビーストマンを繋ぐのは、上っ面だけのやつすい絆!」

怒り数値を計測する針が振り切って、今にも飛び掛からんとするボロ猫は、歯を剥き出しにして唸っていた。私はそいつの怒りを無視し、頭を抑えつけて力を込めた。

「うっせーんだよ、バーカ」

彼からすれば抗えぬほどの強力な圧力で、ボロ猫はあっさり膝をついた。

「人間を食べられないような猿が、興味本位で首を突っ込んでるだけだろう。人間が可哀想と考えて獣を裏切る可能性がある。おまけに、相手は同じようなプレイヤーが二人で、勝算は低い。結果的に獣が全滅したとしても、何とかなるのかなあ?」

「……」

「いいや、きっと何とかなるさー。だって、ビーストマンと糞プレイヤーの間にはやつすい絆があるから!」

ギリりと歯が食いしぼる音が聞こえた。

「他に方法が——「死ねば?」」

言いかけた言葉を食い千切って被せたと同時、獣は地に臥せた。そこで私は手を離して立ち上がった。そのまま放っておこうかと思っただが、存外、彼はすぐに立ち上がった。痛めた手を抑え、私を鋭く睨みながら叫んだ。

「ビーストマンは人間を殺し、食べる種族だ! 同じ大地に生まれながら、人と獣は殺し合う。同じ大地に生まれた命は、互いの命を奪い

合わなければならぬ。だから獣の国は、滅びの王に壊された」

「滅びの王……ねえ」

私は真剣にこちらを見つめる白猫を見ようとしなかった。

「獣はこの世界にいらぬのだと思ひ、親を、親の兄弟を、仲間の親を食つて生きてゐると、ブルーが現れた。最後に戦う機会が、世界から与えられた！」

「違ふ、違ふ！ 全つ然わかつてないんだよなあ」

「何がだ！」

「あのね——」

ブルー・プラネット、餓ころは、ビーストマン側と、人間側に別れている。しかし、二人の目的は寸分と狂わずに一致している。

戦争ではなく、種族の補完だ。

虫唾が走ることに彼らプレイヤーは、最初から今までずっと、上から目線の同情の域を脱していない。何様のつもりで、奇跡的に訪れた幻想世界の、現地生物の種を補完するなどと考えられるのか神経を疑う。

いかにも異世界の転生者が犯しがちな、反吐が出る庶民的愚行、蛆虫のごとき偽善。現実では取るに足らない歯車風情が、指導者を騙るとは思ひ上がりも甚だしい。

だが、得てして綺麗事とは耳当たりが良く、一見して正しいように思える。餓ころもブルー・プラネットも、一般的な倫理観を持つものが聞けば、どちらも正しいような気になる。

種族の補完、弱者の保護、つまるところ倫理と正義。

いつだつてこれらは、仮面を被つた悪魔のように人を誘惑する。

いつそ竜王国もビーストマンも、皆殺しにしてしまえばすつきりする。再出発にはうつつけだが、凡人は皆殺しにしてすつきりするといふ冷酷非道な選択を選べない。

いつそのこと全員、死んでしまえばいいのに。

そう思う私はきつと、笑つていたのだ。

「わかつたか、ボンクラ」

「俺たちは……子供だ」

「だから？」

「大人の命を糧にして、今日まで必死で生きてきた」

「だから？」

「みんな……親を食べて……死ぬ気で生きてきたんだ」

「だあかあらあ？」

「ブルーがいないと生きていけないんだ」

「だから何だよ！」

全力で怒鳴った私が拳を握ると、手の甲から刺身包丁に酷似した三本の爪が生えた。

彼の喉へ爪を付きつけ、声のトーンを落として言う。

「ケダモノ風情が誇りを語るな。誇りとは、子々孫々へ何も恥じることはない、自分の意地を張り通すもの。戦って絶滅しても誇りが守れるならそれでいいと、なぜ命を賭けて戦わない」

「……」

「誇りが聞いて呆れる。獣のガキどもは全員、楽な方、楽な方に流れるだけだ。穢らわしい誇りのままで、生きてて恥ずかしくないのか」

ぼろ猫の頭を鷲掴みに、死なない程度、羽虫をそつと優しく捕まえる程度の力を込めただけで、頭蓋がギリギリと音を出した。地面に叩きつけようとしたが、猫は私の手を掴んで食い下がった。負け犬のボロ猫にしては大した度胸だ。

腕にぶら下がった白いぼろ雑巾は、牙を剥いて吠えた。

「お前はあー！ お前は人間を食ったか！ ブルーは俺たちと同じ食事を取ろうとしてくれた！ 元人間なのに共食いをしようとしてくれた！ 仲間になろうとしてくれた！」

「へー」

「お前はブルーと同じ癖に、偉そうに何だ！」

敢えて何も言い返さず、私は手を離れた。そのまま倒れる白猫を見ず、私は彼方へ顔を向けた。彼の言葉に胸を打たれたと、そんな高尚なものではない。

私は思い出したのだ、空腹を。

「ああ……腹が、減ったなあ」

子供であろうと命の保証がない、弱肉強食の狂った世界。順応する  
なら、人は壊れなければならぬ。壊れてこそ初めて、空<sup>ファンタジー</sup>想の世界  
へ降り立ったと言える。

放り投げられて、草原を転がされ、のろのろと立ち上がって恨みが  
ましい視線を向けている白髪の間人。力の差は歴然で、彼に出来るの  
は精々が睨みつけることだ。私たちの視線に気づき、男は唾を吐きな  
がら叫んだ。

「汚らわしい獣ども、お前らは共食いして滅びてしまえ。いつか必ず、  
神の裁きが下る！ 魔導——」

言い終わるより早く、私は草原を駆けだした。

草原の空間を切り裂かんとする爪の一線が走り、刹那に掻き消え  
た。驚くほど素早く、彼の首を掻つ切った。手の甲から飛び出す三本  
爪が、柔らかい首に埋め込まれてから、薙ぎ払って首を刎ねる刹那の  
コマまで、見落とすことなく惨殺できた。

私は私の殺意を以て、哀れな餌を殺害したが、さしたる感傷は得ら  
れなかった。

やや遅れて、数メートル先へ重量感のある落下音。獲物の生首が落  
ちた。血をまき散らす胴体の切断面から、噴火中の火山並みに鮮血が  
吹き出し、私の毛並みを赤く染めた。そつと指で救って舐めとれば、  
鉄錆の味が口内に広がった。

切断された頭部は両眼をきよきよと動かさず、唇をしばらく動か  
していた。ゆっくりと歩み寄ってから両手で持ち上げると止まった。  
瞳孔から光が失われて、両眼に移された私の顔が闇に溶けていくのが  
見えた。

首の切り口は瑞々しい薔薇の花のようで、肉の色が食欲をそそる。  
手に持った頭部は瑞々しい南国の果実を思わせ、腹部から胃の収縮音  
が鳴り響いた。思い返せば、この世界に来てから何も口にしていな  
い。

飢えた獣<sup>ケダモノ</sup>の前に差し出された人間の生首。次にとる行動は決まっ  
ている。

口を開くと、涎の糸が上下の牙を結んでいた。

一切の躊躇いなく、白髪頭にかぶりつく。彩り豊かな南国の果実のように、瑞々しい体液が口内を満たした。齧り取った頭皮、頭髪、頭蓋が咀嚼によって口内で渾然一体となる。空腹が満たされる得も言われぬ充足感が体中を満たし、体から何かが引き剥がされる感覚があった。

身に余る感動に反し、食感は最低だ。咀嚼されてボロボロになる薄い頭皮と固い頭蓋に混ざり、頭髪が舌だの、牙だのに絡みつく。不愉快さに耐え切れず、吐き出してしまった。唾液塗れの白い毛玉が草原にべちやつと落ちた。

「うええ、まつずいなあ」

齧られた果実から覗く果肉、髄液に塗れた桃色の脳。生きとし生けるもの全て、好奇心と空腹には逆らえない。

ゼラチン質の膜を丁寧に剥し、指を突っ込んでかき回してから、削り取って口に含んだ。舌の上でトロリ溶けた直後、目と鼻と耳と皮膚から冷たい火炎が噴き上がるような錯覚が起きた。

濃厚な肉の味が、舌の上に残ったが、大量に食うと気分が悪くなりそうだ。生まれて初めて食べ物を口にした余韻に浸っていると、白猫が腕を抑えて立ち上がった。

「頭は茹でるんだ」

腰に差した短剣を引き抜き、手慣れた動作で人肉の解体を始めた。両腕、両脚の付け根に刃を入れ、骨のつなぎ目を上手に切断した。驚くほどの出血が草原を赤く染め、骨に着いた肉まで丁寧にそぎ落とした。思わず見惚れるくらいに、順序良く事務的に人間の解体が行われた。

殺害と同様、人間が解体される様子に私の心は動かなかった。

やはり、現地生物に対しては、同じ人間であっても対等ではない。犠牲者への弔いよりも、丁寧に捌いてくれた肉を味わいたい食欲が勝った。中途半端に食べたことで空腹が際立ち、胃袋の辺りから出来の悪い雷鳴のような音が鳴っている。

「内臓は塩漬け、余った肉は干物が燻製にする。少しも無駄にしない。それでも餌は足りない」



「ふーん……」

「食え」

今日一番の笑顔で差し出された血塗れの肉を、拒む理由はない。躊躇わずに口に含むと、噛めば噛んだ回数に合わせて肉の味を放出する。新鮮な人肉刺しは、ブツが思わず勃起する程度には美味かった。

「……これは美味しい。やっぱり、捌いてすぐ食べるから鮮度がいいのか」

「お前の言う通り、誇りはよくわからない……が、戦って勝ち取る得る肉の味は、ブルーが思い出させてくれたんだ」

一匹の戦士として、ようやく前を向き出したと思しき、多感な思春期の子猫おもちゃに何と声を掛けていいのか分からず、捌かれた肉刺しが手渡されるのを無言で眺め、そして無言で食らい続けた。

猫も私が咀嚼する傍ら、捌いた肉を口に入れた。唇の横から血を滴らせ、私たちはクチャクチャと食べ続けた。

大腿部、上腕部の辺りがすっかり骨になる頃に、私の空腹は満たされていた。食べ終えた後で、彼は肝臓を渡してくれた。

「食ってみろ」

「何これ？」

「肝臓だ、生でイケる」

第三臓器バは瑞々しくて美味かったが、贅沢を言うなら塩気が欲しい。調味料がないのが残念だ。

初めての食事を終えた私はその場に腰を下ろし、余った肉の下処理をしている白猫に聞いた。

「名前は？」

「……ササカゼ」

「ササカゼ、なんでここに来た」

「ブルーから手紙を届けろと言われた」

血塗れの手で一つのスクロールを取り出した。

「飯の礼に届けておく」

「お前は……どっち側だ？」

「興味が無いネ。殺したい奴は殺すし、腹が減ったら食う。ゴミどもが戦争をしようがなんだろうが、私には関係ない」

「ケダモノ……」

「ササカゼは違うのか？ ああ、そっか、自称誇り高いビーストマンだもんね！」

「……わからない。わからないが……このまま死んでたくない」  
「……そ」

多くは語らず、彼は余った肉を袋へ仕舞って立ち去った。

道中、思い出したようにボロ猫は振り返って聞いた。

「お前、名前は？」

「名前はまだ、無い」

「……？」

「戦場で会おう」

私は手を振って虎猫を追い払った。

「ケダモノ……か」

人間を辞め、名前さえ忘れた私に相応しいようでありながら、この先、いい加減に諦めて生きるには長すぎるし、私は強すぎる。

私は齧りかけの生首の切り開かれた頭蓋へ手紙を押し込み、王宮へ向かって走った。

首都へ戻る途中、遠くで光が煌めいた。

私が王都へ戻ると、相変わらず馬鹿二人はいちやいちやと、王宮の食堂にて見苦しい光景を展開させていた。将来有望な将兵が遠巻きに睨んでいるところを見ると、館ころはそれなりに人気があるのだろう。

いつの時代も、男の性的欲求の対象は多種多様で千差万別だ。人間を辞めた強者の人外プレイヤーという鮮烈なオカズは、男性将兵たちの性欲とけん玉を掴んで離さない。経験豊富そうな獣娘という、非常に偏った特殊なオカズが、竜王国の成人男性たちに流行るに違いない。

手を握って見つめ合う二人を邪魔すべく、窓から生首を放り投げた。

爆竹を民家へ放り込んで逃げ出す悪童よろしく、騒乱を背に走り

去った。再び竜王国首都の城壁によじ登って遠くを眺めると、先ほどと同じく虹色の光が輝いている。

首都の北方向には明日の和平会談の会場、ブルー・プラネットお手製の避難小屋が見えた。

明日は晴れそうだ。

全て、私に破壊されるとも知らずに。

明日までの暇潰しを探すべく、七色の光が差す方へ、獣のような四つ足で走り出した。



「ま、そんな経緯で今に至るわけッスわ」

これまでの経緯を説明し終えてから、火で炙っていた少年の右腕に食らいつく。調味料もなく、ただ炙っただけでも美味と感じるあたり、流石は竜王といえる。

「結構だ。右腕を代償に差し出した甲斐はある。竜王の名を冠する私のお味はいかがかな」

「人間よりは旨いッス」

「光荣だ」

虹色の竜王は話し好きで、右腕を根元から挽がれているというのに、その優位性を揺るがせず、上から視線も変わらず、口数も減らなかった。

「さて、改めて問う。その体から発せられているのは、私への嫌悪だ。そうだな？」

「ん……まあ」

「君は明朝の和平会談までの時間を潰すべくここへ現れた。ならば、食欲が満たされた現状、睡魔が訪れるまでの時間、ここでの会話を引き延ばすべきではないかね」

「聞きたい事もあったしねえ」

味付けがなされた右腕ステーキの効果で私の機嫌は良く、口と唇が軽くなっていた感は否めない。

「敢えて言うなら……人間に化けるといふドラゴンが気持ち悪いから……ツスカね。下等生物に化けるつてのは、私が鶏や豚に化けるような行為でしょう？　まるで人間が中心になつていようで、気色悪いツスわ。この世界はあれツスカ？　引き籠りニートみたいな、頭の悪い童貞の妄想？」

「そうして私の背後から忍び寄り、右腕を切り落とし、そして食しているのだな」

「ああ……まあ、腹へっちゃったんで。ほら、元人間とはいえ、もう化け物になっちゃいましたし。悪かったとは思ってますよ」

「ふ……ふふ」

少年は右腕の止血をしながら、無表情で嗤った。短く笑い終えてから彼の目が開いた時、そこには何の感情も浮かんでいなかった。

ラーモ・デイ・クロコデイル  
「鰐の涙」

「……あん？」

「プレイヤーとは、自己啓発をすることなく惰性で生きてきた生、己があり方すら確立していない、人格形成の未成熟な人間だ。その生き様は、生まれた瞬間から弱肉強食の摂理に晒される赤子にも劣る。いい加減、己が内に潜む絶望を認めたまえ」

竜王ステーキを掴んでいる私の右手が震え出した。少年はそれを視界に捉え、満足そうに微笑んだ。

「既に人間を殺害して食したな。君は晴れて、オタマジャクシから人食い鮫に進化を果たした……とでも考えているならば、愚者に相応しき思い違いだ。君の殺戮には悲しいほど内容が無い。食欲とは、君の頭蓋に坐す異形の脳髓が出す命令、劣等なる本能の手引書。異形種となれば、呼び声は強烈だろう。君は頭脳に引きずられるだけの傀儡に過ぎない」

「……なんだと？」

「得てして、運命とは皮肉を好む。企業に従属するだけ人生を捨てた先、新たな生で異形の脳髓に隷属している。人間を辞めたと勘違いして胸を張る、致命的に稚拙な自覚無き葛藤者、名もなき怪物よ、カニバリズム同種食いの感想はいかがかね」

気が付くと、私の右手から肉が落ちていた。

「君は、君自身が毛嫌いしている転生者プレイヤールと同様、我ら幻想世界の生物を舐めている。簡単に手に入れた力を駆使し、支配者として君臨する人間、あるいは自らの価値観にそぐわぬ生物を滅ぼす自己中心的な転生者を嫌悪しているが、私からすれば、君も同類……いや、それ以下だ」  
それっきり黙して語らず。

二人の間に置いてある焚き火だけが炎を燦らせ、時おりパキツと燃料が爆ぜる音を出した。私がここで止まっているのは、彼の仮説の裏付けにしかない。本物の化け物ならそんな一説をせせら笑い、この場で惨殺すべきだ。

そうと分かっても、私の体は一枚岩のごとく動こうとしなかった。

「先ほどの問いに答えよう。私が人間に化ける行為、君が指摘した通り、君たち人間が牛や豚に化けると大差ない。しかし、人間は特異な生き物だ。別世界の人間であるプレイヤールが降臨するにあたり、人間なくして成り立つまい。その意味で、人間という種族にはプレイヤールを導く役割が与えられていると考えている」

「……ほー」

「君たちアインズ・ウール・ゴウンと41人の神々は、これまでのプレイヤールと比較にならない、最上位の武力を保持している。頂点に坐す、それ即ち、成長しないと同義だ。人は、敗北からこそ多くのことを学ぶ」

「随分と独善的な暴論だな」

「人間は苦悩し、苦しみ悶えた末、新たな結論を導き出して進化する。これは他に類を見ない、人間に許された特権だ。他の種族では、種族特有の本能と価値観が邪魔をする。君が新たな進化を遂げるのなら、人間性を封じ込めている本能の監獄を破らなければならない」

虹色の餓鬼は左手を上げ、北を指さした。

「明朝、プレイヤール三名による和平会談が執り行われる。君はそれを傍観し、自らの生に結論を出したまえ。君を含め、竜王国に降臨したプレイヤール4名の、2名は苦悩の末に答えを導き出した。残るは君

と、新たに竜王国へ降臨した一名」

「結論……か。そんなもの、本当にあるのか」

「無いはずがない。この世界は、アインズ・ウール・ゴウンと41人の神々という脅威に晒されている。無秩序に世界へ落とされる41人中、4人がこの地へ同時降臨した事象に理由が無いはずがない」

餓鬼は私を指さして言った。

「だが、少なくとも今の君と話すことはない。どの世界であろうと、快樂殺人者は歓迎されまい」

「サイコキラー……」

「その食いかけた私の右腕を持って消えたまえ。黄金を持たぬ人間など、人間以下のケダモノだ」

私は、欠損者の言葉を否定できなかつた。

立ち上がった私は、目的のログハウスへ向けて歩き出した。途中、振り返ると、奴はこちらを見てもいなかった。小僧に言われた通り、自分のあり方に強い違和感を覚え、同時に激しく嫌悪した。

プレイヤー及びこの世界で暮らす生命体を弄ぶ私こそ、私が最も苦しめ、破壊したかつたものだ。

人間側の餡ころもつちもち、獣人側のプルー・プラネットは、私の敵と成り得ない。なぜなら彼らは、私の存在を知らない。不意打ちで心臓に爪を打ち込めば、容易く命は奪えよう。単純な武力で言えば、私と釣り合うのは侍だけだ。それでは、侍が私を殺すのが正しい歴史なのか。

だが、武人は敵と成り得ない。装備品の整っていない武人など恐れるに足りず。彼は、まだ自らの選択をしていない。私の使いきれないほどの加虐心を除けば、戦う理由がない。

建御雷でないのなら――

「私の敵は……殺すのは……誰だ」



和平会談は予定よりも早く執り行われた。

私がブルー・プラネットの作った避難小屋の屋根の上で眠っていると、朝早くに扉が開かれる音で目が覚めた。やや遅れて、いきり立った館ころが小屋へ飛び込んでいった。

寝転んだままぼんやりと、プレイヤー三名の白熱する口論を聞いていた。彼らの主張は退屈なもので、やはり上から目線の転生者という印象は拭えなかった。

退屈のあまり空を見上げ、流れる雲の行方を追いかけていると、小屋の壁をぶち破ってデカブツが飛んでいった。

大の字で草原に寝そべるそれを、何の感情もない瞳で見下ろした。やがてデカブツは小屋に飛び込み、今度は他の2人が飛び出してくる。あと数秒、小屋から飛び立つのが遅ければ、私はサムライの頭上に落下していた。

瓦礫を拳で突き上げて、ガラクタの城の天守閣でデカブツが叫んだ。

「人と獣、立場が違えど同じ大地に生まれた命。共に同じ時間を共有した星の同胞たち。ならば、初めから争う必要は皆無なり！」

怒りを露にする館ころとブルー・プラネットに挟まれながら、更にでかいのが、これまたでかい声で咆える。

「我が名は武人建御雷！ 争いを阻止する調停者である！」

それが彼の出した結論なのだろう。虹色の餓鬼曰く、黄金が付与される結論だ。両陣営が黙り込む異様な静けさの中、私は少し離れた場所ですぐ短い拍手を送った。

「武士道とは死ぬことと見つけたり！」

次いだ言葉で私は拍手を後悔させられた。私は彼の侍道に対し、起因するところの不明瞭でありながら明確な反感を抱いた。

「馬鹿が……」

思わず、私の口から漏れていた。

彼の思想は私の頭脳に適合しなかった。間違ったパズルを無理矢理に当てはめると、いつか必ずガタが来る。とはいえ、誤った解答でも考えることで思考の呼び水となる場合がある。私の脳はいくつかの選択肢を浮かび上がらせている。

その中で最も確率の高い選択肢を選ぶべく、私は竜王国の首都へ走った。

年代を感じさせる木製の扉を開くと、熱気が顔に当たった。

「悪いが掛けて待っててくれや」

鍛冶屋の店主は、私を見ずに言った。かまどの前に腰かけ、ハンマーで何かを叩き続けている。

椅子に腰かけようとしたところで、カウンターの上に梱包された長い物を見つけた。これは恐らく、あのデカブツが依頼した日本刀だろう。この短期間でよくぞ仕上げたものだ。私は無遠慮に梱包を剥し、中身を出した。

白鞘に鍔はなし。これではちよつと長いだけのドスだ。こんなものを振り回したら、武人サムライというより、やくざ者に近い。

さやから刀身を抜き出そうとしたところで、私の腕が掴まれた。

「ちよい待ち、勝手に出されちゃ困る」

「お前は私を、恐れないのか」

「なに言つてやがる。あんたも餡ころさんの仲間だろ？」

「あんた……」

私の鳩尾当たりが悲鳴を上げた。

口を開くと、涎の糸が牙を伝って幾重にも引かれた。

「美味そうだ」

「……は？」

餌が言葉を追える前、私はその喉元へ食らいついていた。鋭い二本の牙を突き立て、私は全力で頭を振った。首を食い千切られ、分離した頭部がサッカーボールよろしく入口の方へ転がっていった。

首の落とされた鍛冶屋の死体を地面に横たえ、男女が情交をするかの如く、衣服を引き千切りながら肉を食った。ざらざらとした舌は、骨に着いた肉までこそげ取る。牙を立てれば、骨まで柔らかく砕ける。脊髄を上下の歯に挟んでプレスすると、トロリとした髄液が口内を満たした。

新鮮な昼食に、肉体はヴェートーベンの交響曲歌第9番を歌った。

《食欲とは、君の頭蓋に坐す異形の脳髓が出す命令、劣等なる本能の手



引書

私は本能に引きずられるだけの、哀れな人形に過ぎない。餓ころはどうやってこれを堪えているのか。抗いきれぬほど強烈な食欲は、この肉体の持つ本能なのだ。私個人の加虐嗜好と相性が良すぎて止められない。このまま怪物に生きるのも悪くないと思わせるほど、食欲と殺人は私を満たしてくれた。

不意に扉が開かれ、歌が止められた。

「ただいまー!」

「こら、荷物を運ぶのを手伝いなさい!」

どうやら妻子持ちだったようだ。少女は父親の頭部に躓き、派手に転んだ。地面に手を突いたすぐ先まで、流血の水溜りが迫っている。

「……おとーさん?」

「ひっ!」

母親は状況を察し、我が子を起こして扉まで引いた。両目が見開かれて、上下の歯がカタカタと震えている。それでも彼女は母親として、我が子の両眼を手で覆い隠した。

私はゆるりと立ち上がり、カウンターのの上に置いてあった白鞄をアイテムボックスへ放り込むと、怯える彼らへ無言で近寄った。

「ひっ! た、たた、たた、たつたす——」

本来なら、さつさと立ち去るべきでありながら、私はその場に居座った。時間が経過するにつれ、母親の体から力が抜けていく。失禁までするかど期待したが、その兆候は見られない。だが、子供の目を抑えている手には隙間が出来ていた。

無垢なる瞳が、返り血で薄汚れた、血に飢えたケダモノを眺めている。

「お前は死にたいか?」

「お願い、子供だけは……この子だけは」

もはや脊髄の反射に任せるだけの人形となった私は、子供の顔を抑える母親の手を外し、彼女を奥へ放り投げた。壁にぶつかった彼女は蛙のような声を出して肺の空気を吐き出し、痛みに悶えながらも必死でこちらへ這い寄ろうとしていた。

私はそちらを無視し、小さな少女の目線まで腰を下ろして聞いた。すでに涙が溢れて、開いた口から呼吸音が聞こえる。意図せず、私の口角が吊り上がった。

「お前は、死にたいか？」

「お、お母さんを苛めるなあ！」

少女はいったん目を閉じてから強い目で私を睨み、涙を振り乱しながら拳を突き出した。私はその手を取り、高く持ち上げた。足をばたつかせ、私に蹴りを食らわそうとしている。少女ながら大した闘争本能だ。

「お前は悪い奴だ！」

「そうだ、私は悪い奴だ。ならばどうする」

「お前なんか！ 魔導王さまがやつつけてやる！」

「魔導王がねえ……あつはっは！」

私は幼女を下ろし、腹を抱えて笑った。少女の闘志は覚めるどころかより一層、燃え上がって私に拳を突きこんでいた。

「うわあああああ！」

「戦場で待っている。悔しければ強くなれ」

それだけ言っただけその場を走り去った。

今日、最も満たされたのは唐突な軽食——ではなく、少女の怒った顔だった。

夕刻迫る竜王国を出て、私は再びデカブツの下へ四つ足で走った。



それから数時間後、焚き火を挟んで座る虹色少年を相手取り、流暢に愚痴をこぼしていた。

「でさー！ 聞いてくださいよー！ あのバカ！ 人が折角、こつそりと武器を仕入れてやろうと思ったのに、大きい方の女王のパイオツ揉んでやがってえー！ マジ、その場でぶっ殺してやろうかと思っただッスよ！」

前日と何ら変わらない光景が展開されている。間違い探しをする

とすれば、挽ぎ取られた腕が左である点と、私の口が饒舌である点、前日以上にひそめられた虹色少年の眉毛だ。

回復薬で治したらしく、右腕は新品が生えていた。

会話を止めることなく、アイテムボックスから竜王国の女王の手作りおにぎりを取り出して頬張る。口から米粒が出て行くが、それは故意にやっているので問題ない。彼の眉がしかめられるほどに、私の口は加速する。

「だいたい、あんなのに曾孫のおっぱい揉ませておいていいんすか？

いいんすか？ 本当にいいんすか？ 処女と童貞の初エツチなんて聞くに堪えない、見るに地獄な最悪の展開ツスよ？ 初夜が失敗に終わって女に恥かかせたり、自分が恥かくくらいならいっそ、娼婦でも買って勉強しろっつーの。竜王国の始祖であらせられる、処女のドラゴン女王の曾祖父としては今、どんな気持ちツスか？」

「……」

「あんなデカブツのデチ棒で処女膜を破られた日にや、女王は再起不能になりますぜ。そこんところ、どう考えてるんですかあ？ もしもーし？ 聞こえてるなら返事くらいしろツスー、バツイチ曾孫持ちの訳あり物件、人間大好きシヨタ竜王」

「……随分、吹っ切れたな」

少年は切り取られた左腕の傷口を抑えながら言った。

「君は恐らく、自らの選ぶべき選択肢が見えたはずだ。君の眼前にそびえる天秤の秤に——」

「禅問答はやってないんすわ」

「……よかろう、ならば本題に入る。情報の取引とは等価交換でこそ成立する。私に聞きたいことがあるはずだ」

「流石、自称賢者ツスねえ！ 話が早くて助かるツスわ！ 見た目は糞生意気なだけのガキだけど」

こんがり焼けた竜王の左腕を、これ見よがしに肉を食い千切りながら笑ってやった。この世界に来て一番の笑顔だったと自負している。少年は目を閉じ、首を振ってため息を吐いた。

「名無し、君の物言いには、いちいち癪に障るものがある。それは何か

を期待してのことなのか？」

「育ちの悪さが故です、猥下」

私は緩んだ顔を締め直し、改めて真顔で聞いた。

「女王が躊躇っているワイルド・マジックとは？」

「ほう……妙なところへ切り込むのだな」

「何の根拠もないが、彼女が持っているナニかは重要なヒントになる。

情報は全て把握しておきたい。お前の言うところの、黄金が付与され

る前段階、苦悩と葛藤に必要な調味料だよ」

「なるほど……」

彼は残った右手を顎に当て、しばらく考えていた。何を言うか考えているというよりは、その情報に対する等価情報が何かを品定めしているように思えた。

「八欲王について何か知っているか？」

「ハチヨクオー？」

「……歴史から説明しよう」

ワイルド・マジック  
始原の魔法。

八欲王というプレイヤーギルドが世界の方を歪めるより以前、この世界に存在していた魔法の総称。現在ではそれ以前より生き残るドラゴンロードのみが行使可能である。事実上、失われた魔法と言っても差し支えない。竜王国の女王陛下は竜王として弱いため、発動の代価として魂を必要とする。

長い説明を終え、彼は私の反応を窺っている。

「……つまり、全部まるっと全て、女王の躊躇いのせいか」

「そう思うかね」

「人間の数十倍も生きてて、たかが百万人を犠牲に出来なかったとは情けない王だ。百万、人間など放っておけば勝手に増える。人間はダニやゴキブリ並みにしぶといというのに」

「いくら殺しても絶滅しない種族とは何だと思うね」

「世界の加護を受けている、下等生物の人間か？」

「私の見解は少し違う。この世界を舞台に例えるなら、必ず主役が存在する。いくら殺そうと絶対に滅びぬ種族とは、世界の主役と同じ種

族だ」

私はここで少し考え込んだ。彼が考えている主役とは――

「モモンガさんがいなければ……遅かれ早かれ百万人は死んだだろう。彼が獣人の国家を滅ぼしたからこそ、かえって竜王国は追い詰められている。彼の武力に依存しながらも、要望は恐れ多くて口に出せない。何より、国民一人一人の怨嗟の声など対応のしようも無い。主役として可能性が高いのは、全ての頂点にいるモモンガさんだ」

「あるいは、そう願った何者か……だ」

「はっ！ 馬鹿馬鹿しい。ゲームの実況動画を見て楽しむアホじゃあるまいし、自分でやらずして何が面白いのやら」

そう言った直後、背筋を悪寒が駆け抜けた。四人のプレイヤーがこの地へ落とされた事象に、誰かの意思が介在している可能性は、寒気がするほどすわりが良い。私は自然と、耳を澄まして周囲を探っていた。

だが、誰かの気配があろうはずがない。夜の闇の中、たき火の音しか聞こえない。

「異世界転生の本質とは何だと思うね」

「現実逃避だな」

「然り。現実を抱いている不満の量によって、逃避行の物語は心に馴染む。それは、自殺願望という逃避手段が異世界転生に化けたに過ぎん。現実に不満を抱いている人間は、自らの理想とかけ離れた異世界転生を嫌悪する。現実に満足している人間には決して馴染まない」

「一理あるが、随分と偏った理論だ。単に幻想小説好きということもあるだろうし、単純に物語の質が低い場合もある」

「君同様に」

嬉しそうに口を歪めるレインボー少年の心情はよくわからない。

「私はサイコキラーではない。他者の苦痛、怒りこそ私の愉悦。殺戮はそれを引き出す一つの手段だ。殺戮そのものに快楽を感じない主義でね、最も近いのは苛めっ子だ。相手の反応なくして満たされたい」

「君は自分で考えているほど自己の秘密を封印できていない。本当に

壊したいものは別にあるはずだ。自ずと明日、君がとる選択肢も見えてくる」

肺に雲丹うんたんでも放り込まれたような感覚がして、吐き気がした。

「君が自覚すらしていない願望は、明日にでも叶えられるだろう」

「……何の話かな」

「頼みがある」

私は、真剣にこちらを見据える少年に胸騒ぎを覚えた。案の定、少年の頼みは私に実現可能な行為であったが、気の進まない行動であった。

「しらね……」

「君は必ずそうする。これは他者を苦しませる君のサディステックな欲望と、私の理想とする未来が合致しているからだ」

「使い古しもいいところだ。自称・頭がいいドラゴンなら、もっと気の利いた策が思いつくだろう」

少年は穏やかに微笑んだ。

「名無し、プレイヤーとは液体の入っていない水槽なのだ。最初に出会った者が色のついた液体を注ぎ込み、吐き出されるものが決定づけられる。対して私たち幻想生物はプレイヤーが吐き出す液体を浴びせられ、良くも悪くも影響を受けてしまう。私も随分と変わった自覚はある」

「どうせ蘇生されるぞ。モモンガさんがお前を放っておくはずがない」

「それも予定調和だ。私は御免なのだよ。知性が高く、悪意に満ちた者が仕掛ける、一国家が滅びてしまうほどの地獄に應對するくらいなら、しばらく彼岸から静観させてもらう。蘇生されてからの事後報告で十分だ」

「……？ いったい、何の話だ」

「私は己が生に課された命題を成し遂げる。初めに馬鹿が成してくれたと同程度の責務を、彼女へ受け継いでやれるだろう」

「……馬鹿？」

それから奴は多くのことを語ってくれたが、こいつだけが知る何か

を最後まで私に話すことはなかった。取りあえずわかったことは、モンガさんは凄い。どうすれば世界にここまで愛されるといふのか。

東の空が太陽の気配を察して明るくなる頃、奴は空を見上げた。

釣られて見上げた暗い空へ、二つの赤い光が北東へ走っていくのが見えた。

「赤い星め……降るがいい。世界の片隅で身動きができずにいる宗教国家を、紅に染め上げろ」

「隕石か？ この世界ではよくあることなのか？」

「これは凶兆だ」

彼は顔を戻し、出会ってから最も真剣な顔で私を見つめた。

「『聖王国には近寄るな』、全てが終わってから皆にそう伝えたまえ」

「……だから、一体なんの話だ。思わせぶりな態度は良くない」

「私が彼岸より復帰してから解説する。さあ、君は眠りたまえ。戦いの日はすぐそこまで迫っている」

その見解は正しい。あと数刻もせず、私の死ぬ日が訪れる。

決断の刻、来たれり。

弱者よ、壮絶であれ ―前座―

武人建御雷は草原に立つ。

朝焼けは世界の変革を告げるかのようだ。澄み渡った空気の異世界であれば、朧な黎明すら神話級の景色だ。今は黙して語らず、静かに闘争の狼煙を待つのみ。

死線を遡ること2日。

竜王国という大翼を形作る羽、領地・領民を管理・保護する貴族たちへ伝言が飛ばされた。

《竜王国の始祖、七彩の竜王より伝達する。竜王国の貴族諸君、速やかに領地の軍を総動員し、首都北部へ集結させよ。獣人と竜王国、互いの存亡をかけた最後の戦いが始まる》

反論の余地なく、そこで切断された。

「始祖さまが……？ ケダモノどもと戦争？」

唐突に放り込まれた情報を、頭蓋の内部で急速に処理をする老年の貴族は呟いた。

膨らんだ風船のような心中、困惑がふよよと漂う心の最奥にて、燻っていた種火が燃え上がる。海馬にて再放送されるは、魔導王の圧倒的な武力に煽られ、戦争に参加すべく立ち上がった過去。

あの時は舞い降りた神の演説で出鼻をへし折られ、その手で遺恨を断つことは叶わなかった。あの日から貴族たちの胸の内、かがり火は燃え尽きることなく心を黒く焦がしている。あの場へ居合わせた領民も同様で、獣人討伐を志願する人間は後を絶たない。

人間は奪われ過ぎた。

ならばこれは、先の戦争の再現だ。参加する理由は多々あれ、参加しない理由は入荷すらされていない。

「遅咲きの竜胆……か」

魔導王の友人の館ころもつちもちが降臨した情報は出回っている。獣たちへの敵意で染め上げられている竜王国に、彼女を取り込んで国の覇権を握る



べく暗躍する貴族はいない。彼女は戦火の予兆、最後に戦う日は近いのだと薄々は勘付いていた。

「晩年、散ると知りながら咲かす花もまた良し」

脳の奥で燻っていた種火が火柱となって噴き上がった。老年の貴族は執務室の装飾品と化していた剣を握り締めた。室外で待機している執事へ、怒鳴りつけるような声で叫ぶ。

「出立する、領内の兵を集めろ！ 私自ら陣頭指揮を執る」

「はっ！……へ？ 領主さま!?!」

「今度こそ、我らの手でケダモノどもの息の根を止めてくれる！」

老年の貴族は駆け出した。



太陽がある世界で、夜は必ず明けるもの。最も暗い夜明け前、闇は少しずつ明けていく。

(私の死ぬ日に陽が昇る)

東の空が徐々に明るくなる様は、さながら獄門の解放だ。魂が向かう先、極楽浄土はここにあると主張している。

随分と長い間、草原に立っていたので気分は高揚している。死刑台への階段を、一段一段と噛みしめて登るくらいの時間はあった。太陽がその全身を覗かせたとき、13階段は昇り終わっているだろう。

やがて、ブルー・プラネットと館ころもつちもちが、南北にそれぞれ陣を張った自軍からゆらりと姿を見せた。

「武士道とは、死ぬことと見つけたり……か」

所詮、この世は修羅の国。

世知辛い弱肉強食は、争い合う大義名分。己の死を恐れながら、死に臨む恐怖はなし。武人サムライは巨体の震えを振り払うように、上下の歯をガキリと鳴らした。

断頭台へ首を置くのは誰なのか、考えるまでもない。結論が出ていながら、過程を飛ばすこともできない。争わずにいられないのは、人間という異形種さかの性か。非合理的な生き方であるが、自己陶醉にも似

た痺れが武人の脳を走った。

「まこと、御しがたきものよな」

気が付くと、地平線から太陽が顔を覗かせていた。

館ころとブルー・プラネットも間合いに入っている。手ぶらであることがこんな不安になるとは知らなかった。両手の爪を擦り合わせて研いでいる館ころは、脅しに十分すぎる。

「タケちゃんさあ……人間の味方をしてくれるなら、助けてあげてもいいのよ」

「下らない、本当に下らない。今さら遅いんですよ、建御雷さん。まあ……俺は優しいから、獣の味方をしてくれるなら殺しませんけど」

「私の方が優しいけど？」

「はっ、どの口がほざくんですか。恋愛体質のビッチさん」

館ころとブルー・プラネットは殺気立っているが、それは建御雷に向けられたものではない。巨体を透過して、館ころとブルー・プラネットが睨み合っている。武人は後ろ髪を断ち切り、剥き出しの歯茎で嘲笑う。

「これより我ら、修羅に入る！」

拳を掲げた武人に対し、反応は冷ややかであった。

「うるさいですよ、死にたがり屋さん」

「ほんつと、男って馬鹿ばっか」

黒く燃える闘争の波動、《絶望のオーラ》が天に向かって伸びている。武人が放つ《英雄のオーラ》を侵食せんばかりに、北と南で挟み打つ。

武人の脳が痺れを増した。

地面を強く踏みつけければ、軽い衝撃波が草原を走っていった。両軍、一体となって何かを叫んでいる。武装した群衆たちのうねりが、闘争本能を過熱させる。三名、もう後には引けない。ここで後に引けるのならば、初めから戦っていない。

「命を賭けて、かかってこい！」

朝焼けで色めき立つ槍衾やりがすまを背景に、三名の混戦式PVP茶番が幕を開けた。

◆  
地面を両手で叩いたブルー・プラネット、蔓が地面から生えて建御雷を拘束した。授かった隙を一分たりとも無駄にせず、餓ころの鋭い爪が迫る。

「うああー！」

叫んだのは胸を切り裂かれた建御雷ではなく、餓ころだった。赤く光る四つの目には、引き裂かれた胸の肉片と血が放り投げられるのが見えた。

胸に手を当てると、驚くほど鮮やかな血が流れていた。触れても痛みはないにせよ、傷は思ったより深い。見下ろすと剥き出しになった心臓が脈打っていた。

戦って味わう激痛は初体験で、死が近づいて鳥肌が立った。

ふと、何の追撃もないので疑問に思って顔を上げた。

武御雷から奪い取った血がべつたりと付着した自分の指を、餓ころもつちもちが舌を出して舐めとろうとしていた。

「ハア……ハア……」

欲情しているかのごとく上気した顔は、彼女と出会ってから最も魅力的な顔だった。

「餓ころさん……っ？」

「メス猫があー！ その程度で怯むなー！」

ブルー・プラネットが怒鳴り、彼女は我に返った。それでも途切れた闘志はすぐに繋がらなかった。

「あ、私は……」

「あんたがやらないなら俺がやるー！」

既に近寄っていたブルー・プラネットの拳が、建御雷の顎<sup>ジョウ</sup>へ突きこまれた。刹那、意識を失った武人は膝をつく。まるで、何かから逃げて没頭するかのよう、休むことなく殴打が繰り返された。

一度はついた膝を上げ、突きこまれた腕を掴みあげて武人は立つ。武闘家の職業を取得していないブルー・プラネットの拳など恐れるに

足らず。ガクガクと膝が震えても、どれほどの血が流れても、武人の闘志、未だ衰えず。

「くっ、倒れる！ 倒れる！」

この時、建御雷は案外と冷静だった。初めから結末は見えている。これは建御雷の命をBETし、戦争を調停するイベントだ。失敗しても彼が死ぬだけで済むなら安い。どうせ、生きる理由にあては無い。建御雷が狙っているのは、教育という洗脳で培われた、脳の根幹にまで値を張り巡らしている倫理と善性を叩き起こすこと。

プレイヤーにとつての殺人は、同じプレイヤーを殺すことに他ならない。

こちらの種族が何であろうとプレイヤーにとつて、この世界の人間は同じ人間ではない。現地の人間をいくら殺そうと、ゲームを間口に世界へ降り立っている以上、人間など数式というプログラムが造り出す幻影だ。

既に現地童貞の人間を殺してたいるブルー・プラネットであろうと、その分水嶺は簡単に越えられないと踏んでいた。有難いことにスキル・魔法の類を使っていない。それは建御雷の仮説を証明してくれる。森祭司ドレイドの力を使えば決着は早い、それは建御雷の死を意味する。

「畜生……畜生……」

ブルー・プラネットの腕から力が逃げていった。

館ころも自分の手に付着した同国人の血が気になるらしく、まるで集中力を欠いている。彼女の全身からは、戦闘続行を迷っている空気があった。

(ここで終わってくれないかな……無理だろうなあ)

建御雷は心中でため息を吐いた。少なくとも自分が死ぬような結末は避けられそうだが、ここで引かないのならもつと痛い目に合いそうだった。

元より彼らは、異世界で出会った大事なものを守るために戦っている。数多の命が大地に吸われている現状、この程度で怯むような薄っぺらい人間が、ギルド、アインズ・ウール・ゴウンに在籍しているとは考えにくい。

「何なんだよ……あんた、何がしたいんだよ……」

「人と異形と、生まれた種族が違っただけのこと。争うことに意味はない。違いますか？ もう、和解しませんか？」

心臓を剥き出され、生殺与奪の権利をそつと見せつけながらも、武人は倒れない。両手を広げて笑っている彼に、餓ころとブルー・プラネットがたじろいだ。

「駄目っ！」

「ああ……駄目だっ！」

その恩情は、感情で足蹴にされた。

「ドラちゃんが……友達が苦しんでるのに、私は何もしてやれなかったもの！」

「餓ころさん……」

「ここでケダモノどもがいなくなれば、きつとドラちゃんは笑ってられる！ だから、私は引けないの！」

彼女の言葉は本心であるが、ブルー・プラネットへの挑発に等しい。

「ちよつと、餓ころさん。ケダモノどもってどういうことかな？」

「何よ！ 人間たちを殺した癖にっ！」

「人を殺していないビーストマンの子供たちを、先に惨殺したのはどこのどいつだあ！」

ブルー・プラネットはこれまで見たこともないほど怒り、口調を荒げた。両陣営の犠牲、その事実だけで鑑みても、餓ころとブルー・プラネットは簡単に和解できない

。ブルー・プラネットは、餓ころへ殴りかかろうと前に出た。

一度は引つ込めた命を、再度テーブルへ差し出す羽目になった。

怒りで理性を紅に染め上げる森祭司の前へ、建御雷が立ちほだかる。その巨体を支える膝が笑い、身動きすれば体が軋む。切り裂かれた胸からは血が止まらず、血の気が引いて顔が涼しく思えた。

「どけよー！」

叫ぶブルー・プラネットの両手を掴み上げ、血を吐きながらも建御雷が叫んだ。

「私を倒さずしてここを通れると思うな！」

武御雷の心臓めがけて、森司祭の拳が突きこまれる。殺してしまうつもりだったのだろうか、所詮、拳で語る職業ではなく、その一撃で心臓を潰すには至らない。

「我が屍を越えて見せろ！」

「タケちゃん、避けて！」

館ころの爪が背後から迫っている。それを知ってなお、建御雷は避けない。避けてしまえば、ブルー・プラネットの喉元が切り裂かれる。ザクツと小気味よい音が背中で鳴り、切り裂かれた背中が熱くなった。貫通していない辺り、途中で加減をした館ころの優しさが見えた。

「どうし……て……？」

「避けなかったのか」と、彼女の震える唇が語った。

傷口からどろりとした感触の何かが伝い、草原の雑草を真紅に染め上げていく。顔だけを振り向き、武人は静かな口調で言った。

「私は言ったでしょう。生まれた種族が違うだけ。人と異形、命の重みが変わりはない。ただ、立っている場所、生まれた種族が違っただけなのだ」

「タケちゃんが死んだらドラちゃんは……悲しむよ、きつと」

「死もまた止む無し」

「……男って、ほんとバカ」

猫科に属する獣娘は微笑んだ。言い終わると同時、館ころの爪が建御雷の腕を切り裂いた。ひじの関節から先、左腕が遥か遠方へ落ちた。

「ほら、腕が飛んだよ。だからもう負けてよ、ねえ！」

「まだまだ！ 私は倒れぬ！」

鋭く尖った爪が顔面に振り降ろされ、建御雷の四つもある目の左半分が潰れた。顔面に縦に走った裂傷から血が流れる。視界の半分も失いながら、大地を踏みつける武人の足は揺るがない。

「倒れてよおー！」

「断る！」

「どうして！ どうして倒れてくれないの！ どうして人間の邪魔を

するのよ！」

「どけえ！」

掴んでいた腕を振り払い、これまでの比ではないほど重い一撃を胸に食らった。一瞬、意識が途切れたのは心臓が停止したからかもしれない。拳の重さは、自らの命を賭した武人に膝をつかせるほど重かった。

自己陶醉によって分泌される痛みの緩和剤、脳内モルヒネドーパミンすら凌ぐ痛恨の一撃に、ある種の称賛すら覚えた。

「背負ってるものが軽いんだよ、餡ころお！」

「何よ！ ケダモノの——」

「黙れえ！ 俺はあの子たちの保護者だ！ あっちの先頭にいる小さい獣たちが見えないのか！」

指さした北の槍衾、食人種たちの寄せ集めた軍勢の先頭。手を組んで戦闘を眺めている小さな観戦者たち。彼らがブルー・プラネットの守るべき子供たちなのだろう。

人は超越した何かに対峙し、己の無力さを悟ったとき、自然と合掌する。人間に支配されつつある大陸の僻地で、絶滅寸前の彼らは神に祈る修道士に見えた。

「女王が可哀想だからって、あんたの行動理念は薄っぺらいんだよ！」

「だから攻撃が中途半端なんだろうがあ！」

その時の顔は印象的で、悔しそうに歯を食いしばって俯く餡ころ女史を、建御雷は美しいと思った。彼女の闘争は終わったように思える。ブルー・プラネットに向き直った建御雷は、顎をガチガチと噛み合わせながら叫んだ。

「ならば問う。ブループラネットさん、私を殺せるのか？」

「ここで引けると思ってるのかあ！」

剥き出しになった心臓。その周囲にある肉片を掴み上げ、ブルー・プラネットは建御雷を至近距離で睨む。こみ上げる感情から目をそらし、自暴自棄になっているように見えた。

「まだ幼い彼らの親を奪ったのは人間だ！ 友達を惨殺したのも人間だ！ 住処を、国を、同胞の命を奪ったのはモモンガさんだ。俺はも

う、彼らから何も奪わせない！」

「彼らを連れて逃げたらどうだ」

「プレイヤーで元人間の俺が、あの子たちの人生を背負った俺があ！」

「ここで引けるかよ！」

「だとしても、私に後退は無い！」

「俺にも後退は無い！」

胸から手を放し、拳を握って武人を殴りつけた。建御雷の体が揺らぐが、それでも彼は倒れない。

左手で再び頭部を殴ったが、やはり武人は倒れない。

残された二つの目が、ブルー・プラネットの唇と拳が震えているのを正確に捉えた。かつて共に笑い、ゲームを楽しみ、時間を共有した仲間。今は同じ世界を生きる、真の意味での同胞。その命を奪う恐怖で震えている。最低限の教育でも、倫理観の躊躇いは足を重く踏みとどまらせる。

それでも背負うものがあれば、人は簡単に引けない。

同じく、武人も引けない。目的は争いの調停。自らの死もまた止むなしと、覚悟を決めた彼はどれほどの血を吐き出そうと倒れない。内心では激痛に悶え苦しみ、泣き喚いて地面を転がりたいと思っても、ブルー・プラネットの戦意を削ぐまでは許されない。

「うああああああ！」

怒号で恐れを振り払ったブルー・プラネットが、何度も、何度も、途中で数えるのが馬鹿らしくなるほど巨体を殴りつけた。

建御雷のHPが削れていく。

血を吐き、左腕を切り落とされ、全身が痛々しい痣だらけになると、必死で意識を繋ぎ止めた。ここで建御雷が倒れてしまえば、惨たらしい戦争が始まるだけだ。どちらが勝つにせよ、争いの果てに溜め込まれ、未来へと引き継がれる憎悪と怨恨はこれまでの比ではない。やがて、負の感情の渦は世界を巻き込んでいく。終わらない戦争を繰り返すだけの螺旋回廊が完成する。

倒れるにしても、死ぬにしても、楔くさびをブルー・プラネットへ打ち込まねばならない。両陣営、固唾を飲んでこのPVPを見守っているの



だから、プレイヤーが止まれば自然と争いも止まる。

「もう止めてよ!」

「はあ!?!」

「タケちゃんか……死んじやうよう!」

館ころの絶叫で、ブルー・プラネットは拳を止めた。

「……くうつ……ううううううううあああああ!」

「止めて! タケちゃんを殺さないで!」

「そんな簡単に引くならなあ! 初めから俺たちに突つかかってくるんじやねえよ!」

怒鳴りながら繰り出された拳は正確に頭部を打ち抜き、遂に武人は草原に倒れた。気を抜けば、意識を失いかねない激痛だ。体も思うように動かず、地に着いた手にもまともに力が入らない。

「立て! 建御雷い!」

胸倉の肉を掴んで引き起こされた。それもなかなか痛かったが、どうにか立ち上がる体裁は立持てた。

(思えば、不条理な出会いだった……)

ブルー・プラネット。館ころもつちもち。武人建御雷。

三人とも、ただ出会い方を間違えただけなのだ。例えば、三人が早々に合流し、一塊になって行動していれば、この事態は避けられただろう。

だが、現実はそのようならなかった。

神懸かったすれ違いの末、三名は立ち位置を違え、開戦は目前だ。

そして今、建御雷の命の蠟燭も、消える寸前の最後の炎上だ。

建御雷に残された時間の感覚が伸びていく。HPも底が見えてきた。体はもう、痛みしか感じない。打撲による疲労感で、すぐにでも倒れてしまいたい。心中を、走馬燈のような心残りが貫いていく。

仮にここで自分が死ぬのなら、残された人と異形と、食うものと食われるものと、共に手を取って同じ大地を生きてもらいたい。

喰らったら意識を浚うであろうブルー・プラネットの拳が、眼前で止まった。

風が顔面に吹きつけた。

「畜生……畜生……俺は引けない……引けないんだよ」

「その拳を突きこめば、それで私は倒れるでしょうね」

たった三人だけの戦場へ走り込む、白い馬が一头。世界のあり方すら変えてしまうプレイヤーの戦いに水を差すのは自殺行為に等しいが、彼女はそれを理解しながら駆け込んだ。

「ドラちゃん……」

館ころが呟いたので、ブルー・プラネットと建御雷の顔がそちらへ向いた。白馬に騎乗した大人の女、銀の甲冑に身を包んだ大きい方の女王、ドラウデIRON・オーリウクルスが憂いを帯びた顔をしていた。その場に居合わせたものの全てが彼女を見ているであろう、緊迫した沈黙の最中。それらの視線を意に介さぬ仕草で、悠然と馬を降りて近寄ってくる。

（あ、ドラちゃんが殺される……）

そう感じた館ころは正しい。動けなかったのは、女王という職業ジョブが他者の妨害をさせぬよう、威風堂々とした侵しがたい空気を発していたからだ。覚悟を決めた一国の王が、何の敵意もなくその場へ跪く。

「お初にお目にかかります、ブルー・プラネット様。私は竜王国の女王、ドラウデIRON・オーリークルス。あなた方の倒すべき、人間たちの王でございます」

目礼の後、顔を上げた彼女は微笑んでいた。

戸惑いながら、ブルー・プラネットが姿勢を正して頭を下げた。まるでサラリーマンのような仕草で、数秒前まで殺し合っていたとは思えなかった。

「……初めまして、女王陛下。ご丁寧な挨拶、ありがとうございます」  
「女王陛下、ここで何をしています」

建御雷の疑問に微笑みで返し、彼女は続けた。

「建御雷様の命を奪ってはなりません。彼が死ねば、アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下は我が国を決して許さないでしょうが、ビーストマンとて同じことにございます。建御雷様が逝去なさったと知れば、魔導王陛下はブルー・プラネット様が獣にいいように利用されたと考え、人と獣、どちらも根絶やしになさるでしょう」

終戦を告げる外務大臣のように晴れやかな顔だった。ぼちぼちと本気で仕事を始めた太陽の光が、彼女の頭髮に陽を当てて虹色に輝かせた。言葉の半分以上は、左と右の耳を繋げる回廊を走り抜けていった。

「美しい……」

どこにあるのかわからない彼の両眼は、七色の光彩で埋め尽くされた。思わず呟いたブルー・プラネットに、心中で武人も同意する。成人男性を以てして、彼女は絶世の美女だ。

「あなた方はアインズ・ウール・ゴウン陛下の御友人、互いに争ってはいいけません。かつて笑い合っていた皆さまが、意見の不一致で殺し合うなど、魔導王陛下はどれほど悲しまれるでしょうか」

「あ……はあ」

「ぶっ……」

更に困惑を深めるブルー・プラネットを見て、餓ころが派手に吹き出した。餓ころをチラリと睨みつけることもできず、男性陣は女王から目を逸らせずにいる。

「代わりといっただけですが、私の首を差し上げます。期せずして、過剰な恨みを込めて殺されたブルー・プラネット様の子供たち。その命に対する償いだと思っただきたい」

彼女が恐れるは戦争ではなく、アインズ・ウール・ゴウン魔導王の怒りだ。命を差し出す程度でアインズの怒りを買わずに国が守れるのなら、お釣りどころか付加価値<sup>プレミア</sup>まで付く。

「ドラちゃん……」

「女王、あなたが獣たちを殺せと？」

「ビーストマンの捜索部隊へそのような指示は出していませんが、想像できたことです。私の思慮が浅く、ブルー・プラネット様の大切な子どもたちを奪ったのは、偏に私の責。長きにわたって獣たちに脅かされた竜王国の民、此度の当事者たちを責めることはできませんが、ブルー・プラネット様のお怒りも理解しているつもりです。この場合は私の首でお許し願いたく」

「しかし……あなたの首を取っても」

「ならば、終戦でしょうか」

「……」

ブルー・プラネットは言葉に詰まった。

ここは魔法が存在する世界。魔導国でモモンガに蘇生を頼めば、彼は快諾してくれる。中立を提示している建御雷こそが正しいだろう。そもそも、自分は何のために戦っているのか。

握った拳が解れていった。

「本当はわかっていたんです。戦争をしたって、あの子たちは帰ってこない。建御雷さんを殺しても、今度は僕の手が血に染まるだけで。でも、俺が止まってしまえば、今度こそあの子たちは前に進めなくなってしまう……だから」

「本当に、大事に思っているのですね」

「……はい」

「あなたは間違っていますね。誰にでも、命を賭してまで守りたいものがありますよ」

館ころへ目配せをすると、彼女は恥ずかしそうにそっぽを向いた。立ち上がり、笑顔で手を差し出した女王。それに応じるかのよう  
に、ブルー・プラネットは優しく握手悪手に応じた。割と至近距離で、誰かが唾を吐いた音が聞こえた。顔を見渡して探るも、三名の誰も吐き捨ててなどいなかった。

「ありがとう、女王陛下」

「ドラウディロンとお呼びくださいませ」

これにて決着と、建御雷が大の字で倒れた。

「……疲れた」

見上げる空は青く、澄んでいた。

「俺も……疲れました」

「二度と御免ですね」

「え……こんなんで戦争が終わるの？ ……まあ、仕方ないか。私もモモさんに蘇生を頼もつかな」

館ころの疑問へ答える間もなく、大量の馬が走る音。人間側へ目を見るのと、竜王国の旗を掲げる武装集団が、本陣に合流するのが見え

た。全員、充電を終えたばかりの電池のような満杯の闘争心でいきり立っていた。

「全軍停止い！ 停止い！」

「皆のもの、ここが戦場だ！ 我らは間に合ったのだ！」

「宰相殿！ 開戦はいつでございますか！」

各地から集められた貴族たちが、宰相に詰め寄っているのが見えた。

「なんだと言うのだ……？」

ドラウディロンが苦笑いをした。

きつとこれから、ブルー・プラネットは女王の色気に惑わされながら獣人たちを保護して魔導国へ向かうのだろう。女王の引率でモモングアの待っている魔導国へ案内してくれるはずだ。

(美女を連れて旅なんて楽しそうだよなあ……)

その点だけ、ブルー・プラネットと建御雷の意見は合致していた。

草原にそよ風が吹く。

和平会談は実現しなかったが、どうにか建御雷の命を維持して調停は叶った。

それであろう筈がない。

それで終われる訳ない。

破壊される前提で仕組まれた和解は、すぐに瓦礫と化する。

(さーて……始めようかあ)

演壇の片隅で、獣は口角を歪めた。

「♪あんだがったどっこさあ、ひいごさあ、ひいごどっこさあ、くうまもつとさあ♪」

プレイヤーの耳が誰かの歌声を引き込む。

建御雷の胸に衝撃が走った。

「……え？」

「建御雷さん！」

建御雷の胸を刀が貫いていた。



ケダモノは物思う。

(少し考えればわかりそうなものを……思考の放棄とは恐ろしいものだ)

竜王国の首都で繰り返される、数千、数万の日々の営み。その最中、王宮に放り込まれた人間の頭部と手紙。たかだかレベル一桁程度の獣人が、誰にも気づかれずに王宮へ侵入するなど不可能だ。ならば、それに相応しいプレイヤーがいると察しても不思議ではない。

それ以外にもヒントはあったが、彼らの思考はそちらへ向けられない。現に、プレイヤー<sup>強者</sup>の気配が増えていることに誰も気づかない。

油断大敵とはこのことだ。

たった三人だけの戦場へ女王が駆け寄ったことで丸く収まりそうな現場に胸やけを覚えつつ、ケダモノは唾を吐き捨てた。野獣が狩りを行うがごとく、静かに歩みを進めた。透明化をしているので表立っては見えないが、踏みつけた雑草が潰れて足跡を知らせている。そこまでしてもなお、彼らは気付かない。

手を伸ばせば届く距離に、館ころもつちもちの背中が見えた。丸みを帯びた体は女性らしさが際立ち、そこはかたなく色気も感じさせる。今なら、手の甲から伸びる三本の爪を突きこむだけで、容易く命も奪えよう。

だが、最初に狙うのは彼女ではない。

有頂天になった彼は、自らの存在を知らしめるように歌い始めた。

「♪あんたがったどっこさあ、ひいごさあ、ひいごどっこさあ、くうまもつとさあ♪」

「誰!？」

館ころが明後日の方角へ顔を向けた。その視界を掻い潜<sup>スナック</sup>って走る。首都で食い殺した鍛冶屋<sup>スナック</sup>から奪取した、専用武器の白鞘<sup>長トス</sup>を、巨体の胸

に突きこんだ。

「……え？」

「建御雷さん！」

「うぶっ……がはあっ！」

彼の口から噴水のような吐血が空中へ放たれた。胸に刺さった刀を引き抜こうともがいている姿は、昆虫標本にされるべく、生きながらに針を刺されたカブト虫に見えた。

「ぶっ……」

思わず吹き出してしまった。

彼は透明化インレシブルを解除した。餡ころとブルー・プラネットが、驚愕の表情で口を開閉させていた。二人の唇は酸欠気味の金魚よりも忙しそうだ。

彼らを小馬鹿にするかのように、片手を上げて獣は叫ぶ。この時の笑顔は、これまでの人生で比較できない満面の笑みだったと自負していた。

「はろおう！」

「あ、あんたは！」

「獣王メコン川あ!？」

「あ、そうだ、いま思い出した。確かそんな名前だった。自然主義者ネイチャーさん、ありがとう！」

忘れていた名を与えられ、姿形まで取り戻した名前の無かった怪物。獣王メコン川が動き出す。

「ギユン」と空間が歪むような音が鳴り、メコン川の姿が消えた。首を回して周囲を見渡したが、どこにも姿が見えない。直後、ブルー・プラネットと餡ころの体は草原に倒れていった。

「お礼に胸を切り裂いてあげるね！」

頭から倒れ込み、勢いよく草原へ接吻する二人へ、悪意に満ちた獣の声が聞こえた。鮮やかな不意打ちでHPの半分程度が削られ、尋常ではない出血が大地を赤く染めた。両陣営、支持するプレイヤーが倒れたことで大騒ぎになっていた。

「あ……やば……いかも」

「なんだよ……コレ」

急激に体力を失ったせいで体に力が入らない。辛うじて頭を上げれば、獣王が笑っていた。

「ドラちゃん！ 逃げて！」

獣女史の体が全力で踏みつけられた。彼女の吐血が女王に吐き出され、鎧の足元に数滴の雫がかかった。

「ぐふっ！」

「死に体は黙ってな」

「餓ころお！」

「来ちゃだめえ！」

突如として倒れた友人に駆け寄るのは当然だ。例え、当の本人が全力で止めようと、世話になった彼女へ駆け寄らずして何が友人か。

「メコン川あ！ 自分が何をしているのか分かってるのか！」

未だ、自分の体を貫いて草原にまで達している刀を引き抜こうと、もがいている建御雷が怒鳴った。

「五月蠅いなあ。そんなに怒ってどうしたの、昆虫標本のタケちゃん。ピンチだったじゃないスカあ。アタイが手助けしてやったのよ！」

「自分が何をしているのか分かってるのかと聞いている！」

「勿論だ！ 少なくともあんたよりは！」

「争いは終わった！ 余計な手出しをするなら私が相手に——」

「ならやって見せろよ、死にぞこないがあ」

目に見えぬ速さで移動する獣王は、建御雷に突き刺さった刀をグリグリと振っていた。

「がああああ！」

「痛い？ 痛いっしょ？ ざまあ！」

握った拳を動かすたびに深く、刀が埋め込まれていく。既に柄の部分しか見えず、刃の部分は大地に埋まっていた。

およそ並の人間なら致死量であろう吐血が、空中に噴射された。

現場はメコン川の独壇場だが、彼の目的がさっぱりわからない

地に伏せるブルー・プラネット、及び餓ころもつちもちが向ける視線。敵意でも殺意でもなく、幽霊でも見つけた不気味な視線を向けて



いた。明確な敵対行動だが、動機が不明なものを見ると下手に身動きが取れない。

ドラウディロンが餡ころを介抱しながら叫んでいた。

「餡ころ、しっかりしろ。お前はプレイヤーだ、死んではならない！  
しっかりしろ！」

「痛うう！ ドラちゃん、私はいいから早く逃げて」

「できるわけないだろうー！」

「お願い、早く！」

「もう遅いッスわ」

女王の背後、得体の知れない怪物の息遣いがする。獣臭い匂いが立ち込め、忍び寄る死の気配で女王の頬を冷や汗が伝った。

振り向きざま、女王は両手を広げて餡ころを庇うように立ちはだかる。

「餡ころを傷つけるな！」

だが、メコン川の目的は初めから女王だ。その首を掴んで持ち上げられ、首輪を嵌められた女王がもがく。

「女王、プレイヤーに甘ったれるのはそこまでにするんだな」

「ぐっ……お前もプレイヤーなのに、よくも餡ころを」

「そうやってプレイヤーに甘ったれてるから、今回の事態を招いたんじゃないのか？」

「私は甘えてなどいない！」

命を握られながらも、女王の目は死んでいない。その強い瞳で睨みつけられ、メコン川の背筋を悪寒が走った。彼女の顔が苦痛に歪む姿は、ずっと前から見たかったものだ。

獣の両眼が輝き、口角が歪んだ。

「人間の数十倍も生きてて、たかが百万人を犠牲に出来なかったとは情けない王だよな」

「……なんだと？」

「それは蛆虫のぐとき偽善というのだ」

もがいていた足の動きが変わり、メコン川の胴体へ蹴りが撃ち込まれた。

「貴様に何がわかる！　ただ平凡に生きたいと、それすら許されない弱者の気持ちだ——」

「お前らの気持ちなんざ知ったことか！　全部、お前のせいだ。戦争が起きるのはお前のせいだ。お前が戦争を招いた。これまでの全て、モモンガさんと餡ころに甘えたお前のせいだ。お前のせいだと認め、さっさと自覚しろ」

繰り返すメコン川は、彼女の反論を許さなかった。女王が口を開こうとするたび、持ち上げられた体を激しく揺さ振られる。

「あつ……たつ……きつ……きさつ……」

「なあ？　なあ！」

メコン川が怒鳴りつけた。

「仲良しこよしで解決するものかよ。モモンガさんに与えられた平和を維持するのは楽だったろう。犠牲になった者や家族を奪われた者の心から目を背け、犠牲を出さずに戦いを放棄して平和に縋るだけなら楽だろう。それらの呪縛を断ち切り、新たな平和を築くとしたら戦争しかない……と、本当は知っているはずだ」

「……くうう」

「子供でさえ命の保証がない、イカれた弱肉強食の世界で、いつまで甘えているつもりだ！」

猛る獅子のようなプレイヤーに言ってやりたいことは山ほどあったが、既視感d・j・i・v・uが女王の口を阻んだ。

「戦いを放棄した死体は弱肉強食の世界に必要な。人も獣も、とつとつと剣を取って戦え！　家族・友・隣人を守れ！　戦って死ぬることを誇りに思え！　それさえもできないのなら死ぬ！　負け犬は死んでしまえ！」

投球でもするような動作で、大人の女王の体が人間の群衆へ放り投げられた。兵隊たちが集まって草原に落ちた彼女を介抱している。彼女の騎乗していた白馬も主の後を追って走り去った。

女子供であろうと一切の躊躇いなく、獣は独壇場で嗤った。

「ひひ、ひゃひゃひゃ！　あああ！　楽しい！　楽しいなあ、みんなあ！」

「メコン川あ！」

「あ、餡ころさん。いたの？」

餡ころの出血は止まっていた。全身を黒い波動で覆った獣の戦姫が、赤い瞳と牙を光らせて睨んでいた。誰の目から見ても彼女は激昂して理性を失っていた。

「その死に体でよくやるもんだ」

「あんたはあああ……あんただけは許さないいい！ タケちゃんみたいに適当に許してやらない！ 泣いて謝っても許さないいい！」

「その台詞、多分、後でまた言うことになるぜ」

「ああ!？」

「後ろ」

メコン川が指さした餡ころの後方より、巨大な何かが落下する音、軽度の地震が草原を走った。牙を剥き出して飛び掛かろうとした餡ころは水を差されて振り返る。

満身創痍の三名と獣性剥き出しの一匹が顔を向けた方角。鱗を七色に輝かせる巨大な竜が、天へ向けて咆哮した。

やや瞳から光が失われていた女王も、驚いて立ち上がった。

「曾祖父様あ!？」

「おお、皆のもの、刮目せよ！」

「我らの始祖！ 七彩の竜王猊下！」

獣人たちが恐怖に震え、老年の貴族たちが加勢に歓喜する。

餡ころが顔を戻すと、メコン川が消えていた。力技で注意を逸らさず、彼は竜王の側へ移動していた。腕を組んでメコン川が佇む傍ら、竜王は集結した人間側の軍勢へ顔を向けた。

「私は竜王国の始祖、七彩の竜王。貴族諸君、急な招集に関わらずよくぞ集まってくれた。これよりこの地で行われるは、人と獣、過去の遺恨を断ち切り、未来を築くための大戦である」

「曾祖父様!？ これは、どうしたのですか！」

「ドラウディロン。絶えることなき悠久の栄光は、その手で作り出してこそ価値を得る。誰かより与えられるものではない。竜王国の栄光は、お前の手で作り出さねばならない」

「どういうことですか！ これ以上！ 我らに更に血を流せと!？」

「立ち上がるのだ、弱き者たちよ。どれほどの血が大地に飲まれようと、一つとして無駄にならない。竜王の魔法とは、魂を対価に発動される」

竜の意志を理解し、女王は膝をついた。アインズ、館ころ、諸プレイヤーの力を借りて、必死で回避した選択肢が、再び目の前に突きつけられている。それは、彼女にとって最も忌避されるべき絶望に相違なかった。

「ま……さか……それを、私にやれと仰るのですか。これまで必死に生き延びてきた民たちを糧に、始原ワイルド・マジックの魔法を行使せよと……仰るのですか」

「いいから戦うんだよ、ドラちゃん」

先ほどの獣の声が耳元で聞こえた。

全身を鳥肌が覆って振り返るも、宰相が青い顔をして口を開けているだけだった。地獄まで繋がる洞穴のようなそれからは、何の言葉も発せられなかった。

顔を曾祖父へ戻すと、彼の首が消えていた。

「……え？」

両目の水晶体が狂ったのだと思い、何度も目を擦った。しかし、遂に彼の首は生えてこなかった。

竜王の鮮血は出鱈目に噴き上げられ、赤い雨となって草原に降った。

「曾祖父様あー！」

駆け寄ろうとした女王の眼前に、切り落とされた竜王の首が差し出された。

「栄光は……お前が……造るのだ」

徐々に声は掠れていき、遂に途切れた。

七彩の竜王自身の死すら含め、プレイヤーの激怒も、女王の心神喪失も、始祖を殺された人間たちを襲う黒い絶望も、全ては七彩の竜王の筋書きでしかない。数人は悠々と座れそうな頭部に腰かけ、メコン川が女王を笑った。

「曾祖父様……曾祖父様……」

「あとはお前が決める、女王。この戦争は、誰にも邪魔させない」

座り込む女王は、虚ろな目で曾祖父の頭部を撫でていた。

やや離れた場所で、建御雷と餡ころが激怒している。相反し、ブルー・プラネットが静かなのは獣側の犠牲が出ていないからだ。予定と寸分狂わぬ三名の様子を確認し、獣王の口角が歪んだ。

彼の姿が掻き消えた。女王を除く、生きとし生けるもの全て、獣の姿を草原に探す。獣王は獣側の先頭で、白い虎へ話しかけていた。

「お前はどうする。戦うか？ それとも薄汚れた誇りを抱いて、死ぬか？」

話しかけられた白い虎の首へ、獣の三本爪が差し出された。周囲の食人種たちのみならず、人間たちの視線まで彼一匹へ集まる。

ブルー・プラネット

青い惑星の子供たちの代表者として、白い虎は立ち上がる。剣を掲げてニヒルに笑うその様は、運命に苛められていた哀れな子供ではなく、十字軍のレジスタンスに見えた。

「我ら、誇り高きビーストマン。欲しいものは戦って勝ち取る。罪と掟は、食人種のものだ！」

「死ぬぞ？」

「死にぞこなつた俺たちは、ずっと生きていない！」

「そうだな……ずっと生きていないな」

(私も同様に……な)

獣王メコン川は、どちらかと問われれば獣側だった。だが、彼が毛嫌いするのは上から目線の転生者だ。這いつくばる弱者に、自分が殺すべき者と、戦うべき敵を、改めて思い知らされた。

「なら、誇りを取り戻せ。弱者よ、壮絶に戦って死ね」

「大地の掟に従い、俺たちは人間を食い殺す！ 腹が減った奴は立ち上がれ！ どうせ死ぬなら、戦って死ね！」

その言葉に呼応し、人を食らう野獣たちが咆えた。獣に属さない一部の食人種が「話が違う」と怒っていたが、逃げ出すものはいない。

魔導王の影に怯え、人間もまともに喰らえない彼らの飢餓は、闘争心へ変換された。生きながらに死んでいた彼らへ炎が宿り、力は蘇

る。

《雄オオオオオオオオオオ！》

人間側の準備如何にかかわらず、食人種側は攻め込む準備を終えていた。

視界の端で、ブルー・プラネットが激昂している。今、何の準備もなく彼の前に顔を出せば、殺されると想像に難くない。せつかく丸く収まり、獣人たちの地位が確立されるはずだった未来は、獣の爪で滅茶苦茶に破かれたのだ。

全ての生物が、自分の戦うべき戦場を持っている。メコン川は、黒い波動が立ち上る自らの戦場へと足を向けた。その足取りは軽く、心なしか浮かれているように見えた。

「♪あんたがったどっこさあ、ひいごさあ、ひいごどっこさあ、くうまもつとさあ♪」

刃のように研ぎ澄まされた雑草が、ダーツよろしく飛んでくる。手の甲から伸びる三本の爪でそれらを払い落しながら、下手くそな鼻歌混じりで自らの戦地へと立った。

三名の準備は出来ている。

館ころよによって引き抜かれた刀を掴み、武人は顎を何度も鳴らしている。「ガキリ」と繰り返し鳴らされる音に混じって聞こえるのは、館ころもつちもちが爪を擦り合わせている金属音。

「お・ま・た・せー！」

不意に、ブルー・プラネットが地面を殴りつけた。

《大地の拘束》

《不動明王撃》！

《剣の舞》！

大地から伸びた巨大な蔓がメコン川を拘束して高く上げ、建御雷の放った衝撃波が空中で命中し、着地間際に合わせて館ころの爪が切り裂いた。

吐血しながら弧を描いて落下するメコン川は、笑っていた。

野獣の優位は揺るがない。

仰向けに倒れる獣の王からは、不敵な笑い声が聞こえてくる。

「ふ……ふ……フ、ふはっ、ははははははは！」

吐き出した血で毛並みを赤く染め上げながら、狂気すら感じさせる有様で立ち上がる。ケダモノは体がへし折れそうなくらいに笑っていた。

「あんたは……あんただけは許さない！」

「殺す！ この場で殺してやる！ あの子たちに何かあったら、地の果てまで追いかけて惨たらしく殺してやる！」

メコン川は口をもにゆもにゆと動かしてから、歯と血を吐き捨てた。

「ぬあああああ！」

激昂する建御雷が詰め寄り、刃を首へと当てた。返答を間違えばこのまま斬首してやるとばかりに激怒していた。

「人の耳元でうっせーんだよ、デカブツ」

「争いをけしかけて何の意味がある！」

「曖昧にすることに何の意味がある！」

建御雷の音量に上乘せされた怒号に、大きな図体が怯んだ。

「これまでの恨みは水に流せない。そこを有耶無耶に終わらせたところで問題を未来へ先送りにするだけだ。ビーストマンの薄汚れた誇り、蛆虫のごとき女王の偽善、人間たちの憎悪の呪縛、今さら個別に解決するなど不可能。死体が積み上げられることになろうと、どちらも本心では戦争を望んでいる」

左右の手から生えている三本爪を擦り合わせ、不愉快な金属音を出しながら絶望のオーラを放った。

「ならば正義はどうなる！」

瞬間、メコン川から表情が消えた。子供が遊んでいた玩具を突然に奪われたような、これまでの彼から想像もできないほど無垢で、虚無な顔だった。

「正義……とは？ 武士道とは死ぬこととうんぬんかんぬんと言ったのに、ここにきて急に正義とかのたまうのか？」

「貴様のやろうとしていることは明らか悪だ！ 攻撃的な言葉を多用し、相手の心を煽り立て、戦争をけしかける！」

「悪も正義も関係ないだろう。だいたい、お前、自称サムライじゃん？正義とか関係ないじゃん。侍のキャラ、確率してないじゃん。ブレレじゃん」

胸倉を掴み上げた建御雷に対し、メコン川は努めて冷静に、武人の腕を掴んで握り締めた。掴まれた腕が軋むほど、ものすごい力が込められていた。

「お前の正義はどこにある。何様のつもりで正義とはほざいているか、わかっているのか？ ふざけているのはお前だろうがあ！」

掴んだ腕を上から抑え込み、膝をついた建御雷の顎に蹴りを入れると、巨体が倒れ込んだ。その腹部を全力で踏みつけ、メコン川は怒りに満ちた声で言う。

「ここでプレイヤーが和解をして、互いに許し合ったところで、人は獣を憎んでいるし、獣は人を食う。疲弊しきった現実は何一つとして変わらないんだよ。なら、私たちに出来ることは精々、徹底的に争わせ、未来に蹴りをつけてやるしかない」

「ち、ちがつう」

「何も違わない。これ以上、無理な和解をさせて苦しませるのはやめてやれよ」

「……」

揺らぐ侍には、メコン川を否定できなかつた。

今にも飛び掛かろうとしている館ころとブルー・プラネットを確認し、メコン川は人差し指を立てた。口調はこれまで以上にふざけていた。

「はい、えー……ここで問題です。とある国に旅行へ来た異邦人。彼はその国が戦争を控えていると知りました。彼は戦争を止めるために戦うべきでしょうか。それとも、何もせずに立ち去るべきでしょうか。はい、ブルー・プラネットさん、どうぞー！」

掌を差し出されたブルー・プラネットは絶望のオーラで応じていた。

「何が言いたい！」

「余所者が彼らの懐へ入り込んで、上から目線で守るだの、止めるだ



の、助けるだの……馬鹿じゃねえの？ 本当に虫唾が走る。ぬるいんだよ、お前ら全員」

「これが、殺し合わせるのがお前の正義なのか！ ならお前は人間じゃない！」

「お前も異形種じゃない！」

「人が真面目に話しているのを、茶化すんじゃねええ！」

ブルー・プラネットが殴りかかるも、獅子は造作もなく躲した。

「簡単に手に入れた力を駆使して神でも気取っているのか……何様のつもりだ！」

「関わったのだから助けるのは当たり前だ！」

「それがビーストマンを貶めているのだと、いい加減自覚しろ！ 本心では戦って誇りを取り戻したいと願う彼らを理解しろ。人間だつて、ビーストマンが憎くて憎くてたまらない。その手で絶滅させたいと思っっている。二人とも、獣と人から戦う場を奪おうとする邪魔ものだといつになったら気付くつもりだ」

女豹と森祭司の顔面に、複数の血管が浮き立った。遂に脳の配線を断ち切った両者は、これから本格的に殺戮行動に移るようだ。

「もういいよ、ブルー・プラネットさん。そいつ、私が殺すわ」

「ああ、メコン川を殺す。こいつはここにはならない」

「こいつを殺した方が、相手に言うことを聞かせるのはどう？」

「いいですよ、それで。今度は俺も本気で殺りにいきますから」

「じゃあ、お先にいい……つと。死ねえええええ！」

「……おつと」

襲い掛かるブルー・プラネットと館ころもつちもちから、メコン川は逃げ続けた。これもまた、予定調和でしかない。初めから彼の目的は、侍の啓蒙にあった。

建御雷は倒れ、地に伏しても刀を離さずに、まだ動かない。

(正義とは……いったい何だ?)

ブルー・プラネットは正義だ。

彼はこれまで虐げられ続けた哀れなビーストマンの生き残りを守るため、種の存続を確立させるべく、自らの命を賭けて戦っている。

館ころもつちもちは正義だ。

彼女は这个世界で新たにできたかけがえのない友人のため、血に飢えた本能さえも超越して、そこに立っている。

故に、互いに本気でぶつかり合った。

獣王メコン川は――

「あんなものが正義であつてたまるか……あんな……正義であつて……正義では……正義とは？」

こんなとき、たつち・みーならどうしただろうか。

――と、考えて止まった。たつち・みーは建御雷の道しるべではない。彼は間違いなく、戦争の調停を選ぶだろうが、それは建御雷の求める道ではない。

建御雷は正義だ。

かつての友で殺し合おうとする状況を回避すべく、自らの命まで投げ出す覚悟を負っていた。

故に、間違つた。

武士道と正義は関係ない。戦いを望むべきであつた最初の気持ち呼び起こされる。戦うべき敵は、人あるいは獣だろうか？

否。

力の差があり過ぎる戦いは、一方的な虐殺だ。

最高なものしばしば、最悪の場所に隠してあるもの。

結論は出ていながら、選んでしまったら後戻りはできない。調停者として惑う建御雷へ舞い降りた先導者<sup>ゼン</sup>は、皮肉にも嬉々として戦争を煽り立てるメコン川だった。

腹立たしいが、認めざるを得ない。これは美女に囲まれて浮かれていた自分の過失と言える。侍は異世界へ降り立って早々に大失態を続けていた。

<sup>長ドス</sup>白鞘を杖にして立つ建御雷の隣へ、館ころが転がってくる。

「くっ、あの野郎……さすがに強い。タケちゃんも手伝つて！」

「ああ……彼は切り込み隊のエースでしたね。私も加勢しなければ」

「でしよー！ あの野郎だけはこの場でぶつ殺す！ よくも虹色君を殺して、ドラちゃんを苛めてくれたな！」

「本当に……甘い」

「え？」

建御雷は刀を振り下ろし、餡ころを袈裟に切った。

「なん……で……？」

返り血が宙を舞った刹那、時間が凝縮されたようにゆっくりと見えた。すぐに時の流れは元へ戻り、血を撒き散らし、絶叫しながら大地を転がった。激痛の初体験でしばらくは大人しいはずだ。

「タケちゃん。ポーシヨン、使うっしょ？」

「礼は言わんぞ、メコン川」

「いらんわい！」

放り投げられた二つのポーシヨンを受け取り、片方を餡ころへ、もう片方を飲み干した。すぐに切り落とされた左腕が生えてくれた。これなら餡ころとブルー・プラネットを相手に十分な戦いができる。

ここで死んでも構わないと思える自己陶醉の最中、建御雷の心が炎が燃えた。

ブルー・プラネットは蹴散らされ、餡ころ同様にポーシヨンを振りかけられた。メコン川も栄養ドリンクよろしく、小瓶を飲み干してこちらへ歩いてくる。忌々しいにやけ顔を殴ってやりたくなった。

「待たせたな。私は、ようやく追いついた」

「おっそ！ 死にかけてやっど気づいたのか」

「黙れ。貴様は終わったらぶん殴ってやる」

メコン川と建御雷が見上げた青空、太陽はすっかり上っていた。

遙か上空に彗星らしきものが二つ、北西へ飛んでいった。そう遠くない未来、あれらと再会する未来が見えた。

「さーて、茶番は終わりにして、みんなでやろーよ、大戦争をさあー」

挑発するメコン川は、無言で佇む建御雷の背中へ寄りかかり、両手の爪を擦り合わせて笑った。ブルー・プラネットと餡ころが、草原を黒く染める殺気を纏って立ち上がるのが見えた。

戦いの刻は、ようやく訪れた。

じきに、草原に銅鑼が鳴る。

弱者よ、壮絶であれ　―魂の救済を―

――死もまた希望であるならば、もはや恐れるものはない。

武士道に立つ漢一匹、散って果てるは戦の花道、有終の美こそ檜舞台。滾る血潮が沸騰するは、鬪争本能の成せる業か、あるいは――人間の業か。

槍衾を背景に、かつての友人同士でズタズタに殺し合う泥仕合、血みどろの惨劇はもはや避けられない。ここにきて、今さら和解などあり得ない。ならば覚悟を決めるまでと、武人建御雷は精神集中する。「人間は天使でもなければ獣でもない。だが不幸なことに、人間は天使のように振舞おうと欲しながら、まるで獣のように行動する……パスカル」

何事もない日常のような口調で獣王が呟いたので、建御雷は静かに顔を向けた。

「メコン川……貴様には緊張感がないのか」

「生きるの死ぬのと、どうでもいいことだ」

ため息が吐き出された。

「パスカルの言葉は私によく馴染む。〃力なき正義は無力であり、正義なき力は压制である〃は、いつかたつち氏に言っただけでよかったが」

「そう遠くない未来、その願いは叶えられよう。この戦争を生き延びられれば……だが」

唇周辺に赤黒い何かを付着させた獅子が笑い、武人は無然とそっぽを向く。

その怒り、鬼神の如く。憤怒の波動を身に纏った二体の化け物、女豹と森司祭が歩いてくる。悠然と歩きながら、その鬪志は肉体という杯に満ち満ちて、体が揺れる度に真紅の瞳が赤い線を引き摺っていた。

「建御雷い！ 裏切ったな！ ドラちゃんと私を裏切ったな！」

「どいつもこいつもお！ 死にたいなら迷惑かけない場所で勝手に死ねよ！」

開幕のゴングとばかりに怒鳴りつける怪物へ、獣と侍は背中を合わせ得物を構えた。

「式式炎雷じゃなくて残念だったな」

「悪くはない」

4つの化け物が走り出したのは同時だった。



竜王国の女王は戦場でへたり込む。眼前で嘸し立てる貴族たちの声も耳を通り抜けていく。

眼球を絶望色に支配され、虚ろな瞳に光は遠い。彼女が見入っているそれは、切り落とされた曾祖父の生首だ。彼女が、この広い世界で一人ぼっちである証明書。

兵士が用意した椅子へ腰かけさせられるが、僅かな猶予も与えられず、武装した貴族たちが詰め寄る。

「女王陛下！ 英断を！」

「じき、彼奴らが押し寄せてきます！」

「ご命令を！」

彼方よりこちらへ攻め込んでくる黒い地平線。仇敵は進軍を開始している。あと10分もすれば敵軍はこちらへ突っ込んでくる。誰も彼も、なすすべもなく今宵の晚餐に並べられる未来は望まない。

突如、女王の胸倉が掴み上げられた。いつもは冷ややかな顔で小馬鹿にする宰相が、王の頬を張る。陣営に渴いた音が鳴り、静寂を際立たせた。

「陛下、居眠りの白昼夢から、そろそろ意識を覚醒して頂けませんか。敵はそこまで迫っていますので」

「……私は」

「目が覚めましたか？」

「私は……………間違っていたのか？ お前たちに死ねと命令するの  
が、正しき王のやることなのか…………？」

「やれやれ…………」

弱り目に祟り目を食らった女王から手を離すと、巻き戻しをされた  
ようにストンと椅子へ腰かけた。

草原を軽い衝撃波が走り抜けた。そちらへ顔を向けずとも分かっ  
ている。神域フレイヤの戦いは一足先に始まっている。

「館ころ……………私は、間違っていたのか」

遠い目の女王に、宰相がため息を吐いた。腰を下げて姿勢を低く、  
女王と視線を合わせ、彼女の肩を掴んで諭すような口調で言う。

「女王陛下、それでも七彩の竜王猊下の曾孫なのですか？ その不甲  
斐ない有様で恥ずかしくならないのですか？ 王として立派なのは  
胸の大きさだけですか？」

「馬鹿にしているのか…………？」

「おや？ いつもの調子に戻りましたか？」

「つーか、お前、さつきはよくも叩いてくれたな。私は曾祖父様を殺さ  
れて、へこたれとるんじゃない」

「フフ……………結構です。死体は逃げませんので始祖様の件は後回しに、  
戦争の話を進めましょう」

「……………お前は鬼か」

文句を言いつつ、女王の瞳に光が宿った。宰相は姿勢を正して満足  
げに見下ろし、冷ややかな微笑みで人差し指を立てた。物理的に上か  
ら視線で高説を垂れる。

「あなたが王として君臨するこの竜王国は、我らの祖国なのです。そ  
れ以外の何物でもありません。私を含め、この場で戦闘を決  
意しているもの全て、この国が好きなのです」

「はあ？」

眉を顰める女王をないがしろに、宰相は居並ぶ貴族たちへ目配せを  
した。彼らもそれを受け、宰相に代わって話し始める。

「我らが死ねば陛下の魔法の糧となれるのでしょうか？ ならば、死な  
ど恐れるに足りませんな」

「たとえ死んだとして、それが何だと言うのですか。陛下の手で掴み取る新たな未来に比べれば」

「女王陛下にもたらされるは悠久の栄光！ ならば今こそ、戦うとき！」

「法国の糞馬鹿どもが陛下を偽りの竜王と蔑もうと。我らにとっては崇め、奉るべき王！」

貴族たちの頭上を通り越えた先では、若き兵隊たちが玩具を手に入れた子供のような瞳でこちらを見ている。

蜃気楼のように揺らいでいた女王は、怒りで生気を取り戻した。

「どいつもこいつもクソ馬鹿どもが……この馬鹿野郎があ！」

虹色に輝く髪をたなびかせて女王は立ち上がった。青筋を立てて拳を握り、満足げに笑う宰相の顔を殴りつけた。そこに立っていたのは迂闊としか言いようがない。手加減なしの鉄拳が顔面に叩きこまれ、宰相はゴロゴロと転がっていった。

貴族の領主たちが見守る最中、誰も彼も、唇を“あ”の形に固定して閉じなかつた。

「貴様ら、雁首揃えて馬鹿なのか！ なぜ誰も彼も死にたがる！ それは戦死ではない、ただの自殺だ！ 誰かの犠牲の上に成り立つ平和に価値があるものか！」

そこかしこからクスクスと笑いが起きた。

「何がおかしい！ 殴りたいのなら前に出る！」

小馬鹿にされたようで女王の怒りが増し、額の青筋がより深くなつた。拳でぶん殴られた宰相は衣服を正し、何事も無かつたかのように歩いてくる。

彼の頬はひどく腫れあがっているが、怯んだ気配はない。長命の女王は宰相が生まれた時から知っているが、長い付き合いで一度も困つた姿を見たことが無い。

「いたた……陛下、そういうのを何というかご存知ですか？」

「言ってみろ！」

「余計なお世話です」

どうせ碌な解答ではないと踏んでいたが、想像したよりも悪かつ



た。両手で宰相の胸倉を掴み、虹色の髪をたなびかせて女王は怒鳴る。

「また殴りたいのか！」

「我らがどういう死に方を選ぼうと、陛下に言われる筋合いは在りません。我々は復讐のために戦うのではない。死にゆく我らの魂で、陛下が未来へ続く道を開拓するのです。魔導王に与えられたものではなく、自らの手で掴み取った平穩。これこそが愛国心ではありませんか？」

「明日の平和のために、今日死ぬというのか。この……阿呆どもが」

「訂正を要求します。我らはただの愛国者に過ぎません」

「だから……それを阿呆と言うのだ」

「なるほど」

彼が女王の言葉に納得するのも珍しい。

「褒め言葉と受け取っておきましょう。遅かれ早かれ、どうせ人は死ぬのです。早いか遅いか、その程度の差ではありませんか？」

断じて違うと言いたかったが、彼の調子は通常運転だ。下手な理屈は倍になって返ってくる。死を前にした貴族とは思えぬほど日常的であった。拍子抜けしたので掴んだ手を離れた。

同調した貴族たちがこれ幸いと騒ぎ始める。

「ならば我らはなべて等しく、阿呆で結構！」

「今こそ我ら、遅咲きの竜胆とならん！」

「陛下、進軍を！ 愚か者どもにご命令を！」

「この命、祖国の新たな栄光と安寧のために！」

死にたがる烏合の衆に囲まれた女王には、選択肢も時間も無い。耳をすませば、大地を揺るがす地響きは聞こえてこない。獣たちの進軍は止まっていた。

今はただ、幾万の甲冑が震える音しか聞こえない。



人間の瞳孔では捉えられぬ速度で動き回っていた餡ころもつちも

ちと獸王メコン川が、空中でひととき大きな金属音を出してから立ち止まる。

弁慶の如く立ち塞がる建御雷を突破できなかったブルー・プラネットも、荒い息を整えながら口元の出血を拭いた。刀を手にした侍は水を得た魚も同様だが、あの武人建御雷を相手にブルー・プラネットは土砂を操作して獣たちの進軍を堰き止める離れ技をやったのけた。

改めて思い知らされるのは、背中合わせに共闘する獸王メコン川と武人建御雷という桁違いの力。共闘していない自分たちに勝ち目は薄い。自分に何かあれば、支持する種族が窮地に立たされると、博打的な選択をできない餡ころとブルー・プラネットは分が悪い。

戦場に小休止が訪れた。

圧倒的優位に立つ獸王メコン川が、両手の甲から伸びる三本爪を擦り合わせ、火花を草原に落としている。明確な挑発をもって戦闘続行を求めるメコン川の背後で、刀を鞘に納めた音がした。

数回、アゴをガキガキと鳴らしてから、地底湖から響いてくる低い声で侍が言う。

「メコン川」

「あん？」

「説明を要求する。私たちは知らなければならぬ。かつて共に遊んでいた友人が、何ゆえに殺し合わねばならぬのか」

「あ、そうなの？ フーン」

「お前はこの世界に来て、いったい何を見たのだ」

僅かの間を空け、メコン川が拳を振って爪を仕舞った。幸い、獣たちの進軍は止められている。女王の進軍命令、死刑判決が下るまで時間稼ぎが必要だ。

「順を追って説明しよう。あの虹色ドラゴンは、タケちゃん王宮にきた時点で“もう一人いる”と思っただろうだ」

今となれば首を扼された竜の死体だが、自称賢者の竜王はプレイヤーの支配から竜王国が脱却することを目的に掲げていた。

それは彼という個体の望みではなく、自らの血を引く曾孫、女王ドラウディロンの願いだ。

種族に関わらず心ある者、一定量の弱さを備えている。未だ確たる形を成していない、竜王国を巡る負の事象とは、人心を病む戦禍の憎悪ではない。

王の格差だ。

竜王国の終戦、敵对国家の殲滅は魔導王が成し遂げた偉業である。ぬるま湯に長く浸かると出られなくなるように、押し売られた平穏の下に人は墮落する。発展に魔導国の力を借りる以上、アインズへの崇拜が時間に比例して培われ、女王の権威を薄めていく。

純正の人間ではない女王は長命で、この先数百年、王の交代は無い。王の首を挿げ替えるべく暗躍する思想を産みだす危険性を孕んでいる。

竜王国の栄光を高め、後の遺恨を断ち切るのならば、女王の栄誉を高めればよい。

空気の読めないアインズによって出鼻をへし折られたが故、彼らの闘争心は一向に萎えていない。ジクジクと膿む火傷のような闘争心を利用して、失われた<sup>ワールド・マジック</sup>“始原の魔法”を蘇らせ、女王の力を見せつければいい。

「ご丁寧にそのための下準備はかなり以前から出来上がっていた。

『もつとも、私はそんな栄光など求めていないがね』

そう言つて竜王は笑った。

「というわけだ。つまり餡ころさん、全部あんたのせいだよ」

ニヤニヤと笑う獣の王は、餡ころ女史を指さした。念のため自分の後方に誰もいないことを確認してから、女豹は自分の顔に人差し指を向けた。

「……わたし?」

「なんでも、兵隊たちを啓蒙し、戦う理由を与えたそうだな。女王のために戦うべきであると、それこそが正しい形だと」

「別にそんなつもりは」

「あれを見ればわかる。偶然こそが必然。まるで初めからそう組まれたように思えないか?」

メコン川の三本爪が向けられた方角。

女王と貴族たちが揉めている後方で、異様なまでに殺気立つ兵隊。数万の兵が無秩序にまとまっている最前列にて、今にも特攻しかねないほどいきり立っている。餡ころとレベルアップを行なった者たちは、赤い布を目前にした闘牛並みだった。

「そんな……死ぬためにレベルを上げたわけじゃないのに」

「見給え、あれこそ大量の死体を生産する愛国者そのものじゃないか。自らの命すら重視しない馬鹿、笑いながら死んでいく阿呆、誇り高いオナニー野郎ども、愛すべき弱者<sup>ザコ</sup>」

「メコン川ああ……口の利き方に気を付けろ。マジに殺すぞ」

「人間を守る？　メス猫風情が思い上がりも甚だしい。虹色は初めから甘ちゃんのみス猫に期待なんかしてなかったよ。ここまでのお膳立てが終わった今、あんたの利用価値はもう無い。むしろ戦争を邪魔するただのお邪魔虫だ」

瞬間、餡ころの体から絶望の波動が漏れ、アメーバ状に広がってメコン川へ敵意を向けた。

「どうしたんスか？　今、笑うところだったんスけど？」

「メコン川ああああ！」

「そこまでだ！」

二匹のケダモノが激突する寸でのところ、乱入した武御雷の刃が餡ころを弾いた。

「邪魔邪魔邪魔邪魔あ！　どいてよ！　そいつだけは許さない！　ぶっ殺してやる！」

「落ち着け、餡ころもつちもち！　メコン川の説明は途中だ」

「何がよ。早く弱肉強食をやろうぜ。今さら同士討ち禁止とかないんだから」

「獣側の話も聞かなければならない」

「……チツ、メンドクセエな」

餡ころ自身、よくぞここで堪えたと思った。それも獣側の進軍が止まっているからだ。三名が顔を向けた先、腕を組んで静かに佇んでいるブルー・プラネットの顔面は獣人たちを見ていた。

「ブルー・プラネットさん、ビーストマンをどう思う？」

「ん……どう……とは？」

「ごつごつした岩のような顔が、にやけた獅子へ向いた。その顔はまるで、救いを求めているように見えた。三名の誰も彼の疑問に答えようとせず、止む無く口を動かさし始める。

「そう……ですね……。ビーストマンはあ……虐げられた絶滅危惧種だ。だから俺は、彼らを保護して——」

「違う違う、そうじゃなくて、ケダモノどもの習性をどう思う」

「習性……？」

「まずそこからツスカ」

この世界におけるビーストマンは、戦争を好む傾向にある。

人間の10倍も優れた身体能力、国家を形成する知性。それを以てしてもなお、抗うことのできない食欲は姿と形を変え、闘争を求め、獲物に苦痛を与えても満ち足りない。神に等しき強者に庇護され、ゆりかごの如き安寧が保証されたとしても、彼らは人間を食らい続ける。

食欲という本能から起因する渇欲。劣情ともいえるそれは、簡素な理性で抑え込めるものではない。彼らは初めからそのような作られている。

国を追われ、共食いを続けてきた彼らは生きながら死んでいた。本心では一匹のケダモノとして戦場を駆け巡って暴れ尽くし、獣の意地を見せつけて死にたいと考えている。

ビーストマンは死にたがり屋だ。

「違うっ！ 何も知らない癖に、何様のつもりだ！」

「何が違う？」

ブルー・プラネットはメコン川に詰め寄った。

「戦争なんて世界の一部なんだよ。それが全てじゃないんだ！ 見ろよ、こんなに美しい世界なんだから、他にいくらでも幸せになる道があるんだよ！ だから俺があ！」

「俺が守るとか、まさか言わないでくれよ。あんたが下地を作ったんだから」

「俺が何をした！」

「私たちプレイヤーとは世界の理を破壊する。生きているだけで罪な

んだよ」

同胞の命を食らい、緩やかな死を迎えていた獣人。命の灯火が消える最後の瞬間を待ただけだった彼らは、保護されることによって時間を手に入れた。

猶予とは時に心を苛む。自分たちで何も得ることなく、与えられる生活が待っている。それ即ち、戦いを放棄して飼い慣らされることだ。その未来が見えた瞬間、彼らの中に種火のように小さい疑問が生まれた。

ブルー・プラネットは獣人を率いて村を襲った。ブルー・プラネットを利用すれば戦って死ぬことができると知ってしまった。

種火は時間をかけても消えはせず、メコン川の一押しであっけなく火が付いた。そしてケダモノたちは走り出した。安寧の夢から目覚め、錆びついた車輪が動き出せば、ブルー・プラネットでは止められない。飼い慣らされる平穩を捨て、死へ全力疾走する。例え、最後の一匹になろうとも。

それが獣人の矜持だ。

「そんな馬鹿なことがあるかあ！」

「あるんだよ！」

メコン川は歯を食いしばって唸り声をあげ、ブルー・プラネットの胸倉を掴み上げた。そのままブルー・プラネットを引き摺って行き、へたり込む餡ころの胸倉を掴み上げた。

「餡ころも、いい加減、目を覚ませ！」

「痛い！」

ブルー・プラネットと餡ころの顔面に、牙を剥いたケダモノの顔が肉迫する。

「戦争なんて全てじゃない？ 全てなんだよ！ 死んだ者たちから目を背けて和解し、仲良しこよしで暮らしていけるものか。どん底から這い上がり、獣人の誇りを取り戻してこそ人間たちに一矢報いることができる。人間も、自分の命が無駄にならないなら死など怖くはない。全力で生きるといふことは、戦うことだ！」

メコン川が両手を開くと、ブルー・プラネットと餡ころが崩れ落ち

た。

「ビーストマンは絶滅し、人間たちの過半数は苦しみ抜いて死ぬ。人も獣も、活火山の火口に飛び込むが如く、壮絶な最期を迎えるだろう。それでも死にたいんだよ！ 家族を選んで生き延びるより、人生の最後に未来を守って笑いながら死にたいんだ！ みんなそうしたいんだよ、素晴らしいことじゃないか！」

俯く二人の体が急に重くなり、癌細胞のような絶望が広がった。人間・獣人、時間を共有した彼らが無残に殺されると知り、過ごした時間の多い両者の衝撃は計り知れない。

「違う……違うんだよ……俺はただ、彼らに生きてほしい。それだけだったのに……」

「みんな死んじやう……だって、みんな幸せになりたいのに……。生きればいいじゃん、みんな仲良くさあ……」

地面に落ちた餓ころの視界が、水中に潜ったように歪んだ。

「ここは戦場だ、そして戦争は既に始まった。それだけでいい。弱い奴も強い奴も、グチャグチャになって死ねばいい。みんな死んでしまえばいい。それでやつとすつきりする」

俯いたブルー・プラネットが、誰ともなしに呟く。

「俺と餓ころさんが戦えば済むと思っていた。話がまとまってから、ナザリツクの桜の樹の下で花見をしたかった。……笑いながら食事をして、酒を飲んで騒ぎたかった。人間なんか食べなくても、他にいくらでも美味しいものがあるんだよ。ビーストマンにだってこの世界はこんなにも優しいって……教えてあげたかった。誰も死ななくていい、優しい世界もあるって……教えたかったのに」

すすり泣くような呟きに、餓ころが両目を擦った。

「ただそれだけだったのに……どこで間違っただ」

誰も答えない。彼の呟きは回答を求めているし、彼が間違っただけは思っていない。戦争とは、正義と正義のぶつかり合いだ。「私は悪です」と公言して戦争を仕掛ける阿呆はいない。周りから集中砲火を受ける上、内乱を招く危険もある。戦争が終わった後も歴史に汚点を塗る上、最悪は国家の消滅に繋がる。

「メコン川、此度の戦は、お前と竜王のお膳立てだな。あのドラゴンは何を自殺か？」

「そーゆーことーん」

竜王は自らの死を以て、女王に選択肢を突きつけた。どれほど酷な選択であろうと、彼女の望んだ未来に繋がるのだ。餓ころ・ブルー・プラネット以外の全てがそれを望んでいる。

「見えるか、餓ころ、ブルー・プラネット。弱者たちが自らの命を張って立ち上がる姿はこんなにも美しく、眩しいものだ。誇り高い死に向かう弱者へ、今まで全力で生きたこともないまま人間を辞めてしまつた我々が、語る言葉は無いはずだ」

「そんなの……」

所詮、この世界は弱肉強食。自分の望むべき未来を押し付けるのは、幸福の押し売りだ。現実で、惰性で生きていた自分が望む未来を押し付け、相手もそれで幸せになれると思うのは傲慢以外の何物でもない。行きつくところは、メコン川の持論だ。

最前線に立つ、若き兵隊たち。餓ころと共に夕食を食べ、笑いながら未来を語り明かした彼らは一人の例外もなく、戦域に塵と消える。ここで彼らを止めるのは、お預けを食らつた犬の前に差し出された餌を奪うにも等しい。更なる鬱憤、闘争心を抑え込みながら未来を生きなければならぬ。

理屈はわかっているが、感情は結末を拒絶する。女豹の眼球から一滴の涙が草原に落ちた。誰かのために涙する人間性は残っていた。

「私……間違つたのかな」

「我々は、彼らの戦いを見届ける立会人だ。それでいい、ただそれだけでいい。私たちは強いが、人間を辞めた死者でしかない」

その自覚は全員が持っている。餓ころ自身、この世界に来る前に何気なく呟いた言葉が辞世の句だつたと思つている。人間を辞め、化け物となつた今、人間の自分は既に死んでいる。敢えて、彼女の間違いを指摘するとすれば、転移してすぐにモモンガへ会いに行かなかつたことだ。

今さら、モモンガに会いたくなつた。



揺らぐ視界の先に見えたのは笑う白骨死体、モモンガの幻影だ。彼ならばきつと、餓ころろに協力して世界の摂理を変えてくれたかもしれない。餓ころろの意向を汲み取り、先に転移した他の仲間と優しい世界を作ってくれたかもしれない。やまいこ、ぶくぶく茶釜あたりがいれば、確実に協力してくれた。

たられればの夢まぼろしが、涙のスクリーンに揺らぐ。

「優しい世界に行きたい……」

餓ころろの肩に手が置かれ、耳の先端から尻尾の末端まで毛並みが逆立つほど驚いた。

「モモンガさん!？」

「……なに言ってるんですか、餓ころろさん」

「なんだ、ブルー・プラネットさんか……」

「悪かったですね……」

慰めようと手を置いたら酷く残念な顔をされたもので、ブルー・プラネットの機嫌は急速降下した。

「餓ころろさん、俺たちも戦おう。俺たちが優しい世界を作って見せよう。最後に命を賭けて、全力で生きよう」

「だって……どうせ勝てないよ。この二人、チョー強いもん……」

「俺はあの子たちと生きたいから、この化け物どもを相手に戦うよ。戦争が正義と正義のぶつかり合いだというのなら、俺たちもまた戦争しているんだ」

「……そう。そっかあ、これが戦争かあ。ここで二人を倒せば、あの戦争を止められる?」

「俺たちは二人を倒さなくていい。こいつらを振り切つて戦場に割り込めばいい。戦争が止まれば俺たちの勝利だ」

ブルー・プラネットの手を掴んで餓ころろが立ち上がった。

目の前にそびえ立つ建御雷とメコン川という壁は高い。だからこそ立ち上がらなければならぬ。自分よりはるかに弱い者が命を張っているのに、強者の自分が見ているだけで済むはずがない。

立ち上がった餓ころろとブルー・プラネットから黒い殺戮の波動が噴き出た。同様に絶望のオーラで応戦するメコン川は、怒りを隠そうと

もせずに牙を剥いた。

「うっぎー！ 優しい世界とか、ガキみたいで気持ち悪いッスわあ。精神年齢が低いんスカ？ 私たちを振り切れるとでも思ってるんスカ？ ますますうっぎー！」

軽口の割に、顔は怒りを隠そうともしない。メコン川がケダモノのように唸り声を上げ、拳を振ると爪が突き出された。

建御雷も刀を抜いた。餛ころが首をゴリゴリと回し、ブルー・プラネットが両手の指をコキコキと鳴らした。

建御雷の刀が、餛ころへ向けられる。

「餛ころ女史、自分や仲間が死ぬなどどうでもいいことだ、未来を創ることに比べれば。私は壮絶な生き方を全うする弱者たちの戦いを見届けよう。何物にも決して、邪魔などさせん」

「みんなにだって家族がいる、死んだら悲しむよ。自分の家族が犠牲になって、残された家族はどうなるの」

「優しい世界というものがあるのなら、弱肉強食の摂理を倒した先にあるだろう。世界の摂理を変えていけば、死せる彼らを救うことができた」

「まだ間に合うもん！ 私は世界を変えるよ！」

餛ころが牙を剥き、四つん這いになった。これまで抑え込んでいた獣性の歯車が、けたたましい音を立てて回り始める。もはや恐れることは無い。本能のままに、かつての友を食い殺せばいい。世界とは数多の犠牲を、おびただ夥しい数の贅を大地に捧げて作られるのだ。

メコン川がどす黒い波動を垂れ流し、牙を剥いて叫んだ。

「何が優しい世界だ、どいつもこいつも……甘ったるくてうぜえんだよ！ 餛ころさんとブルー・プラネットさんには虫唾が走る！」

「だって、みんな幸せになりたいだけじゃん！ 生きればいい！ 生きていれば恋をして、結婚して！ 子供を産んで幸せな家庭を築けばいいじゃない！ 自殺なんて許さない！」

「メコン川は本当にクソ野郎だ。弱肉強食の世界だからって、全力でそれに乗っかるあんたは、自分で突き進む道を放棄した馬鹿野郎だ」  
「腐れオナニー野郎どもが偉そうに！ それが傲慢だと何故わからない

い！」

建御雷の心は燃え上がる。これでようやく、全員が異世界という土俵へ登ったと言える。掲げた刀を太陽に向けて、戦争を宣言した。

「今こそ、改めて言わせていただく。武士道とは、死ぬことと見つけたり！」

「そう……全力で生きるってことは馬鹿なのね」

「もう馬鹿でいい。傲慢でも何でも、殺す気で戦う」

「始めようかあ、血みどろの戦争を！」

地面に突き刺さった四本の剣は掴まれ、友の命を奪う罪を、背負う覚悟は決められた。投げられた賽の出目は変わらず、時計の針は戻らない。全員が仲良く手を取って、魔導国へ向かう選択肢は初めから存在しない。

弱肉強食の世界だった、理由はそれだけでいいのだ。

館ころは一人でも多くの人間を守るため。

ブルー・プラネットは獣人と共に生きるため。

武人建御雷は戦争を見届けるため。

獣王メコン川は不条理な世界を突きつけるため。

混ざり合わぬ強烈な殺気が四方から放たれる。局所的な暗雲が雷鳴を鳴らし、大地が割け、空気が歪み、景色が瘴気に染められた。上位者には上位者の戦場が用意されている。

獣性を剥き出しに全力で走り出し、空中で金属の激突音が鳴り、大地が出鱈目に盛り上がる。

銅鑼のような轟音と衝撃波が草原の表面を撫でていった。



死兵とは――

恐れを知らぬ戦士といえは聞こえはいいが、死を望む自殺志願者だ。愛国心という、自分が生まれただけの国が他の国より優れているという勘違いが造り出す死体の山。しかし、彼らの両眼は未来へ向けられている。狂気に身を浸してこそ己が内に食い込み、身を食らい尽

くす憎悪の鎖を抉り取る。

死が喪失ではなく創生だとすれば、何を恐れることがあるのか。女王だけが使える魔法は、死者への救済だ。家族の、友人の、隣人の、安息の未来を確信しているからこそ、笑いながら死んでいける。復讐、善意、愛情など、未来へ向けて紡がれる自殺にも劣る。

数千の食人種たちが造り出す数万の兵隊たちの屍。女王に未来を託す、甘き安寧の死の嵐。それらを礎に築き上げるは竜王国の栄光。未練ある魂は尊い魔法の糧となり、白き光の爆発が戦場を覆い、争いの歴史に終止符を打つ。

死を前にして武者震いする兵隊たちの前で、女王の口はまだ開かない。自殺志願者の大馬鹿野郎どもは愛すべき自国民だ。どの面下<sup>ツラ</sup>げて、彼らに「死ね」と言えるのか。

「餓ころ……」

そちらへ顔を向けると、メコン川の三本爪が餓ころを袈裟に切り裂いているのが見えた。レベル100ともなれば声まで大きく、怒号はこちららまで聞こえてくる。

「私は負けない！ 人間は私が守る！」

「甘い幻想に縋るな！ あんたがいくら幸福を押し売ろうと、優しい世界なんざありやしねえんだよ！」

「無いなら作ればいいじゃない！」

「それが傲慢だと、なぜわからん！」

「五月蠅い黙れ馬鹿クソ野郎！ 傲慢で何が悪い！」

啖呵では負けてないが、戦況で餓ころに分が悪い。宙を飛ぶ鮮血の飛沫は餓ころのものだけだ。速度は同等だが、単純な攻撃力に差があるように見えた。

建御雷は、全身を土くれで覆って巨大ゴーレムと化したブルー・プラネットの甲冑を、いともたやすく細切れにしていた。相手は拳を叩きこめば大地すら割る巨大な存在だが、泥人形を壊す気軽さで刀を振って鎧を引っぱがしていった。武力はさておき、ブルー・プラネットは戦闘に集中できない。大地に影響を与え、獣人たちに侵攻を食い止めることに思考を割いている。

そんな戦いでは長く持つはずもない。建御雷を一步も動かすことすらできず、ブルー・プラネットは血を吐いて倒れた。首へ切っ先を付きつけ、武人は上からものを言う。

「友よ。我等、現実を捨て去った哀れな人間。生きながらに死んでいた人間。私たちは今この瞬間、初めて生きている！」

「俺は負けない！俺はあの子たちと生きたいから！」

ブルー・プラネットが大地に両手を叩きつけると、刃のように鋭く尖った鳶が幾つも生え、建御雷を串刺しにした。開いた口から大量の吐血が流れ出しても、建御雷の足は揺るがない。

侍は鳶を薙ぎ払い、血反吐と共に咆えた。

「あなたには見えないのか、弱者である獣たちが武器を手に攻め込んでくる姿が！それを上回るほど弱い人間が、死を覚悟して立ち上がった姿が！彼らの死を！覚悟を汚すつもりか！」

「困っている子供たちに手を差し伸べるのがそんなに悪いのか！」

「だったらせめて弱肉強食の狂気で生きる者たちの邪魔をするな！」

彼らの誇りを貶めているのはその偽善だ！」

全力の森司祭と裸の侍では力の均衡が保てているように思えた。どちらも無事では済まなそうだ。

突きつけられている残酷な現実を無視して、そちらを観戦していたかった。

「陛下……」

振り返ると、宰相の人差し指が頬を突いた。慌てて首を振り、いつも通りの青筋を立てて怒る。

「何するんじゃない！」

「時には現実逃避も結構ですが、我らの戦場はここですよ」

「……わかっている」

ブルー・プラネットが何かしたらしく、大地に巨大な地割れができている。土砂によって阻まれていた獣たちは動き出しているが、地割れを迂回して進軍が遅れている。演説する程度の時間が天より与えられた。背中の後押しは有難迷惑だ。

空に空気の読めない魔導王が降臨していないかと確認するも、忌々

しい太陽がこちらを見下ろしているだけだ。種の存亡を賭けた戦いは、いつだつて晴天だ。毎日毎日、飽きることなく、どこまでも上から目線の太陽が忌々しい。

今となれば、寝室で餡ころろと煎餅を齧りながら他愛もない話に花を咲かせていた数日前が懐かしい。貴族たちは騎兵を引き連れ、突撃準備を終えている。領主自ら死線へ突っ込むなど狂気の沙汰だ。

(やはり……もう後戻りはできないのだな)

これも弱者の道理である。死んでこそ意味があるのなら、生きている今は正気である意味がない。弱者には、死こそ希望なのだ。

「陛下、魂は足りるでしょうか。当初、百万の魂を必要としていたはずですが。竜王殿下の魂は数十万の人間に値するなどという僥倖が世界から与えられますかね」

「私が知るか……」

敢えて口にしないが、形になっている確信。何の根拠もないが、一定量の魂を必要とするのではなく、魂の量で魔法の威力が変化するように世界の法則が造り替えられている気がした。

あとは死にたがりの同志たち<sup>カメラード</sup>へ、突撃の号令をかけるのみ。大量の死者を生み出す、泥くさい異種族間戦争が始まる。

女王は振り返り、号令を待つ兵隊たちへ顔を向けた。振り向きざまに、ドラウデイロンの右目から一筋の涙が流れた。自然と全てが動きを止め、彼女の声に聞き入った。

### 《始原の魔法》 ワイルド・マジック

彼女の背中に魔方陣が展開され、魂は可視化される。ドラウデイロンの頭上、おたまじやくしに似た純白の魂が渦を巻いて回っている。銀色の鎧を身に纏った淑女の背中から、純白の翼が生えているように見えた。この世ならざる光景に、兵士たちが唾を呑んだ。

先ほどから、幾度も打ち鳴らされる金属の轟音。戦闘音が徐々にこちらへ近づいてくる。ひととき大きな地響きを上げ、餡ころろの叫び声が聞こえた。

「駄目えー！ ドラちゃん、言っちゃ駄目えー！」

こちらへ駆けようとしている餡ころろが、メコン川に羽交い絞めにさ

れていた。

「ここの駄目女のクソ館ころ、大人しくしろ！」

最後の悪あがきは凄まじく、館ころは体を捻って拘束を外した。真つすぐにこちらへ駆けてくる館ころを、後ろからメコン川の爪が襲った。

「痛いっ！」

組伏された彼女の肩に、三本の爪が風穴を開けていた。流れる血、吐き出す血に構わず、館ころはなおも立ち上がろうとしている。

「離せええー！」

「なんて女だ。女王お、早く言えー！」

メコン川が首筋に噛みついた。まるで野獣同士の交尾に見えた。

そのすぐ隣でブルー・プラネットが這いつくばり、建御雷に踏みつけられている。腹部を刀が貫通して大地に張り付けにされていたが、吐血と共に叫んだ。

「止めろおおー！ 何をしているのかわかっているのかあー！」

「さあー！ 言うのだ、女王！ 私がいっつを抑えている間に！」

言われなくても分かっている。引き延ばせば、館ころとブルー・プラネットの傷が増えるだけだ。

女王は深く息を吸い込んだ。

思えば、この選択を選ぶのに随分と時間をかけたものだ。

女王が片手をあげ、宰相が叫ぶ。

「総員、傾聴！」

かくて容赦なき覚醒の銅鑼が鳴り、心無い天使の喇叭は耳元で鳴らされ、天秤は回答を導き出し、黙示録に新たな教義ドグマが生まれた。あとは背負う覚悟のみ。死にたがる民の死と、命じた罪を背負う覚悟のみ。

彼女は女王、彼女は竜王、戦死者の命を軽く背負えずして何が王か。たとえ地獄の蓋が開かれようと、今より酷い未来はない。働き盛りな成人男性を数万、数十万も失えば国力は大幅に低下するが、百万、数百万を失うに比べれば格安だ。

死にたがりを救う術なし、付ける薬もなしと断じ、儲けものとはか

りに魂を利用して戦争に終止符を打てばよい。

女王の唇がゆつくりと開かれ、まくし立てるように叫んだ。

「我が名はドラウディロン・オーリウクルス、栄光ある竜王国の女王！

ブライトネス・ドラゴンロード  
七彩の竜王の血を引く後継者、ブラックスケイル・ドラゴンロード黒鱗の竜王である！ 竜

王の名のもとに、竜王国は何者にも媚びぬ！ 敵を前に決して引かぬ

！ 我らの戦争に魔導王の力などいらぬ！」

女王が手を振ると、頬を伝う涙が空中に流れた。

「竜王国の諸君に告ぐ。敢えて言わせてもらうが、貴様ら全員、死にたがりの大馬鹿野郎どもだ！」

静寂、だが視線は外れない。

「貴様ら馬鹿どもの死など、もはや振り返らぬ！ 這いつくばる弱者どもよ、死に賜え！ 一人でも多く殺し、一人でも多く殺される。未来の礎となるべく首を切られる、腹を抉られる、崩され叩かれ潰される。貴様ら馬鹿どもの死骸を踏み引き、私が奴らを塵にしてくれる！」

そして……」

女王は一瞬だけ俯き、すぐに顔を上げた。その顔は、家族の処刑を目の前にした少女に見思えた。泣き顔を隠そうともせず、涙を拭おうともせず、ありのままの顔を兵隊たちに見せつけた。

「そして……どんなに無様でもいいから……っ……！ 一人でも多く、生き残ってくれ。頼む……頼む」

《雄オオオオオオオオ！》

掲げた幾万の剣と、女王の体を揺さぶる兵士たちの怒号。

すぐ隣で聞いていた宰相は拍手をし、らしくない声で叫んだ。

「素晴らしい。これぞ我らの王。我らの掲げる旗です！」

「私は……愚かな王だった」

「結構、初めから知性に期待はしておりません」

「……」

本気で首を切ってやろうかと思った。

「だからこそ、いいのです。我らは神を崇める信仰者ではありません。踏み潰される我らの魂は、偽りの竜王と揶揄される女王を、天高く舞い上げる翼となりましょう。あなたは優しき女王、そして不完全な竜



王！ 捧げられた幾万の魂の翼で、今こそ羽ばたくのです。魔導王の手が届かぬほどの高みへ！」

女王は何も言わずに剣を掲げた。既に手が届く場所まで迫っていた獣たちへ目がけ、女王の剣が突き出される。やがて緩慢な動作で掲げた手が降りていく。

断頭台の刃は、思いのほかゆつくりと降りた。

「全軍、突撃せよ！」

《雄オオオオオオオオ！》

女王の剣に合わせ、人間たちは出鱈目に進軍した。目的は勝利ではなく、速やかな死だ。混沌と狂気が織りなす死の嵐に、隊列など必要ない。

後に女王は、二度と繰り返してはならぬ地獄だったと述べた。

死にたがりの兵どもと、泡沫の夢は羽ばたいて。

咲かす徒花、修羅の果て。

哀れ命は露と消え、屍も軀も野ざらしに。

死が吹き荒れた戦域に、笑う屍、拾うもの無し。

弱者よ、壮絶であれ　―遙かな虹を越えて―

時は移ろうもの、人は滅びるもの。

先人たちの経験・苦労を経た進化の果て、今も揺るがない不変の約定<sup>やくじょう</sup>。最高位の残酷性を持ち、最上位の皮肉屋である運命は、弱者を奴隷のように弄ぶ。

故に、弱者は死を選ぶ。

そこに希望があるのなら、弱者は命を切り捨てる。唾棄すべき大義名分もまた、弱者だけに開かれた道。長い歴史に裏付けされた、陰惨なりし弱者の業因。新たな悲劇へと続く螺旋階段。

家族に金を残すため、保険金を掛けて死を選ぶ人間。

魔女の嫌疑を掛けられた我が子を庇い、生きながら火あぶりにされた母。

災害の最中、降り注ぐ瓦礫から我が子を守って潰された父。

子を逃がすために捕食者<sup>プレデター</sup>へ立ち向かう野兎。

家族の重荷にならぬよう、極寒の地で野垂れ死ぬ年老いた雪原の民。

戦乱の最中、多くの敵を道ずれに自爆した将校。

全身に数百の矢を受けながらも倒れることなく、主君を逃がして絶命した武将。

誰も彼も、無作為に与えられた自らの生の存続が絶望的も、笑いながら死んでいく。隷属を強いる運命、惰性の生を拒絶し、その身に宿した決意には黄金の価値が与えられる。

弱者はその決意を以て、運命の抵抗者<sup>レジスタンス</sup>となる。

★

各地から集められた数十万の死兵が作る死線<sup>デッドライン</sup>。

最前線で突撃した兵隊が、巨体を並べて進軍するトロールたちの棍

棒で、一列まとめて薙ぎ払われた。ばら撒かれた人間の残骸が宙を舞い、目くらましに後詰が攻めてくる。

死体を足場に飛び上がった若き兵隊たちは、目の前のトロールたちの頭部へ剣を突きこんだ。突きこまれた剣がグリグリと弄られ、少しでも早く死ぬように補助をする。

「ガアアア！」

この世のものとは思えぬ断末魔をあげ、トロールは頭に風穴を開けて息絶えた。恐慌状態となった兵士は止まらず、敵の頭部へ何度も何度も剣を突きこみ続けた。返り血を拭いもせず、柄が血と脳漿に濡れても、絶命した敵の頭部へ剣を差し込み続けた。

食人種たちは止まらない。後続の食人鬼が、兵士の頭を掴んで首を振じ切った。首だけになった体が草原に倒れ、切り離された頭部は脳死までの短い時間、食人鬼の口が涎の糸を引いて開かれる場面を人生の最後に見た。

死骸は誰にも顧みられず、踏み拉かれて草原に残された。

そこから少しだけ外れた場所、戦場の外れに佇むはローブを纏った魔法詠唱者。

獣人に比べ、食人鬼・トロールは戦力的に劣る。人間が食えるという誘い文句で戦列に加わったが、今さら後には引けない。生き延びたところで更なる飢餓が続くのはわかる。

知能の低さは彼らを罠へ招き寄せる。簡単に食える餌ならば、それに越したことはない。食人鬼・トロールたちの一部がそちらへ向かった。

「チツ……馬鹿どもが」

後方の獣人が、忌々しそうに唾を吐いた。どこの世界に、のこのこと馬鹿面下げて罠だと思わしき敵へ向かう兵士がいるものか。

魔法詠唱者は左手で手招きする。その顔は満面の笑みで、夜の路地裏で人を誘う街娼に見えた。飛んで火にいる夏の虫の如く、周囲は食人種たちに取り囲まれる。

「もつと……もつと近寄ってこい」

冷や汗を流しながら呟いた。懐に突っ込んだ手を引き抜くと、伸ば

された人差し指と中指の間に一枚の符が挟まれていた。それは出陣前の首都にて、親を獣<sup>ビーストマン</sup>人に食い殺されたという少女から譲り受けたもの。身寄りのない自分は、彼女の代わりに復讐を代行しなければならぬ。

死ぬ理由があるだけで嬉しかった。

ジリジリと距離を詰めてくる食人種たちが全身に食らいついていた。

「竜王国……万歳ー」

最期の意識を振り絞り、自分の体に符を張りつけると符が輝き、『爆散符』という文字が浮き出た。

あと僅かで死体になるはずだった彼の体は、トロールたちを吹き飛ばす爆弾と化す。爆散した血肉が周囲に飛び散り、砕けた骨が弾丸のように敵の体を貫いた。敵味方の区別なく、その周囲にいた者は弾丸に貫かれた。

弱者が綴る、犬死の美德。

兵<sup>つわもの</sup>どもの夢、未だ果てず。



女王は一人一人の死に様を忘れてはならない。

今の彼女には、それくらいしかできない。壮絶な死に様を網膜にまで焼きつけ、二度と悲劇の歴史を繰り返さぬよう、残された命を慈しむよう、今は目を剥いて耐えるのみ。魂が一定量、集まるまで耐えるのみ。視界が涙で滲まぬよう、泣くことすら許されない。

領地を治める老年貴族の騎兵、死を覚悟した彼は猛将のようだった。雄叫びで開かれたトロールの口内へ槍を突っ込み、後頭部へ貫通した槍は後ろにいるトロールの片目を貫いた。なおも勢いは止まらず、引き抜いた槍を隣の食人種へ突きこんでいる。

混沌とした戦況の最中、領地で待つ家族の幻影が浮かぶ。自分と息子を笑顔で送り出した孫はまだ1歳だ。生まれた時など、皺だらけの指を必死で握ってくれる赤子<sup>やちこ</sup>に頬が緩みっぱなしだった。

日々、息子が生まれた時と比べ物にならない喜びがある。愛する者と再会は果たせない。自分の命は、紡がれる未来への礎だ。敵を殺してから、のた打ち回って死ねばいい。

貫いた槍が頭蓋の眼窩にはまり込んで引き抜けなくなった。騎兵に後退はなく、前進あるのみ。横からトロールの棍棒が迫り、一撃で彼の左腕の骨が砕けた。激痛を振り払うように馬上で吠える。

「全員、突き進めえ！」

自分がここで死ぬのなら、せめて一太刀浴びせてからだ。槍を放り、腰の短剣を引き抜いて敵の顔面に突きこんだ。

「ギャアあー！」

トロールが出鱈目に暴れるが、差し込んだ剣は離さない。後は後続の息子がやるだろう。振り返れば、女王が泣き顔で見守ってくれている。彼女こそ、死体が造る丘の上に咲く大輪の花だ。不完全にしてか弱い、竜王国の掲げる旗そのものだ。

「竜王国に、栄えあれ」

棍棒が貴族の頭部へ叩き落とされた。潰れた兜が眼球を飛び出させ、口から潰れた脳漿が飛びした。意識を失うまで一瞬だった。馬から落下する彼の死骸を踏み引き、すぐに息子が攻め込んだ。

「父の仇！」

暴れるトロールの首へ、槍の切っ先が差し込まれた。

本音で言えば、踵を返して妻子が待つ領地へ帰りたい。よちよち歩きの我が子はまだ一歳だ。だが、父の死を前にしながら逃げ帰り、どの面下げて可愛い我が子に自分は逃げてきたと言えるのか。

たとえば、家族がそうして欲しいと願っても、無様に逃げのびるためにこの地へ集ったわけではない。

奪った首級しるしを振り払い、後ろの食人鬼オーガの心臓を目がけて槍を突き出した。その死体を引き摺りながら戦場を駆けた彼は、遂に獣人本隊ビーストマンへ辿り着く。

不甲斐ないトロールに苛立っていた獅子は、騎乗する彼へ飛び込んだ。馬もろとも並んだ死体は、踏み拉かれて草原に消えた。

死して屍、拾うもの無し。



竜王国のありふれた日々の営み。市場は常に人で賑わっている。

露店の女性店主が、常連の女性と談笑している。

「あら、奥さん！ 今日は何を買っていく？」

「そうねえ……」

「そういえば聞いたわよ！ 息子さん、ビーストマン討伐に出掛けられたんですって？」

「あらー、お耳が早いわね。あの子もいつの間にか立派になって。今ごろ、そちらの旦那さんと一緒に戦場に出ているころね。ほんと……子供の成長は早いわ」

「ウチの旦那と違って将来有望ね、きつと出世するわよ！ いい年してうだつの上がない歩兵だなんて恥ずかしいったらありやしない」「そう言わないで。ビーストマン相手に戦っているんだから。私も美味いもの作ってあげようかしら。じゃあ、コレとコレと……」

愛とは押しつけがましく、ありがた迷惑なもの。彼女たちは今夜、帰ることのない家族を待つのだろう。彼女らが望んでいない未来のため、決して家族は帰らない。明日も、その次の日も、彼女たちは家族が欠けた未来を送る。

女性客の息子は、同じ釜の飯を食ったかけがないの戦友と戦場を駆けていた。思い出すのは、女王の演説が始まる前、先輩と交わした会話。

「お前、逃げろ」

「はい？」

「お前はまだ若い。今のうちに逃げろ」

「先輩こそ、年老いた祖母が待っているんじゃないんですか」

彼の両親は先の戦いで、獣人に食い殺されている。年老いた祖母と暮らす彼が帰らなければ、祖母はどれほど悲しむのだろうか。それは、両親がいる自分も同じことだ。

「……あまり舐めないでもらえますか。餓ころ様は力を与えてくださ

いました。逃げるために強くなつたんじゃないんです！」

それつきり、彼は何も言い返さなかつた。兜から覗く横顔が、見たこともない悲しい顔だつた。

200人の死兵は、一直線に獣ビーストマン人を目指す。並の人間でも束になればどうにかなる雑魚オーガ・トルールどもは、他の兵隊へ任せておけば良い。館ころと共に魔獣を狩つた成果が体に漲る。敵を殺せと、内なる力が咆えている。

先駆けて戦場を突き進んだ黒い狼が立ちはだかつた。

ゼエゼエと息を荒げながらも、その口からは涎がダラダラと垂れ流しにされている。

狼は飢えているが、空腹ではない。誇るべき自身の脚力を生かす場面に飢えていた。鋭く尖つた牙と爪も、誰よりも早い足も、敵を殺すために使うもの。魂が揺り動かす戦場で死ぬ役目が与えられた。

立ちはだかる生き餌は他より強そうだが、個としてなら自分の方が強い。ならば舞台上踊ればいい。戦場で出会つた敵同士、成すべきことは決まつている。

同じ時代と同じ大地で生まれ、同じ戦場で会つた同胞を、殺さねばならない。種族が違うのなら、互いの命を奪い合わなければならぬ。い。

牙を剥き、餓狼ガロが咆えた。

「かかつてこい、人間どもがあー！」

様子見とばかりに突きこまれた槍を払い、兵士の体を拳が貫いた。その首筋に食らいつけば、口内を満たすのは懐かしき、戦場で味わう鉄錆の味。死と生が混ざり合う、生の肉の香り。人生最後の食事に相応しいものだ。

首に食らいつかれた青年兵は、振じ切られた勢いで顔を後方へ向けられた。脳死までの数秒、瞳は泣き叫ぶ館ころもつちもちと、泣き顔の女王を見た。

(ああ……よかつた……本当に)

死にゆく自分はそれでいい、彼女たちの糧になれるのならば、少しの恐れもない。自分で思うが、悪くない死に方だつた。上手く笑えて

いるか不安になったが、すぐに意識は途切れた。

「怯むなあ！ 殺せえ！」

兵隊の誰かが叫び、取り囲んだ兵隊たちが四方八方から狼を串刺しにした。心臓が貫かれ、含んだ獲物の血が自分のものを上乗せして吐き出される。体から力が抜けていくのを感じ、狼は自分の死を理解した。潔い死に様など求めていない。戦士は戦場で花を咲かせるのだ。

最期にいま一度、力よ、蘇れ。

願った瞬間、脱力した足に力が宿り、両手は強く拳を握った。

「ビーストマンを舐めるなよ！」

突き刺した剣が抜けないように抑えている人間たちの兜へ、鉄拳を叩き込んだ。既に動けないはずの体は、夥しい熱量をもって彼らを殺害してくれた。

誇らしかった。

「俺は……ビーストマンだ」

複数の兵隊を道連れに、狼の獣人は息絶えた。

兜への衝撃は頭蓋の後頭部を砕き、脳へ深刻なダメージを負いながら、兵隊たちは自分が息絶えるまで一人も剣を離さなかった。およそ、これまでの人生で味わったことのない、砕けた頭蓋骨で脳が攪拌される地獄の痛みを味わいながら。

息絶える直前、痛みが心地よくなっていく。最後に唇を歪めて草原に倒れた。

汝、無様に生き残るなかれ。戦域で無残に死に賜へ。餓ころと共に強くなった200人弱の兵隊、その全てが息絶えるまで獣人を相手に戦う。これはそういう戦だ。そのために彼女は、力を授けてくれた。最後まで戦える力を。

「進めえ！ ビーストマンを殺せえ！」

『うおおおおお！』

敵の隊列は度重なるブルー・プラネットの妨害で出鱈目だ。このまま進めばビーストマン本隊と激突する。そこが彼らの死に場所だ。獣人軍の横つ面を突くように、彼らはがむしやらに突撃する。

酷い乱戦だった。



メスの豹らしき獣人と相対した青年は、敵と餌ころが重なって剣が緩む。戦場で手加減され、戦士の矜持に泥を塗られて激怒した彼女に両の手足を挽がれ、最後に首に食らいつかれ、そのまま顔を振って首を食い千切られた。悪いことをしたと感じながら、兵士の四肢は散り散りに草原に落ちた。

人間の群れに突っ込んだ獅子は、その体が動く限り人間を殺し尽くした。誰よりも兵士を殺した彼も物量に押され、最後は笑って首を刎ねられた。その首を掴んで掲げた兵士は、背後から喉元を食い千切られ、戦場の兵糧と化した。

出会い頭に両足を負傷した兵士は、敵と味方が入り乱れる戦場を這って進み、全身を滅茶苦茶に踏みつけられながら、あちこちの骨を破壊されながら、敵の下方から剣を突き上げた。不意打ちを果たした彼は満足げに笑い、その笑顔が崩れる間もなく飛び込んできた敵の足に頭を潰された。

腹を裂かれた兵士は意識を失う前に敵の足へしがみ付いた。動きが鈍った獣人は魔法詠唱者の火球を受け、しがみついた兵士もろとも黒焦げになった。それでも獣は止まらず、炭化した手が崩れ落ちるまで人間の兜を叩き割った。

獣人を率いる白虎は、物量に負けて左腕を切り落とされ、腹部を複数の剣に貫かれ、飛んできた矢が肩に突き刺さり、尚も全力で戦場を駆けた。激しい出血で霞む視界に、従兄の幻影が見えた。

(兄ちゃん……)

無念にも、先の大戦で殺された白い虎の従兄。喧嘩ではいつも勝てなかつたし、何度も泣かされた。彼は最後の戦地の向かうとき、友達を食い殺して強く成長していた。

今、ついてこいと言わんばかりに、彼の前を走っている。

「先に行けえええええ！」

誰かが叫び、背中を押した。生き残った全ての獣人たちが自分に付き従う。ならば目指すは女王の首。辿りつけずとも、戦場を晴れやかに駆け抜けて、死ねばいい。白き戦士は茨のような剣の山を突き進む。人間の王へ、獣の意地を見せるため。何の意味もない、死ぬため

の戦。

獣人相手の総力戦で、200名は一人の生き残りもなく草原に消えた。空腹に耐えきれなかったものは、その場で補給を初めた。

敵味方問わず、死体から魂が抜けて行く。初めは生前の姿で死体に重なるように立ち上がり、やがて白いおたまじやくしとなつて女王の下へ向かう。残った屍が赤い川を作り出す。何度も湾曲しながら、どこへともなく赤い奔流が進む。

館ころとブルー・プラネットの思い出が、紅に染められていく。食いしばった歯ぐきから血が出て、掴んだ大地が軋み、辺りの空気が歪む。見せつけられる死の奔流に、思い出までが崩れていく。

「みんな……みんな死んじゃう。私たちのせいでみんな死んでいく」

「これで満足か、建御雷！ 彼らを殺したのは俺たち全員だ！」

二人を抑えつけている建御雷とメコン川、言葉を交わさずとも、胸の内は等しく同じ。

彼らの死の様は見るに堪えない無残な有様だが、こんなにも強烈に心を掻き乱される。

今は黙して語らず、その時を待つ。

空を渦巻く魂が回転を早めていく。



見える景色は果てのない絶望。ここに自分がいる限り、経過した時間に比例して死亡者の数が跳ねあがる。館ころと共に訓練を積んだ強化兵たちは、全員が戦死した。その場で食い殺されたもの、死体を野ざらしにするもの、一人の生き残りもない。

「もういい……もういいんだ。頼むから死ぬな……生き残れば幾らでもいいことがある」

戦況は煮詰まっている。このまま放っておいても物量で人間が勝つが、生存者の数を増やすには魔法の行使しかない。死者の魂は可視化され、女王の頭上を渦巻いている。

「陛下、頃合いでしたら撤退を指示しますが？」

「撤退だ。総員撤退！ 命を拾い、我が前に帰還を果たせ！」

撤退を告げる狼煙、それを知らせる砲撃が上がった。誰もがそれを確認して、誰も撤退しない。迫りくる前線を抑えるべく、熾烈な戦いが続いている。

「馬鹿なっ！ なぜ撤退しないのだ！ 魔法を打つからさっさと戻れ！ 巻き添えを食らって死にたいのか！」

「伝令！ 伝令！」

最後尾にいた兵士が滑り込むように跪いた。

「何事だっ！」

「敵を惹きつけるべく、前列は撤退を拒否！ 陛下、このまま魔法を行使ください！」

それが何を意味するのか、わからないはずがない。女王は国民を巻き添えに魔法を行使しなければならない。激昂した女王は伝令兵の胸に拳を打ち付けた。

「貴様らの死は何の意味もないのだぞ！」

「だから何だと言うのですか！」

歯を食いしばって涙を流す兵に、それ以上、言葉が出てこなかった。

近距離の爆発では、どの道味方に被害が出る。そう考えた最前列の兵隊たちは、敵をその場へ釘打ちにするために撤退を拒否した。結果、撤退したのは僅か半数、人の群れの半分が申し訳程度に敵軍より距離を空けた。

「お早く！ これ以上、ビーストマンの進軍を堰き止められません！」

もはや一刻の猶予もない。

「下がれ……お前は生き残れ」

「はっ！」

女王の背後に展開している魔方陣が回転を始めた。同時に、頭上を渦巻く魂の群れが回る速度を速めていく。

加速。

加速。

加速。

人の目で追えなくなった魂は中心部へ向かう。その中心部は女王へ続いている。降下した魂が女王の中へ吸い込まれていった。背中の魔方陣が解体され、光の翼となって形を変えた。その翼で女王は少しずつ浮かび上げる。

敵の姿が良く見える場所まで、天高く。

「愛すべき者たちよ……光となれ」

天空に舞う女王の両翼がいつそう広げられてから、純白のシートのように女王の全身を包んだ。女王の光は全身を覆い、開いた口から光の粒子が出て行った。

「撃滅・廻天」

詠唱と同時に、白い光の熱戦<sup>レーザー</sup>が食人種軍へ一直線に落ちた。巨大な半円が戦場に作り出され、食人種たちのみならず交戦していた人間たちも飲み込んでいく。

純白の爆発が戦場を覆った。

鼓膜を貫こうとする爆発音、視界はただ白一色。全てが白く、苛烈なほど鮮烈に漂白された。血も臓物も、踏み潰された死体も、全てが白に染められていく。

ここは兵どもの夢の果て。

白い光が時間を経て収束していく。剥き出しの大地の上に、熱を帯びた爆破の爪跡。敵味方の区別なく、戦場に散った戦士たちの死体は真夏のアスファルトに落ちた水滴のように蒸発した。骨の一本すらも残されていない。故郷で待つ家族は、戦死した身内の亡骸を抱いて泣くこともできないだろう。

凱歌は、静寂と沈黙を以て歌われた。

草原に女王が降りた。瞳孔が白く焼かれていた宰相が、目が見えぬまま労らってくれた。

「女王陛下。我らの勝利です」

「何が勝利だ。一人でも多く生き残れと言っただろう……馬鹿どもが」

「未来のため……でしょうか。私たち弱者にできる、唯一の無償の行為」

女王が唇を噛み、震える拳を握った。

「報いてやる……死んだ馬鹿どもはあの世から見ているがいい。この私が！ 竜王国を未来永劫、繁栄させてやる！」

拳で目を擦り、白い手袋に涙がついた。

「女……王……」

ざわめく人の波が切り裂かれ、白い虎が倒れ込んだ。

「残党!？」

「待て！」

剣を抜こうとした宰相を制す。

右目に矢が刺さり、唇は切り裂かれ、左腕の裂傷から骨が見え、幾つもの剣が腹部を貫き、肩へ矢を受けている。最後の爆発で吹き飛ばされた背中から背骨を剥き出しに、獣人最後の戦士が草原を這つてくる。

生きているのが不思議な有様だ。やがて進むこともできなくなり、女王に伸ばした手が震えている。

激戦を生き抜き、敵の王の前に現れた彼に報いなければならぬ。人間側の王として恥ずかしくないよう、マントを柵引かせて近寄った。

しばし、無言で見つめ合う両者。あれほど憎むべき敵であったはずなのに、不思議と心は穏やかだ。胸を満たしているのは、同じ時代を生き、地獄のような戦争を共にした共感<sup>シンパシー</sup>。

女王の声は自分でも驚くほど穏やかで優しい。

「私が人間たちの王、ドラウディロン・オーリウクルスだ。ビーストマンの最後の将、名を名乗れ」

「ササカゼ……白き戦士の子」

「よくぞここまで辿り着いた。賞賛に値する、お前は私が首を刎ねてやろう」

放つておいても死ぬのなら、一刻も早く首を刎ねてやらねばならない。それが、敵として相まみえた者への礼儀だ。剣を抜いた女王を見て、虎が口角を歪める。真摯な顔で跪いた女王の剣が、そつと優しく首に当てられた。

「やあめろおおおおおおお！」

ブルー・プラネットが絶叫している。

「すまん……女王」

「過保護だが、いい親だな」

白い虎が、崩れた顔面で苦笑いをした。恥ずかしそうな顔は愛嬌すら感じさせた。

「女王……ビーストマンは最後まで戦い、誇り高く滅びた、と……未来へ」

「ドラウディロン・オーリウクルスの名において誓う。お前たちのことは忘れない、永遠に語り継ごう」

安心したのか、瞳から光が失われていく。最後の白い虎の子は人間のように笑って見せた。

「ビーストマン、ここに滅ぶ」

「さらばだ、戦場に散った勇敢な戦士、愛すべき我らの宿敵」

剣を引くと、草原に首が落ちた。女王は無言で立ち上がる。剣に着いた血を振り払い、死体に背を向けて歩き出した。

「さらばだ……ただ、生まれた種族が違っただけの友よ」

起因するところの分からぬ涙が溢れた。

彼女は振り返らない。彼女は女王、彼女は竜王。弱者が命を賭して守った命を、残された国民と竜王国を守らなければならない。女王には戦死者のために泣く時間などない。

戦死者の屍を越えて、女王は確かに成長していた。人間としてではなく、一個体の生物として。一体の竜ドラゴン・ロード王として。敵、味方の区別はもはや無く、戦死者たちは見えない翼となって支えてくれている。

「宰相。総員、速やかに首都へ撤退準備だ」

「畏まりました、陛下」

宰相は兵隊たちに集合をかけ始めた。

女王は純白のマントを翻し、草原の赤い水溜りから歩を進める。向かう先は、餓ころの首根っこに食らいつき、彼女を抑え込んでいる獣王メコン川。

姿が見えるや走り出し、剣で切りつけた。

「獣王メコン川あ！ 貴様だけは……貴様だけは許さん！」



残虐なりせば獣道。冷血なりせば獣道。強者の死に様、獣であれ。人間も所詮、一匹のケモノに過ぎないのだから。

建御雷はブルー・プラネットを解放し、メコン川も餓ころの体の上から飛びのいた。

立ち上がる時間すら惜しいと、獣のように走り出す。人込みをかき分け、戦域に霞と消えた戦士たちの亡骸を拾い集めるため。

自分が泣き叫んでいる自覚など無い。無言の兵士たちが、壊れた強者を痛ましい目で見ている。そんな視線は関係ない。モーゼに勝ち割られた海の如く、爆心地へ続く道が開かれる。

餓ころが爆心地で座り込み、両手に砂を乗せて叫んだ。

ブルー・プラネットが落ちた白虎の首を抱いて吠えた。

「うあああああああ！」

「あああああああ！」

沈黙の凱歌の中、彼と彼女の号泣だけが草原に響き渡った。

メコン川が鉄の爪に付着した血を振り払い、腕を組んで眺めている。そのふてぶてしい態度に、女王の眉間に皺が寄り、こめかみが痙攣した。

建御雷が刀を鞘に納め、女王の前に跪く。

「女王陛下、見事な戦、感服した。弱肉強食の世界、プレイヤーに縋らずに成し得た女王の功績。私は、あなたを尊敬する」

「ありがとう……私では彼らを奮い立たせることはできなかった。いや、正確にはそれを知りながら選ぶとうしなかった……が」

女王は抜いた剣をメコン川へ向けた。

「だが……お前だけは……お前だけは絶対に許さん！ 獣王メコン川あ！」

白銀の剣を両手で持ち、メコン川へ突きつけた。

「ひっ……ひひひ」

「何がおかしい！」

「後ろ」

指さされた後方、虚ろな瞳の餓ころが、両手いっぱい砂を抱えていた。

「ドラちゃん、見て。ほら、きつとこれがみんなの骨だよ。蘇生できるかなあ……えへへ、みんなあ、魔導国へ一緒に行こうね。モモンガさんに蘇生してもらおうからね」

そこから離れた場所では、ブルー・プラネットが白い虎の体を解体していた。

「共に行こう、お前だけでも。俺の武器となつて一緒にいよう……」

ブツブツと呟いている有様は、終戦直後にして重度の精神的後遺症<sup>P T S D</sup>を発症していた。戦場に散った兵士たちと比べ、あまりに不甲斐ない様に女王が苛立つ。餓ころの頬を張ろうと振りかざした手は、メコン川に掴まれた。

「離せ！ 私に触れるな、汚らわしいケダモノが！」

「まだだ、戦争は終わってない」

「何だと！ この期に及んで、貴様はまだ我らを弄ぼうというのか！」

メコン川は静かに首を振り、女王の手を離れた。音もなく忍び寄った建御雷が、メコン川の肩に手を乗せる。

「メコン川、分かっているだろう」

「ああ」

「私たちはこの地を去る」

「世話になつたな、女王。私たちは行かなくてはならない」

「そんなこと言われずとも分かっている！ 貴様らは魔導国へ帰れ！」

二度と竜王国の地を踏むな！ とつとと帰れ！」

目的地への感情はさておき、過程においてメコン川と建御雷は同じ道を歩いた。

雄<sup>オス</sup>とは単純な生き物である。

「女王、絶対強者など新世界には無用の長物」

「私たちは強者に相応しい業を背負い、ここで息絶える」

そして、理解に苦しむ生き物でもある。



「……はああああ？ お前ら、頭がおかしいのか？」

「ここまで好き勝手に暴れて血が流れずには済まない」

「狂っている……何の意味があるのだ」

陣營の外れにて、武人建御雷と獣王メコン川は20メートルほどの距離を取って武器を構えた。彼らの趣味・嗜好が理解できず、女王が割って入る。

「私の話を聞け！ 戦争は終わったのだ。何でお前たちが殺し合う、馬鹿なのか？」

「死もまた止むなし。武士道の果ては、無為な死だ」

「違うな、建御雷。強者が晒すのは死に様だけだ」

「メコン川……お前も私も、最後まで死にたがりの馬鹿だったな」

安い口車に乗って無様に死んだ弱者たちを笑うことなどできない。現実から逃げた自分たちに比べて、羨ましくなるほど完成された死だった。未来のため、笑いながら死んでいく彼らは胸に迫った。

今となれば決して届かない。自分たちは招かれた異世界へ、馬鹿面下げて逃げ込んだ滓だ。<sup>カス</sup>なぜ、現実世界を牛耳っている企業の喉元を食い千切るべく戦いを挑まず、馬鹿のように差し伸べられた手を取って逃げてきたのか。

「私たちプレイヤーは負け犬だ。初めから、この世界に居場所などありはしなかった。無様な生き様、晒すつもりはない」

「女王、人生の最後に良いものを見せてもらった、感謝している」  
戦死者の死に様こそ、自分たちが現実で行うべき見本だった。

そして今、死に直す機会が与えられた。

「館ころとブルー・プラネットはモモンガさんに頼むといい」

「止めろと言っているんだ！ この私を誰だと思っている、竜王国の女王だぞ！ この私が辞めろと言っている——」

「五月蠅い、すっこんでろ」

割って入ろうと両手を広げた女王は、その腕をそつと優しく掴まれ、兵隊たちの方角へ放り投げられた。

「行くぞ、メコン川」

「手加減したら殺すぞ」

死の嵐が吹き抜けた草原に、強大な力が衝突する。生温かい厭いやな風が吹き、空気は鉄錆の臭いを濃くする。

ここだけが守られた空間であるかのように雲に穴が開き、最後の舞台へ光が差し込んだ。



### 《獣王壊神撃》

仁王立ちする建御雷を凶爪が襲う。全方向から襲い掛かる爪は捌ききれない。ならばと、刀を鞘へ戻し、武人は居合の構えを見せる。

### 《忿怒の門》

ダメージ量に応じて攻撃力が上げられた。

### 《阿修羅一閃》

すかさず仕掛けられたカウンターがメコン川の体を切り裂く。胸から腰へ斜めに走る傷がつけられ、夥しい量の出血が飛び出した。

両者、手傷で後退しない。

狙うは相打ち、馬鹿の最後に相応しい無為な死。煽り立て、戦争を仕向けた報い。竜王国の兵、獣人連合の兵、どちらとも違う。この死には何の意味もなく、虚しいだけの死。

どちらのHPも過半数を割ったのなら、スキルも術も必要ない。至近距離で武器を叩き込むだけの異常な接近戦<sup>インファイト</sup>。体力数値が大きく削れていく様が笑える。

死はすぐ背後まで歩み寄っている。

「やめろおー！」

女王が絶叫し、全力でこちらに駆けてくる。彼女が到着する頃には、二つの屍が草原に晒されていることだろう。

メコン川が息を荒げ、草原に膝をついた。縋りつくように伸ばした爪が、武人の胸から腹部までなぞった。馬鹿馬鹿しい役割演技だが、侍の二つ名は伊達ではない。同程度にHPが削れているが、武人は呼吸さえ乱れない。

肩で息をしながら建御雷を見上げて言う。

「お見事だ……サムライ」

「メコン川、最後となると名残惜しいものだ」

「躊躇う必要はない。私の首が落ちる前に、お前の心臓が細切れになっている」

「い——」

刹那、恐ろしいほどの殺気が二人の背筋を泡立たせた。女王が天へと舞い上がり、光の翼を広げている。それは、一回目の魔法で死んだ魂をかき集めた一撃。プレイヤーとは根源を別にする、異質な魔法の兆し。

程なくして二人へ熱戦が叩きこまれた。

「止めろと言っているのだ！ この馬鹿どもがあー！」

爆発に混じって聞こえたのは女王の怒鳴り声だった。死ぬつもりだったのに、自然と爆発を避けていた。それでも魔法の威力は凄まじく、二人は白い爆発に飲み込まれた。その一撃で死んでしまいそうなほど、全身が火傷の激痛に包まれた。

「わあ、お空綺麗……」

無垢な子供のような声で餡ころが言った。

光はやがて収束し、草原に残るは天を見上げて倒れる侍と野獣。頭の中から尻尾の先まで重度の熱傷。痛みしか感じず、身動きもままならない。彼女の怒りの鉄拳を躲すような余力は残っていないが、顔面に叩きこまれた拳は痛くない。

「竜王国と魔導国を全面戦争させるつもりか！」

「……なぜそうなる」

「よく聞け、馬鹿ども！ 魔導王とはな、仲間を探して世界を旅する、理解不能なアンデッドだ！ 貴様ら仲間の癖にそんなこともわからないのか！」

「勝手に自殺したと言え。それで全てが丸く収まる」

「収まるものかっ！ いいからとつとと傷を治せ！ 生き残れ！」

「女王とは、あまくち体質でも成し得るのか……つくづく甘いな」

空を見上げるケダモノが嗤った。

「残念だが、建御雷」

「何だ？」

「私の勝ちだ」

「もう戦争は終わったのだ！ とつとと貴様ら、魔導国へ帰れ！」

「終わってないもん。お父さんはそいつに殺されちゃったのに！」

どこからともなく、幼さを感じる少女の声が聞こえた。女王と建御雷が顔を向けた先、メコン川の上に小さい少女が馬乗りになっていた。

「はあ？」

「へえ？」

女王と武人がぼかんと口を開いている最中、少女は柄に《天》と刻印されたナイフを掲げた。太陽の光が切っ先でキラリと輝いた。

「お父さんの仇！」

メコン川の体が滅多刺しにされた。物理無効化を解除しているらしく、面白いように刃が体内に吸い込まれた。差し抜かれてすぐ体内へ戻り、何度も往復し、メコン川の出血が赤い絨毯のように広がっていった。

「やめろ！ 何をしている！」

「メコン川！」

「勝った……」

獣の優位は揺るがない。父を食い殺された少女は黄金の決意を携えて立ち上がり、復讐の刃をメコン川の胸に突き立てた。これでメコン川が本当に殺してやりたかった者、傲慢で哀れな負け犬を殺すことができた。

(ぎまみろ……ああ、楽しかった。どうか、次は弱者ザコに生まれますよ  
うに)

差し込まれるナイフは止まる気配を見せず、メコン川の意識は途切れた。



鍛冶屋の庭で、洗濯物を干し終えた女性が遥かな空を見上げる。

「あの子に出来るかしら……」

数分前、空へ旅立った二体の化け物が、可愛い愛娘を無事に連れ帰ってくれるだろう。晴天の彼方、大きな虹が見えた。

状況を把握していないものは呑気なものだ。

「やー、戦争が終わってるといいねえ」

「助力を頼まれても困るもんね。やだやだ、戦争なんて嫌いだよ」

戦争が終わっていけば獣<sup>ビーストマン</sup>人への敵討ちは別の者が行っているし、父の仇が何かの拍子で生き残っていたとしても問題はない。与えた特製武器・掛けた魔法量を考慮すれば、人間の10倍程度の身体能力を持つ獣人の一匹くらい、どうにかなる。レベルが一桁である少女であっても。

太陽光に囲まれた円形のPVP舞台へ、二体の異形種が舞い降りた。

瞬時に理解したことは、自分たちは大いに出遅れたということだ。

甲冑の美女にナイフを没収され、血だらけの獣王メコン川の上で号泣している少女。泣いている少女に困惑している、全身黒焦げの武人建御雷。幼児返りして空を見上げている餡ころもつちもち。意味深に白い虎を解体して、骨の人体模型を作っているブルー・プラネット。「わっけわっからんど」

「ぶっ！」

混沌としていて笑えてきた。

「仇ってメコン川さんだったの?」

「こりやあ俺たち、だいぶ出遅れたね」

意識を失ったメコン川を除く三名は、眼球が飛び出さんばかりに目を剥いた。

「あー、あまのまひとつと源次郎だー……はあ!?!」

「おおお!?!」

ブルー・プラネットと餡ころの精神的後遺症<sup>D</sup>を宇宙まで吹き飛ばすほどの衝撃に、二人は慌てて立ち上がった。

「うわああああ!」

蟹の被り物を背負ったようなあまのまひとつへ、父の仇を討った少

女が泣きながら抱き着いた。蟹の鋏が少女の頭を撫でている。

「サキちゃん、仇は打てたかなー？ それじゃあ武器を返し……と、あちらの美女さんが持つてるなあ……源次郎さん、ちよつと回収してきて」

「やだよ！ あんな美人さんにどうやって話しかけんのよ。悪いけど自分でやって」

「そんな殺生な」

「ごめん無理」

ヒソヒソ話をしているつもりだろうが、沈黙の草原で会話は筒抜けだ。奪ったナイフを持ったまま、女王が不思議そうに首を傾げた。

「あのー……？」

《はい！ な、なんででしょうか？》

双子かと聞きたくなるほど声が一致した。

「誰ですか？」

女王はこの瞬間、確信する。どうやら空気が読めないのはプレイヤーの性質らしい。事情を一切、把握してない様子はいつぞ清々しい。ある種の悪意すら感じさせる。

「女王、左があまのまひとつ、右が源次郎。私たちの友人だ」

血反吐を吐き、黒焦げの建御雷が空気を読んで解説する。状況が理解できずに困惑している女王は、肩に置かれた建御雷の手がとても頼もしく感じた。

「や、建御雷さん」

「お久しぶりです」

「説明を願いたい。一から十まで、知っていることを全てだ」

「あ、その前にメコン川さんに回復薬を掛けてあげて」

「……どうみても死んでいるようにしか見えないが」

「大丈夫。ビースト系特攻の、あまのま特製ナイフだから」

「……回復薬が無い」

「あらら、ほいじゃ源次郎さん、回復してあげて」

「はいはい」

軽度の回復魔法で、驚くほど簡単にメコン川は起き上がった。両手

の指では足りないほど体を穴だらけにされていたはずだが、起き上がった体には傷一つない。あまのまひとつは幼女を抱き上げた。「よく頑張ったねえ。お父さんは後で源次郎さんが蘇生してくれるから」

「うん……」

「これでもう、復讐なんてしちやだめだよ？」

「ふええん……」

蟹と人間の混血らしき彼は、幼女の弱みに付け込む幼児愛ペド野郎好家に見えた。

「説明しろ！ 早く！」

「陛下！ 撤退を！ 兵士たちは疲弊しきっております！」

「くっ……」

宰相が珍しく怒っている。戦死者の数は馬鹿らしくて数える気にもならない。同胞を殺され、重苦しい雰囲気撤退準備を終え、こちらの号令を待っている兵士たちをいつまでも放っておけない。

「何なのだ、貴様らプレイヤーはどいつもこいつも！ こちらの事情を無視して好き勝手にしておつて！」

女王は吐き捨てるように言い放ち、兵士たちへ撤退の号令をかけた。

不本意ながら、状況把握は帰還してからにせざるを得なかった。

無言で凱歌を歌う兵士たちの最後尾。源次郎とあまのまひとつの二人だけが、追従する足取りも軽く首都へ歩を進めた。

それ以外は、会話する余力もなかった。



女王のやるべき公務の量は、考えただけで嫌になるほど積まれてしまった。最低限、生き残った兵士たちを労い、明日に公開演説の予定を取り付けて、女王は会議室へ駆けこんだ。

先に通された館ころの目を覚まそうと往復ビンタしたが、源次郎の回復道具でもう我に返っている。ついうっかり反撃してしまい、間違

えて食らった黒焦げの建御雷が倒れ、慌てて源次郎が回復魔法をかけていた。同じく我に返ったブルー・プラネットが、メコン川を本気で殺そうと暴れて入口が大破する珍事が起きた。

騒動の最中、あまのまひとつはギルドメンバー同士の小競り合いじゃれあいに手を叩いて笑っていた。

ブルー・プラネットと館ころの怒りはまだ熱を持っている。終始、メコン川に突っかかり続け、うんざりする回数を仕切り直した末に経緯の説明が行われた。既に太陽は今日の仕事を終え、地平線の先へ沈もうとしていた。彼はいつだって残業とは無縁だ。

「まず、この子はメコン川さんが食い殺した鍛冶屋さんの娘さんです」「はじめまして、サキですー!」

あまのまひとつに紹介された少女はお辞儀をした。

「可愛いでしょう?」

「ちよつと待って、食い殺したってなに?」

「発言は拳手でお願ひします」

あまのまひとつと源次郎は、気が付いたら二人揃って首都の前に立っていた。幻術を駆使して国家へ不法侵入を果たしてすぐ、子供が泣き叫ぶ声を聞いた。無視するわけにもいかなないので鍛冶屋へ向かった。

館ころもつちもちが建御雷の武器を依頼した鍛冶屋は、メコン川によって殺害、武器を強奪されている。父が食される場面を見た幼女は復讐心に燃えていた。

負傷した母親の手当てもできず、困り果てていたところへ偶然、あまのまひとつと源次郎が現れた。仇が誰かは知らないが、母親の治療の傍ら、面白半分で獣人特攻の武器を作ったら少女がそれを掴んで飛び出して行ったもので、母親手作りのオヤツをのんびりと食べてから止めに来たのだと言う。

あまのま手製の、反感値ヘイトに応じて回避不能なダメージを獣系に与える武器は、少女の復讐に大いに役立ってくれた。そうして戦域の後方より様子を窺っていた彼女は見事、敵討ちを成就させた。

「異議あり」



「はい、メコン川さん」

「ものすごく痛かったツスけど、なぜ生きてるの？」

「HPが一定量を切ったらダメージ無効になるような設定しておいたからでいす」

得意げにあまのまひとつが蟹の爪を開いた。どうやらVサインをしているつもりらしい。

「いや……だから……なぜ？」

「何が？」

「なぜ親の仇を生かしておく」

「復讐なんて他にやる事が無い暇人のすることですよ。野蛮なケダモノの命をこの子が背負う必要ないから」

「……ケダモノで悪かったな。やっぱり母親も食い殺しておけばよかった」

余計な発言は会議を停滞させる。館ころとブルー・プラネットは瞳に怒りを宿し、メコン川を睨み続けている。どちらも隙あれば襲い掛かろうと爪を研いで機を窺っている。

「メコン川ああ、私が怒りを抑えている内にその汚い口を閉じろや」

「死にたいなら手伝うが？」

風当たりはかまいたち並みに鋭く強い。

（死に損なったか……）

これは生き残った自分が悪い。予定では、自分は少女に殺されていくはずだった。メコン川は俯き、借りてきた猫を演じるしかなかったが、反感を独占している現状では意味がない。

「さて、速やかに罰せなければならぬメコン川のゴミ野郎について話ませんか」

「そうよね、ブルー・プラネットさんに賛成。こいつは死刑」

「死刑！」

「死刑！」

「断固拒否！」

「死ねっ！」

「死ねえ！」

つい数時間前まで相容れなかった二人は、見事に意見を一致させていた。当の本人は反省すらしていない。

「私は何も間違っていないはずだが」

「ふざけんな！ あんたのせいで何人死んだと思ってる！」

「ああ、絶対にこいつだけは許せない」

「ケツ、傲慢ここに極まりだ。何度も言うが、彼らは自分たちで望んで死んだ。その死にケチをつけるな、馬鹿二人。私は彼らの背中をちよつと押しただけに過ぎない」

「やかましい！」

「野獣、死すべし！」

発言するたびに二人の怒りが炎上している。

「館ころ、ブルー・プラネット、まずは魔導国へ行つてからにしないか？」

あまのまひとつと源次郎がわくわくした目で見守っている最中、建御雷の発言は火に油を注いだに過ぎない。

「あのさあ……タケちゃん、自分は違うとも思っているわけ？ 何様？」

「あんたたち二人のせいでビーストマンは絶滅したんだぞ！ 自分が何をしたのか、まだわからないのか！」

「シラネ」

「メコン川あ！」

「煽るな、メコン川！」

「ぶち殺す！」

頭を抱える女王は、宮廷の壊滅を覚悟した。草原での戦い方を見る限り、暴れた場所を中心に半径一キロは焦土と化してもおかしくはない。その費用は魔導王に請求できるだろうかと考えたところで、結論は怪しい。

「みんな落ち着けー」

「なんかとっても怒ってるねえ」

館ころとブルー・プラネットの標的はメコン川一人だ。メコン川はのんびりした二人を見て、人差し指を立てた。

「あまのまささんと源次郎さんに質問。とある国に旅行へ来た異邦人。彼はその国が戦争を控えていると知りました。彼は戦争を止めるために戦うべきでしょうか。それとも、何もせずに立ち去るべきでしょうか。あまのまひとつさん、どうぞー！」

「ん、俺？ 俺なら帰るわ」

「源次郎さんは？」

「俺も家に帰るかな」

メコン川は矢鱈にのんびりとした二人にペースを乱される。黙っていられないのは飽きるとブルー・プラネットだ。

「だって、しょうがないじゃん！ 人間を守らなきゃいけないんだからー！」

「俺がいなきやビーストマンは絶滅するんだ！ 現にそうなった！

可哀想な彼らを放って家に帰れるかよー！」

「それを傲慢と言うのだ、馬鹿二人」

「無視して帰るのは私も違うと考えている」

4人の誰からも同意する意見は得られなかった。あまのまひとつは腕を組んで天井の染みを眺めた。この手の会話、というより説得ゲームは苦手だ。自然と視線は隣の源次郎へ移る。

「なに？ どうした、あまのまっち」

「説明、求ム」

「俺にやれと？」

源次郎はため息を吐いてから身を乗り出して、咳払いをした。

「みんな、この世界を満喫し過ぎだよ。別に、どうでもよくない？」

源次郎曰く、あくまで自分は異世界からの渡航者だ。地球の反対にある国の人間が何百人、何万人死のうと、極端な言い方をすれば興味はない。戦争をするもしないも、その国の勝手だ。異世界ならなおのこと。感情的になるのは、関心を示す程度に感情移入しているのだ。「外国の戦争でたかだか数万、自分たちで志願して死んだ。別に気にせず、自分の家に帰ればいいじゃない。部外者に出来ることなんてないし、俺だったらぽっと出の旅行者に好き勝手にされたくないね」

「そ……」

「そんなことはない」という言葉は最初の一字だけでけつまづく。「だって、宇宙人に地球を好き勝手に改造されるようなもんだよ?」  
「……」

反論が出なくなった。

しばしの沈黙の後、ブルー・プラネットが挙手にて発言を求めた。「確かに、俺たちは外来種かもしれない。それでも……俺がいなければビーストマンは絶滅する。自然というものが滅茶苦茶に破壊された世界から来た俺たちこそ、この世界の絶滅危惧種を守らなきゃ」「つていうか、多数決は?」

「多数決で反対になったら見殺しにしろつて言うんですか!」

「だって仕方ねえべき。俺ら、聖人君主でもねーし、異世界人にできることなんてないわ」

「俺たちは日本人だよ? 嫌な現実から目を背けるのは慣れているでしょう?」

「喧嘩するために来たわけじゃないかな、少なくともオイラは違う場所で生きたいと思ったから来たんだー」

あまのまひとつが蟹の鋏を開閉した。源次郎とあまのまひとつの間に腰かけた少女は、所在なさげに煎餅を齧っていた。大人の話には興味が無いようだ。

「理由や相手は違っても、4人とも肩入れしすぎだわ。誰よりも頑張るんは俺らじゃなくつて、その美人な女王さんだべ」

「つていうかその口調は何? そんなキャラ設定だった?」

「なんかそんな口調で話しそうじゃない? このアバター」

「知らん知らん」

黙つて話を聞いていた女王に電流が走る。まるで神槍の稲妻、100万ボルトと10万アンペアの饗宴。脳の海馬を直接、ぶん殴られたような激しい衝撃。

プレイヤー  
転生者とは世界の抵抗運動だ。定められた運命に唾を吐き、世界の理まで歪めてしまう。だからこそ女王は、自分にできない結果を出してくれるプレイヤーに依り過ぎていた。弱肉強食の摂理の中で誰かに縋るとは、隷属を意味する。生殺与奪の権利を喜んで献上するも同

義。

何時から自分はそうなった。

館ころが来た時か。空気の読めない魔導王が君臨した時か。

あるいは、彼の部下がこの国を訪れた時か。

姿、名前が思い出せない彼の部下とは誰だ。

何となくの直感で言えば、とても酷い目にあわされた気がするし、それなりに楽しかったようにも思える。ならばなぜ、その部分の記憶だけがすっぽりと抜け落ちているのか。

まるで、女王が竜王として成長するために、今回の舞台が作られたようだ。遡るなら、魔導王の部下が訪れた時から。

「私は……夢を見ていたのか」

「ドラちゃん？」

ふわふわした夢から覚め、突きつけられた残酷な現実を、女王は自らの力で踏破した。それは間違いない。数万の成人男性、国力が低下する死者を出しながら、竜王国は魔導国の手を振り払った。扱いの良いい奴隷的な立場を打開し、竜王国は新時代を迎えるだろう。

「ブルー・プラネット」

「はい？」

「獣人たちを守りたかったなら、魔導国へ向かえばよかったのだ、違うか？」

「そ……」

獣人たちの保護は、敵対国である竜王国の近郊では不可能だ。ならばさっさと魔導国へ向かうべきだった。モモンガは間違いなく、彼らを皆殺しにするとは言わない。

「館ころもグダグダと抜かさず、とつとと魔導国へ帰ればよかったのだ」

「う……」

「そうすれば戦争は起きず、メコン川という鬱陶しいバカタレは建御雷に連れられて魔導国へ向かっただろう」

「確かに」

「まあ、その場合はそうする」

「お前たちは揃いも揃って喧嘩ばかりしおつて……さつさと魔導国へ行っていていれば、全員が理想を実現できただろう、違うか？」

「……」

「まったく……プレイヤーどもは何をしでかすか分かったもんじゃない。その2人がいなければどうなっていたかわからんぞ」

「多分、メコン川さんを巡る壮絶な殺し合いが始まってたんじゃないですかね」

「獣王さん、ちよつとはしやぎ過ぎだべ」

最期の詰めは女王が行った。誰も彼も、同意を示しこそすれ、彼女に反論はなかった。

「だが、プレイヤーはこの世界にいらないね。それは間違いない。私たちは現実を捨てた負け犬だ、異世界に来たからって何をする」

「どうやらメコン川は、その点だけは譲れないらしい。」

「何が悪いのん？」

源次郎がすつとぼけた声で聞いた。

「負け犬でいいじゃん、だってその通りなんだから。きつと、次は上手くできるよ。失敗したっていいじゃん、人間なもの」

「……それでいいんか？」

「凡人にできることなんて、出会った人にちよつと優しくする程度じゃんかあ」

机に顎を乗せてだらけている源次郎と、のんびりした口調のあまのまひとつに、メコン川の持論は通じない。なあなあで押し切られた感はないが、メコン川は拳を振り上げている。そのまま降ろすのはどうにも収まりが悪く、悪あがきを始める。

「いや、違うね。みんな死んでしまえばいい。それでこの世界はようやくすつきり——」

「メコン川さん、もしかして女王に惚れたん？」

「はあ？」

「だから突っかかっているんかー？」

「男の嫉妬なの？」

「メコン川のSHIT」

「ぶっ！」

不意打ちで吹き出した餡ころが、笑いを堪えてそっぽを向いた。空気を和ませようとしているのではなく、どちらも本気でそう思っているようだ。

「なるほどねえ。確かに、女王と結婚するなら手え出しした方がいいわなあ」

「ほーかほーか、メコン川も男の子だったか。確かに女王様は美人だあな」

「おいコラ」

「ごめん、それなら俺が間違ってた」

「頑張れ、SHIT！」

「おいしいい！ ふざけんなあ！」

遂にメコン川は振り上げた拳を下ろすしかなかった。惚れた女王と結婚したいから、あちこちで突っかかっていたことにされるくらいなら、さっさと引いた方がましだ。

何となく丸く収まったような空気を確認して女王が立ち上がる。マントを翻し、会議室を出て行く寸前に入口で振り返った。

「お前たち全員、とつとと魔導国へ帰る支度をしろ。プレイヤーなど即刻、魔導王に引き取ってもらう。今回の件については魔導王へ正式に抗議してやる」

「ええー？ ドラちゃん、私も出て行くの？」

「当たり前だ！ プレイヤーなど金輪際、竜王国にいらんわ！ 特にメコン川、二度とこの国に立ち入るな！」

「出禁!？」

「生温いくらいだ！」

「メコン川、フラれちまっただか」

「うむ、当然の報いだな」

「おいしいい！ さつきから何なんだよ！」

「出発は二日後だ。私も一緒に行くからな」

取り急ぎ、プレイヤーは魔導国へ追い返されることだけは決定した。

「……ありがとう」

出て行く女王の眩きは、騒がしくなった会議室に聞こえなかった。



翌日、宮廷前の広場にて、戦死者を弔う慰問会が行われた。プレイヤ―は応接間に押し込まれ、窓から様子を見る以外に行動を許されなかった。

女王改め竜王は、家族を失った者たちを慰めなかった。謝罪はしなかったが、王の言うことに背いて死んだ者たちを責めることもしなかった。

「私は彼らのために泣くような非力な王ではない。祖先英霊が託した未来、残された命のために我が身を捧げよう。私は死ぬまで女王であり、この国を統べる竜王である。魔導国の手など、わが国には必要ない。英雄たちが翼となって支えるこの国こそが、竜王国のあるべき姿だ！」

泣き声と拍手の最中、女王を責め立てる声は無かった。

この国は徴兵制ではない。自ら兵隊を志願し、最後まで戦って死んだ。戦死した先で、家族は英雄として称えられる。残された者は死者を思つて泣くだろう。自分の家族は死なないと、考えたことはない。きっと全員、そうしたかったのだ。

「それから……プレイヤーは見つけ次第、魔導国へ追放する。竜王国の新たな法律である。思い当たる人間は申し出るように」

蛇足にそう付け加えられた。

これ以上のプレイヤーが潜んでいないか確認するために二日間ほど待機し、魔導国へ向かう馬車が用意された。

宰相、衛兵たちが絶対強者を見送ってくれた。挨拶は簡潔で、とつとと帰れと言わんばかりだ。特に、メコン川の扱いは冷遇されている。

ただ一組、メコン川が食い殺し、源次郎に蘇生された鍛冶屋の一家だけ、あまのまひとつ、源次郎と談笑していた。



他の全員、手を拱こまねいて終わるのを待っている。館ころの知り合いは全員が死に、ブルー・プラネットに人間の知り合いはいない。建御雷は、そもそも人間の顔と名前を覚えていない。鍛冶屋を食い殺したメコン川はさっさと外へ出て行ってしまった。

あまのまひとつが少女の目線で笑いかけた、つもりだろうが表情はさっぱりわからない様だ。太陽光を反射するあまのまひとつの眼鏡が眩しく、少女は源次郎の影に隠れた。

「いやー、蘇生出来てよかったよかった」

「おかげさまで生き返ることができました」

「本当に、なんとお礼を言っているか。この子も喜んでいますが、またみんな静かに暮らします」

「私、鍛冶屋になる！ あまのまひとつの弟子になる！」

「ほーか、んじゃ、魔導国まで訪ねてこいー」

「あまのまっち、そんな投げやりな態度で、後で面倒事になっても知らんよ」

「ぐつどらつく」

親指を立てて少女を鼓舞するあまのまひとつに、余計なイベントの伏線を張っているなど全員が思った。

馬車は出発し、草原を進む。

館ころと小さい方の女王が乗る、豪華な装飾の馬車。騒がしい男どもの馬車と比べ、お淑やかな空気が流れている。

「結局、ドラちゃんちゃんは小さい方なのね」

「馬車の広さを考えてのことだ。この方が広く使えるからな」

「そーね……」

王は公人だ。人目が無いと気を抜く。女王は横に寝そべり、無造作に足を投げ出し、煎餅を齧っている。下着が見えそうだが、二人きりの車内で気にした素振りもない。

「館ころ」

「何？」

「お前たちアインズ・ウール・ゴウンと愉快的仲間たちは、41本の首を持つヒュドラだ。その時の気分次第で、隣の首にまで食らいつく凶

「暴な連中だ」

「うん……間違ってるかも知ね」

「メコン川の馬鹿野郎は、死んだ兵士たちを見て、生きているのが恥ずかしいと思ったのだろうな。その気持ちはわからないでもないが」

命が安い世界で、生き恥を晒す苦痛は理解できる。七彩の竜王の血を引くからと言って、国家運営は自分で成し得なければならぬ。そこで失敗すれば、曾祖父の名に泥を塗る生き恥となり、死んだ方が幾分か楽な未来でもあった。

「あいつ……人を食ったんだよ。そんな殺人鬼、褒めなくていいよ」

「そうだな……奴は曾祖父様の自殺を手伝い、兵士を煽って大量の死者も出た。奴への処遇は魔導王に任せるが、今はお前たち全員に感謝している。ようやく、長い夢から目覚めた気分だ」

「フン……別にいい。私は何もしてないしい」

そっぽを向いた餡ころは、むくれながらも笑っていた。

「それと、死者のために慰霊碑が立てられる予定だ。爆心地に一つと、郊外の森へな」

「2つ？ 戦場はわかるけど、森はなに？」

「生まれた種族が違っただけの友へ、だ」

それから1カ月後、竜王国の外れにある小さな森の入り口の片隅へ、小さな慰霊碑が立てられた。碑文にはこう記されている。

《竜王を相手に戦い、戦場に散った誇り高い戦士。竜王国の友人、ここへ眠る》

「おとぎ話として、ビーストマンは語り継いでやる。我らを相手に、勇敢に戦った戦士たちだ」

「私も、ビーストマンの子たちとも話せばよかったかなー……」

知り合いの死は消化しきっていない。それでも、前に進まなければならぬ。源次郎の見立てでは誰も蘇生できない可能性が高いが、考えても仕方がない。モモンガとの合流を優先すべきだ。

二人の視線は窓の外へ移動する。

「あ、虹だ」

見える虹は遥かな彼方。

その手は虹まで届かないが、その地へ向かうことはできる。

「私は、曾祖父様を越えて見せる……いつか必ずな」

「婚期が遠ざかるよ？」

「……諦めた」

「誰か紹介してあげるよ、今度こそね」

「それは幸福の押し売りだろう。お前は色恋が好きだな。情欲魔導士か？」

「失礼ね！ 紹介するだけで、決めるのはドラちゃんよ」

「それもそうだな」

女性二人は窓の外を眺めた。大きな虹の橋は極彩色も鮮やかに、遙か彼方でそびえ立つ。曾祖父が先へ進めと言っているようだ。

蘇生された曾祖父と、いつかまた会える日が来る。その時は、胸を張って誇れる王になっていよう。それまで、何度でも躓き続けよう。そうやってここまで来れた。いつかその手が、虹へ届くように。

美しい女性専用車両から距離を空けた後方、大型のリヤカーを一人で引き摺るメコン川が怒鳴った。

「疲れた！ なんだ、この扱いはあ！」

「仕方ないんじゃない？」

「クソ！ 覚えてろよ、ドラ公！ 着替えを覗いて乳揉んでやる……建御雷のように！」

「ちよっと、たげやん。どういう意味かな？」

「私は知らん！」

「しらばつくれるな、ムツツリ助平！」

「詳しく！」

「さつきから五月蠅い！ とつとと走れ、メコン川のクソ野郎！」

男性陣4名が大型のリヤカーに押し込まれ、メコン川が馬代わりだ。ブルー・プラネットは怒りを新たに、獣系特攻が付与された鞭を振るう。柄の部分には《天》と刻印されていた。そのブルー・プラネットの首には、紐を通した獣たちの頭骨が揺れていた。

あまのまひとつ特製の鞭は効果的で、メコン川は必死でリヤカーを引つ張らされた。

「メコン川、あっちの馬車と距離が離れている。もつと急いでくれな  
いか」

「女王のおにぎりウマー……」

「あれ？ 俺の分は？」

「あ、ついうっかり食べちゃった」

「酷い！」

「たくあんなら残ってるだ」

「頑張れ、頑張れ、メ・コン・川！」

「女王と結婚もな！」

「この荷物どもが喧しいわ！」

文句は言いながらも、メコン川はリヤカーを放り出して逃げることはしなかった。建御雷がごそごそと地図を開き、現在地と目的地を指でなぞった。

「今がここ竜王国の外、目標はここ、魔導国領内の城塞都市エ・ランテルだ。そこまでいけば馬を買ってくれるらしいな。魔導国へ請求するらしいが」

「ちなみに、どんなに急いでも二日間くらいかかるってさ」

「ふっぎけんなああ！」

「あまのまひとつさん、寝ちゃった……人の分のおにぎり食べてお腹いっぱいになったからって」

「怠惰であるな」

「あ、虹だ」

天気は晴天、風向きは追い風。

旅の幸運は、巨大な虹が祈ってくれる。

異世界の旅が始まった。

## 最悪編・裏

### タブラ・スマラグデイナの退屈

——目を閉じろ、それが心の闇だ

身辺整理は、辞表を出してから5分で終わった。籍を置いた年数に反し、驚くほど簡単に終わるものだと感じた。この机には、私の存在した痕跡は残っていない。

額の汗を拭って一息ついた直後、背後へ忍び寄っていた者が声を掛けた。

「あのう……辞めちゃうって聞いたんですけど」

子リスのような女が、あざとい上目遣いで言う情景が浮かぶ。残念ながら、現実世界でのイベントは締め切りが過ぎている。私は振り返りもせずに応えた。

「ええ、田舎へ帰るんです」

「田舎？ スラム街ですか？」

「帰る場所があるって素晴らしいと思いませんか？」

いつもの軽口に、彼女が笑った様子はない。同様に、私の両眼も笑っていないが、彼女の知性ではそれに気付かない。

「もうっ、今ならまだ間に合いますよ！」

「結構です。次の予定はもう決まっていますので」

「教えてください」

「どうして？」

「う……じゃ、じゃあ、連絡ください！ ずっと待っています！」

小さなメモを無理矢理に握らせ、うら若き女性は顔を赤くして走り去った。

(好感度、推定60。年齢は20代前半、両親は既に他界、彼氏は今まで一人もいたことが無い。化粧を加味した顔面の幼さは処女、あるいはまともな男性経験が無い。恋愛へ憧れがある小娘……つまらない

女だ)

人の容姿は雄弁に情報を与える。腐敗した現実世界では限られた生き方と、人生経験しか積めない。下らない人間の中身を、観察で見抜くのは造作もない。

渡されたメモを握り潰し、ゴミ箱へ放とうとしてから思いとどまる。二つ隣の席で私を睨んでいる青年へ、潰したメモをそつと投げた。

受け取ってから青年の目つきは更に険を増した。

「……そういう人を見透かしたようなところ、ずっと嫌いでした」

私は微笑んだ。



良好な人間関係の構築は社会を生きる者の処世術であり、同時に退屈な生の暇潰しだ。思えば、今の会社には長く在籍したのだが、退社する私に何の感傷も無かった。これから訪れる未来に比べれば糞にも劣る。

手紙の情報が虚偽であり、私がこれから死のうとも、予定に変更はない。どうせ常世は修羅の国、世界へ混在するありとあらゆる生命体は、詰まるところ死ぬために生きている。

人生の最後に、笑いながら死ぬために生きている。

帰宅してすぐ、ヘッドギアを被った。ユグドラシルのアイコンをクリックして意識が闇に溶けた。

闇の中、体は動かない。あるいは動かすべき体など、既に存在しないのか。視界は良好。遠くから白いものが、徐々にこちらへ迫ってくる。

眼前にそびえ立つ銀色の門が、私を飲み込もうと迫った。事前に予想した様々な可能性の一つだ。ここまでは予測していたが、問題はこの先だ。先の読めない未来に、高揚感を覚えたのは久しぶりだ。

「中略」 いあ！ いあ！ よぐ・そとおす！ おさだごわあ！

私が叫ぶと、門の動きが止まった。

やがて、玉虫色の球体が門の内側からまろびでて飛び出て跳ねあがり、空の彼方へ姿を消した。気が付くと私は、闇に立っていた。くたびれたスーツを着て、自分の体でしつかりと立っていた。

銀色の門の通じる先、先ほどまで闇だった場所から、明るい光が差し込んでいる。踏み出した足に躊躇いは無い。

門を潜れば、四畳半程度の小さな部屋だった。高級感のある紅茶の香りが充満している。室内を物珍し気に見渡していると、背後から声を掛けられた。

「誰だ!」

ゆっくり振り返ると、20代前半とおぼしき男性が、金髪の美女を二人、付き従えて立っていた。女性たちの美貌に反し、男性は典型的な日本人顔だ。

「もしかして……タブラさんか?」

いかにも、人間を辞めた私はタブラ・スマラグデイナだ。



首を刎ねられたブライトネス・ドラゴンロードの竜王の魂は魔法の発動に消費され、一直線にどこかへ向かった。魂の向かう先、目的地で待つ者に思い馳せると胸が躍る。

脳は膨大な電力をカロリー必要とする。成人男性の脳は日に5000カロリーを消費し、これは日に摂取するエネルギーの20%が脳で消費される計算になる。魂だけとなった今、肉体という牢獄に囚われていた生前よりも思考能力が高く、演算速度も速い。これは素晴らしい発見だ。

おたまじやくし  
魂 は物思う。

獣王メコン川へ自らの首を刎ねるように頼んだが、彼らしからぬ失策だった自覚はある。効率的であろうと安易な死を選ぶ性格ではない。知性に自信がある彼ならば、代替案を無数に作り出せた。

世界は圧倒的な悪意を以て、女王へ選択肢を突きつけた。逃避を許さず、無視もさせず、厄介も極まっていた。

常々、どこかの馬鹿が作り出した舞台<sup>ステージ</sup>にしては悪意が強すぎると考えてはいた。愚者は失敗こそすれ、悪意を以て他者の運命を弄ぶ真似はしない。馬鹿ほど短絡的でわかりやすく、優しい舞台を好む。

建御雷の存在を確認してから王宮を離れ、メコン川に腕を食い千切られるまでの空白時間に、あつさりと謎は解けた。

小高い丘で翼を休めていた竜王は背後をとられて目を開く。接近に気付かなかったというより、幻が足元から湧き上がったようだった。はつきりしない、曖昧で不定形な気配。

竜王は頭を上げ、振り向かずに言った。

「君は誰だ。いつからそこにいた」

「freeze<sup>動</sup>く<sup>な</sup>」

真つ暗な洞穴からドロリと溢れたような暗い声に、背筋が薄ら寒くなった。

「必要なことは全て知っている。幻想生物に許されるのは、ゆっくりとこちらを振り向くことだ」

指示された通りに振り返ると、人間が立っていた。蜃気楼のように背景が透けている。人差し指と中指を立てた手を眼前につき出された。

「選択肢は2つ、回答はそれぞれYES or NO。生き延びて私の手足となって働くか、死んで舞台から降りろ」

「貴様はプレイヤーだ」

「然り、そしてお前は箱庭の駒だ」

「高圧的に指示するだけで、他者が思い通りに動くと考えるのはプレイヤー……いや、人間に相応しき傲慢だ。圧倒的強者として振る舞うなら、演技の勉強もしておくべきだったな」

「こんな議論になると知っていたら、そうしただろう」

ドラゴン  
竜王はその巨軀を立ち上げた。口からは小さな炎が漏れ、全身から立ち上るのは闘争心の熱。背景が歪むほどの温度差で、竜王は交戦を挑んだ。

「舐めるなよ、人間風情が」

「無駄な会話は時間の浪費だ。私がこうしていられる時間は少ない」



その男と相對して、背筋が粟立つた。目の前にいるのは幻、眼鏡をかけて涼しい顔をした男の蜃気楼。吹けば揺らぐし、払えば消えるだろう。なのに、これまで出会ったどんな存在よりも不気味だ。

(寒気……この私がプレイヤー相手に?)

一切の感情を悟らせない蜃気楼。無表情が故、顔を見てようやく畏れの正体に気付く。

「天地万物に絶望した者のみ所持を許される、底なしの悪意。如何にしてそれを所持するに至ったか、興味がないわけではない」

「ほう?」

「だが、時おり顔を覗かせるその悪意は、信用を著しく欠損させる。少なくとも私は、悪意ある存在に隷属しようとは思わん。私の言葉を理解する知性は、君の桃色の脳髓へ既に所持されているだろう。消え失せろ、人間が」

「話はまだ途中だ。勘違いしてほしくないが、これは取引だ。<sup>ビジネス</sup>好悪のレヴェル論は必要ない。死を選ぶのなら、報酬に妻との再会を約束しよう」

「な……に?」

自分でも驚くほど、表情が変わった。それを確認し、蜃気楼の男はグチャリと嫌らしく笑った。

「私の目的は——」

結果を鑑みれば、竜王の死まで含めたここまで、彼の描いた絵面通りに進められ、寸分の狂いもなかった。彼による取引<sup>ビジネス</sup>だった。

それでも、死を選んだ後悔はない。

やがて、魂は目的地へ着いたらしく、動きを止めた。

巨大な光の球体を、小さな光があちこちで出入りしている。見てはいけないものを見た時のような、独特の背徳感があった。それが何かを考察するよりも、神秘的な情景に思わず見惚れた。

背後から忍び寄ることを許してしまうほど。

「あら、また会えたわね」

しばらく、退屈せずに済みそうだった。



「あ、まーた勝手にパソコン弄ってる。ちよつと、やめてくださいよ、タブラさん！」

亜空間にて馬鹿が叫ぶ。この場所へ居座ること1日半、これもまた見慣れた風景となりつつある。彼はせわしなく私の監視をしている。澁々と自分の席へ戻った私に、男はブツブツと文句を言いながらデータベースをチェックしていた。とはいえ、数値だけで何が起きているか理解する知能はない。

「嫁二号さん、紅茶のお代わりをお願いします」

「ふえ!? あ……はい、わかりました」

緊張のあまり、油の切れたブリキ人形のような女性の背中を眺めた。ユグドラシルが元になった異世界だけある。特別な美人だったとしても、こんな美女がいる可能性のある世界というだけで素晴らしい。次元の狭間におわす管理者と二人の妻は、寒気がするほど微笑ましい夫婦だ。

「人の嫁を一号だの二号だのと……仮面ライダーじゃないんだから」

「黙れ馬鹿」

「くつ、なんて厄介な……アルベドの創造主だけある」

「ああ、彼女は上手く機能していたようで何よりだ。この物語を読む限り、随分と苦戦させられたようだな。精魂込めて作り上げた甲斐があったというものだ。よかったよかった」

「良くないわい。ぶつ殺されるところでした」

「あそこでアルベドを殺していたら、ここにはいなかったらうな」

「うーん……どうでしょう」

「タブラ・スマラグデイン様、新しい紅茶をお入れいたしました」

そこで第二夫人が紅茶を持ってきてくれた。薔薇の花びらが泳ぐ演出と、気遣いが素晴らしい。手間の数に比例して時間は充実される。茶葉は不明だが、立ち昇る香りも芳醇だ。

馬鹿には勿体ない細君だ。

「いつもありがとう、素晴らしい腕だ」

「き、恐縮です」

彼女は私に接するとき、小動物並みに萎縮している。まるで、肉食動物の前に放り込まれたハムスターだ。事前に馬鹿野郎からどんな説明をされたか不明だが、魂だけの凡人に何を怯えているのやら。

頭の悪そうな青年が目の前に腰かけ、冷めた紅茶を啜った。

「さっさと異世界においてもらえませんか。嫁も怖がつてるし、何されるかわかったもんじゃない」

「私は人畜無害だ」

「アルベドの創造主サマが？」

「他に何に見える」

「悪意の塊に見えますが……」

「失礼な奴だな。こうして久方ぶりに再会したからには、会話を楽しんでくれても罰は当たらないだろう。死人に思い残すことが無いように話をしてくれるのが、人情というものではないだろうか」

「お断りツス。俺一人にタブラさんの相手は荷が重いんで」

「なら、お前も舞台に降りろ」

彼の動きが止まった。

聞くまでもなく、解答は予想できる、説得に意味はない。愚者はどれほどの利益があらうと、自分の意見を曲げない。損得勘定で動くのは愚者に非ず<sup>あら</sup>。彼の返事は何千回、何万回と試しても変わらないだろう。

「お断りします」

彼は再会してから一貫し、予想の範疇を出ない。

「少年よ、逸脱者であれ」

「なんスか……急に」

「持論だよ。人並みの趣味嗜好、いわゆる常識人や凡人が成し得る功績など、たかが知れている。道を踏み外した者や倫理なき悪党、誰にも理解されない愚か者こそ、その行動力で世界を進化させてきた。アドルフ・ヒトラーなくして技術の進歩が存在しなかったように」

「はあ……」

「立派な逸脱者になったな、自称世界の管理者」

「どうも……」

「メコン川の言葉を借りるなら、オナニー野郎が」

「……チツ」

照れくさそうに頭を掻いていた手が止まり、忌々しそうに舌打ちをした。

これは、次なる苦難の世界へ船出しようとする彼らと、最後に会話を楽しもうという情けだ。だから今は、不毛な会話を楽しむのだ。最後の別れが近いとなれば、内容の無い殺伐とした会話も感慨深い。そう言ってしまうえば、彼は私を追い出そうとしなくなるだろう。

それではつまらない。

(存外……私にも人間らしさがこんなに残されていたか)

嬉しい反面、寂しくもある。

「おかげさまで竜王国問題も解決しましたしい、そろそろ舞台へ上がってくれませんかね……」

「どうしても異世界に降りるのを拒否するなら、私にも考えがあるぞ」「そんなワガママな……考えって、何する気ツスか。なんか怖いんですけど……」

「決まっているだろう」

私は小さく深呼吸をして、勿体つけてから言った。

「モモンガさんを殺すのさ」

目の前にいる若者は化け物になった。

目を見開いた彼の体から影が溢れ、青年をすっぽりと包んだ。蠢く影は徐々に形を成し、一匹の大蛇の姿となる。黒い舌を垂れ、大口を開き、私を上から睨んでいる。

「やれるものならやってみろ。あんたはここで殺してやる」

声に込められるのは異形の感情。全身を射抜くような殺気。冷や汗を流しながら、私はこの状況を楽しんでいた。

思わず微笑んだ。

「アルベドのようにか?」

「……」

「そう、アルベドのように、仕留め切ることはできない。人間くさい半

端な優しきは、いまさら捨てられない」

彼は残酷な選択肢を選べない。残酷な未来を選ぶのはいつだって、運命という指揮者だ。コンダクター

「もし、私が奥方たちを殺したら、君はどうする？　舞台に降りてくれるかな？」

再び、体から黒い影が溢れた。今や黒い影は、部屋中を覆い尽くさんばかりに溢れている。黒い部屋の中心で、黒い大蛇が私を飲み込もうと口を開いている。

「ダメー！　ヤ……」

「止まって、ヤ……」

止めようと伸ばされた奥方たちの白くて華奢な手でさえ、影に飲み込まれてしまった。

「ぶち殺すぞ！　人間があー！」

今でも奴は、蛇であるようだ。

「人間が……か」

「できないと思うのか！」

「できないね、お前にかつての仲間を殺せない」

だからこうして、脅迫で意見を変えさせようとしている。殺すのなら相手の意見など聞きはしない。それを肯定するかのように、私の頭上で開かれた口は動こうとしない。とはいえ、ぶちのめすことはできるようなので、私はこの辺で挑発を引き下げた。

「迂闊な挑発に乗るは精神の幼さを露呈させ、弱みを証明する。自身の弱みアキレスが奥方とモモンガさんであると明かしているのか、よりによって私に」

その言葉で影は消え、異次元の優雅なティータイムが帰ってきた。しよぼくれて俯く青年は、慌てて駆け寄った二人の女性に首を締めあげられた。

「この馬鹿ー！」

「いい加減、成長しなさいよー！」

「グエエ……ぐるじいじい」

金髪の美女は、下手をしたら私よりも強いのではないだろうか。今

の私は錬金術師<sup>アルケミスト</sup>ではなく、凡人の魂でしかない。冷静に考えれば、私に彼女らを殺せないとわかりそうなものだ。四つの手で締め上げられ、ひとしきり悶絶する彼を眺めてから、私はカップを置いた。

「二人とも、その辺で勘弁してやってくれないか。会話を楽しむ余裕はいつだって必要だ」

「……タブラ様がそうおっしゃるなら」

「申し訳<sup>ご</sup>ございません……」

「ふう……助かったあ」

解放された青年は派手に咳き込み、喉を優しくさすっている。

「勘違いをしているようなので教えるが、君の存在がギルドのメンバーに知られるだけで、ギルドAOGは崩壊する。他のメンバーもさることながら、モモンガさんは決して自分自身を許さないだろう」  
「うう……」

「私が絶大なる悪意を以て、この事実をメンバーに告げない保証はない。いくらでも、お前が降臨して修正しなければならぬ状況など作り出せる。その時になって、君はどうする？」

「行きませんよ」

意見に迷いは見られない。41人が集結する未来のため、42人目を犠牲にする事実は確定事項らしい。

私がこの地を去るには頃合いだ。まだまだ、話したいことは山ほどあるが、足りないくらいでちょうど良い。人間は満足すると、欲望を肥大させる。このままでは本気で試したくなってしまう。

奥方たちの殺害を。

「さて……約束通り、問題児の三名は私に任せてもらう。モモンガさんが退屈しないよう、他のメンバーを片っ端から異世界へ放り込め。聖王国へ目を向けさせるな。たっち・みーとウルベルトさんの確執は、あの国の崩壊を以て解決されるべきだ」

「聖王国をどうするんすか？」

「歴史から抹消する」

「うへあ……」

「悪意ある人間が仕掛ける舞台<sup>イベント</sup>だよ。呆れるほどの死者を出し、うん

ざりするような胸糞悪い物語を始めよう。お前が舞台へ降りるなら、違う手段を考えるが？」

彼はそっぽを向いて、何も聞こえませんがという態度を貫いていた。「やれやれ……私もそろそろ、墮天おどりさせてもらおうとしよう」

私はPCの前へと移動し、あらかじめ入力して保存しておいた数式を打ち込み、エンターキーを叩いた。足元からゆっくりと、光の粒子となって消えていく。私は振り向き、世界の管理者を眺めた。

「いつまでも、何年、何十年、何百年だろうと、そこで見ているがいい。何があるうと目を離すな、それが管理者の義務だ。そして、いつでも舞台へ上がって来い。私は……忘れない」

「……ん」

「私は、君が嫌いではなかったよ」

「ありがとう……タブラさん」

女性たちが深々とお辞儀をして見送ってくれた。体が掻き消える直前、私が最後に見たのは悲しそうな表情の青年だった。

四畳半程度の世界は消失した。

目を閉じると、闇が見えた。



「我らは、一足先に墮天した。最強の二人も、そう時間をかけずに落ちてくるだろう。人間を辞めた感想はいかがかね」

蛇の一件は説明していないが、質問されて彼の顔はひん曲がった。口を尖らせ、私を責めるように言った。

「確認したいことがある、嘘偽りなく答えてほしい」

「いいとも」

「たっち・みーさんの嫁さんと子供は、なぜ死んだ？」

敢えて答えず、私は微笑んだ。

「おかしいだろう。企業側の人間はアークロジに守られ、テロリストは侵入すらできない。たっちさんは現実で幸せになれるはずだったのに、ピンポイントで企業側の二人が死んだから、たっちさんもこ

の世界に来る?」

「納得できないか」

「ああ、出来ないね。生憎と俺は、物分かりが悪いんだ」

「ふふ……この世にあり得ないことなど存在しない。ただ、確率が低いだけのことだ」

「悪いが禅問答は余所を当たれ。今、俺が聞いているのは、たった一つの真実だ」

「あれは……そう、悲しい事故だった。例えば、換気システムがエラーを起こし、汚染された大気が流れ込むことだってあり得る。女子供など、体力のないものから先に力尽きるだろう」

悲しい出来事を振り返っているような演技をしているが、なんの結論も出さない私に、彼はますます苛立った。

「……答えるつもりが無いようだが、それは肯定と判断していいのか」「本来ならば、たちさんの家族をまとめて招く手はずだった。既に死んでいるのだから、こればかりはどうにもならない。いつだって、現実は無慈悲なものだ。失われた命は取り返しがつかない。無情の理、宇宙の真理、無慈悲な指揮者の謀」  
コンダクターはかりごと

彼の顔から色濃く浮き出ているのは不信感だ。

「やはり……あんただだな」

「目は雄弁に語るものだな、るし★ふぁー」

るし★ふぁーは私を見た。楽し気に嗤う私を見た。触手を蠢かし、体をへし折り、全身で嗤う私を無言で責めていた。

「逆に聞かせてほしいのだが、仮に、私がたちさんの家族を殺したとして、何とする? 私を罪人と糾弾し、致命的な決別をするか? それとも、罪の償いを迫るか?」

堕天使は何も言わない。

そう、彼は何も言えない。現実世界で官僚の地位まで上り詰めておきながら、ギルドAOGの問題児として生きるべく、人間を辞めて異世界へ飛んだ彼が、どんな顔で倫理を押し付けるのか。

「激怒した俺が、あんたを殺すことだってあり得るんだぜ」

「勿論、それも承知の上だ。私と君が殺し合えば、互いに無事では済ま



ないがね」

「……だろうな」

「倫理観など、足かせにしかなるまい。どうせ遅かれ早かれ人は死ぬ。元より幸せになれない宿命。ならば舞台を変え、新たな幸せを掴み取る機会を与えてやるのが、人間らしい慈悲というものではないだろうか。優しい世界とは、押しつけがましい平和な世界であるべきだ、そうだろうか?」

「あんた……いつからそんなにやべえ奴になった」

「人間を辞めたプレイヤーがまともであるはずがない。41人の全員がなべて等しく、名実ともに化け物なのだ」

「元は人間だろうが」

「その感性こそ信じられないよ、私は。人間から倫理と法が取っ払われたのなら、それは真に化物だ」

ここで反応が無いのは想定内の範囲内だ。私は彼をフォローするかのように、反証を離し始めた。

「もつとも、堕天使殿の言う通り、私たちは所詮、人間上がりの異形種だ。41人の全員で異世界を遊びたいという理想。それこそが、箱の底へ最後に残されたエルピスとなるだろう。人間性を失わずにいられる最後の障壁。少なくとも、君は確実にそう思っている」

「まあ……そうだな」

「なら、現実世界のことなどもう忘れよう。私たちが成すべきことは、正義と悪を完全和解へと導く舞台を作り上げるべきだ」

「……」

納得をしたようには見えないが、反論は出てこないだろう。私が指揮者のように両手を振ると、晴天に暗雲が渦を巻き、雷鳴轟く曇天が現れた。草原に、冷たい豪雨が降り注ぐ。

「Under the name of DARKNESS! 我が名は暗黒、ギルドAOGの邪悪、タブラ・スマラグディナだ!」

豪雨の最中、私は陽気に踊った。

「悪道よ、覚醒せよ! 眠れる正義を呼び覚ませ! 正義が幻想でないのなら証明して見せろ。地獄の釜の底で共に手を取り、邪悪へ堕ち

「我がこの身を打ち砕け！」

己が獄道を白日の下へ晒し、邪悪なりしものが嗤う。

雨にその身を打ち付けられながら、体をへし折って笑う。地獄の底から浮かび上がる悪意の塊が、止まることなく笑い続ける。

視界の端で、盗賊らしき者に追い立てられる豪華な装飾の馬車が見えた。向かう先は聖王国だろう。私の引いたレール通り、貴族か商人が乗っているはずだ。

「さあ、始めよう。正義と悪が降臨する舞台作りを。まずは、情報収集といこうか」

歩き出した私を冷めた目で眺め、るし★ふぁーが呟いた。

「……気に入らねえ」

私は微笑み、黙殺した。

彼の内心も含め、これから退屈せずに済みそうだ。

数時間後、聖王国を長年にわたって守護してきた防壁が破壊された。